

## 第2章 京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

千葉 豊 阪口英毅

### 1 調査の概要

本調査区は吉田山の西南麓、吉田南構内（旧、総合人間学部構内）の南西部にあたり、吉田二本松町遺跡に含まれる（図版1-261）。ここに総合メディアセンターの新営が予定されたため、周辺地区での調査成果を勘案し、予定地全域の発掘調査を実施した。調査は1998年12月16日に開始し、1999年5月31日に終了した。調査面積は1800㎡である。

本調査区の周辺では、これまでの調査によって、縄文時代から江戸時代にいたる各時代各時期の遺構・遺物が発見されている（図版1）。とりわけ、弥生時代前期の水田跡（220地点）、古墳時代中期の方墳（111・220地点）、古代末の梵鐘铸造遺構（111・220地点）、中世の溝群（220・228地点）の発見は、特筆すべき成果であり、今回の調査でも、こうした時代の遺構・遺物に特に留意しつつ、縄文時代から現在にいたる遺跡の広がりや土地利用の変遷に関する資料を得ることを目的とした。

本調査区の北を東西にはしる道路をほぼ境に、総合人間学部構内の南半はもと京都医科大学の敷地であり、のち旧制第三高等学校の敷地が南に拡大するに及んで、本調査区付近には三高のグラウンドが設置された。その後、現在にいたるまで校舎などの建設がなされなかったため、遺構の保存状況が全般によく、旧制三高のグラウンド跡、江戸時代の道・野壺・柵列、中世の建物跡・石室状施設・溝・井戸、弥生中期の方形周溝墓、縄文時代の旧流路など各時代にわたる遺構を検出した。出土遺物は、縄文時代から近代にいたり、整理箱で194箱を数えた。遺構・遺物の主体は中世であり、その時期的変遷と遺構・遺物の密度から判断して、藤原北家吉田殿あるいは吉田社社家の邸宅の一部であった可能性が高い、という知見を得た。また、縄文早期の押型文土器、弥生中期の方形周溝墓とそれに供献された弥生土器、古墳中期の家形埴輪の出土なども、この地における土地利用の変遷や当該時期の編年を考えるうえで、特筆すべき成果となった。

発掘調査は、千葉豊・古賀秀策・阪口英毅、資料整理は千葉・阪口が担当した。発掘と整理を通じて、曾根茂・長尾玲・下坂澄子・磯谷敦子・村上昇・佐々木奈月・川本紀子・本吉恵理子・菊井佳弥・大谷礼子が補助した。本章は、第5節・第7節(9)・第10節(3)を阪口が分担し、それ以外を千葉が分担して、執筆した。

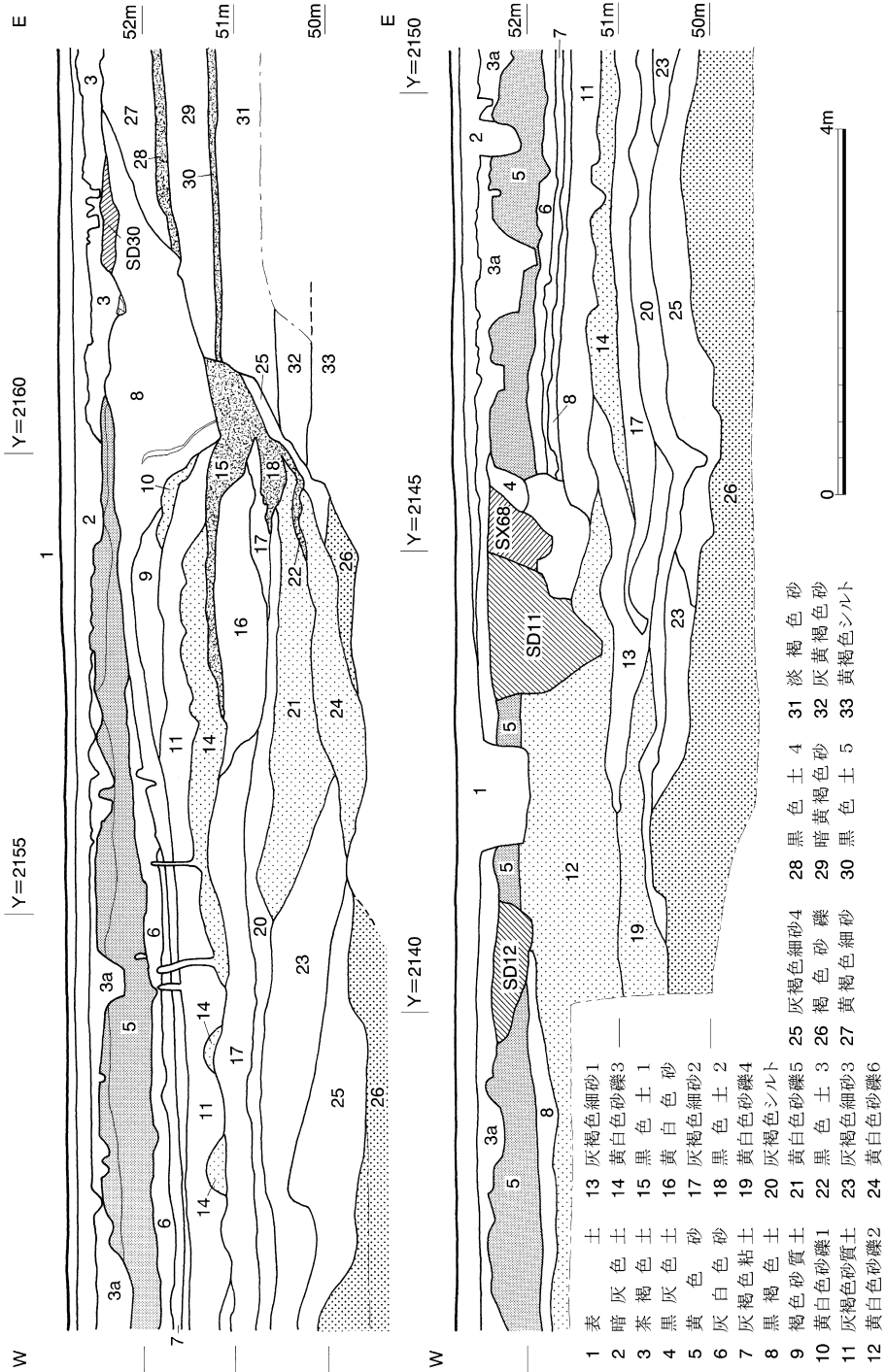


図1 調査区東西畔の層位 縮尺1/80

調査の概要

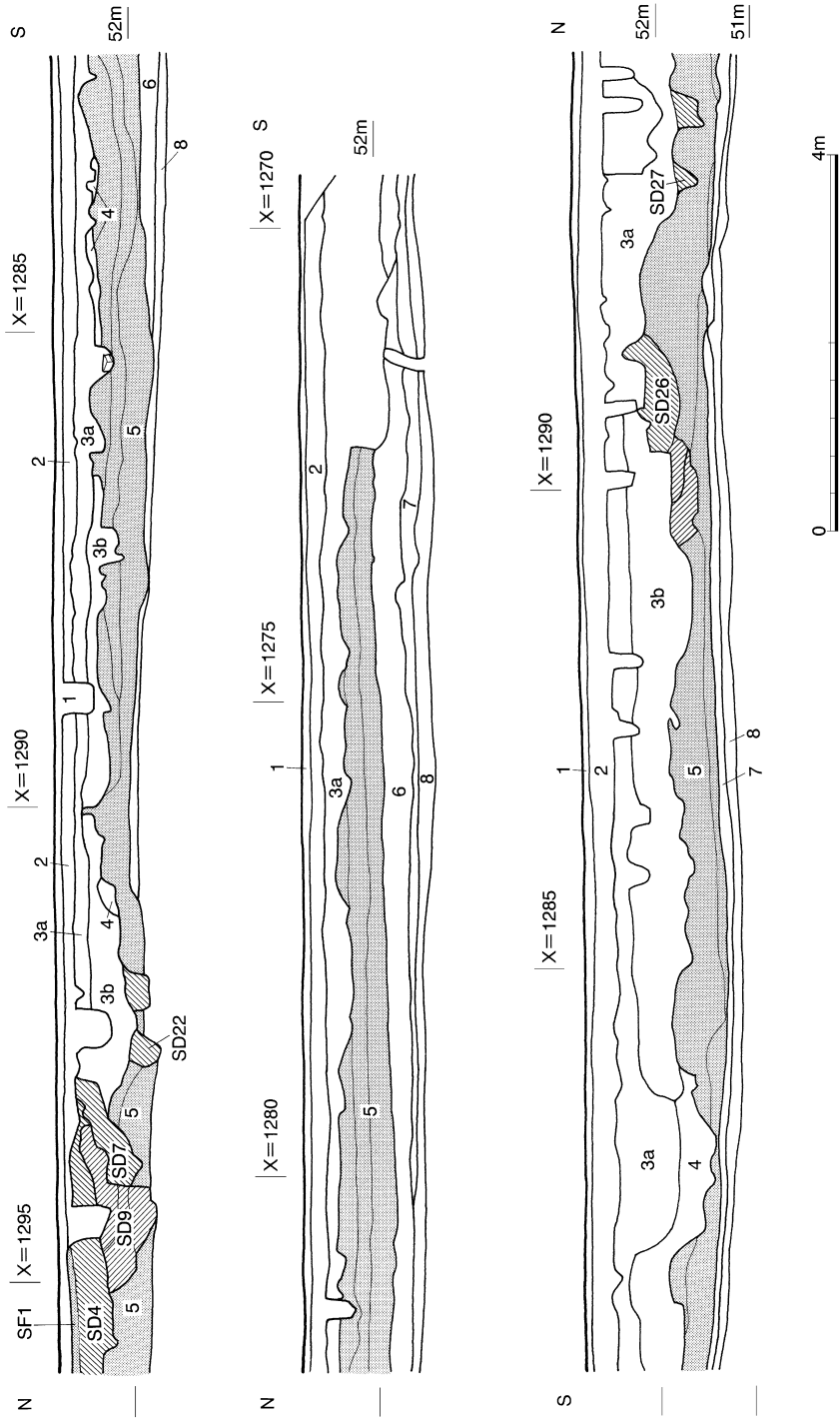


図2 調査区南北畔（上・中）と調査区西壁（下）の層位 縮尺1/80

## 2 層 位

調査区のほぼ中央に、調査区を四分するように設けた土層観察用の畔と調査区西壁の層位を図示して、堆積状況の説明をしよう（図1・2）。

調査開始前の現況はテニスコートであり、現地表面の標高は52.9m前後でほぼ平坦であった。土層は、黄色砂（第5層）より上位の堆積で、ほぼ水平で水の影響をほとんど受けていない堆積（上層群と仮に呼ぶ）と、黄色砂以下、水の影響を受けて堆積した土層（下層群と呼ぶ）に大別でき、上下で堆積環境が大きく異なる。

上層群の堆積は、上から順に表土（第1層）、暗灰色土（第2層）、茶褐色土（第3層）、黒灰色土（第4層）となる。第1層の表土は、テニスコートの造成土。第2層の暗灰色土は近世、第3層の茶褐色土は中世の遺物包含層である。第2層上面で、第三高等学校のグラウンド跡、第3層上面で、近世の道路や野壺・溝・耕作用と思われる無数の小穴を検出した。第3層の茶褐色土は、調査区北西部分で、下層の黄色砂との漸移的な様相をみせる茶褐色砂質土が本来の茶褐色土の下位に堆積していた。出土遺物は中世であり、茶褐色土を第3 a層、茶褐色砂質土を第3 b層に区分した（図2）。Y=2160付近を境に、東側では第27層上面、西側では第5層の上面で、中世の遺構を検出した。

第4層の黒灰色土は、本来調査区全面に堆積していたと考えるが、中世以降の削平により、溝など遺構として深く掘り込まれた部分を第27層および第5層上面で検出したにとどまった。出土遺物から見て、弥生中期以降、古代までに形成された土層である。

つぎに下層群の説明に移る。下層群の堆積物は、ほぼY=2155付近で西へ向かって下がる斜面、およびその前面に広がる低地に堆積した土層（第5層～第26層）と、それらよりも古く縄文時代に微高地を形成していた土層（第27層～第33層）に細分できる。前者のうち、もっとも新しい堆積物である第5層の黄色砂は、吉田キャンパス一帯で広く見られる弥生前期末の洪水性堆積である。上部が粗砂、下部が細砂からなる。第8層の黒褐色土は腐植土壌で、縄文晩期から弥生前期の遺物が出土しており、当時の旧地表とみられる。上部は、第5層が直接覆っている部分と、第6層の灰白色粗砂および第7層の灰褐色粘土が介在する部分がある。

なお、第8層に貫入し、第7層～第5層内で消失する砂脈を観察した。Y=2155および2160付近で、下層から上位へ細長く立ち上がる堆積物である。第8層上面で検出した砂脈については、図3に、その平面的位置を示した。地震にともなう液状化の痕跡と考える。



## 層 位

検出層準からすれば、北部構内B A28区の調査で検出した砂脈と同時期であろうか〔浜崎ほか1995 pp.106-113〕。

第9層から第26層の土層の大部分は、砂・砂礫といった水成堆積物であるが、これらにはさまるような形で、微高地上から供給されたと想定しうる黒色の腐植土が斜面部に堆積していた。この黒色の腐植土は、調査区中央畔付近では3枚（第15・18・22層）認められ、調査区南壁寄りでは、黒色土3の下位に砂層を介在してもう1層黒色土を確認し、合計4枚の腐植土を確認することができた。これら斜面部に形成された黒色土および砂層・砂礫層中から、早期・中期～晩期の縄文土器が出土している。

第33層の堆積状況から判断して、西へ下る段差は地下深部へと続くものではないと理解している。第26層は褐色の砂礫であることから白川系流路ではなく、高野川系流路の攻撃によって、この南北にのびる崖面が形成された可能性が考えられる。第26層以下を掘りきっていないため、この段差がいつ形成されたのかは不明であるけれども、後期以前には形成され、後期以降に埋積が進み、弥生前期末の洪水堆積（第5層）で最終的に覆われて平坦化した、ということではできよう。

微高地を形成する第27層以下は、ほぼ水平に堆積している。砂・シルトといった水成堆積物のあいだに、黒色の腐植土の堆積（第28・30層）を2枚確認したが、砂・シルトを含めて、微高地を形成している堆積物からは、遺物はまったく出土しなかった。

### 3 縄文時代～弥生前期の遺跡

#### (1) 弥生前期の地形（図版3，図3）

弥生前期末の洪水層である第5層およびその下位に水成堆積していた第6・7層を取り除くと、黒褐色の腐植まじりの土壌（第8層）があらわれた。その上面は弥生前期の旧地表であり、図3に10cm間隔の等高線で、当時の地形を復元した。全体的には、東が高く西へ向かって下がる地形であるが、調査区北西部で検出した溝状遺構の方向からみると、北東から南西へ傾斜する傾向が読みとれる。Y=2155の南北ライン付近で、西へやや急激に下がるのは、縄文時代の地形の影響である。

調査区北西隅、第8層上面で溝状遺構を検出した。埋土は第5層黄色砂。北側は調査区外へと続き、南側はX=1288付近で終わる。幅10～50cm前後で一定せず、人工の溝か、自然地形のくぼみか、判断しがたい。人工のものであれば、北に隣接する220地点で発見された弥生前期の水田跡〔伊藤1999a〕に関連する可能性もあるが、水田跡本体は、本調査区に

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

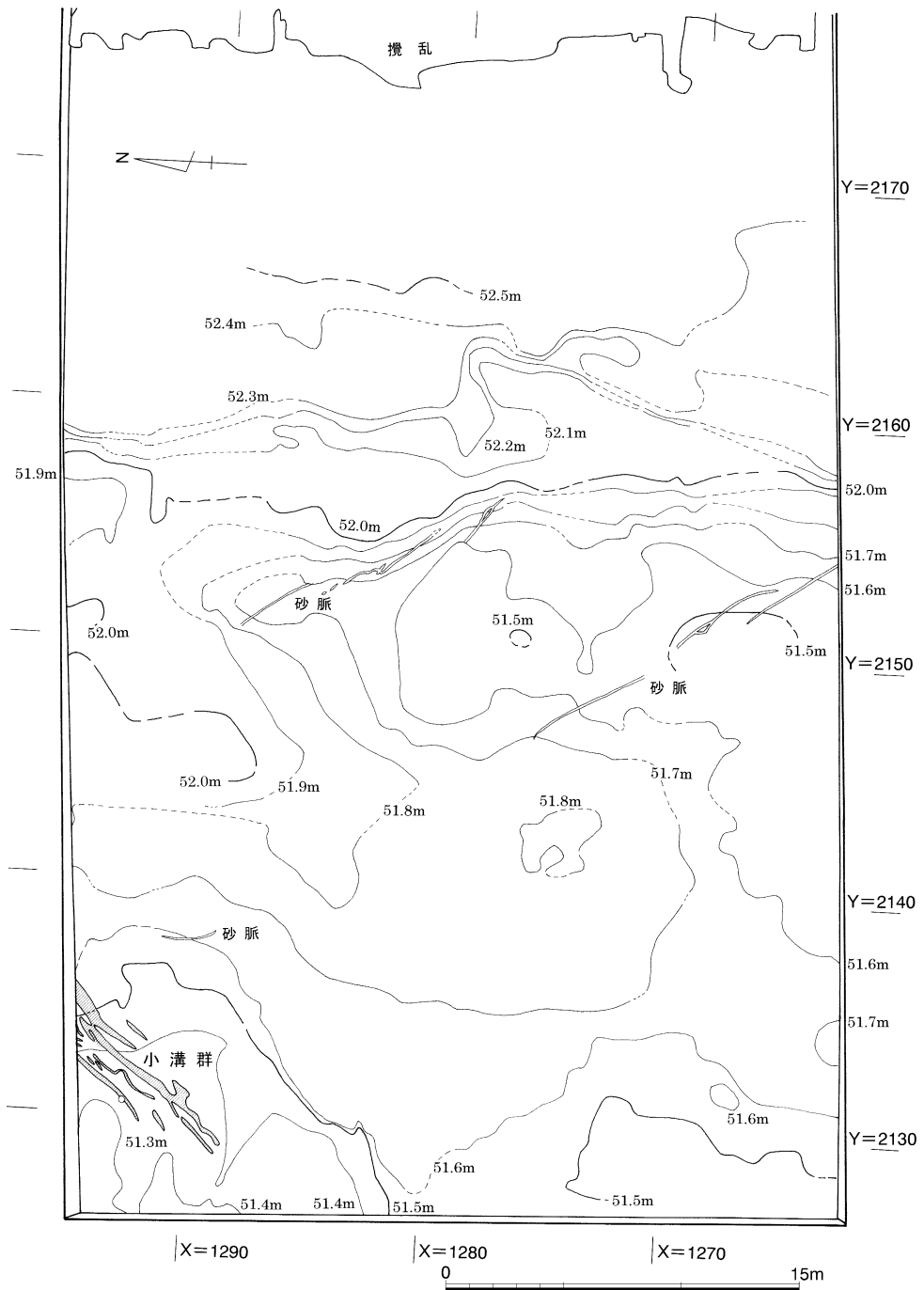


図3 弥生前期の地形 縮尺1/300

は及んでいないことが判明した。

(2) 縄文時代の地形 (図版3, 図4)

第2節で説明したように、第8層以下は、基本的に水成の堆積物からなるが、Y=2155～2160付近を境に、東側は微高地からなり、西側には低地がひろがっていた。遺物は、この微高地から低地へ下る斜面から多く出土した。磨滅しているものは少ないので、遺跡は本来、この微高地上に展開し、遺物はそこから流入したものと考えられる。

(3) 縄文～弥生前期の遺物 (図版8～10, 図5～12, 表1)

第8層から縄文晩期・弥生前期の遺物が出土したほか、縄文晩期以前の遺物が9層以下の斜面堆積層を中心に、整理箱3箱出土した。出土遺物の地区と層位を表1に掲げる。

縄文早期の土器は、第22層の黒色土3およびその下位に形成された黒色土を中心に、調査区南辺よりまとめて出土した。中期・後期の土器は、黒色土1・2を中心にその上下の砂層・砂礫層より主体的に出土し、晩期の土器は黒色土1～黒褐色土、弥生前期の土器は黒褐色土から出土している。ただし、黒色土3よりも下位の土層である第24層および第26層から、後期ないしは晩期に比定できる土器が出土しており、中期～晩期の土器も同一層準から混在して出土しているため、斜面堆積出土遺物はプライマリーな状態を保っているとは理解しがたい。したがってここでは、時期別・型式別に遺物を図示・分類し、解説を加えていきたい。

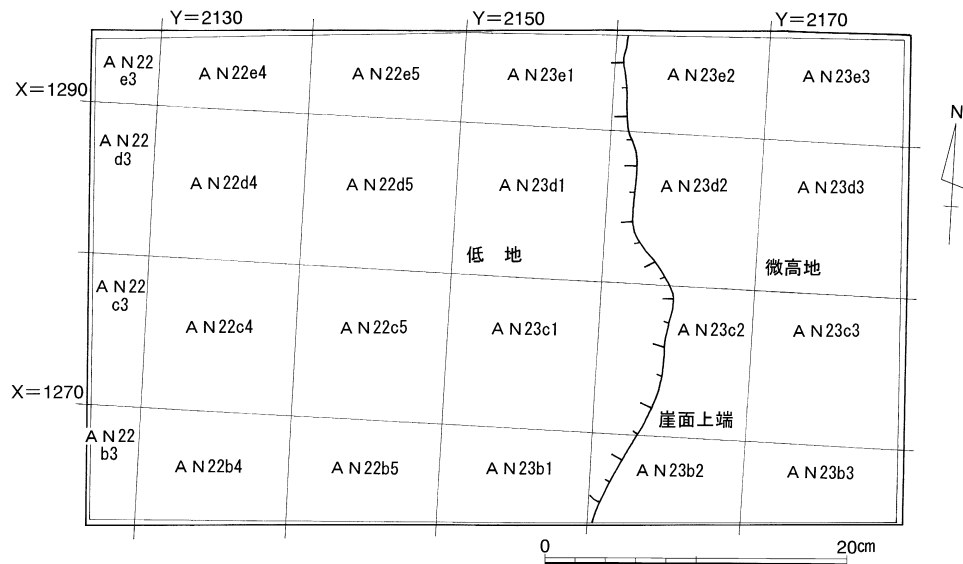


図4 縄文時代の地形と調査区の地区割り 縮尺1/500

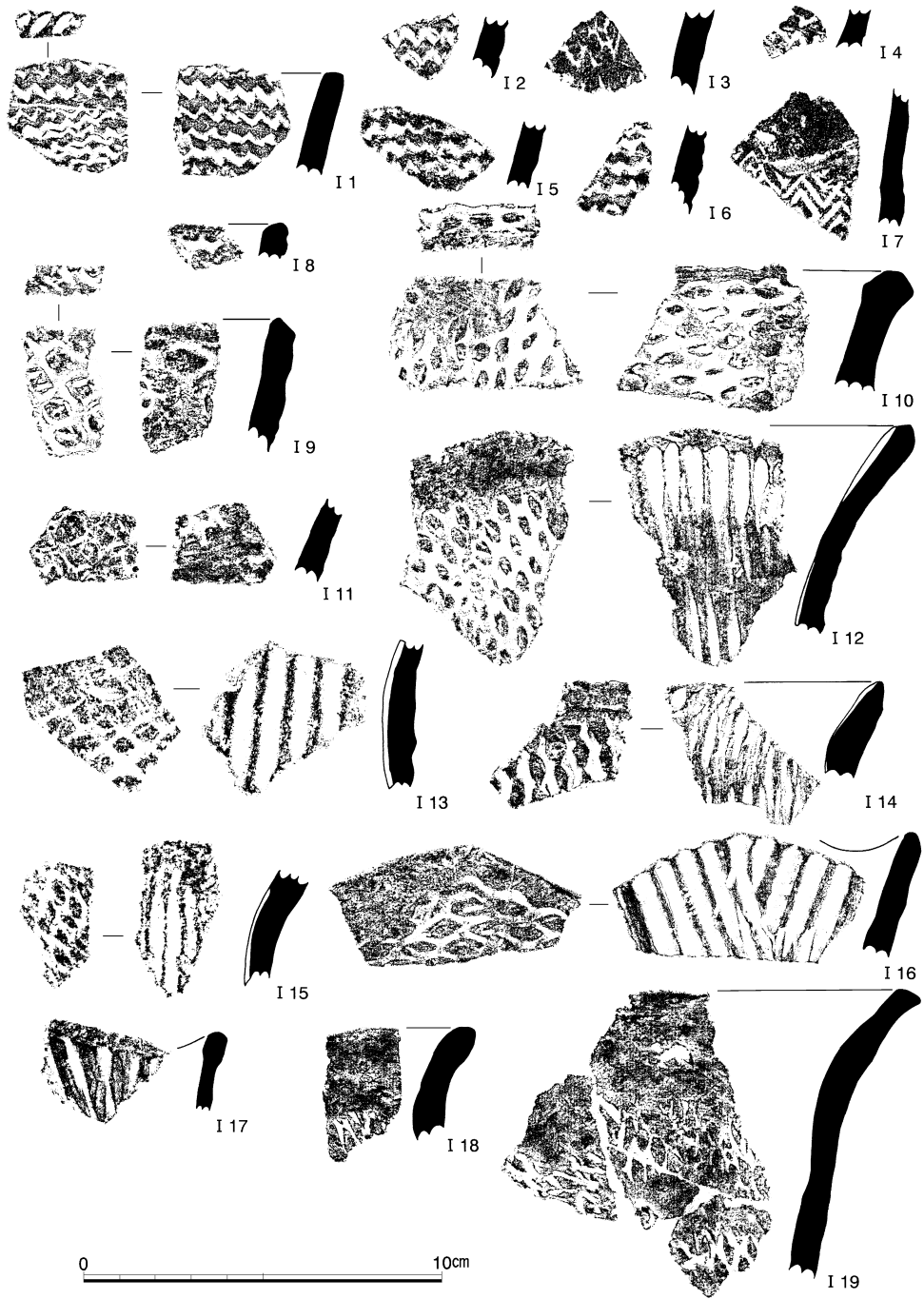


図5 縄文早期の土器(I) (I 1 ~ I 7 黄鳥式直前段階, I 8 ~ I 19 黄鳥式) 縮尺1/2

縄文時代～弥生前期の遺跡

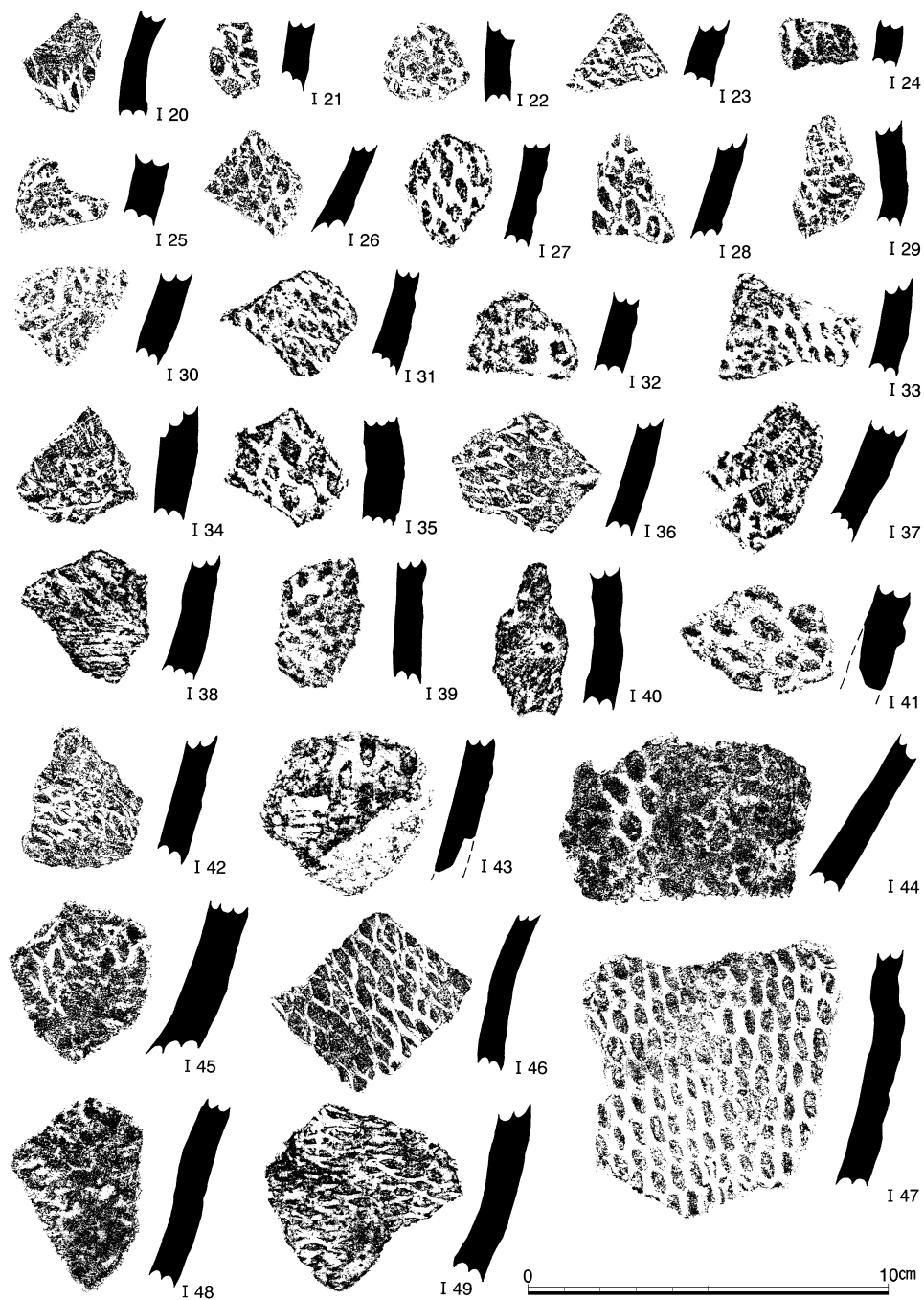


図6 縄文早期の土器(2) (I 20～I 49黄島式) 縮尺1/2

縄文早期の土器（I 1～I 92） I 1～I 56は押型文土器。I 1～I 7は、山形文を横位に施す。器壁の厚さは6～7mm。I 1は口縁部内面にも、山形文を施文し、口縁端部には左下がりの刻みを加える。山形の単位は、3単位・周長18mmに復元できる。山形文をもつ土器は、本調査区から、北東1.5kmに所在する北白川廃寺下層遺跡の住居跡からみつかった押型文土器と同一の特徴をもつ〔網1994〕。山形文の多用される時期であり、黄鳥式直前段階に編年できる。

I 8～I 56は楕円押型文を施文する土器。器壁の厚さは7～10mmで、山形文をもつ押型文土器より厚く、次に記述する無文土器に類似する。胎土に、繊維の混入が明確にわかる例はない。器形は、口縁部が外反し胴部がややふくらみ、尖底となる。水平口縁（I 9・I 10・I 19）とゆるやかな波状口縁（I 12・I 16）がある。

楕円文は、その形状と上下の並びで、米粒状の楕円文が上下で互い違いにならずに横並

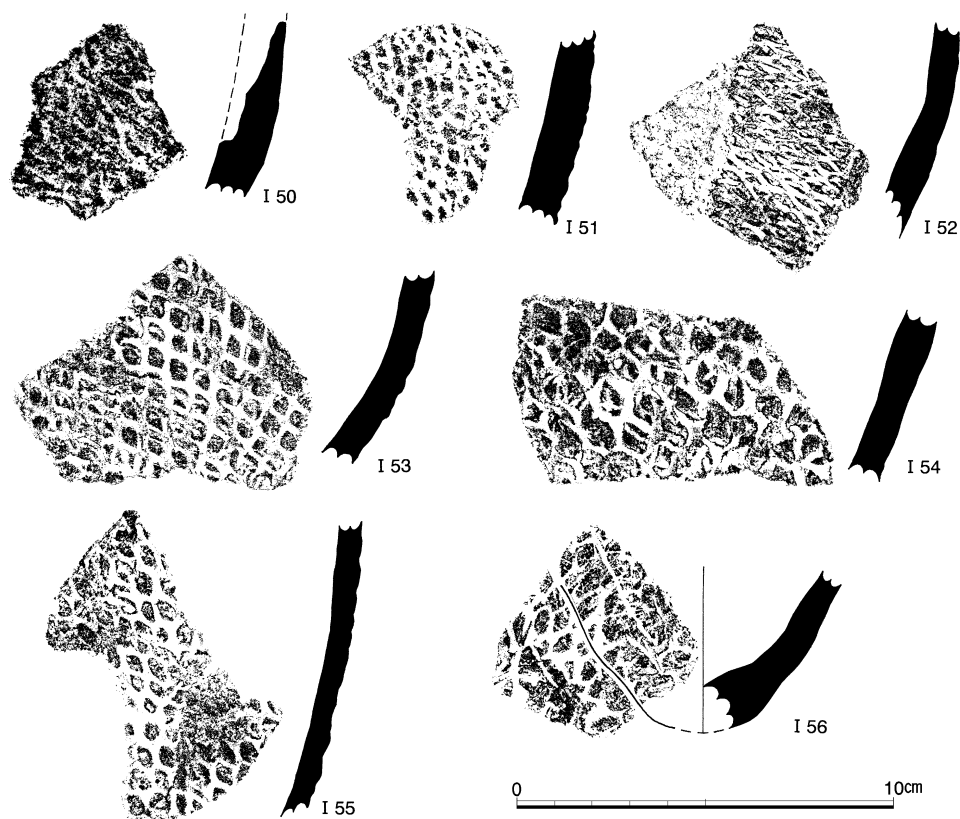


図7 縄文早期の土器③（I 50～I 56黄鳥式）縮尺1/2



縄文時代～弥生前期の遺跡

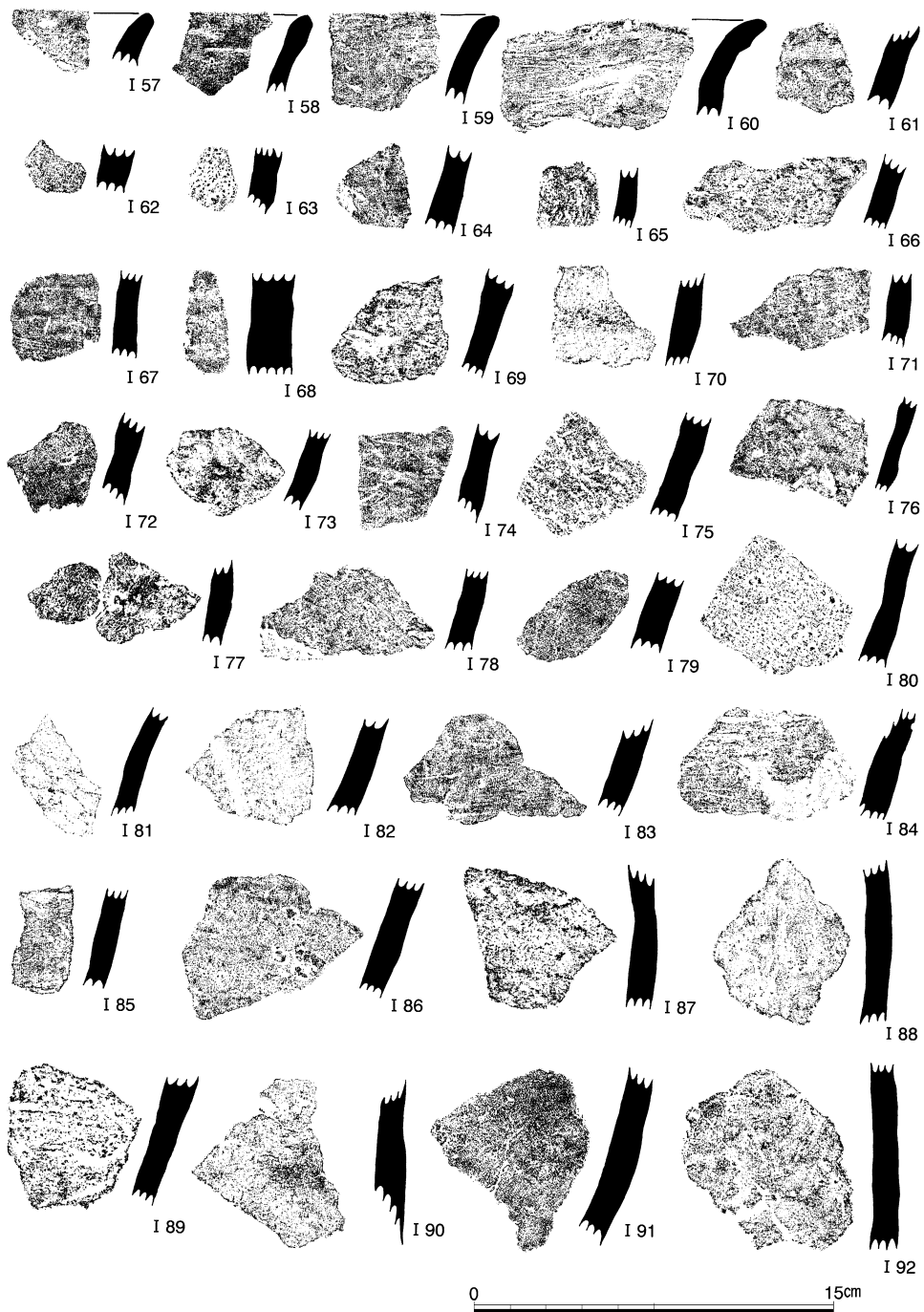


図8 縄文早期の土器(4) (I 57～I 92無文土器) 縮尺1/3

びになるもの（I 10・I 14・I 47など）、同様の楕円文が上下で互い違いに並ぶもの（I 26・I 27・I 46など）、菱形状の楕円文が上下で互い違いに並ぶもの（I 9・I 13）に、細分できる。繰り返しの単位を明確に観察できる例は少ないが、I 12は2単位・周長20mm、I 47も2単位・周長16mmに復元できる。

楕円文は縦位に密接施文するものが多いが、I 16・I 49・I 52のように、横位、斜位に施文しているものも少量ある。口縁部内面は、楕円文を横位にめぐらすもの（I 9～I 11）、押型文とみられる平行沈線文を横位に施文するもの（I 12～I 17）、無文のもの（I 18・I 19）に分類できる。内面に楕円文をめぐらすものは、口縁端部にも刻み（I 9）や楕円文（I 10）で、加飾する。

I 8～I 56は、瀬戸内地方の黄鳥式に比定できるが、内面文様に平行沈線文と楕円文を組み合わせた文様が見られないなど、違いも見られる。また縦位密接施文が多いことから、黄鳥式の新しい段階が主体を占めると理解する。

I 57～I 92は無文土器。黒色土3・4から押型文土器に伴出したものを中心に、器壁の厚さや仕上げ方から、後晩期の無文土器ではないと判断した土器をここに一括している。器壁が10mm前後と、厚いのが特徴的である。内外面ともに、撫でて仕上げるものが多いが、I 75は外面に、I 66・I 89は内面に、斜めないし横方向の砂粒の動きがみられることから、削り調整を施していると理解できる。I 80のように、胎土に繊維を混ぜ合わせている可能性を指摘できるものもあるが、それ以外で、繊維の混入を確実に指摘できるものは観察できない。器形は、胴部がややふくらみ、口縁部がやや外反する深鉢である。口縁端部は、丸くないしは尖り気味に作る。これらは、I 8～I 56の黄鳥式の押型文土器にともなうものであろう。

**縄文中期の土器（I 93～I 160）** I 93は2段左撚縄文を縦走させる。船元Ⅲ式。I 94は縄文の条が交互に深浅となる縄巻縄文を施す。船元Ⅳ式。I 95は半截竹管による平行沈線で弧状文を描く。地文はみとめられない。船元Ⅳ式～里木Ⅱ式。

I 96～I 160は末葉の北白川C式に比定できる土器。I 96～I 108は有文深鉢の口縁部。口縁端部に、I 96は刺突、I 97・I 98・I 101・I 102は縄文を施す。I 97の沈線は結節状である。I 105は矢羽根状沈線文を施す。I 109～I 134は有文深鉢の頸胴部。I 110～I 114は多重沈線による連弧文を頸部に横位にめぐらしている。I 115～I 133は、胴部に3条以上の沈線束を垂下させ、I 115～I 124はそのあいだに2段左撚縄文を縦に転がして施文している。曲線的な沈線による磨消縄文（縄文は2段左撚）をもつI 134は後期初頭・

縄文時代～弥生前期の遺跡

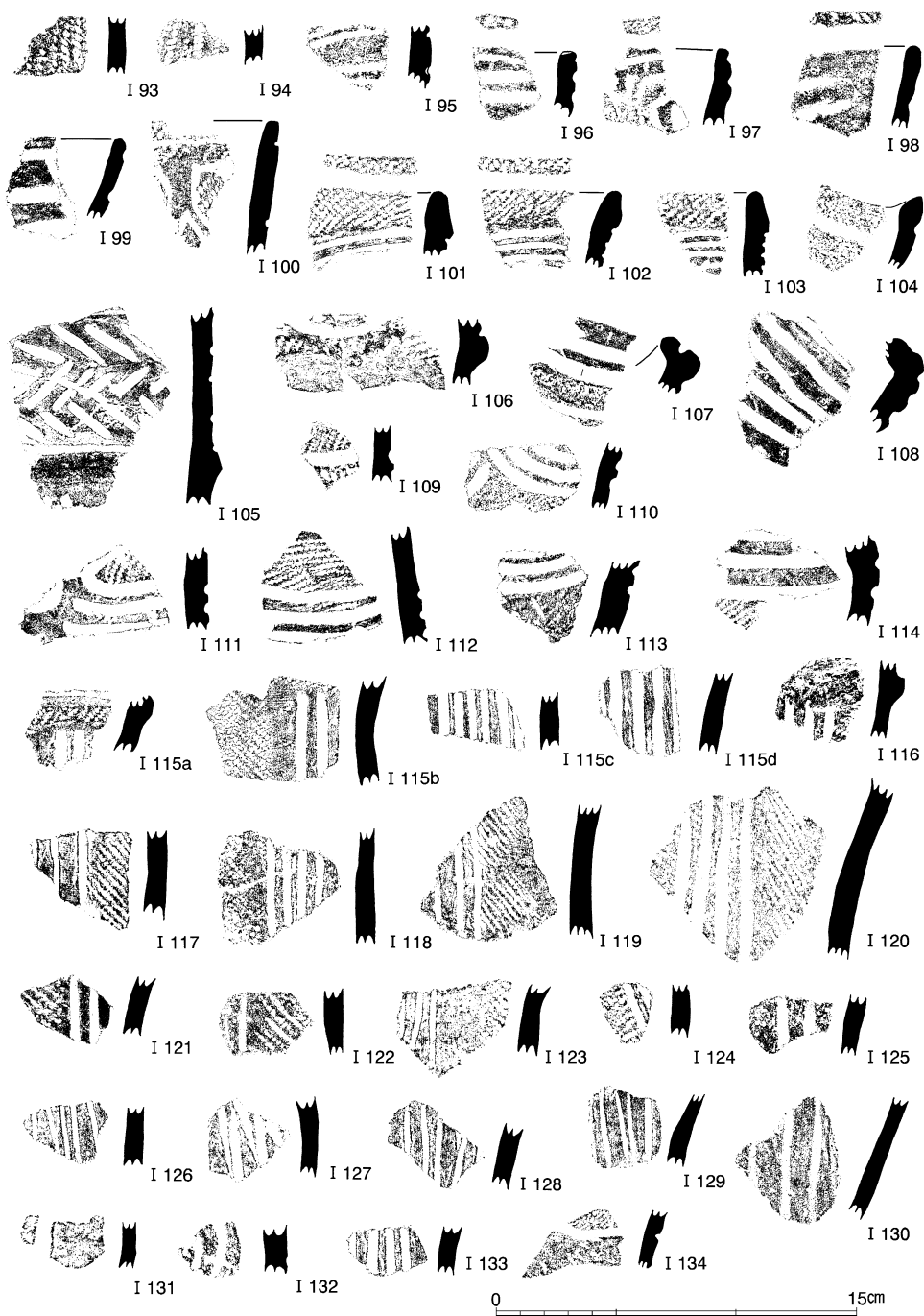


図9 縄文中期の土器(1) (I 93船元Ⅲ式, I 94船元Ⅳ式, I 95船元Ⅳ式～里木Ⅱ式, I 96～I 134北白川C式) 縮尺1/3

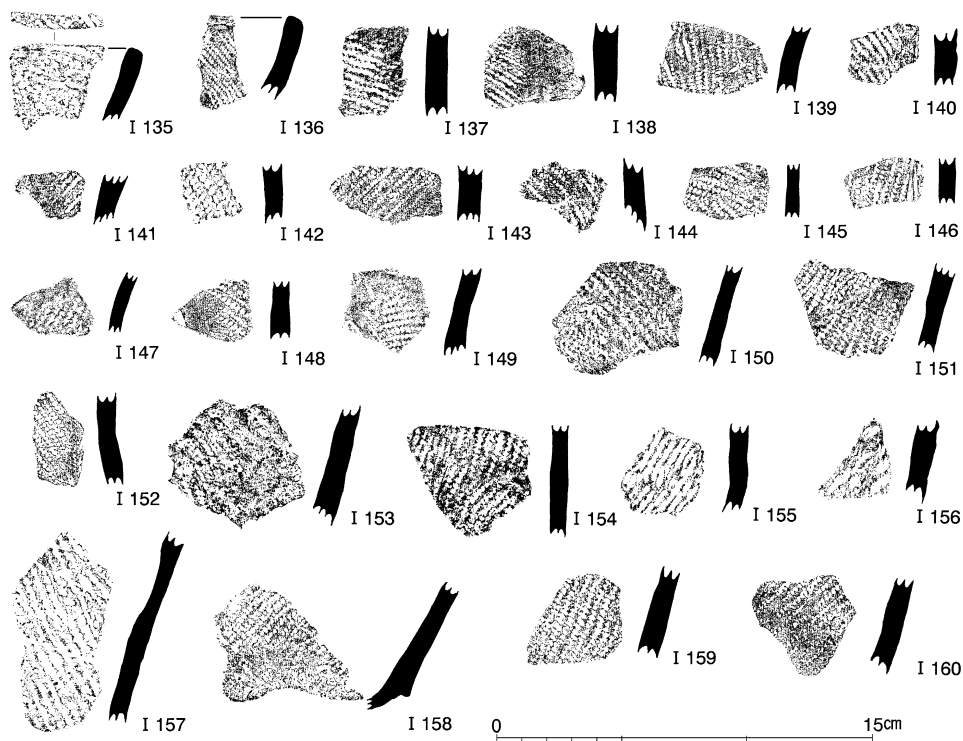


図10 縄文中期の土器② (I 135～I 160北白川C式) 縮尺1/3

中津式とすべきかもしれない。

I 135～I 160は縄文施文の土器。一部は、後期に下る可能性もある。I 135・I 136は口縁部で、横位に施文。I 135は口縁端部にも施文する。I 137～I 160は胴部資料で、横位回転施文と縦位回転施文の両者がみられる。縄文の原体は、2段左撚の単節縄文が多くを占める。I 142は3段右撚の複節縄文、I 156は1段左撚の無節縄文である。

**縄文後期の土器 (I 161～I 205)** I 161～I 163は初頭の土器。I 161は沈線内部に竹管による円形刺突を2個配し、沈線下に1段右撚の縄文を施す。中津式。I 162・I 163は口縁端部が内側へ肥厚する。沈線間に、I 162は2段左撚？、I 163は2段右撚の縄文を充填する。福田K 2式。

I 164～I 166・I 168～I 197は、前葉～中葉の北白川上層式。このうち、I 165・I 177・I 178は上層式1期、I 169・I 170は上層式2期、I 166・I 168・I 174・I 180・I 181は上層式3期に比定できるだろう。

I 164～I 166・I 168・I 169は口縁部資料。I 164は口縁内外面に沈線を2条横走させ、



縄文時代～弥生前期の遺跡

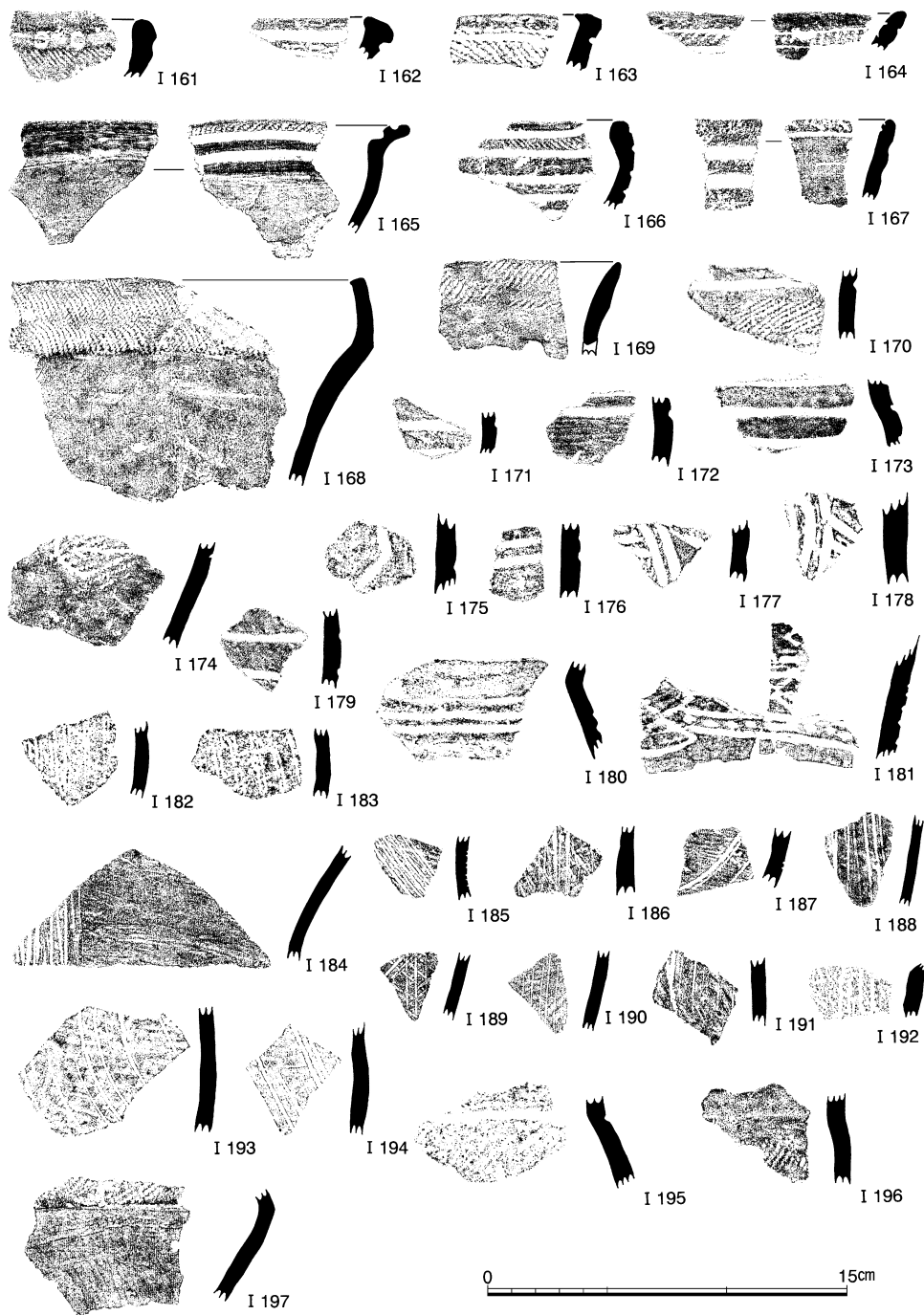


図11 縄文後期の土器(1) (I 161中津式, I 162・I 163福田K 2式, I 164～I 166・I 168～I 197北白川上層式, I 167元住吉山Ⅱ式) 縮尺1/3

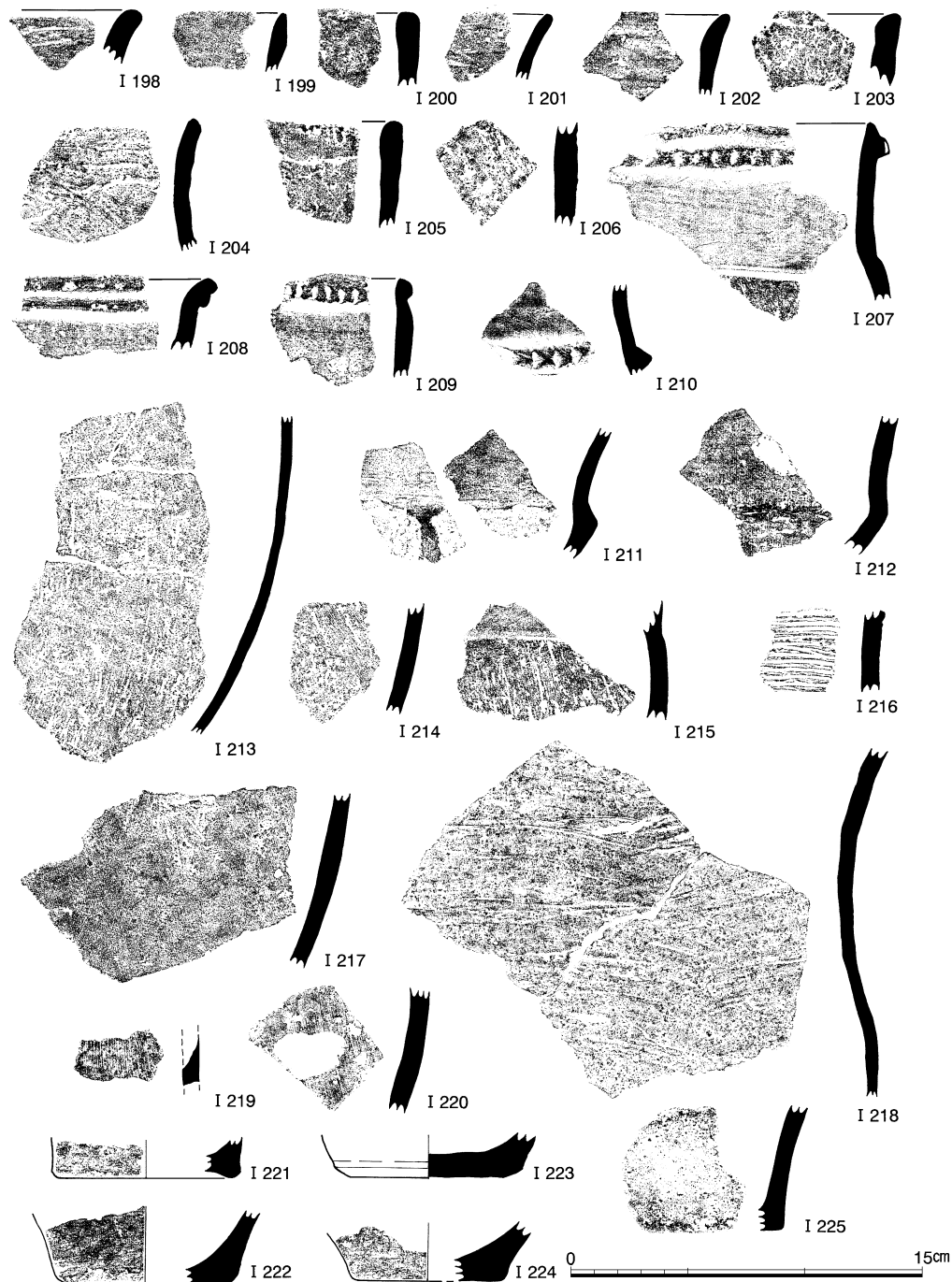


図12 縄文後期の土器② (I 198～I 205無文土器), 縄文後～晩期の土器 (I 206・I 217・I 218無文胴部), 縄文晩期の土器 (I 207～I 216滋賀里IV～船橋式), 弥生前期の土器 (I 219・I 220), 縄文土器底部 (I 221～I 225) 縮尺1/3



2段左撚縄文を充填する。I 165は口縁部内面を肥厚させ、2段左撚縄文を施して沈線を2条めぐらす。内外面磨いて仕上げしており、縄文部に赤色顔料が付着する。浅鉢であるが、類例の少ない器形である。I 166は内湾する口縁部に、多条沈線をめぐらし、2段右撚縄文を充填している。I 168・I 169は縄文地深鉢で、I 168は2段右撚、I 169は2段左撚の縄文を施文する。I 169は胎土に角閃石を多量に含む。

I 170～I 197は胴部資料。I 170は2条沈線間に、2段左撚縄文を施す。I 171～I 181は沈線文をめぐらした胴部資料。I 177・I 178は、2～3条の沈線束で、曲線的な文様を描いている。I 181はバケツ形の器形で、列点をもつ沈線文を横位にめぐらし、蛇行沈線を垂下させている。I 182～I 194は、櫛状施文具による条線文を施す。I 193は胎土に角閃石を多量に含む。I 195・I 196は縄文地の胴部で、2段左撚縄文。I 197は「く」字形に屈曲する浅鉢。口頸部に2段左撚縄文を施文する。体部外面は磨いて仕上げる。内面は撫で仕上げ。

I 167は後葉の元住吉山Ⅱ式。外面に凹線文を2条以上施し、口縁内面には1条の沈線を横走させ、口縁端部との間に、右下がりの刻みを加えている。

I 198～I 205は無文土器の口縁部。口縁に向かって外反しつつ立ち上がるものと直立するものがある。口縁端部は尖り気味ないし丸く収めている。

**縄文後～晩期の土器**（I 206・I 217・I 218） 後～晩期以上に、時期を細分できない資料。I 206は、第26層褐色砂礫出土の胴部片。層位的にはもっとも下層から出土した土器である。内面は撫で仕上げ。外面はやや劣化しているが、削って仕上げている。I 217は胴部、I 218は頸胴部資料。

**縄文晩期の土器**（I 207～I 216） I 207～I 210は突帯文土器。I 208は刻みのない突帯、それ以外は篋状施文具でD字刻みを施す。I 207は肩部に段をもつ。I 211・I 212は口頸部が「く」字形に屈曲する浅鉢。I 213～I 215は深鉢の胴部。内面は撫で、外面は削り調整。I 212は深鉢の頸部。内面は撫で、外面は横方向の粗い条痕を施す。これらは、滋賀里Ⅳ式～船橋式に比定できる。

**弥生前期の土器**（I 219・I 220） とともに小破片で、縦方向の刷毛目をもつ甕。

**縄文土器底部**（I 221～I 225） 底面はいずれも撫でて仕上げる。I 221～I 224のように、いったん立ち上がってから外へ開くものが多い。I 225は底面から外反しながら立ち上がる。

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

表1 縄文～弥生前期土器の出土地区と層位

番号	時	期	出土地区	出土層位	番号	時	期	出土地区	出土層位
I 1	早	期	AN23c1	黒色土2	I 58	早	期	AN23b1	黒色土1・2
I 2	早	期	AN23c1・c2	黒色土1	I 59	早	期	AN23c2	黒褐色土
I 3	早	期	AN23b1	黒色土3	I 60	早	期	調査区南壁	黒色土3?
I 4	早	期	AN23c1・c2	黒色土1	I 61	早	期	AN23b1	黒色土2
I 5	早	期	AN23b1	黒色土3	I 62	早	期	AN23b1	黒色土4
I 6	早	期	AN23b1・b2	黒色土1・2	I 63	早	期	AN23b1・c1	黒色土1・2
I 7	早	期	AN23b1	黒色土4?	I 64	早	期	AN23b1	黒色土4
I 8	早	期	AN23c1	黒色土2	I 65	早	期	AN23b1	黒色土4?
I 9	早	期	調査区南壁	黒色土3?	I 66	早	期	AN23b1	黒色土4?
I 10	早	期	AN23b1	黒色土3	I 67	早	期	調査区南壁	灰褐細砂4
I 11	早	期	AN23c1	褐色砂質土	I 68	早	期	調査区南壁	黒色土3?
I 12	早	期	AN23b1・c1	黒色土1・2	I 69	早	期	AN23b1	黒色土4
I 13	早	期	南西調査区	黒褐色土	I 70	早	期	AN23c1	黒色土2
I 14	早	期	AN23c2	黒褐色土	I 71	早	期	AN23b1・c1	黒色土1上面
I 15	早	期	AN23b1・b2	黒色土1	I 72	早	期	東西畦	不明
I 16	早	期	AN23b1	黒色土3	I 73	早	期	AN23b1	黒色土4?
I 17	早	期	AN23b1	黒色土3	I 74	早	期	AN23c2	黒褐色土
I 18	早	期	AN23b1	黒色土3	I 75	早	期	AN23c1	黒色土2
I 19	早	期	AN23b1	黒色土3	I 76	早	期	AN23c1	褐色砂質土
I 20	早	期	AN23b1	黒色土4	I 77	早	期	AN23b1・c1	黒色土1・2
I 21	早	期	AN23b1	黒色土3	I 78	早	期	AN23c1	黒色土2
I 22	早	期	AN23b1・b2	黒色土1	I 79	早	期	AN23b1・b2	黒色土1
I 23	早	期	AN23b1	黒色土3	I 80	早	期	AN23b1	黒色土1・2
I 24	早	期	AN23b1	黒色土4	I 81	早	期	AN23b1	黒色土1・2
I 25	早	期	AN23b1	黒色土4	I 82	早	期	AN23b1	黒色土3
I 26	早	期	AN23b1	黒色土3	I 83	早	期	AN23b1	黒色土4?
I 27	早	期	AN23c1	黒灰色土	I 84	早	期	調査区南壁	黒色土3?
I 28	早	期	AN23c2	黒褐色土	I 85	早	期	AN23b1	黒色土4?
I 29	早	期	AN23b1	黒色土3	I 86	早	期	AN23b1・b2	黒色土1
I 30	早	期	AN23c1	黒灰色土	I 87	早	期	AN23b1・b2	黒色土1
I 31	早	期	AN23b1	黒色土3	I 88	早	期	AN23c1	黒色土2
I 32	早	期	AN23b1・c1	黒色土1・2	I 89	早	期	AN23b1	黒色土4?
I 33	早	期	AN23b1	黒色土1・2	I 90	早	期	AN23b1・b2	黒色土1
I 34	早	期	AN23b1	黒色土3	I 91	早	期	AN23c1	黒褐色土
I 35	早	期	AN23b1	黒色土1・2	I 92	早	期	AN23b1・c1	黒色土1上面
I 36	早	期	AN23b1	黒色土2	I 93	中	期	AN23b1・c1	黒色土1・2
I 37	早	期	AN23b1	黒色土3	I 94	中	期	AN23b1・c1	黒色土1上面
I 38	早	期	AN23b1	黒色土3	I 95	中	期	北東調査区	黒褐色土
I 39	早	期	AN23c2	黒色土1	I 96	中	期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5
I 40	早	期	AN23c2	黒色土1	I 97	中	期	AN23c2	黒色土1上半
I 41	早	期	AN23b1	黒色土3	I 98	中	期	AN23e2	黒色土2
I 42	早	期	調査区南壁	黒色土3?	I 99	中	期	AN22b3・b4	黒褐色土
I 43	早	期	AN23c1	黒色土2	I 100	中	期	AN23e2	黒色土1下半
I 44	早	期	AN23b1	黄白砂礫5	I 101	中	期	AN23d2	黒褐～黒2の間
I 45	早	期	AN23b1	黒色土4?	I 102	中	期	AN23d2	黒色土2
I 46	早	期	AN23b1	黒色土3	I 103	中	期	AN23d2	黒色土1下半
I 47	早	期	AN23c1	黒褐色土	I 104	中	期	AN23c1	黄白色砂礫3
I 48	早	期	調査区南壁	黒色土3?	I 105	中	期	AN23c1	黒色土1
I 49	早	期	AN23b1	黒色土3	I 106	中	期	AN23d2	黒色土1下半
I 50	早	期	AN23b1	黒色土3	I 107	中	期	AN23d2	黒褐～黒1の間
I 51	早	期	AN23b1	黒色土4?	I 108	中	期	AN23d2	黒色土1下半
I 52	早	期	AN23b1	黒色土1・2	I 109	中	期	北東調査区	黒褐色土
I 53	早	期	AN23b1	黒色土4?	I 110	中	期	AN23d2	黒色土1下半
I 54	早	期	AN23b1	黒色土4?	I 111	中	期	AN23d2	黒褐～黒1の間
I 55	早	期	AN23b1	黒色土3	I 112	中	期	AN23d2	黒色土1下半
I 56	早	期	AN23b1	黒色土2	I 113	中	期	AN23d2	黒色土1下半
I 57	早	期	AN23b1	黒色土3	I 114	中	期	北東調査区	黒褐色土

縄文時代～弥生前期の遺跡

表1 つづき

番号	時期	出土地区	出土層位	番号	時期	出土地区	出土層位
I 115a	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 169	後期	AN23b1・c1	黒色土2下
I 115b	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 170	後期	AN23e1	黄白色砂
I 115c	中期	AN23d2	黒色土2	I 171	後期	AN23e2	黒色土2
I 115d	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 172	後期	AN23b1・c1	黄白色砂
I 116	中期	AN23d2	黒色土1上半	I 173	後期	AN23c1	黄白色砂
I 117	中期	AN23e2	黒色土2	I 174	後期	AN23b1・c1	黒色土1上面
I 118	中期	AN23e2	黒色土1下半	I 175	後期	AN23e2	黒色土2
I 119	中期	AN23e2	黒色土2	I 176	後期	東西畦	不明
I 120	中期	AN23d2	黒色土1上半	I 177	後期	AN23e1	黄白色砂
I 121	中期	AN23d2	黒色土1上半	I 178	後期	AN23e2	黒色土2
I 122	中期	AN23e2	黒色土1下半	I 179	後期	AN23d2	黒色土2
I 123	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 180	後期	AN23e1	黄白色砂
I 124	中期	AN23e2	黒色土2	I 181	後期	AN23b1・b2	黒色土1
I 125	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 182	後期	AN23c1	黒色土2
I 126	中期	北東調査区	黒褐色土	I 183	後期	AN23c1	黒色土2
I 127	中期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5	I 184	後期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5
I 128	中期	AN23d2	黒色土2	I 185	後期	AN23e1	黄白色砂
I 129	中期	AN23d2	黒色土2	I 186	後期	AN23e1	黄白色砂
I 130	中期	AN23e1	黄白色砂	I 187	後期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5
I 131	中期	AN23e2	黒色土2	I 188	後期	AN23c1	黄白色砂
I 132	中期	AN23e2	黒色土2	I 189	後期	AN23e1	黄白色砂
I 133	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 190	後期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5
I 134	中期	AN23b1	灰褐色シルト	I 191	後期	AN23d2	黒色土1上半
I 135	中期	AN23e1	黒灰色土	I 192	後期	AN23c2	黒色土1・2
I 136	中期	AN23d2	黒褐～黒1の間	I 193	後期	AN23d2	黒色土1下半
I 137	中期	AN23e2	黒色土1上半	I 194	後期	AN23c2	黒色土1
I 138	中期	AN23e1	黒灰色土	I 195	後期	AN23e2	黒色土2
I 139	中期	AN23e2	黒色土1下半	I 196	後期	AN23b5	下層流路
I 140	中期	AN23e2	黒色土2	I 197	後期	AN23b1・c1	下層流路
I 141	中期	AN23d2	黒色土2	I 198	後期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5
I 142	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 199	後期	AN23b1・c1	黄白色砂
I 143	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 200	後期	AN23e1	黄白色砂
I 144	中期	AN23c1	褐色砂質土	I 201	後期	AN23e1	黄白色砂
I 145	中期	AN23e2	黒色土2	I 202	後期	不明	不明
I 146	中期	AN23b1・c1	黄白色砂	I 203	後期	AN23d2	黒褐～黒1の間
I 147	中期	AN23e1	黄白色砂	I 204	後期	AN23b1・c1	黒色土1上面
I 148	中期	AN23d2	黒色土2	I 205	後期	AN23b1・c1	黄白色砂
I 149	中期	AN23c1	黒褐色土	I 206	後～晩期	AN23b1	褐色砂礫
I 150	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 207	晩期	AN23c1	黒褐色土
I 151	中期	AN23d2	黒色土2	I 208	晩期	AN23e1	黒灰色土
I 152	中期	AN23d2	黒色土2	I 209	晩期	北西調査区	黒褐色土上面
I 153	中期	AN23d2	黒色土1上半	I 210	晩期	AN23c1	黒褐色土
I 154	中期	北東調査区	黒褐色土	I 211	晩期	北西調査区	灰褐色砂質土
I 155	中期	AN23e2	黒色土2	I 212	晩期	AN23d2	茶褐色土
I 156	中期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5	I 213	晩期	AN22e3	灰褐色砂質土
I 157	中期	AN23d2	黒色土2	I 214	晩期	北西調査区	灰褐色砂質土
I 158	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 215	晩期	AN22c3・c4	黒褐色土
I 159	中期	AN23d2	黒色土1下半	I 216	晩期	AN23b1・b2	黒色土1
I 160	中期	AN23d2	黒色土2	I 217	晩期	北東調査区	黒褐色土
I 161	後期	AN23e2	黒色土2	I 218	晩期	AN23b1・c1	黒色土1上面
I 162	後期	AN23b1・c1	黄白色砂礫5	I 219	弥生前期	AN22d3・d4	黒褐色土上面
I 163	後期	AN23e2	黒色土2	I 220	弥生前期	AN23c1	黒褐色土
I 164	後期	AN23b1・c1	黒色土1上面	I 221	縄文底部	AN23b1・c1	黄白色砂礫5
I 165	後期	AN23c2	黒色土2	I 222	縄文底部	AN23c2	黒色土2
I 166	後期	AN23c1	黄白色砂	I 223	縄文底部	AN23d3	SD7
I 167	後期	AN23d1	不明	I 224	縄文底部	AN22e3・e4	SD19
I 168	後期	AN23d2	黄色砂上面	I 225	縄文底部	AN23e1	黄白色砂

## 4 弥生中期の遺跡

### (1) 遺 構 (図版3, 図13)

弥生中期から古代の遺構は、中世の遺構と同様に、Y=2160付近を境に東側では第27層の上面、西側では第5層上面で検出された。埋土が黒灰色土であることから、中世の遺構とは明瞭に区別できた。ただし、弥生中期から古代の遺構を埋土で区分することはできず、出土遺物や遺構の切り合いなどから、年代を決定した。埋土である黒灰色土は、本来調査区全面に堆積していたと考えるが、中世以降の削平により、溝など深く掘り込まれた部分がかろうじて残存しており、遺構も部分的な確認にとどまったものが多い。

弥生中期の遺構として、土坑および方形周溝墓を構成すると想定できる溝を検出した。

**土 坑** S K13とS K14がある。調査区西端北寄りで見つかったS K13は、長径1.5m、短径0.7mの不整楕円形で、深さ0.25mをはかる。甕 (I 253) が出土した。調査区北端西寄りで見つかったS K14は、古代の溝S D21に切られる。長径1.0m、短径0.7mの楕円形を呈し、深さ0.1m前後。南東隅より壺 (I 242) が倒立した状態で出土している。

**方形周溝墓** 溝を確認したのみであり、封土や主体部はまったく残っていなかった。溝も後世の開発により部分的に確認できすぎない。したがって、これらの溝が方形周溝墓の区画溝であると断定することはできないけれども、直角に曲がるコーナーをもつ溝があること、底部穿孔などから墓に供献されたと理解しうる土器が複数の溝からみつまっていることから、方形周溝墓としての復元案を示し (梨地の部分)、説明を加える。

方形周溝墓Ⅰは、調査区の北東に位置し、S D31が北辺、S D24が南辺を区画すると想定して復元した。1辺8m前後。S D24は幅1.0m、深さ0.3m、S D31は削平が著しく、幅0.5m、深さ0.1m前後。S D24からは、壺 (I 227・I 229・I 234) と甕 (I 252・I 245) が横倒しで溝底から若干浮いた状態で出土している。S D31からは、甕 (I 255) と横倒しになった完形の高杯 (I 276) が溝底から若干浮いた状態で出土している。中世柱穴出土の甕 (I 248) および穿孔のある底部 (I 266) も、その位置がS D24と重なるため、本来はこの溝に所属していたものと理解する。

方形周溝墓Ⅱは、調査区中央に位置する。S D25が北辺と東辺、S D32が西辺を区画すると想定して復元した。1辺8m前後。S D25は幅0.6m、深さ0.2m、S D32は幅0.5m、深さ0.15mをはかる。S D24と25は接しているが、切り合いはつかめなかった。S D32より、壺 (I 240) が出土している。

弥生中期の遺跡

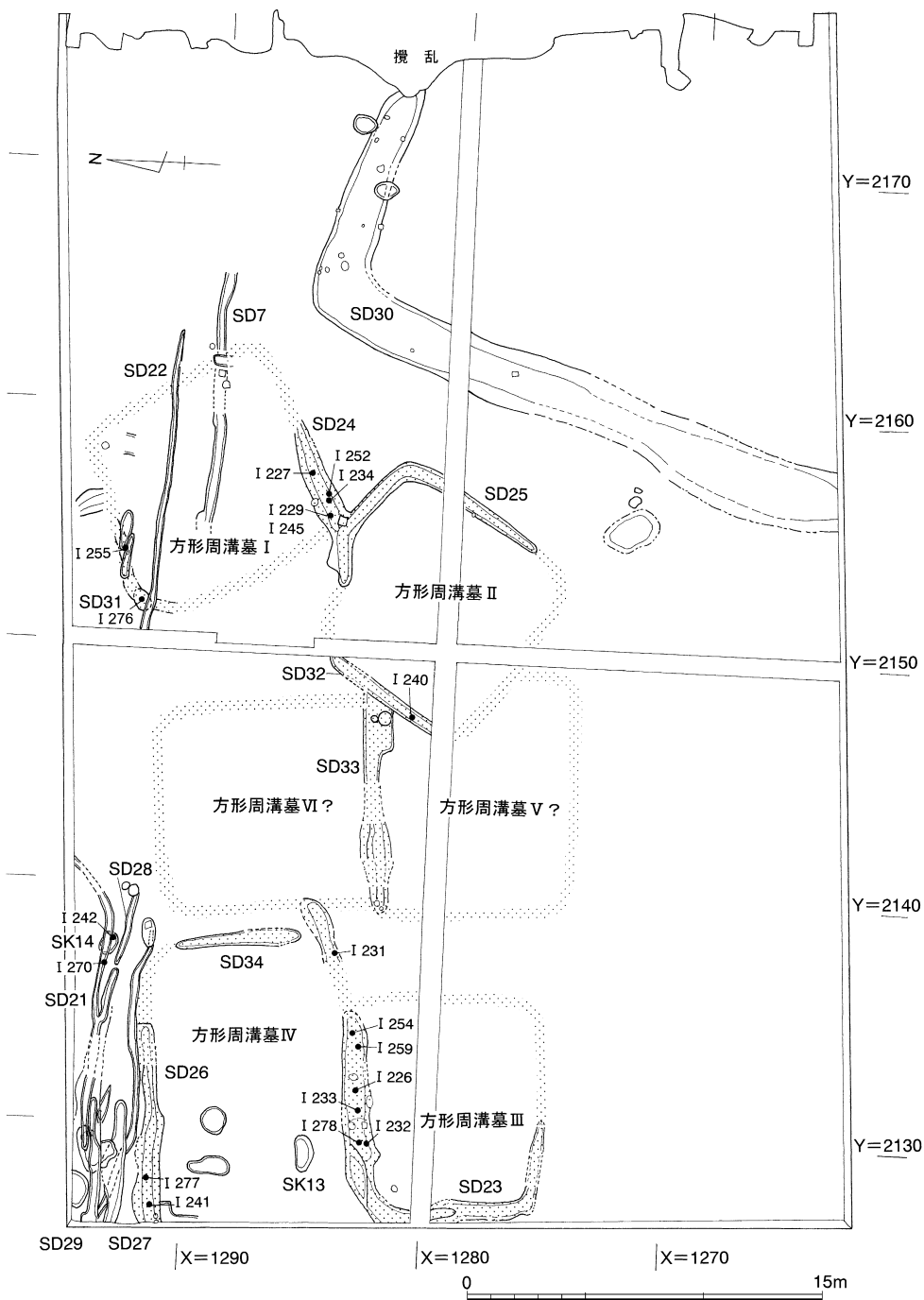


図13 弥生中期～古代の遺構 縮尺1/300

方形周溝墓Ⅲは、調査区西辺に位置し、S D23が北辺、西辺、南辺を区画する。1辺7～8m前後。S D23は幅0.7～1.2m、深さ0.2m前後。S D23の北側を画する溝中から、壺（I 226・I 231～I 233）、甕（I 254・I 259）、コップ形の小型土器（I 278）が横倒しの状況で出土している。I 254が溝底に貼り付くような形で出土したほかは、溝底から10cm以上浮いて出土している。中世柱穴出土の壺（I 239）も、その位置がS D23と重なるので、本来この溝に属していたものであろう。

方形周溝墓Ⅲの北側に推定復元できるものを方形周溝墓Ⅳとする。北側をS D26、東側をS D34が画し、南側はS D23を方形周溝墓Ⅲと共有する。西側は調査区外へと続く。南北は8m前後、東西の長さは不明。S D26から、鉢（I 277）が倒立した状態で溝底から若干浮いて出土したほか、壺（I 241）が出土している。

以上のような復元が正しいとすると、方形周溝墓ⅠとⅡ、ⅢとⅣは1組となって、東西方向に並列するように見える。そうすると、Ⅰ・ⅡとⅢ・Ⅳのあいだの空閑地にS D33を区画溝とする方形周溝墓の存在を想定できるかもしれない。ただし、S D33はS D32によって切られており、切り合いの位置関係から判断して、方形周溝墓Ⅱは封土を一部壊して墳墓を形成したと想定しなくてはならなくなる。出土土器に大きな年代差を考慮しがたいから、これはいささか不自然である。あるいはS D33は方形周溝墓をつなぐ連結溝としての機能をもっていたのかもしれない。よって、方形周溝墓4基を想定復元し、蓋然性は低いながらも2基存在した可能性もあると指摘するにとどめておく。

## (2) 遺物（図版11～16、図14～21、表2）

弥生中期後葉の土器が土坑や溝、第5層上面あるいは中世遺構などから出土した。個々の遺物の出土地点は表2に掲げ、器種別に解説を加える。

**細頸壺（I 226～I 228）** I 226は頸部の径5.9cm前後、胴部最大径19.6cm、残存する高さ19.4cmをはかる。口縁部は欠失するが、頸部に波状文を2帯、頸胴部の境に直線文を櫛描きで描いている。胴上半は丁寧な撫で調整ののち、上から直線文－波状文－直線文－波状文－波状文を櫛描きで表現する。櫛描文の原体は、幅約1.4cmの割り板である。さらに櫛描文帯をはさんで4個1組の円形浮文で5箇所（3箇所残存）飾る。胴部下半は、左上がりの刷毛目調整ののち縦方向の篋磨き。胴部内面は、刷毛目調整を施し、胴部最大部よりやや上の部分に、指押さえの痕跡が顕著に残る。指押さえは、刷毛目ののちにおこなわれており、胴の上部と下部を別々に作って接合した可能性が考えられる。外面と内面の刷毛目原体は別物である。底部中央に、径2cmの焼成後穿孔がある。



弥生中期の遺跡

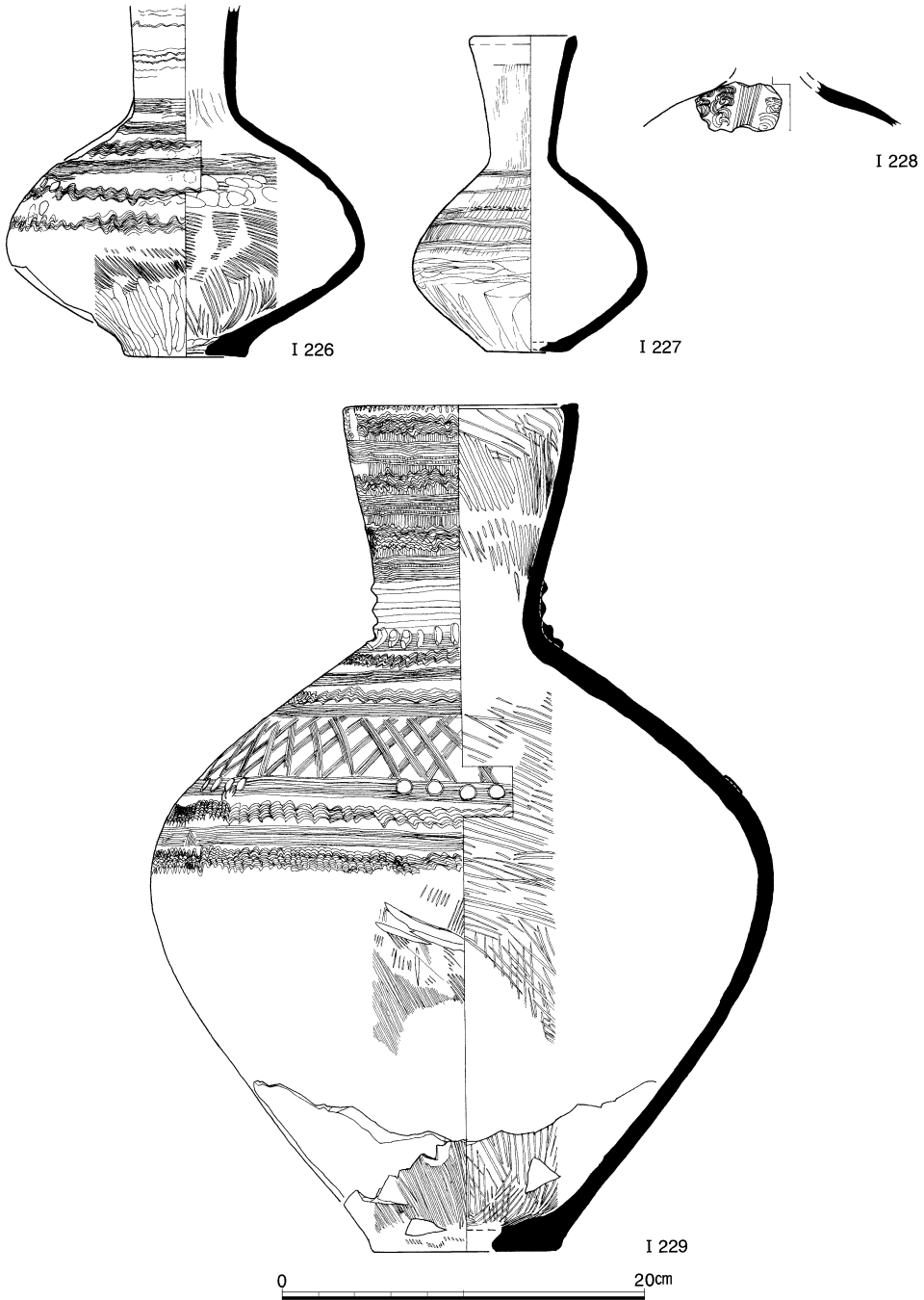


図14 弥生中期の土器(1) (I 226～I 228細頸壺, I 229直口壺)

I 227は底部の穿孔を除いて、完全な形で遺存していた。口径5.6cm、胴部最大径12.8cm、高さ17.4cm。口頸部は縦方向の刷毛目、胴上半は右上がりの刷毛目、胴下半は縦方向の粗い篋磨き、胴最大径部分には横方向の篋磨きを施している。胴上半を5帯の櫛描直線文で飾る。櫛描文は右回りで、描き継ぎはない。櫛描文の原体は、幅6mmの割り板である。口頸部内面は撫で調整。胴下半は刷毛目、上半は刷毛目ののち、横撫でを加えているようである。底部に、長径1.4cm・短径1.1cmの楕円形の穿孔を施している。

I 228は胴上部の破片。櫛描直線文で縦方向に分割し、そのあいだを櫛描波状文で埋めている。櫛描文の原体は幅10mmの割り板。内外面、撫で調整。

**直口壺 (I 229)** I 229は、口径13.0cm、胴部最大径34.2cm、高さ45.0cmをはかる大型の直口壺。底部から口縁部まで残存するが、外面の剝落が著しい。口頸部は、縦方向の刷毛目、胴部上半は丁寧な撫で、下半は刷毛目調整。内面は、外面よりも目の粗い原体による刷毛目調整。口縁部に面取りを施し、外端部を刻む。櫛描文を主体とした文様構成は以下のとおり。口頸部には、上から波状文と直線文を交互に3帯施し、その下部に、断面三角形の突帯を3条めぐらせる。胴部上半には、上から直線文－波状文－直線文－波状文－直線文で飾り、その下位に斜格子文を施し、さらに直線文と波状文を交互に2帯施している。最上位の直線文には、棒状浮文を32個前後貼り付け、斜格子文直下の直線文には、4個1組の円形浮文で6箇所飾る。底部に焼成後の穿孔をもつ。

**短頸壺 (I 230～I 239)** 高さ27～29cm前後で、口頸部がほぼ直立、胴部の張りが弱く細長い形態を呈する壺。口縁部の凹線文、刻み目文を除くと、目立った装飾を施さない。内面は刷毛目調整。外面は、口頸部は縦方向の刷毛目調整、胴部は叩き調整ののち、刷毛目調整で仕上げるものが多い。叩きは、痕跡を顕著に残すもの (I 231・I 234) と刷毛目で消され、かすかに残るもの (I 230・I 232・I 233・I 237) があり、叩きの有無が確認できないもの (I 239) もある。

いずれも、丁寧な横撫でによって口縁端部に面取りを施すことは共通するが、口縁部外面は、1条の凹線をめぐらせるもの (I 231・I 232・I 236・I 237・I 239)、横撫でするもの (I 230・I 238)、口縁外端部に刻みを加えるもの (I 233・I 234) の違いがある。I 234は口縁部の一部を弧状に抉っている。この点を除くと、I 233に酷似する。水差とすべきかもしれないが、抉りのある側および抉りに対応する反対側のいずれにも把手はつかないので、ここに分類しておく。

I 233には胴部下半に被熱痕跡がみられ、煮炊きに用いたと想定しうる。I 232には底部

弥生中期の遺跡

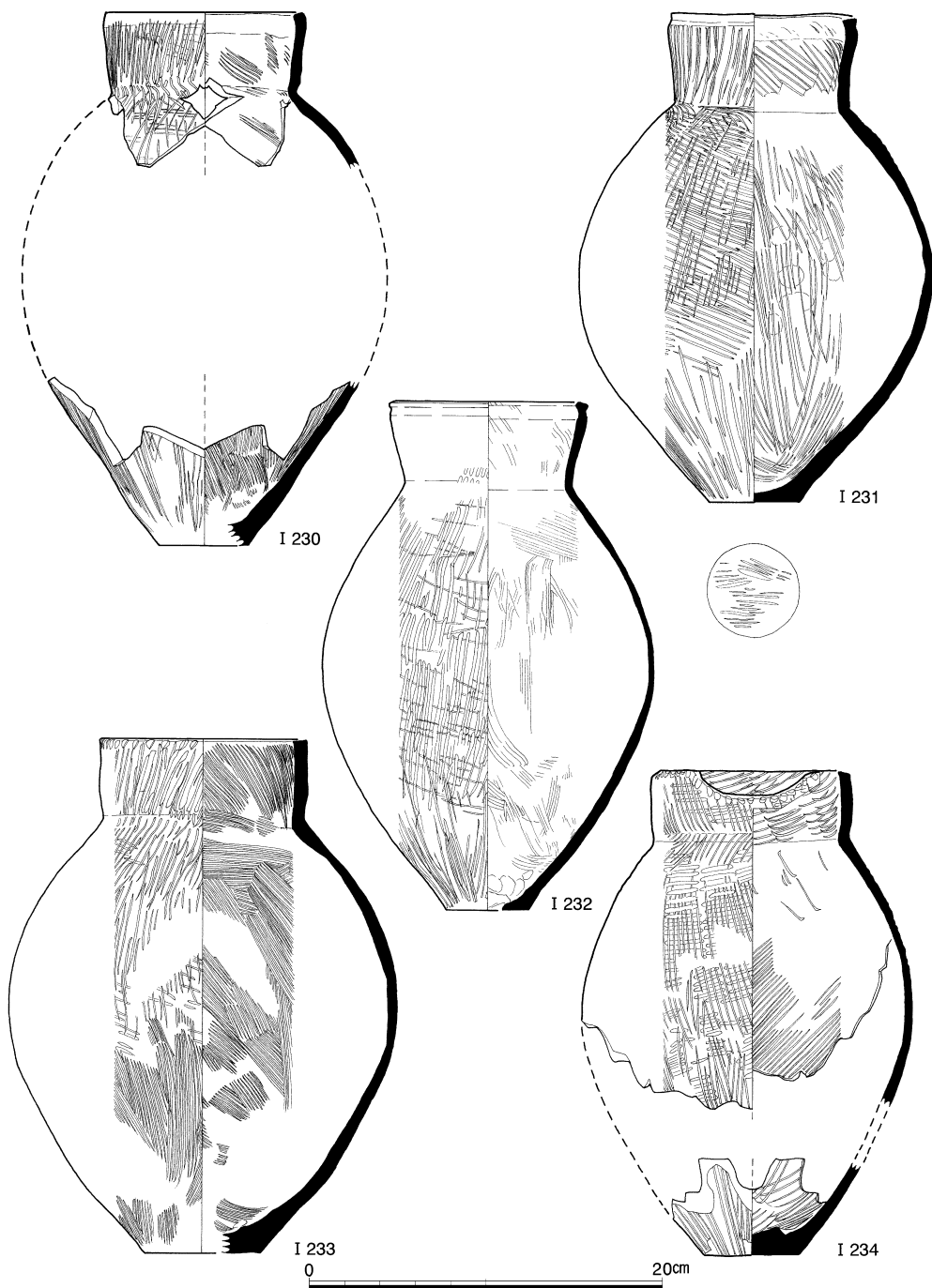


図15 弥生中期の土器(2) (I 230~ I 234短頸壺)

中央に径2cmの焼成後穿孔がある。I 230の口縁部内面や胴下部外面には、幅6mm前後でやや弧状になる傷跡が無数に見られる。同様の傷跡は、I 241（内面）・I 253（外面）・I 269（底面）・I 276（内外面）にもみられる（図版16-8）。齧歯類による噛み痕の可能性を考えている。

広口壺（I 240～I 243） 口縁部が外へ開く短頸壺。I 242によれば、文様で飾らない土器である。I 240・I 242の口縁端部は、上方へわずかに拡張し、横撫でを施す。頸胴部の内外面とも、刷毛目調整で、叩きの痕跡はみられない。

水差（I 244） 口縁部が直立し、胴部が算盤珠形を呈する水差。底面は剥落しており、脚台がついた可能性がある。胴部下半は磨いて仕上げ、胴部上半から口頸部にかけては、丁寧な撫で調整。内面は撫でて仕上げる。口縁端部は面取りする。半環状の把手のつく側の口縁部に弧状の抉りをいれる。口縁直下に凹線を1条めぐらし、櫛描直線文を2帯、頸部に施す。頸胴部の境を簾状文で画し、胴部上半を櫛描流水文で飾っている。口縁の抉りにそって浅くなりつつも凹線文はめぐるが、櫛描直線文と簾状文は抉りのある位置には施さない。櫛描文・簾状文の原体は同一で、幅13mmの割り板である。

甕（I 245～I 258） 甕は、「く」字状に口縁部が外反する形態で、口縁端部の刻み目文の有無で、2種類に大別できる。

I 245～I 251は口縁端部に刻みを施している類。高さ20～30cmのものが多く、I 245は高さ14.5cm前後の小型品である。胴部外面は、刷毛目仕上げするもの（I 245・I 247・I 251）、叩きによる調整のち、胴部下半のみ刷毛目仕上げをするもの（I 249・I 250）、叩きのち上半まで刷毛目を施すもの（I 248）がある。胴部内面は刷毛目調整を基本とし、I 248～I 251には下半を削りにより仕上げている。

口縁端部の刻みは、I 245を例外として、刷毛目原体を用いる。I 245は6個1組の刻みが4箇所（2箇所残存）に加えられており、口縁部内面に、刻みに対応するように爪形がみられることから、左手の親指と人差し指を用いて刻みを施したと理解できる。

I 252～I 257は、口縁端部に刻みを施さない類。I 252～I 254は高さが35cm前後になる大型の甕。胴部外面は刷毛目調整、内面の上半は刷毛目調整、下半は削りによって仕上げている。口縁端部は、上方ないしは上下にやや拡張し横撫でする。I 252・I 254は底面も、刷毛目仕上げとしている。I 252は胴下部に、長径19mm、短径14mmをはかる楕円形の穿孔をもつ。

I 255は高さ24cmをはかる中型品。I 256～I 258は底部まで復元できないため高さは不

弥生中期の遺跡

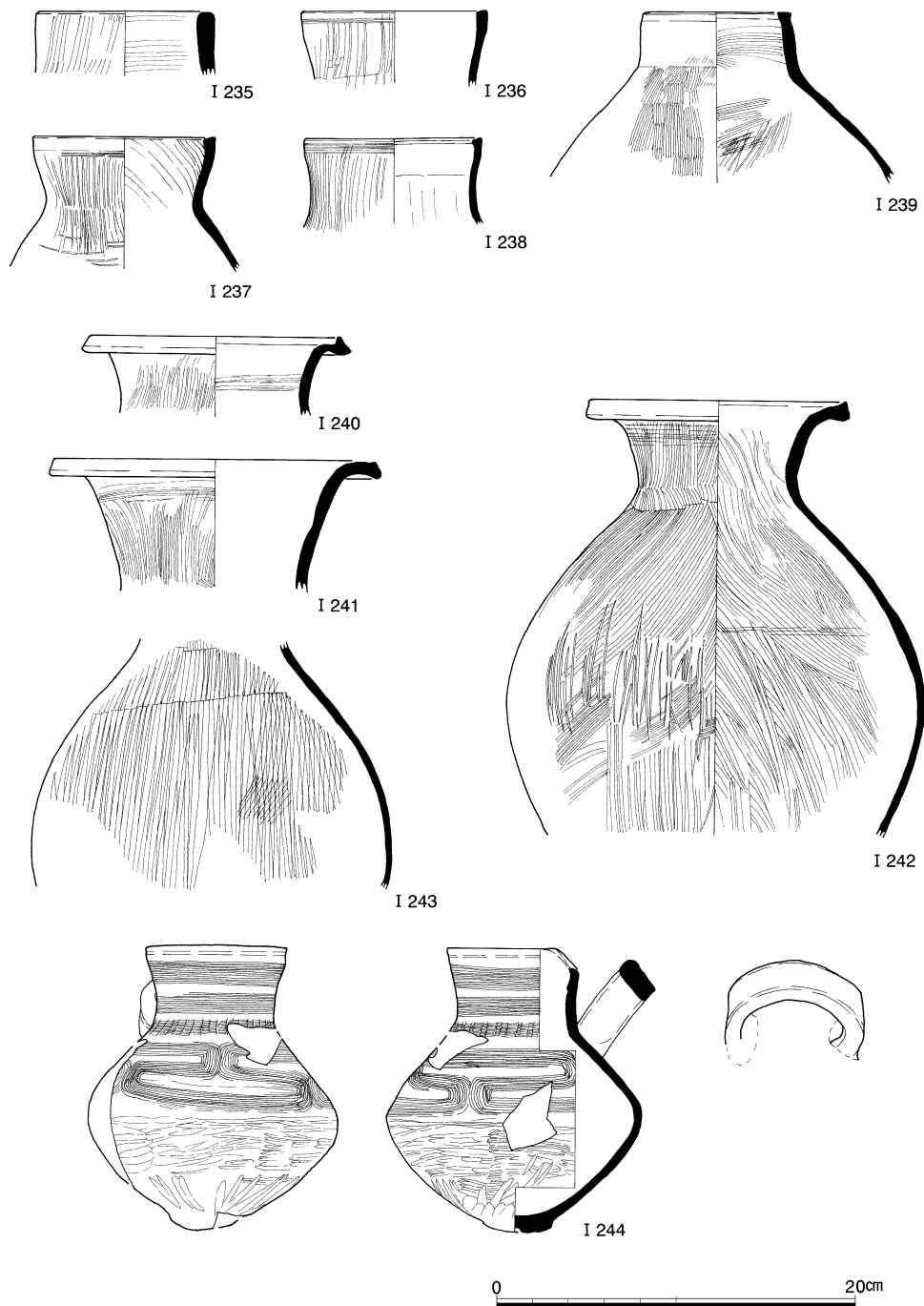


図16 弥生中期の土器③ ( I 235～ I 239短頸壺, I 240～ I 243広口壺, I 244水差)

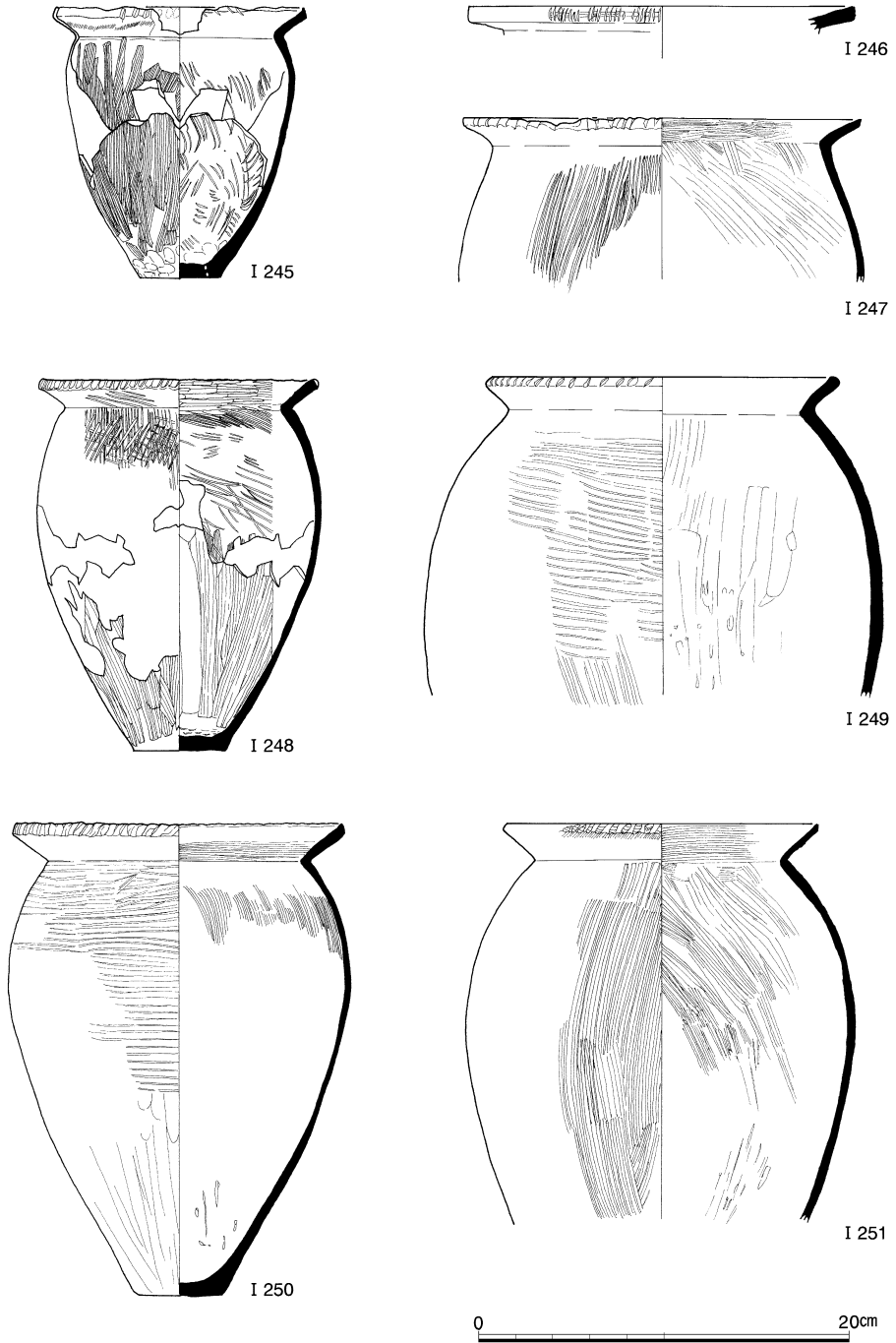


図17 弥生中期の土器(4) (I 245～I 251甕)



弥生中期の遺跡

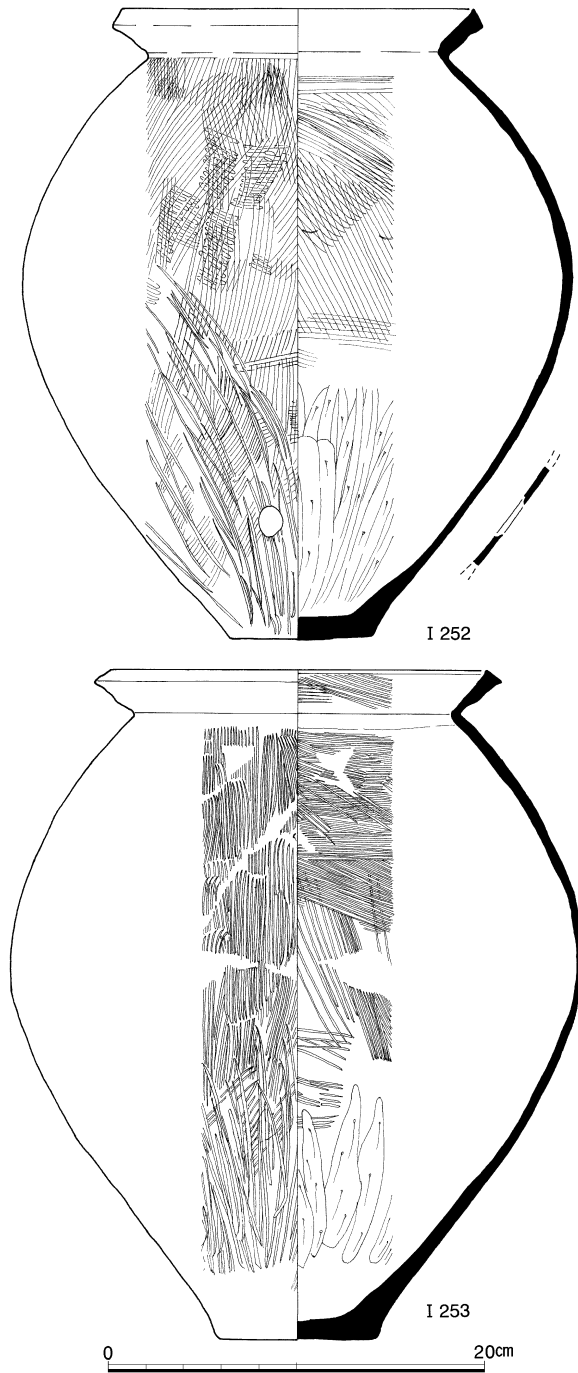


図18 弥生中期の土器(5) (I 252・I 253甕)

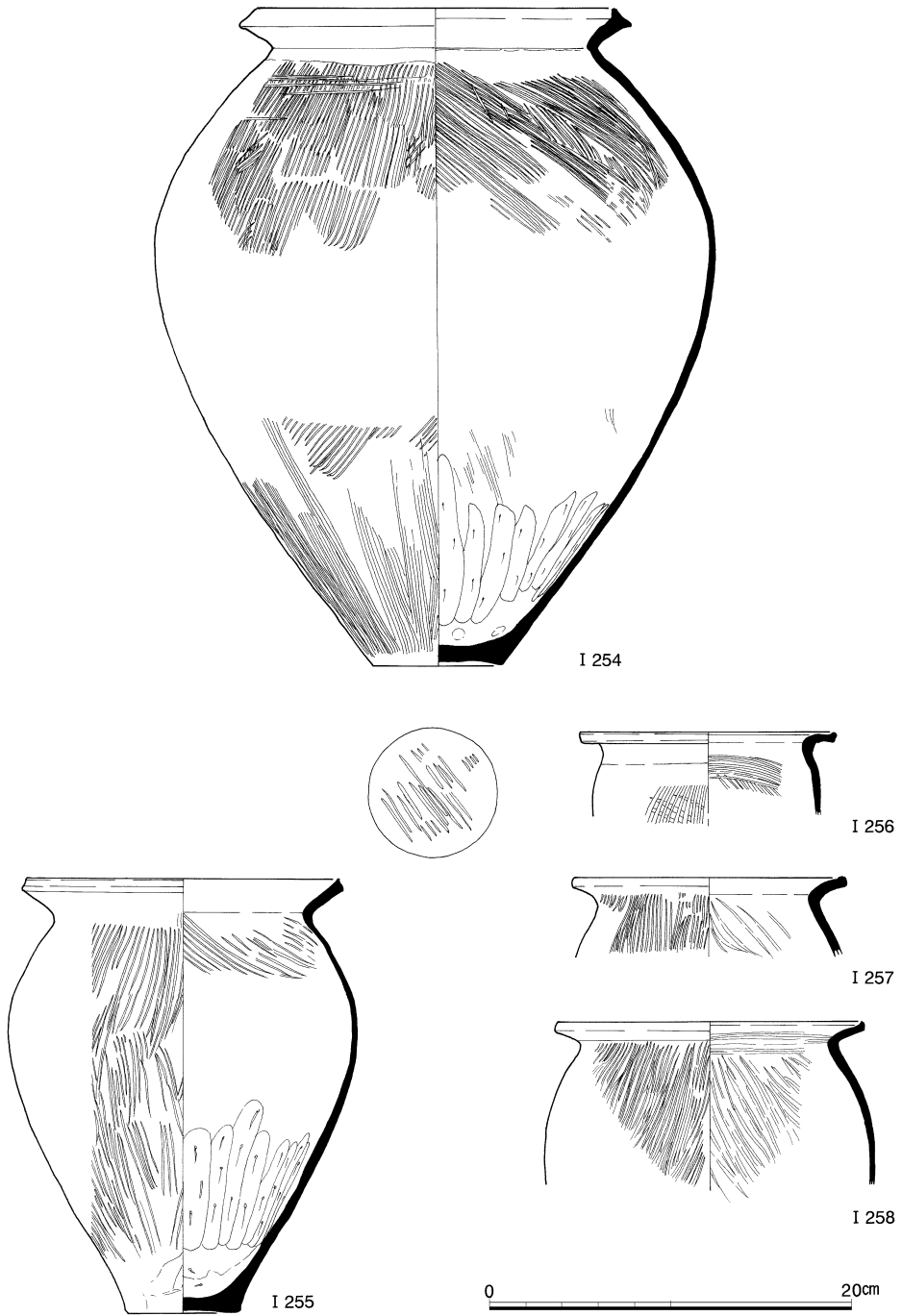


図19 弥生中期の土器(G) (I 254~I 258甕)

弥生中期の遺跡

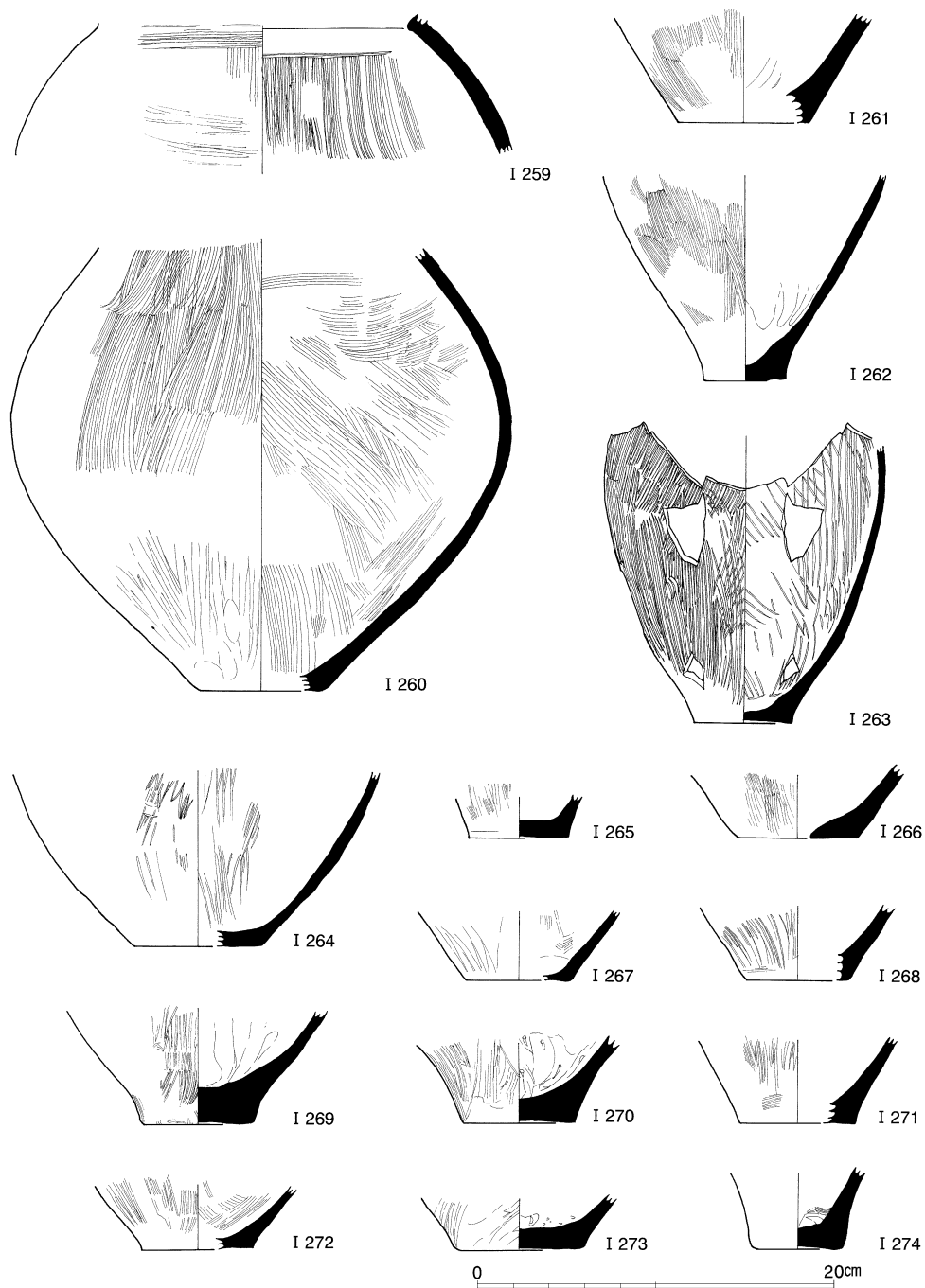


図20 弥生中期の土器(7) (I 259~I 274壺・甕の胴部・底部)

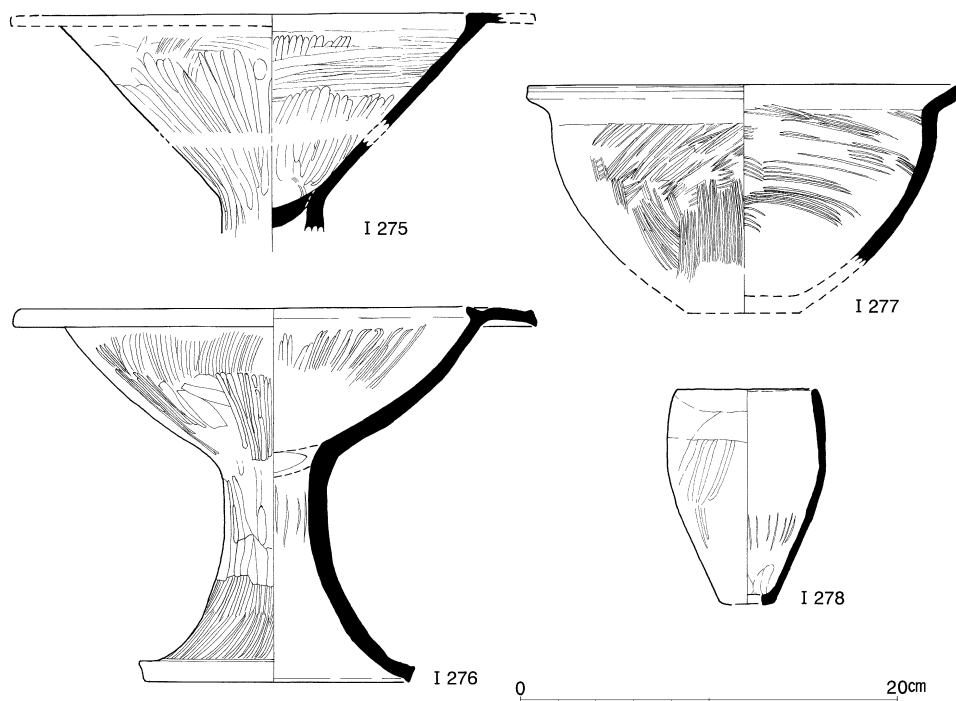


図21 弥生中期の土器(8) (I 275・I 276高杯, I 277鉢, I 278コップ形)

明であるものの、口径から判断して、中・小型品となろう。胴部外面、内面上半は刷毛目仕上げ、内面下半は篋削りで仕上げている。

**壺・甕の胴部・底部 (I 259～I 274)** 壺・甕の胴部から底部資料を一括した。胴部外面は、刷毛目で調整する。I 260・I 264は、胴下部にさらに磨きを施して仕上げ、I 267は底部直上を削りで仕上げている。内面の調整も刷毛目が多いが、I 269・I 270・I 273は削りを施している。I 265・I 270は、底面を刷毛目調整している。I 266は底部中央に、焼成後の穿孔をもつ。

**高 杯 (I 275・I 276)** 水平に口縁部がのびる高杯。杯底部は、円盤充填法で作る。I 275は脚部と口縁端部を欠失する。杯部が直線的に立ち上がり、口縁部内端が三角形状に肥厚する。杯部の外面・内面とも、篋磨き。I 276は、杯部がやや内湾し、口縁部内端が斜め上方へ突出する。口縁端部は、横撫でにより面をなし、上下にわずかに肥厚する。杯部・脚部ともに刷毛目調整のち篋磨きするが、脚部下半、杯部上半には磨きは及んでいない。脚部内面は横撫で調整で、しぼりの痕跡を残す。杯部内面は篋磨き。

**鉢 (I 277)** ボウル形の胴部に、外傾する口頸部がつく鉢。口縁端部に1条の凹線が

弥生中期の遺跡

めぐる。胴部は内外面とも刷毛目調整。胴部上半には目の粗い刷毛目（6条／2cm）、胴部下半には目の細かい刷毛目（16条／2cm）、内面には中間の刷毛目（12条／2cm）が観察でき、刷毛目原体を使い分けているようである。

コップ形（I 278） 口径8.7cm、高さ11.4cmをはかる小型の土器。最大径が胴部中程にあり、口縁部がやや内傾する。胴部は縦方向、口辺部は横方向に、撫でて仕上げる。底部に焼成後の穿孔をもつ。

表2 弥生中期土器の出土地区と出土遺構・層位

番号	地区	層位・遺構	器種	備考	番号	地区	層位・遺構	器種	備考
I 226	AN22d4	SD23	細頸壺	底部穿孔	I 253	AN22d3	SK13	甕	
I 227	AN23d1	SD24	細頸壺	底部穿孔	I 254	AN22d4	SD23	甕	
I 228	AN22c5	茶褐色土	細頸壺		I 255	AN23e1	SD31	甕	
I 229	AN23d1	SD24	直口壺	底部穿孔	I 256	AN22d3	黒灰色土	甕	
I 230	AN22d4	黄砂上面	短頸壺		I 257	AN23d1	茶褐色土	甕	
I 231	AN22d4	SD23	短頸壺		I 258	AN22d5	SX61	甕	
I 232	AN22d3	SD23	短頸壺	底部穿孔	I 259	AN22d4	SD23	胴部	
I 233	AN22d4	SD23	短頸壺		I 260	AN22d3	茶褐色土	胴部	
I 234	AN23d1	SD24	短頸壺		I 261	AN22d4	茶褐色土	胴～底部	
I 235	AN22d3・d4	茶褐色土	短頸壺		I 262	AN23d1	黄砂上面	胴～底部	
I 236	AN22d3	中世柱穴	短頸壺		I 263	AN23d1・e1	茶褐色土	胴～底部	
I 237	立合調査区		短頸壺		I 264	AN22e3・e4	SD26	胴～底部	
I 238	AN22e3	茶褐色土	短頸壺		I 265	AN22e3・e4	SD26	底部	
I 239	AN22d4	中世柱穴	短頸壺		I 266	AN22d5	中世柱穴	底部	底部穿孔
I 240	AN22d5	SD32	広口壺		I 267	AN22e4	SD26?	底部	
I 241	AN22e3	SD26	広口壺		I 268	AN22e4	SD26?	底部	
I 242	AN22e4	SK14	広口壺		I 269	AN22d3	SD23	底部	
I 243	AN22e3	黄砂上面	広口壺		I 270	AN22e4	SD21	底部	
I 244	AN22c4	黄砂上面	水差		I 271	AN22d3	中世柱穴	底部	
I 245	AN23d1	SD24	甕		I 272	AN22d4	黄砂上面	底部	
I 246	AN22d4	SD23?	甕		I 273	AN22d4	黄砂上面	底部	
I 247	AN22e4	SD26?	甕		I 274	AN22d4	中世柱穴	底部	
I 248	AN23d1	中世柱穴	甕		I 275	AN22e4	茶褐色土	高杯	
I 249	AN23c1	中世柱穴	甕		I 276	AN23e1	SD31	高杯	
I 250	AN23e1	SD31	甕		I 277	AN22e3	SD26	鉢	
I 251	AN22d4	SD23?	甕		I 278	AN22d3	SD23	コップ形	底部穿孔
I 252	AN23d1	SD24	甕	側面穿孔	地区割りは、図4（9頁）参照。				

## 5 古墳時代の遺物

本調査では、古墳時代の遺構は認められなかった。しかしながら、中近世の包含層や攪乱など、さまざまな層位および地点から、家形埴輪片12点および円筒埴輪と推定される破片2点が出土した（図版17、図22・23、表3）。

**家形埴輪** 家形埴輪片は一括資料ではないものの、胎土や製作技法からみて同一個体由来する可能性が高く、特徴的な破片から入母屋造に復元できる。ここではこれらの破片のうち、部位を推定できる9点を図示する。

I 279は下屋根根部の隅棟の破片である。軒先に粘土を貼りつけて帯状に一段高く成形し、そこに梯子状の文様を線刻する。横線の後に縦線が刻まれていること、A面の線刻がB面の線刻よりも先行することが、切り合い関係から判断できる。また、隅角部では、A面の文様とB面の文様に、上下方向の食い違いを生じている。軒先端部には赤色顔料が鮮明に遺存する。下屋根部上面にもうっすらと遺存している箇所が認められることから、本来は外面の全面に塗布されていたものが、樹立後に風雨にさらされて流失してしまったものと考えられる。内面には、粘土紐接合部に薄く粘土を補充し、撫でつけた痕跡が明瞭に残る。また、内面の上部には壁体部の剝離痕が観察される。

I 280は上屋根根部の大棟に据えられていたと推定される鱗飾りの破片である。外形のほとんどを欠損しているが、上端の遺存部分がS字状のカーブを描くことから、逆S字系の鱗飾り〔清野1996, p.204〕が左右対称に配置された形状であった可能性が高い。A・B両面ともに線刻が施される。上半には、外形の相似形を志向したと思われる線刻内に、鱗飾りの傾き方向と同じ方向に傾斜する斜線を刻む。下半には、軒先と同様の梯子状文様を線刻する。ただし、B面の方は2条の横線の中央にもう1条の横線を刻んでいる。A・B両面とも、I 279と同様に、横線が縦線に先行する。また、A・B両面とも、線刻の中軸線と外形の中軸線にずれが生じているが、A面のずれの方がより顕著である。B面には、わずかに赤色顔料が遺存する。

I 281は上屋根根部の破片で、網代を線刻している。縦線と横線を単位ごとに交互に刻んでいったことが、線刻の切り合い関係から窺える。粘土を貼りつけることによって、立体的に押縁を表現する。

I 282も上屋根根部の破片で、網代を線刻している。本来の天地はわからない。

I 283は壁体部に開けられた窓の上縁部分の破片と推定する。下縁には粘土を貼りつけ



古墳時代の遺物

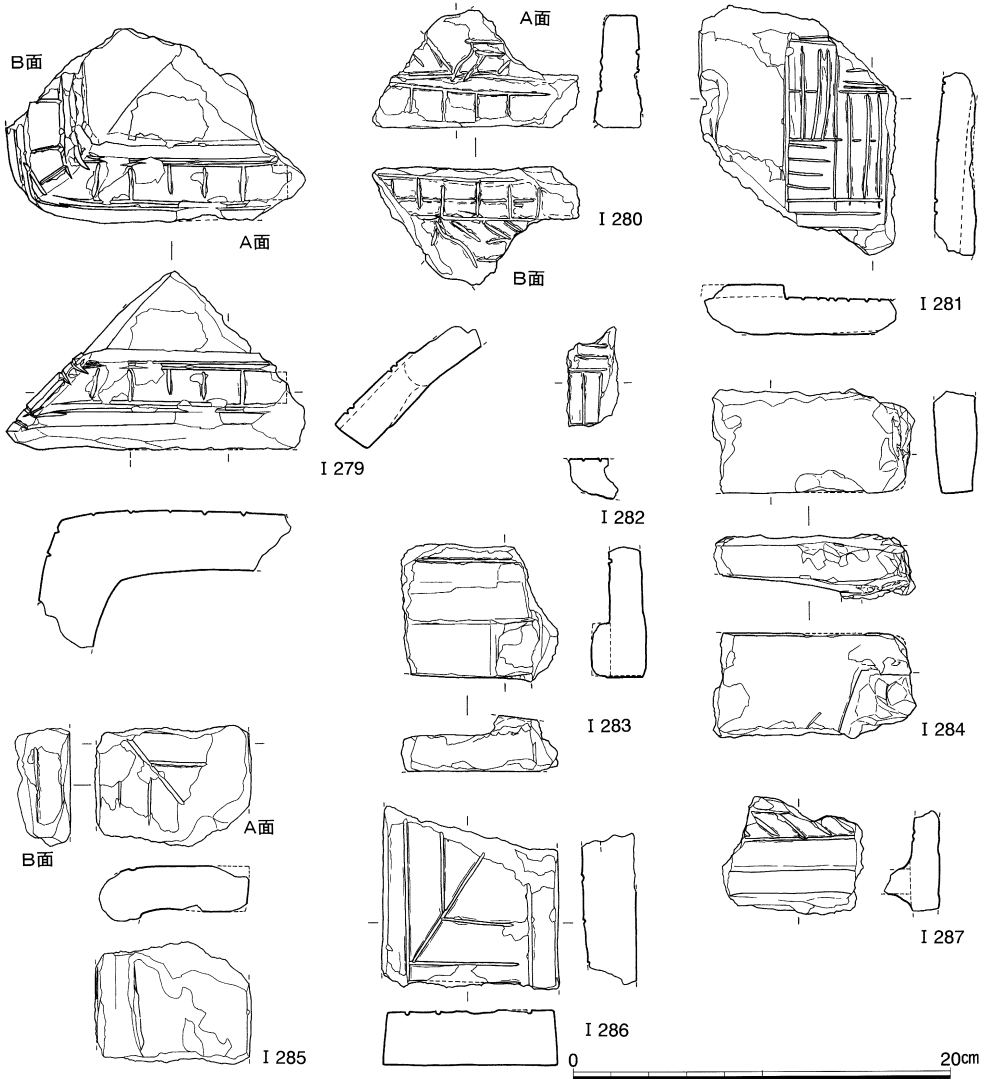


図22 家形埴輪 (I 279～I 287)

で帯状に一段高く成形するが、大部分が剝離してしまっている。その上方には1条の横線を刻む。外面には赤色顔料が良好に遺存する。

I 284は入口の庇の破片と推定する。突出が大きいので、<sup>のき</sup>楣というよりは庇と表現した方が適切と考える。下面には入口の柱表現の剝離痕が残る。庇端部と下面には、赤色顔料が遺存する。本来は上面にも塗布されていたものと考えられる。

I 285は軸部の隅柱の破片である。A面には鍵手文が線刻され、B面にも鍵手文を構成

すると思われる線刻がみとめられる。A面の鍵手文は斜線を先に刻み、その後横線を刻んだことが、線刻の切り合い関係からうかがえる。内外面ともに赤色顔料が遺存する。

I 286は軸部の柱の破片である。I 285と同様の鍵手文を線刻するが、斜線の傾きがI 285とは逆になっている。まず外側の縦線とそれと直交する横線を刻んだ後、その交点に交わるように斜線を刻み、最後に内側の縦線および横線を刻んだことが、線刻の切り合い関係から窺える。内外面ともに赤色顔料が良好に遺存する。

I 287は軸部の壁体部と基部、および裾廻突帯の破片と考えられる。裾廻突帯の上方に2条の横線を刻み、その間に右下がりの斜線を刻む。胎土はほかの8点の破片とよく似るが、やや薄手であることから、この破片のみ別個体である可能性も考えられる。

**円筒埴輪** 円筒埴輪片2点はいずれも小片であるが、突帯を含む。

I 288は、器壁の厚さ1.2cmをはかり、高さ3mm程度の低平な突帯をもつ。外面にタテハケ目を観察できるが、器表の風化が著しいため、突帯貼りつけとの先後関係は判然としな



い。色調は、内外面ともに橙色を呈する。

I 289は、器壁の厚さ1.1cmをはかり、高さ6mm程度の突帯をもつ。風化が著しく、内外面ともに調整痕を観察できない。色調は、外面は明黄褐色、内面は橙色を呈する。

図23 円筒埴輪 これらの円筒埴輪は、古墳時代後期のものであろう。

表3 埴輪の出土地区と出土層位

番号	品目	部位	赤彩線刻	備考	出土地区	出土層位・遺構
I 279	家形埴輪	下屋根(隅棟)	○ ○		AN22e3	黒灰色土上面
I 280	家形埴輪	上屋根(鱗飾)	○		AN22e4	黒灰色土?
I 281	家形埴輪	上屋根	○	網代表現	AN23e1	溝群上層清掃
I 282	家形埴輪	上屋根	○	網代表現	AN23e1	茶褐色土
I 283	家形埴輪	壁体部	○ ○	突帯	AN23d3・e3	中世溝群清掃
I 284	家形埴輪	入口庇	○ ○		AN23d3	黒灰色土
I 285	家形埴輪	隅柱	○ ○	鍵手文	AN22e5	SD 2 埋土
I 286	家形埴輪	柱	○ ○	鍵手文	AN23d2	黄砂直上
I 287	家形埴輪	壁体部・基部・裾廻突帯	○	やや薄手	AN22e4	黒灰色土or茶褐色砂質土
—	家形埴輪	不明	○		AN22d4	黄砂上面清掃
—	家形埴輪	不明		突帯剥離痕?	AN23d3	中世溝群上層
—	家形埴輪	不明			AN22e5	SX 6
I 288	円筒埴輪	突帯を含む		タテハケ調整	—	SD19
I 289	円筒埴輪	突帯を含む		摩滅が著しい	AN22d5・e5	攪乱坑

## 6 古代の遺跡

### (1) 遺 構 (図13)

この時期に属する遺構は、調査区南東でみつかった大型の溝、調査区北辺でみつかった東西方向の小溝群であり、遺構密度は低い。中世の遺構に混入した古代の遺物からみて、中世の開発でこの時期の遺構が破壊されている可能性も高いが、北に隣接する220地点で、多種多様の遺構・遺物がみつまっているのとは対照的なありかたである。

S D30は大型の溝で、幅1.6～2.6m、検出面からの深さ0.2～0.3mをはかる。西南西から北北西の方向へ22m以上延び、X=1285、Y=2165付近で東側へ直角に折れ曲がる。南端は調査区外へ続き、東端は攪乱で失われており、全体の規模は不明である。埋土からは、土師器小片が少量出土したのみで、時期を特定できない。古代の区画溝とともに、調査区内から埴輪が出土していること、北に隣接する111・220地点から方墳がみつまっていることから〔五十川・飛野1984、伊藤1999a〕、古墳の周壕の可能性も捨てきれない。ここでは、可能性の指摘にとどめて、周辺地区の調査成果を待ちたい。

調査区北辺のS D 7・21・22・27～29は、幅0.2～0.5m、検出面からの深さ0.2m前後をはかる東西方向に延びる小規模な溝群。時期の特定できる溝は少ないが、S D28からは10世紀、S D 7からは10～11世紀の遺物が出土している。中世にも、ほぼ同様の位置に溝が掘削されるので、東西方向の区画が古代に遡って形成されたことを示唆するものとして重要である。

### (2) 遺 物 (図24)

I 290は弥生時代の溝S D26上面から出土した須恵器杯蓋。内面のかえりは短い。つまみを欠失する。岩倉Ⅱ段階（7世紀後半）に比定できる〔宮本1992〕。I 291はS D28出土。黒色土器A類の椀。外面の篋磨きはみられない。10世紀前半頃。I 292～I 294はS D 7出土。I 292は土師器皿。「て」字状口縁手法B<sub>4</sub>類。I 293は須恵器の底部。I 294は灰釉

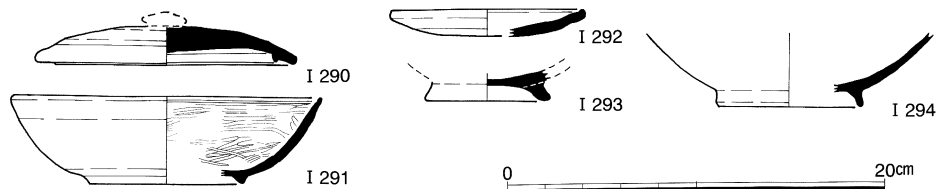


図24 古代の遺物

陶器碗。高台は外側へ踏ん張り、釉は漬け掛けされる。これらは10～11世紀中頃のものである。

なお、中世の遺構に混在した古代の遺物は第7節で、古代の瓦は中世の瓦塼類とともに一括して、第8節で報告する。

## 7 中世の遺跡

### (1) 時期の設定と遺物の分類

今回の出土遺物の中で、主体を占めるものである。記述の便宜と、遺構の変遷が把握できるように、在地産の土師器碗・皿類の編年を基準にして、3時期に大別し、各時期を古段階、新段階に細分して示すことにした。

中世1期は、1段撫で手法D類が主体を占める時期であり、遺構によっては2段撫で手法のC類や1段撫で手法のE類がともなうもの。12世紀末～13世紀ごろ。古段階は、12世紀末から13世紀前半、新段階は13世紀後半。

中世2期は、1段撫で手法E類が主体を占める時期であり、おおむね14世紀代。14世紀中頃を境に、前半の古段階と後半の新段階にわける。

中世3期は、E類とともに1段撫で手法F類が出現している時期で、15世紀を中心とし、新段階の一部は16世紀前葉に下る可能性がある。15世紀中頃を境に、前半の古段階と後半の新段階に分ける。

在地産土師器の分類は、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』にしたがい、その暦年代観については、小森俊寛・上村憲章の成果〔小森・上村1996〕を参考にした。そのほか、貿易陶磁器は、山本信夫〔山本2000〕、森田勉〔森田1982〕、上田秀夫〔上田1982〕、東播系須恵器は森田稔〔森田1995〕、常滑は中野晴久〔中野1995〕、古瀬戸は藤澤良祐〔藤澤1991・1993・1995 a・b・1996〕、備前は間壁忠彦〔間壁1991〕、信楽は木戸雅寿〔木戸1995〕の分類に対比した結果を記した。

なお、金属製品のうち鉄製品は第9項、銭貨は第10項、瓦塼類については第8節で記述した。

### (2) 1期の遺構

1期の遺構には、溝・井戸・配石・廃棄土坑・集石土坑・埋甕などがある(図25)。

溝 南北方向にのびるSD12～14と東西方向にのびるSD5・6・8・9がある。

SD12は幅1～1.5m、深さ0.4m前後をはかる断面U字形の溝。真北より約3°東へ振

中世の遺跡

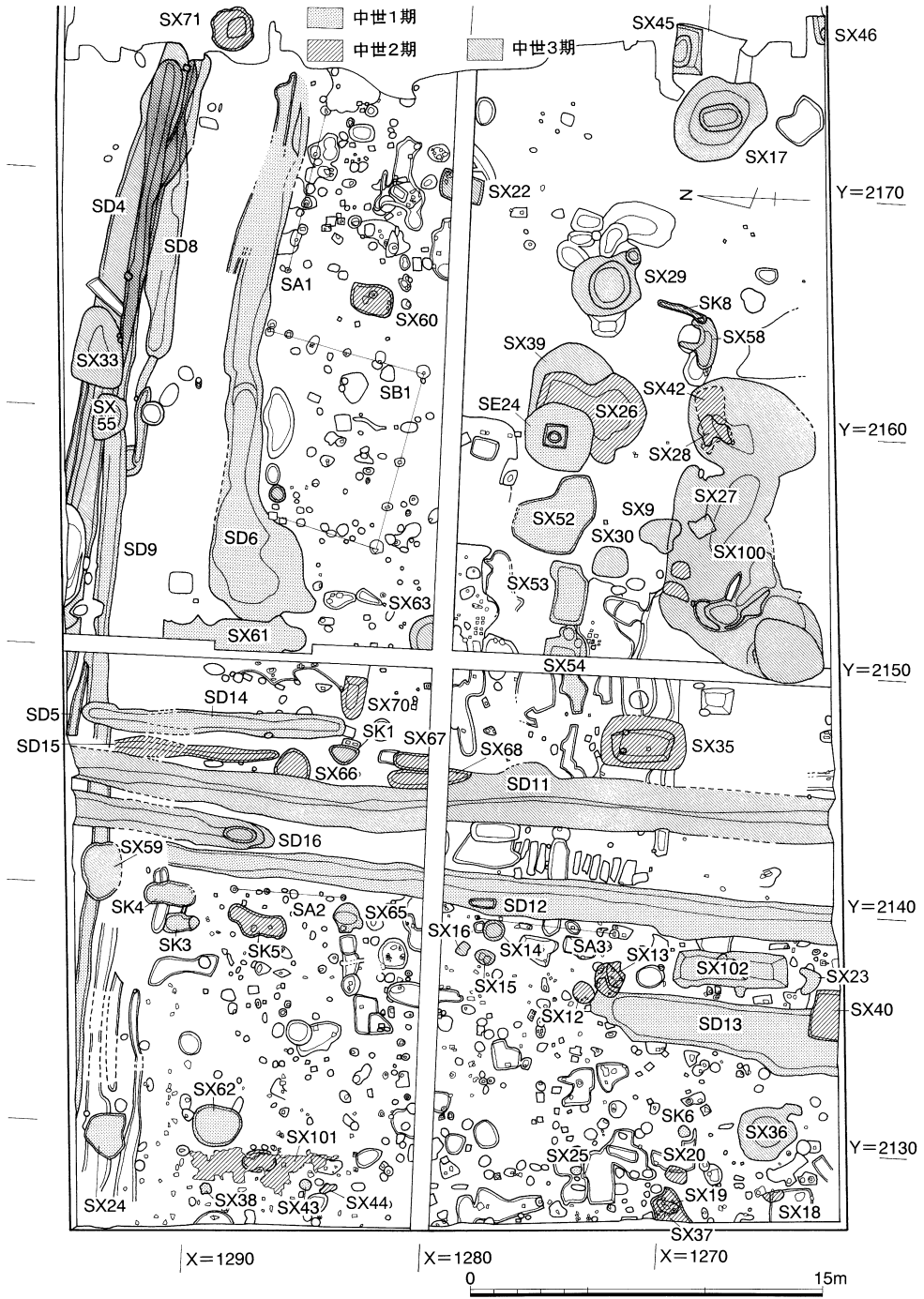


図25 中世の遺構 縮尺1/300

る。南端は調査区外へと続く。北端はX=1292付近で浅くなり続きがはっきりしなくなるが、東西溝S D 9の手前で収束していたようである。S D 12の西側を並行してはしるS D 13は、幅2~2.8m、深さ0.4mをはかる。南端は調査区外へとのび、北端はX=1273付近で収束している。S D 14はS D 12の5 m東をはしる溝で、幅1 m、深さ0.5mをはかる。南端はX=1284付近から始まり、北端はX=1295付近で収束しており、東西溝S D 9をきっている。

東西方向の溝のうち、S D 5・8・9は、調査区北辺を東西方向にのび、幅0.5~1 m前後、深さ0.4mをはかる。検出状況の良好なS D 9でみると、真北より約3° 東へ振れており、南北溝とほぼ直交している。調査区の北側の地点における立合調査でも、東西方向にのびる12~13世紀の溝が確認されていることから、これらの東西溝は道路の側溝としての役割を想定することができる。

一方、幅1.5m前後をはかるS D 6は、上に述べた東西溝の約2 m南を東西にのびるが、Y=2152付近で、幅4 mほどの袋状になって収束しており、その西側には配石S X 61が構築されていた。これらが一連のものであれば、州浜とみることもでき、東側から導水した園池状の施設と想定することもできる。ただし、S D 6は砂地に掘り込まれており、滞水を示すような埋土は確認されなかった。

**配石** 東西溝S D 6の西側で検出されたS X 61は、南北6 m、東西1.5mの範囲に、拳大から人頭大の礫が敷き詰めてあった(図版5-3・4, 図26)。地山を削平し、東西の比高差0.4mの斜面を作りだし、礫を敷き詰めている。上に述べたように、S D 6と一連の遺構で、州浜状施設の可能性を指摘しておく。

**井戸** S E 24は本調査区でみつかった唯一の井戸である(図版4-6)。石室S X 26によって上部を破壊されていたが、方形縦板組の井戸側と曲物を設置した水溜が残存していた。井戸底の標高は、48.37mである。

**廃棄土坑** 不用になった器物類を廃棄した土坑として、S X 24, S K 6, S D 6 上面がある。調査区北西隅で検出したS X 24は瓦を廃棄した土坑。調査区南西辺に位置するS K 6は食用後の貝を廃棄した小土坑。整理箱1杯分の巻貝が出土した。種類は、オオタニシ(*Cipangopaludina japonica*)とマルタニシ(*Cipangopaludina chinensis malleata*)で、前者が多かった<sup>(1)</sup>。いずれも水田などに棲息し食用となる。S D 6 上面は、S D 6 西辺の袋状の部分の上面でとらえられた土器溜。廃絶後の窪地を利用したものであろう。

**集石土坑** 遺物よりも礫をおもに廃棄している土坑を集石土坑として区別した。S X



23・43・62・65はS D12より西側，S X 27は調査区南東部でみつかっている。

**土 坑** 性格を異にする各種土坑を一括した。

調査区西北部でみつかったS K 3・4は東西に並んで検出された隅丸長方形の土坑。S X102は，S D12と13の間で検出された土坑で，幅1.5m，長さ5mをはかる大規模な土坑である。

一方，調査区中央南寄りで見つかったS X52～54や東南隅で見つかったS X45は砂層を深く掘り抜いて構築されており，砂取り穴の可能性はある。

**埋 甕** X=1289，Y=2127.4の地点で見つかったS X38は，常滑焼大甕を正位の位置で埋置していた。口頸部の破片は，内側に落ち込んだ状態で検出された。

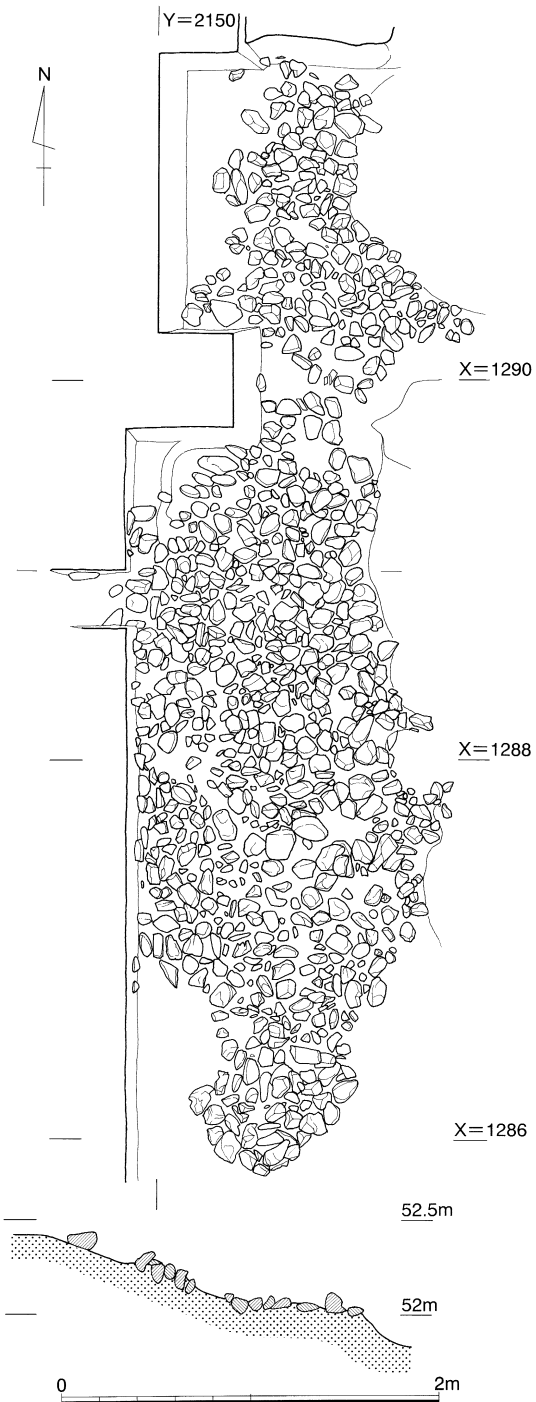
(3) 2期の遺構

溝・石室・石敷・廃棄土坑・集石・集石土坑・土坑などがある(図25)。

**溝** この時期に属する確実な溝は，南北方向の溝S D15のみ。幅0.6～0.9m，深さ0.4m。南端は，X=1287付近から始まり，X=1294付近で止まる。

**石 室** 地面を掘りくぼめ，四周に礫を壁状に配置した遺構を石室として報告する。1期に属するものはなく，2期から3期にかけて構築された。

図26 配石S X61 縮尺1/40



調査区中央をはしる南北の溝群よりも、東側に分布する。四周の壁の残りのよいものは少ないが、これは上部を後世に攪乱されたという要因とともに、石組井戸と比較してみたときの、石積みの乱雑さにもその一因があると想定している。

調査区中央、南辺でみつかったS X35は、石室の規模がもっとも大きく、また残りもよいものであった(図版7-1~3, 図27)。掘り方は平面隅丸長方形で、規模は南北3.6m, 東西2.4m, 検出面からの深さ1m前後。この掘り方の内部に、10~40cm前後の川原石を長方形に積み上げている。下部に大型、上部に小型の礫を用いる傾向にある。内法の規模は、長軸が下部で2.4m前後、上部で2.5m, 短軸が下部で1m, 上部で1.2m前後である。埋土に礫が多数落ち込んでおり、本来はもう少し高さがあったものと思われる。底面は、中央に向かってわずかにくぼむすり鉢状を呈し、北側と中央の西寄り付近で土坑が検出された。北側の土坑は、短辺20cm, 長辺30cmの長方形で、深さ25cm, 中央の土坑は、短辺30cm, 長辺55cmの長方形の土坑で、深さ25cmをはかる。

調査区南東部でみつかったS X26は、検出時は集石土坑状を呈し、発掘の結果上部の破壊された石室であることが判明した(図版6-1・2, 図28)。掘り方は2段掘り状で、直径3mをこえる不整形の掘り方の中に1辺1.4m前後の隅丸方形の掘り方が築かれ、その中に石室が構築されている。3段程度残存する西壁の石積は残りが良かったが、それ以外の石積は本来の位置をたもっていないと思われる。内法の規模は、80cm前後。

S X60は調査区北東部に位置する(図版6-3・4, 図28)。掘り方は隅丸長方形で、規模は長辺1.9m, 短辺1.2~1.3m, 深さ0.4m前後をはかる。東側になる長辺の石積は残存していなかったが、それ以外の3辺については、川原石による石積が2~3段前後残存しており、短辺の石組はとくにしっかりとっていた。石室の内法の規模は、長軸が1.4m前後、短軸は0.6~0.7m前後であろう。底面上には、10~25cmの厚さで、黒色の有機質泥土が堆積していた。この堆積物の一部を松井章氏に水洗選別していただいたが、遺構の性格を特定できるような動植物遺体は含まれていないとのことであった。中央部に直径35cm, 深さ10cmの土坑が存在し、なかに礫が1個落ち込んでいたが、この小土坑は床面上に堆積した黒色有機質土を切って構築されており、S X60に伴うものか不明である。

**石 敷** 調査区北西部でみつかったS X101は、10~40cmの偏平な川原石を敷き詰めた遺構(図版4-3, 図29)。後世の遺構や石の抜き取りなどによって残存状況はよくなかったが、幅1.3mで南北方向に5.6m前後、検出した。西端は、長辺を西側に向けて直線になるように配石しており、東端も直線状をなす部分があるため、幅については本来の長

中世の遺跡



図27 石室 S X 35 縮尺 1/40

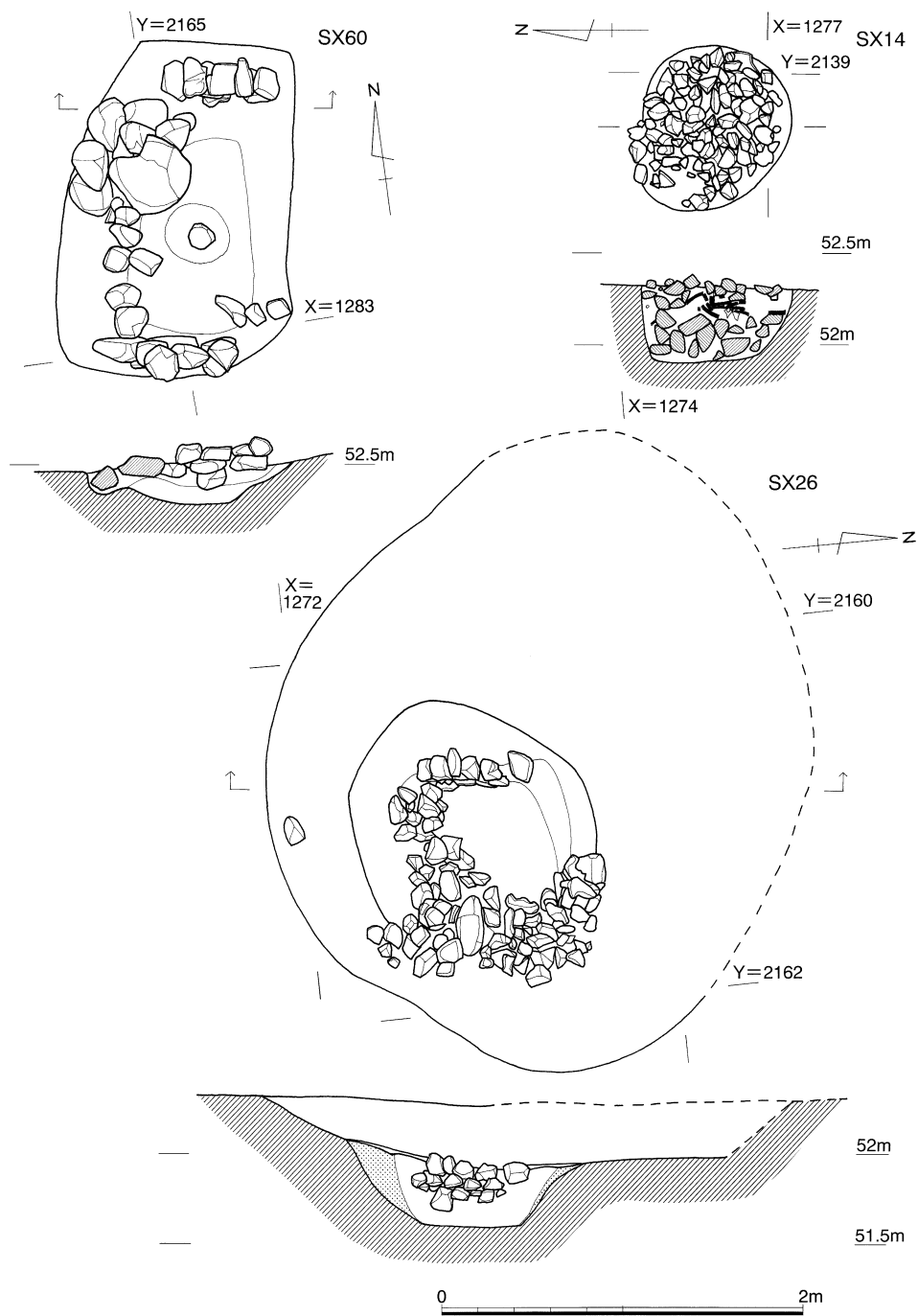


図28 石室 S X 60・S X 26, 集石土坑 S X 14 縮尺 1/40

中世の遺跡

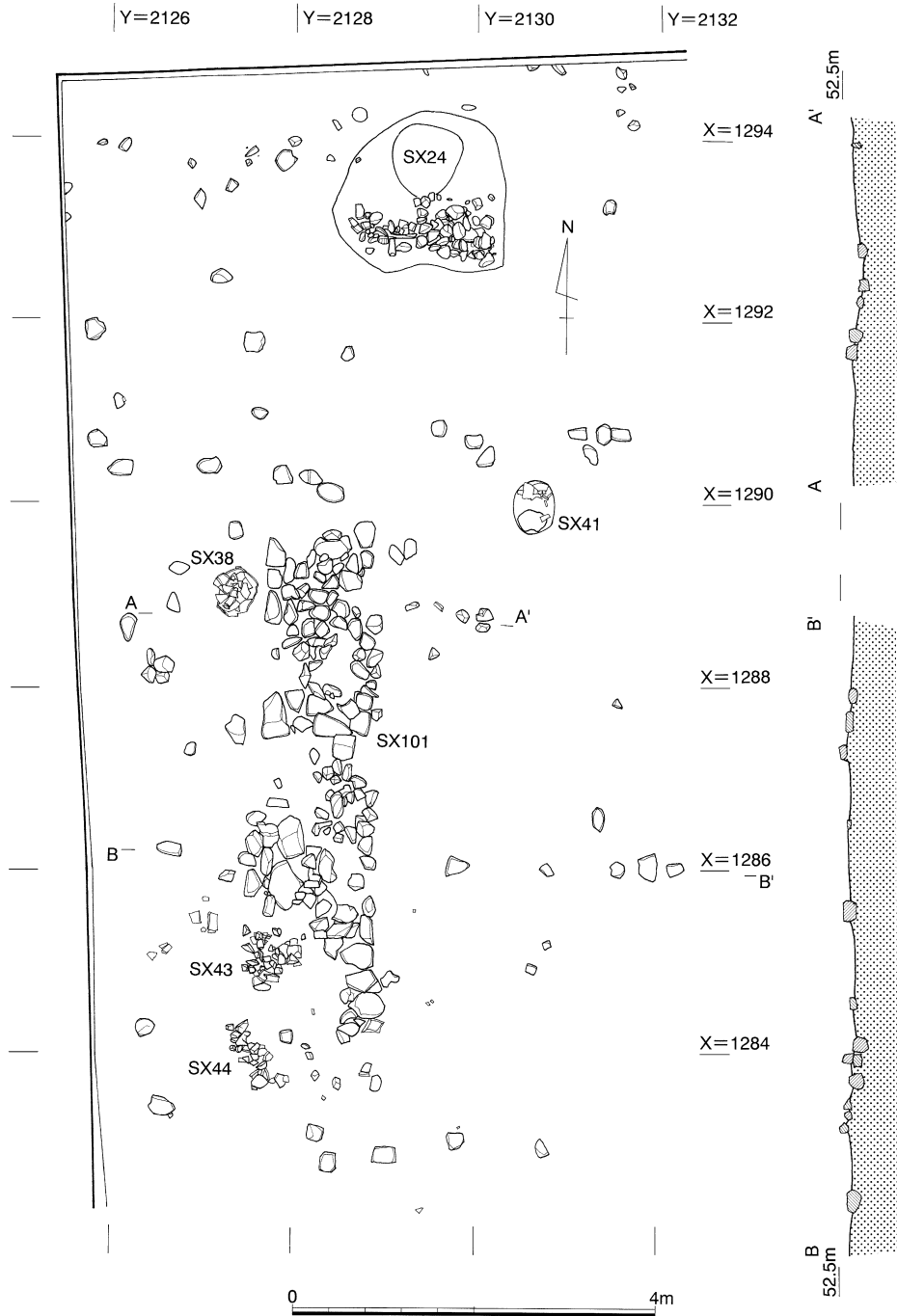


図29 石敷S X101, 瓦溜S X24, 埋甕S X38, 集石S X41・44, 集石土坑S X43 縮尺1/80

さが保たれているとみなせる。建物に付属する雨落ち施設の可能性が考えられる。

**廃棄土坑** S X25は調査区西辺，S X28・S X32・S X34は調査区南東部でみつまっている。S X25は、掘り方がはっきりしなかったが、南北0.5m、東西0.35mの楕円形の範囲内から多量の土師器皿が出土した（図版5-2）。

調査区南東部に位置するS X28・32・34はいずれも小土坑で、これらの廃棄土坑のある地点は、長期にわたって廃棄場所として利用されており、3期にはこれらの遺構を覆うような形で、大規模な遺物溜S X100が形成されている。

**集石・集石土坑** 明瞭な掘り方がなく礫を集めている遺構と、掘り方がみられ礫を集積した土坑を一括した。いずれも不用になった礫を破棄した遺構が主体を占めると理解しているが、大規模な集石土坑は石室が崩壊した遺構の可能性もある。

S X12・S X13・S X18～S X20は、集石で、いずれも調査区南西部でみつまっている。S X44は石敷S X101の南西辺でみつかった小規模な集石（図29）。

調査区西壁際で検出されたS X37は集石土坑で、上部にS X19が構築されており、一連の遺構かもしれない。調査区南東部のS X42は東西3m、南北1mの大規模な土坑のなかに礫が集積していた。もとは石室であった可能性もあり、その場合この上部に構築された廃棄土坑S X28は、廃絶した石室の跡を利用したゴミ捨て穴と理解できる。

**土坑** 調査区北西部でみつかったS K5は、長さ2.6m、幅1m前後をはかる不整形な土坑。調査区西寄り、南壁際でみつかったS X40は、方形の竪穴状で調査区外へと続く。深さ0.3mをはかる。S D11に一部切られてみつかったS X66と調査区北東辺でみつかったS X71は、直径1.5～2mをはかる平面円形の落ち込みである。並列して検出されたS X67・68は、S X68の西肩がS D11によってきられる。南北に長い隅丸長方形の落ち込み。

#### (4) 3期の遺構

3期の遺構には、溝・石室・廃棄土坑・集石・集石土坑・土坑などがある（図25）。

**溝** 南北方向にのびるS D11・16と東西方向にのびるS D4がある。南北溝S D11は、Y=2144付近を南北にはしり、両端とも調査区外へと続いている。幅1.7～2.2m、深さ1.2m前後をはかる断面V字形の大溝。埋土より多量の遺物が出土した。S D16は、S D11の西側をはしる南北溝。南端はX=1287付近より始まり、北側は調査区外へとのびる。幅1.4m、深さ0.9mをはかる。

東西溝S D4は東端を攪乱で破壊され、西端は調査区外へと続く。幅1.5～2m前後。



中世の遺跡

主軸を真北より9°東へ振っており、1期の東西溝より6°前後、東への振れが大きく、近世の道路の主軸方向にはほぼ一致する。

石室 2基確認した。調査区南西隅に位置するSX17は掘り方不整形で、規模は南北4.3m、東西4m前後、深さは0.8mをはかる(図版6-5, 図30)。10~50cm大の川原石を用いて、長軸を南北にとる長方形の石室が構築される。北壁と西壁はよく残っていたが、東壁と南壁は崩落が著しい。内法の規模は、長軸2.3m、短軸2mに復元できる。

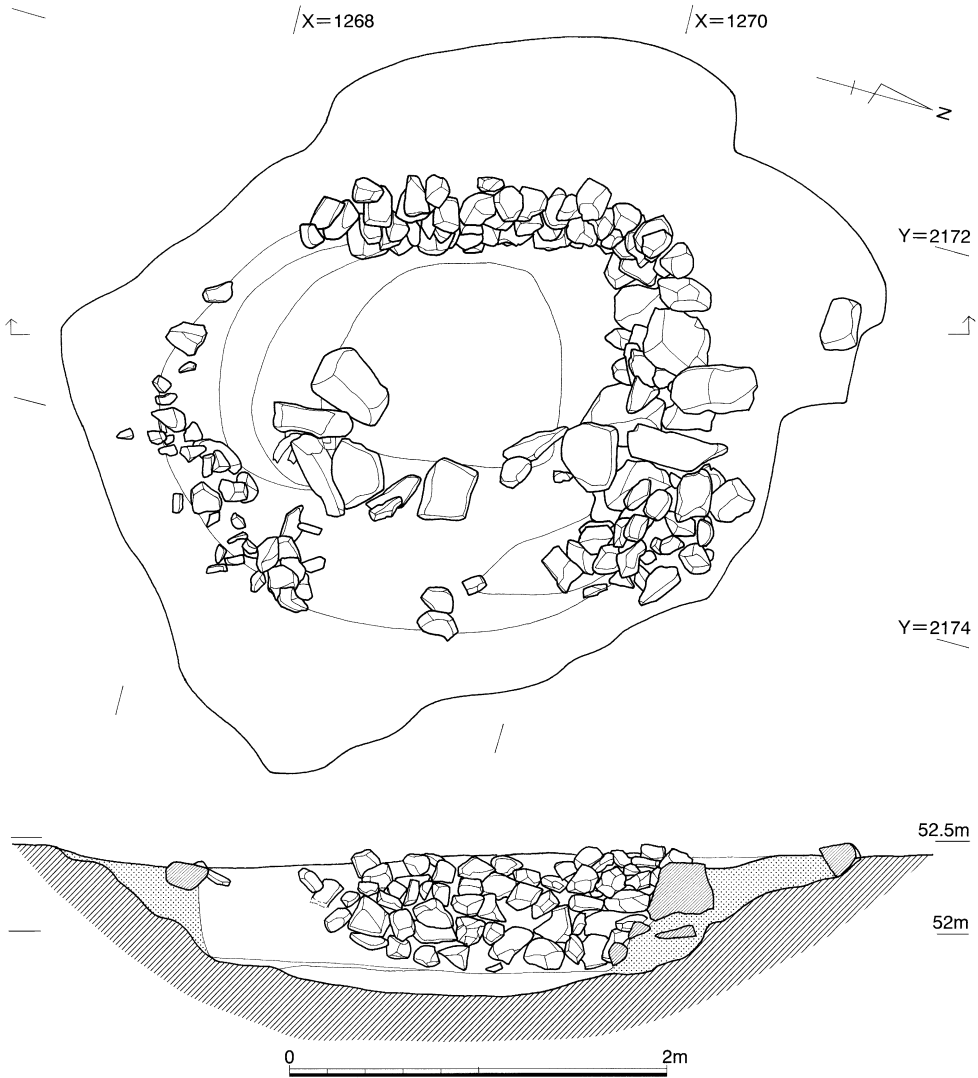


図30 石室SX17 縮尺1/40

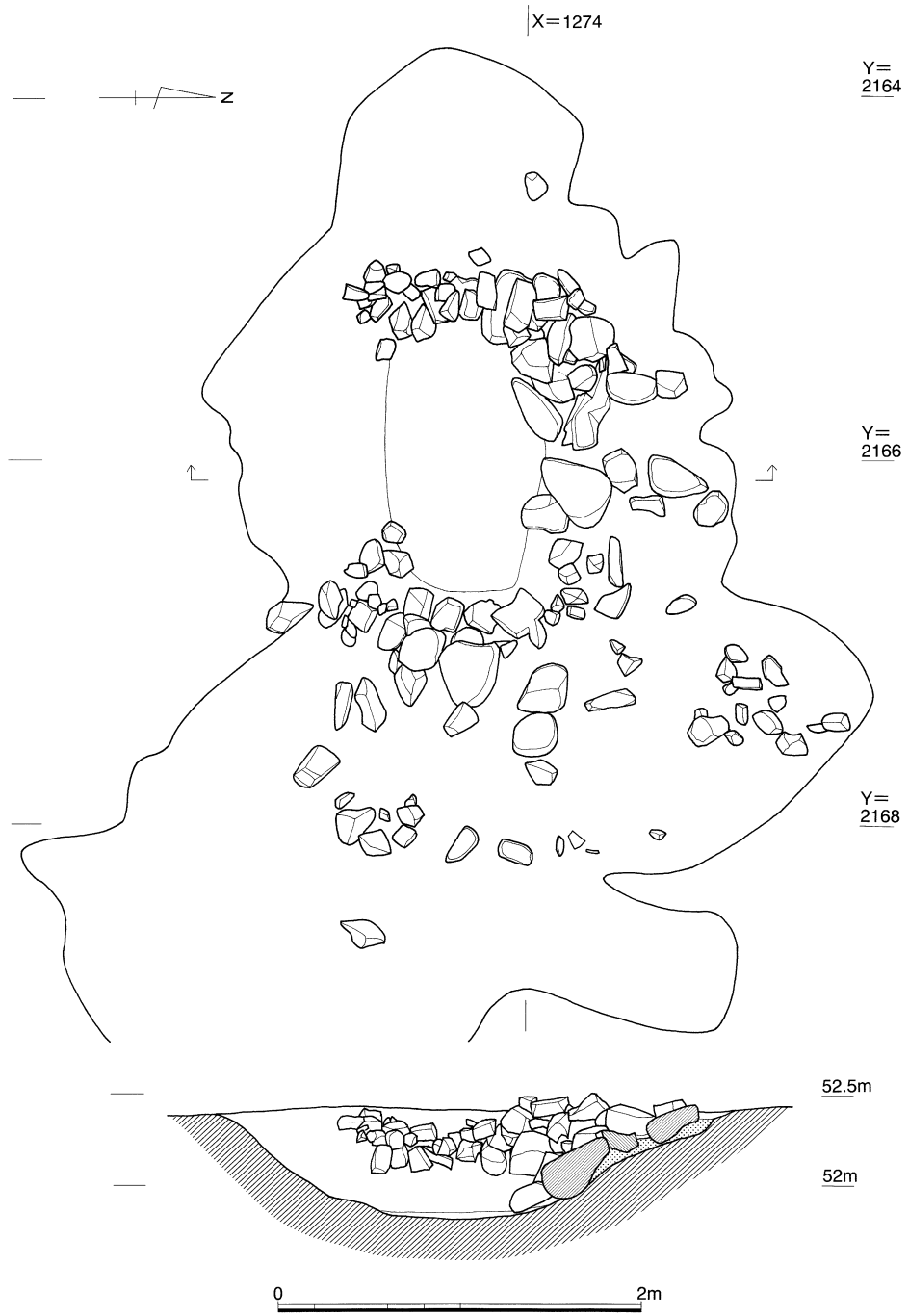


図31 石室 S X 29 縮尺 1/40

## 中世の遺跡

S X 29は、S X 17の北西8 m前後の地点に位置する(図版6-6, 図31)。掘り方が不整形で、ほかの遺構と切り合っている可能性があり、南北3 m、東西2.8 m前後の規模が本来の大きさであろう。検出面からの深さは0.6 mである。10~40 cm大の川原石を用いて、長軸を東西にとる長方形の石室が構築されるが、南壁は礫がほとんど残存せず、北壁も崩壊が著しかった。内法の規模は、長軸1.6 m、短軸1 m前後に復元できる。

**廃棄土坑** S X 100は、調査区中央南辺にひろがる大規模な遺物溜。明瞭な掘り方をもたず、窪地状の範囲に遺物を廃棄している。土師器皿を中心にして、多量の遺物が出土した。S X 30はS X 100の北2 mに位置する1.5 m前後の方形隅丸の廃棄土坑。S X 63は調査区中央に位置する円形の土坑で、礫とともに土師器・瓦器などが出土した。

**集石・集石土坑** 明瞭な掘り方をもたないものに、S X 15, S X 16, S X 21があり、掘り方をもつものに、S X 9, S X 14, S X 22, S X 33, S X 39, S X 55, S X 58, S X 59がある。掘り方をもつものには、調査区南西部に位置するS X 14のように(図28)、1 m前後の規模で、埋土に多量の礫や遺物が含まれる例と、調査区北東部に位置するS X 33・S X 55、北西部に位置するS X 59のように、4~5 mの大型の掘り方をもち、埋土に人頭大の礫を多量に含む例がある。後者は、石室が完全に崩壊した状況を示す可能性もある。なお、S X 33・S X 55は溝S D 4を切って構築されている。

**土坑** S K 8は、調査区南東部、S X 58の東側に位置する溝状の土坑。S X 36は調査区南西部に位置する不定形土坑。

### (5) 時期の特定できない建物・柵列遺構(図25)

溝S D 12より西側一帯およびX=1280以北、Y=2150以東でS D 6より南の空間では、無数の柱穴や礎石になりうる平石が見つかった。柱穴には根石をもつものが多かった。これらが建物や柵などを構成する一部であることはほぼ間違いなく、その並びの検討から建物配置などの復元を試みたが、十分な結果を示すことはできなかった。可能性の高い建物と柵列の復元を以下に示す。

**建物** S B 1は調査区北東部に位置する。東西南北4間程度の建物。主軸は真北より11°前後、東へ振っており、この主軸方向は3期のS D 4の主軸に近い。

**柵** S A 1は調査区北東部でS D 6の南側を東西にのびる柵。主軸は、S B 1と同じである。S A 2・S A 3はS D 12の西側を南北にのびる柵。

### (6) 1期の遺物(図版18~20, 図32~42)

**S D 12出土遺物(I 295~I 333)** I 295~I 315は橙褐色の土師器皿。D類のうち、口

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

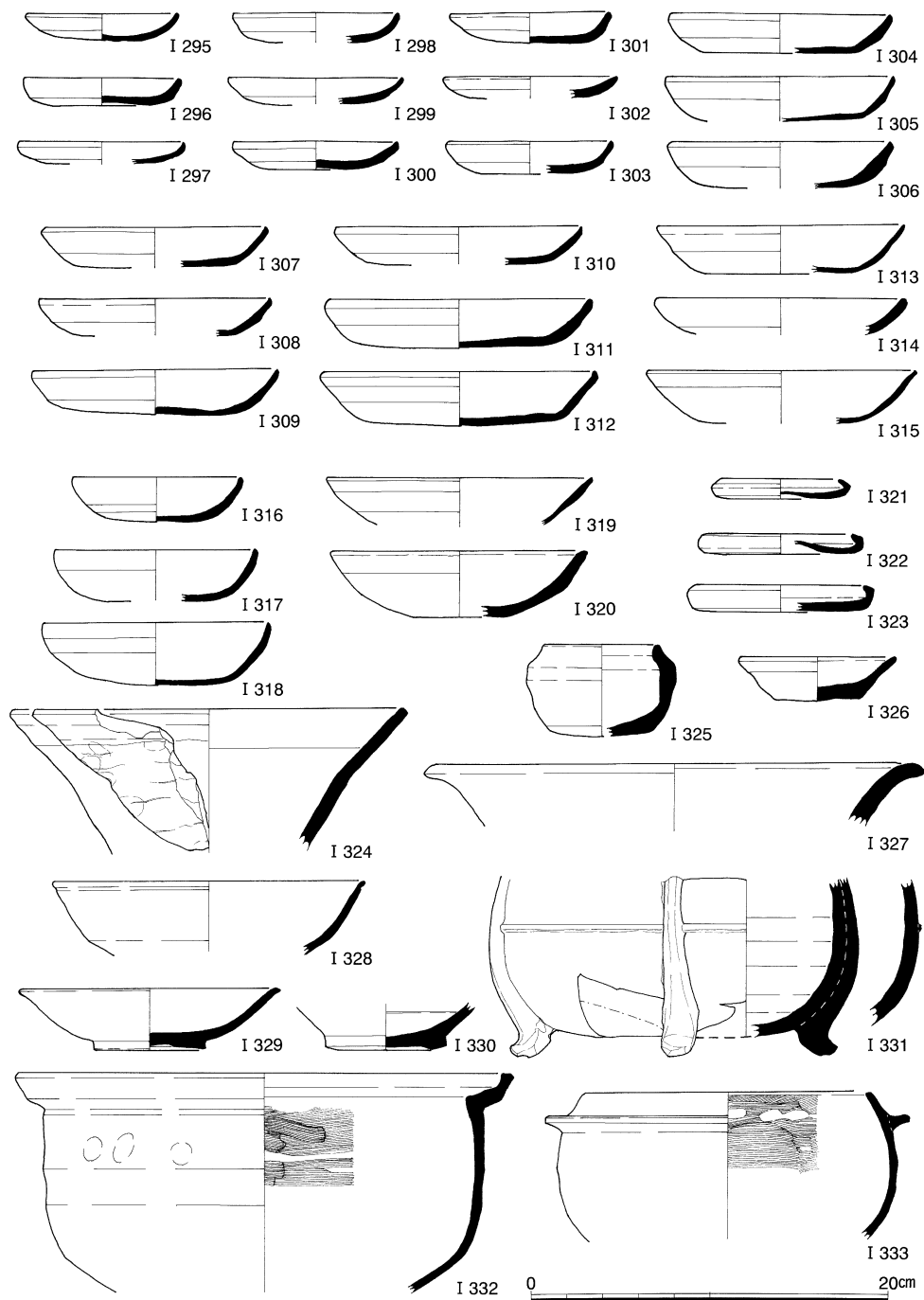


図32 S D12出土遺物 (I 295~I 325土師器, I 327須恵器, I 326・I 328・I 329, I 331陶器, I 330白磁, I 332・I 333瓦器)

## 中世の遺跡

縁端部に面取りを施すD<sub>4</sub>類・D<sub>5</sub>類が主体を占める。小は口径8.5～9cm台、大は12.5～15cmである。I 316～I 318は灰白色の土師器椀。I 319は土師器椀で、体部外面に横方向の削りの痕跡がみられる。I 320は赤褐色を呈する土師器椀。内面から口縁部外面にかけて撫で調整で平滑に仕上げているが、体部には亀裂が無数に生じている。型作りの可能性があろう。I 321～I 323は土師器受皿。I 321・I 322は灰白色、I 323は橙褐色を呈する。これらの土師器椀・皿類は、1期古段階。

I 324は土師器鉢。内面から口縁部外面は、撫で調整。体部外面は粘土紐を積んだ痕跡を残す。I 325は土師器で、口径6.4cm、高さ5.1cmをはかり、口縁部がすぼまる形態をとる。口縁部から底部にかけて煤が付着する。I 326は灰釉系陶器皿。I 327は須恵器甕の口縁部。I 328・I 329は緑釉陶器で、I 328は体部中位に稜をもつ椀。I 329は全面施釉する皿で、口縁端部がわずかに外反し、底部は蛇の目高台となる。I 328は硬質焼成、I 329は軟質焼成である。I 330は白磁椀。高台は幅広で、削り出しが浅く、内面には沈線がめぐる。椀IV類の底部であろう。

I 331は灰釉陶器四足壺。外面は丁寧な磨きを施す。上半を欠失する。同様の形態で緑釉の四足壺が本部構内A U30区の調査で出土している〔千葉ほか1997〕。I 332は瓦器鍋。I 333は瓦器羽釜。口縁部が内傾し体部が丸みを帯びている。

在地産土師器は1期古段階であり、遺構の帰属年代はこの時期に求められるが、緑釉陶器、灰釉陶器あるいは土師器椀（I 319）など、一部に9～10世紀ごろに帰属する遺物が含まれている。

**S E 24出土遺物（I 334～I 356）** I 334～I 346は橙褐色の土師器皿。D類が主体を占め、2段撫で手法C<sub>3</sub>類（I 343・I 344）をともなっている。小は口径9～10.5cm、大は12.5～14cm。I 347は橙褐色の土師器受皿。底部外周がわずかにくぼんでいる。これらの土師器は、1期古段階。

I 348・I 349は瓦器椀。I 348は小型品で、見込みにジグザグ状暗文を施す。I 349は内外面に篋磨きを施すが、磨きは疎らである。I 350・I 351は白磁皿。I 350は体部中位に沈線がめぐり、見込みの釉をかきとっている。I 351は体部中位に段をもつ。I 352～I 356は白磁椀。I 352～I 354は口縁部が玉縁となり、体部外面の中位以下を露胎とする。I 355・I 356は口縁端部が短く外側へ折れ、平坦面を作っている。

**S K 3出土遺物（I 357～I 360）** 呈示資料は、橙褐色を呈する土師器皿で、I 357・I 358がD<sub>3</sub>類、I 359がD<sub>4</sub>類、I 360がD<sub>5</sub>類である。口径は9cm前後にまとまる。これら

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

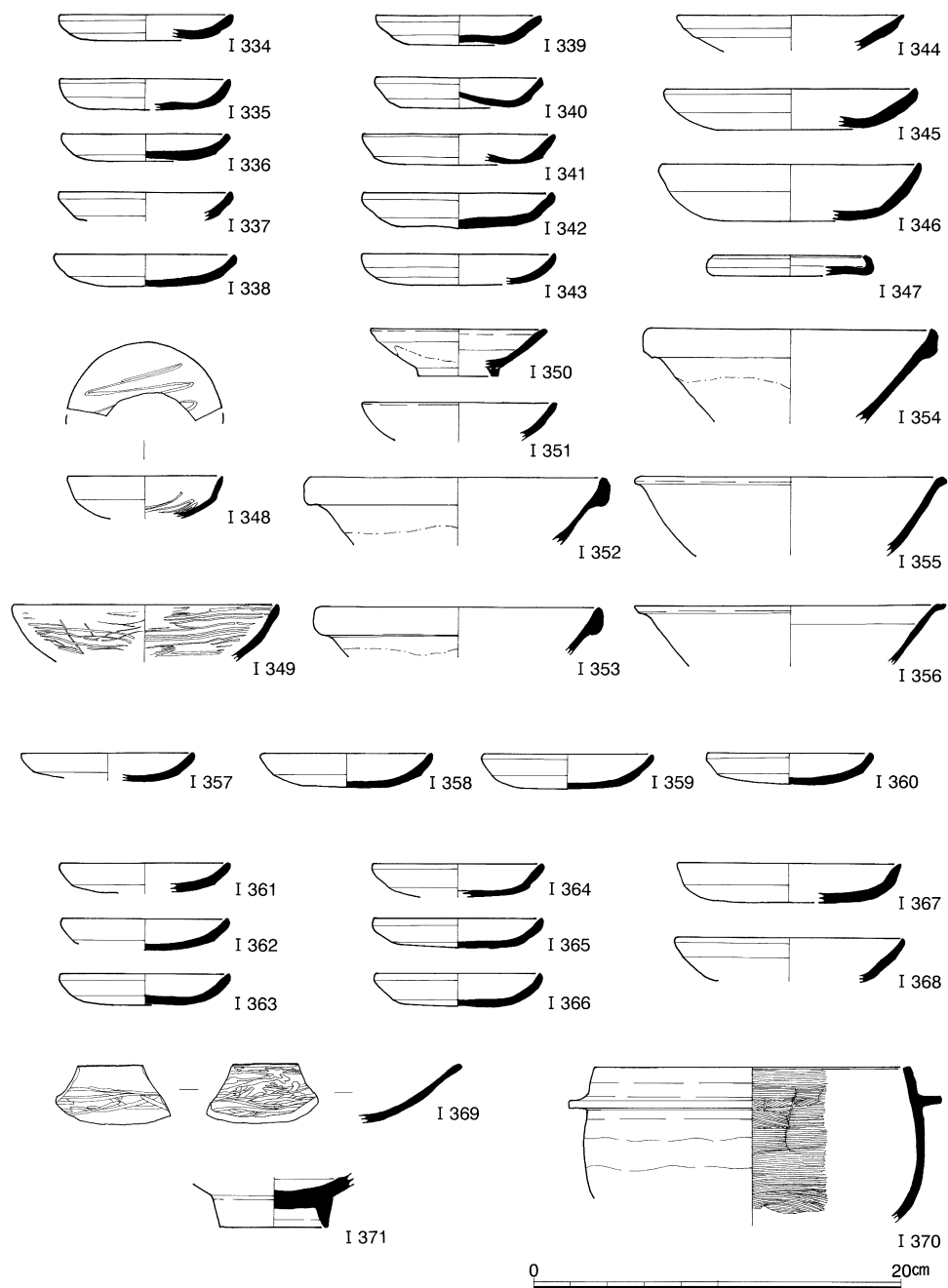


図33 S E 24出土遺物 (I 334~I 347土師器, I 348・I 349瓦器, I 350~I 356白磁),  
S K 3 出土遺物 (I 357~I 360土師器), S K 4 出土遺物 (I 361~I 368土師器,  
I 369・I 370瓦器, I 371白磁)



中世の遺跡

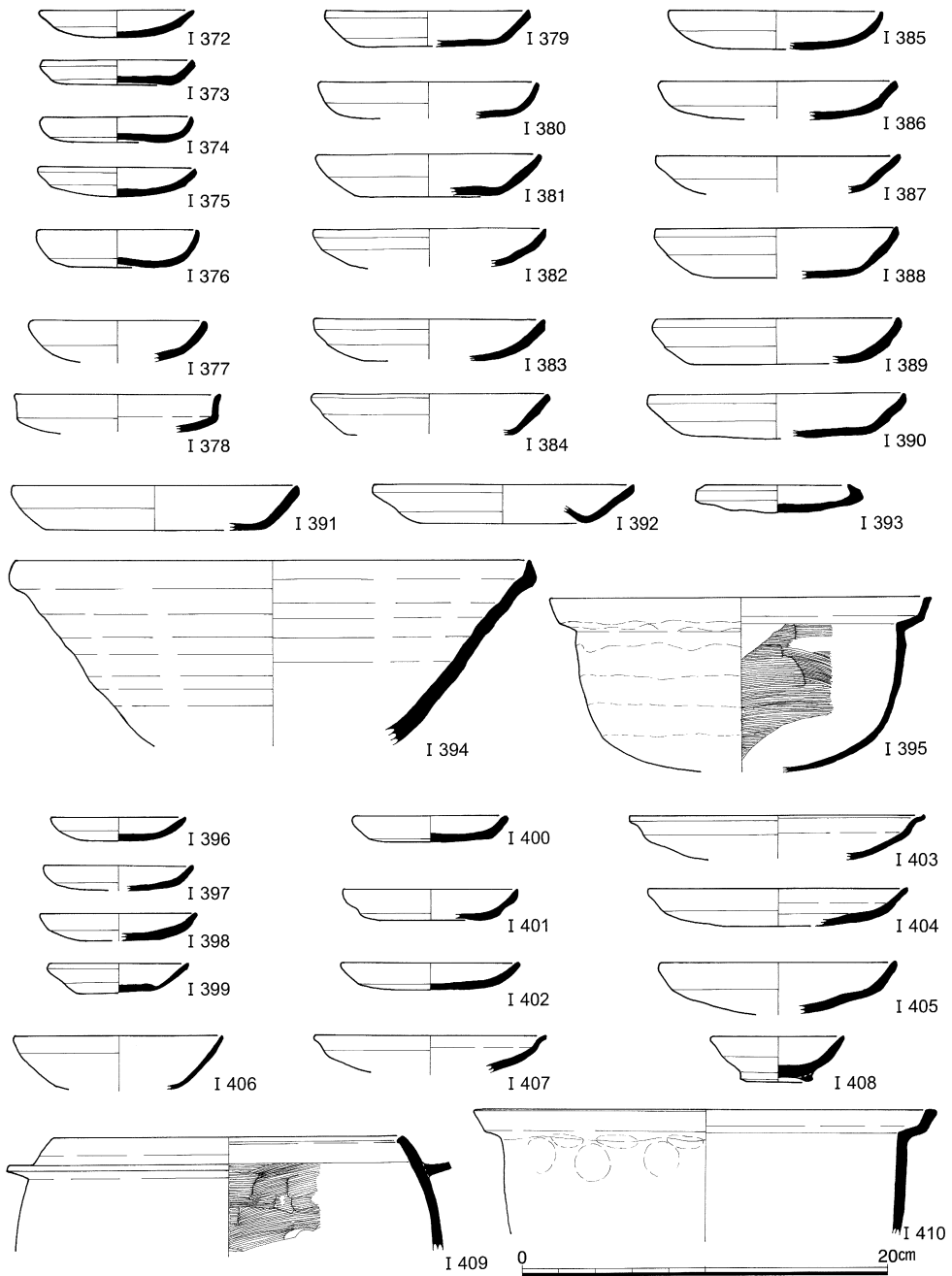


図34 S D 8 出土遺物 (I 372~I 393土師器, I 394須恵器, I 395瓦器), S D 13出土遺物 (I 396~I 406土師器, I 407・I 408陶器, I 409・I 410瓦器)

は、1期古段階。

S K 4 出土遺物 (I 361～I 371) I 361～I 368は橙褐色の土師器皿。いずれもD類で、面取り手法と素縁手法ともにみられる。小は口径9 cm前後、大は12～12.5cm。1期新段階。

I 369は瓦器椀。和泉型で口縁部を強く横撫です。内面と体部外面の中位に篋磨きを施す。I 370は瓦器羽釜。底部から丸みをもって立ち上がる。I 371は白磁椀の底部。高台は高く直立し、残存する体部は露胎である。内面に段をもつ。椀V類の底部。

S D 8 出土遺物 (I 372～I 395) I 372～I 392は橙褐色の土師器皿。D類で口縁部を面取りするものと素縁のものが半ばする。口径は8～9 cmのものと12～13cm台のものが多。I 378は口縁部が強く外反しており、在地産ではないかもしれない。I 374は口縁部に煤が付着する。I 393は土師器受皿で、橙褐色を呈する。底部外周がくぼんでいる。1期古段階。

I 394は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が上方へ拡張する。第Ⅲ期第1段階に比定される。I 395は瓦器鍋。口縁部は2段にするどく屈曲し、体部は丸みを帯びて底部にいたる。

S D 13 出土遺物 (I 396～I 410) I 396～I 405は橙褐色の土師器皿。I 403を除いて、すべてD類で、素縁手法のD<sub>2</sub>類、D<sub>3</sub>類が多い。小は口径7.5～9.5cm、大は13～14cmである。I 403はての字手法B<sub>2</sub>類で、緑釉陶器の椀・皿であるI 407・I 408とともに、10世紀代の遺物の混入であろう。I 406は灰白色を呈する土師器椀。口径11.4cm、高さ約3 cmである。1期新段階。

I 409は瓦器羽釜で、口縁部が内傾し、球胴となる。I 410は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲する。

S D 5 出土遺物 (I 411～I 417) I 411～I 416は橙褐色を呈する土師器皿。2段撫で手法C<sub>3</sub>類のI 411を除いてD類で、I 415のみ口縁端部に面取りを施す。I 412は口縁部に煤が付着する。1期新段階。I 417は瓦器壺。口径6.1cmをはかる短頸壺で、口縁端部を面取りし、肩部に螺旋状暗文がめぐる。

S D 6 出土遺物 (I 418～I 445) I 418～I 438は橙褐色の土師器皿。すべてD類であり、口縁部に面取りを施すD<sub>4</sub>類・D<sub>5</sub>類が主体を占める。口径9 cm前後のものと14～16 cmのものが多。1期古段階。

I 439は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が内側へ拡張する。第Ⅱ期第2段階に比定できるか。I 440は瓦器鍋。口縁部が2段に屈曲する。I 441は瓦器壺。口径6.0cm、胴部最大

中世の遺跡

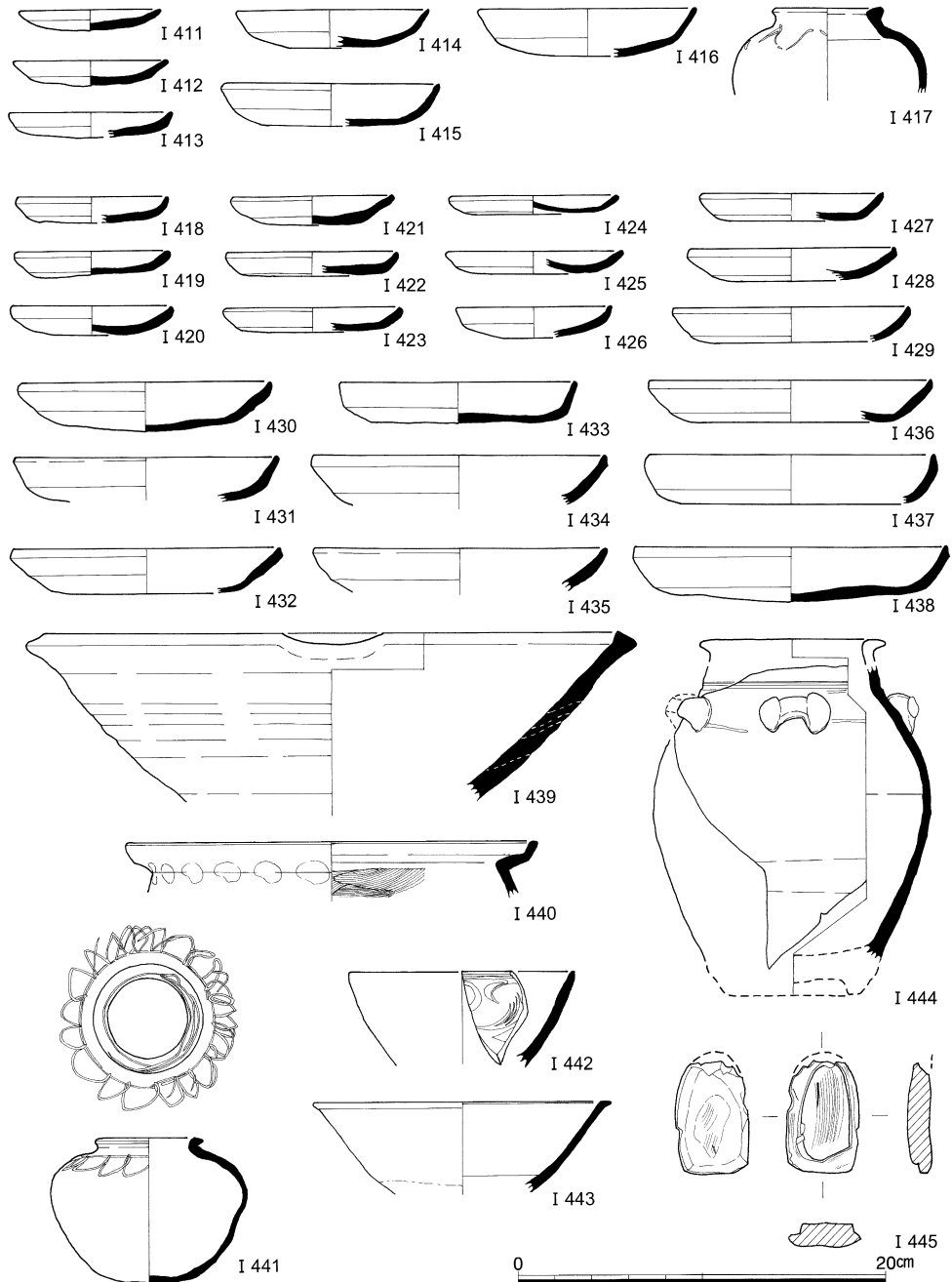


図35 SD 5 出土遺物 (I 411~ I 416土師器, I 417瓦器), SD 6 出土遺物 (I 418~ I 438土師器, I 439須恵器, I 440・I 441瓦器, I 442青磁, I 443白磁, I 444陶器, I 445石製品)

径10.7cm, 高さ7.9cmをはかり, 口縁端部に面取りを施す。肩部に, 水平にめぐる暗文と螺旋状暗文を施す。I 442~ I 444は貿易陶磁器。I 442は青磁椀。外面無文, 内面に片切りによる劃花文を施す。龍泉窯系椀I - 2類。I 443は白磁椀。体部は斜め上方へ直線的に開き, 口縁端部が外側へ折れる。釉表面に気泡が目立ち, 胎土には小さな空洞が目立つ。椀V類ないしはVIII類。I 444は褐釉四耳壺。褐色の釉を全面に施釉し, 把手付近に, 黒褐色の釉を掛け流している。胎土は灰色で, 黒色斑点がある。胴部上位に, 沈線が横走する。耳壺VI類に対比できる。I 445は, 用途不明の石製品。滑石製で, 長さ6.0cm, 幅3.8cm, 重量49.9gをはかる。片面は一回り小さい範囲が突出しており, 「凸」字形の断面形となる。

S X 24出土遺物 (I 446~ I 451) I 448が灰白色を呈するほかは橙褐色の土師器皿。素縁手法のD<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>類である。小は口径9~9.5cm, 大は14~14.5cmである。1期古段階。

S D 6 上面出土遺物 (I 452~ I 465) I 452~ I 457は橙褐色の土師器皿。いずれもD<sub>5</sub>類で, 口径は12~13cm。1期新段階。

I 458~ I 460は白磁椀で, I 458・I 459は口縁部が玉縁となる椀IV類。I 458は釉表面に気泡が目立ち, 胎土に褐色の斑点がある。I 460は口縁端部を外側へ折り, 水平な端面を作りだし, 内面に櫛描文を施す。外面は口縁直下まで篋削りする。椀V - 4類。I 461は白磁四耳壺。頸部が直立し, 口縁部は外側へ丸く折り曲げている。胴部内面上半まで施釉している。四耳壺III類。I 462は青磁皿。全面施釉後, 底部の釉を掻き取る。龍泉窯系青磁皿I類。I 463は青磁皿, I 464は青磁椀であるが, 胎土が精良で, 黄緑色に発色した釉を薄く施釉している点で共通する。いずれも体部下半には施釉しない。I 465は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲し, 端部は丁寧に面取りを施す。

S X 61出土遺物 (I 466~ I 480) I 466~ I 479は土師器皿。橙褐色を呈するが, I 469・I 470は白みが強い。小は口径8~9.5cm, 大は14cm前後にまとまる。1期古段階。I 478は, 胎土に砂粒を多く含み, 椀状となる。在地産でない可能性がある。I 472は口縁部の数カ所に煤が厚く付着する。I 480は白磁椀の口縁部で, 端部が外側へ折れて平坦面をつくる。椀V - 4類ないしVIII - 1・3類。

S X 23出土遺物 (I 481~ I 487) I 481~ I 486は橙褐色の土師器皿。素縁手法のD<sub>3</sub>類に, 素縁手法E<sub>1</sub>類 (I 482・I 485) をともなう。小は, 口径9.5~10cm, 大は, 12.5~14cm。1期新段階。I 487は白磁の小皿。底部にも施釉し, 口縁端部は口禿げとする。皿IX - 1類。

中世の遺跡

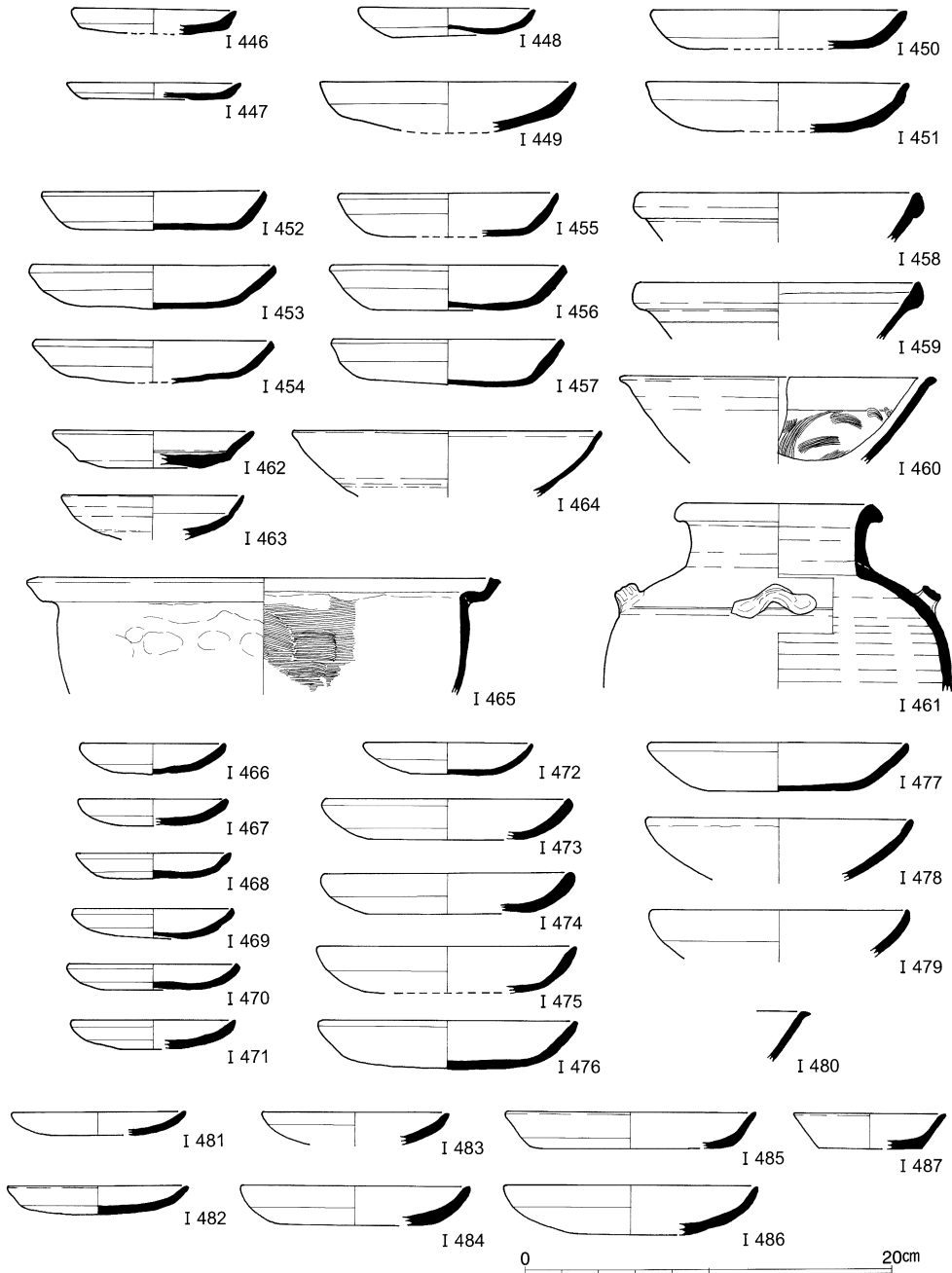


図36 S X24出土遺物 (I 446~ I 451土師器), S D 6 上面出土遺物 (I 452~ I 457土師器, I 458~ I 461白磁, I 462~ I 464青磁, I 465瓦器), S X61出土遺物 (I 466~ I 479土師器, I 480白磁), S X23出土遺物 (I 481~ I 486土師器, I 487白磁)

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

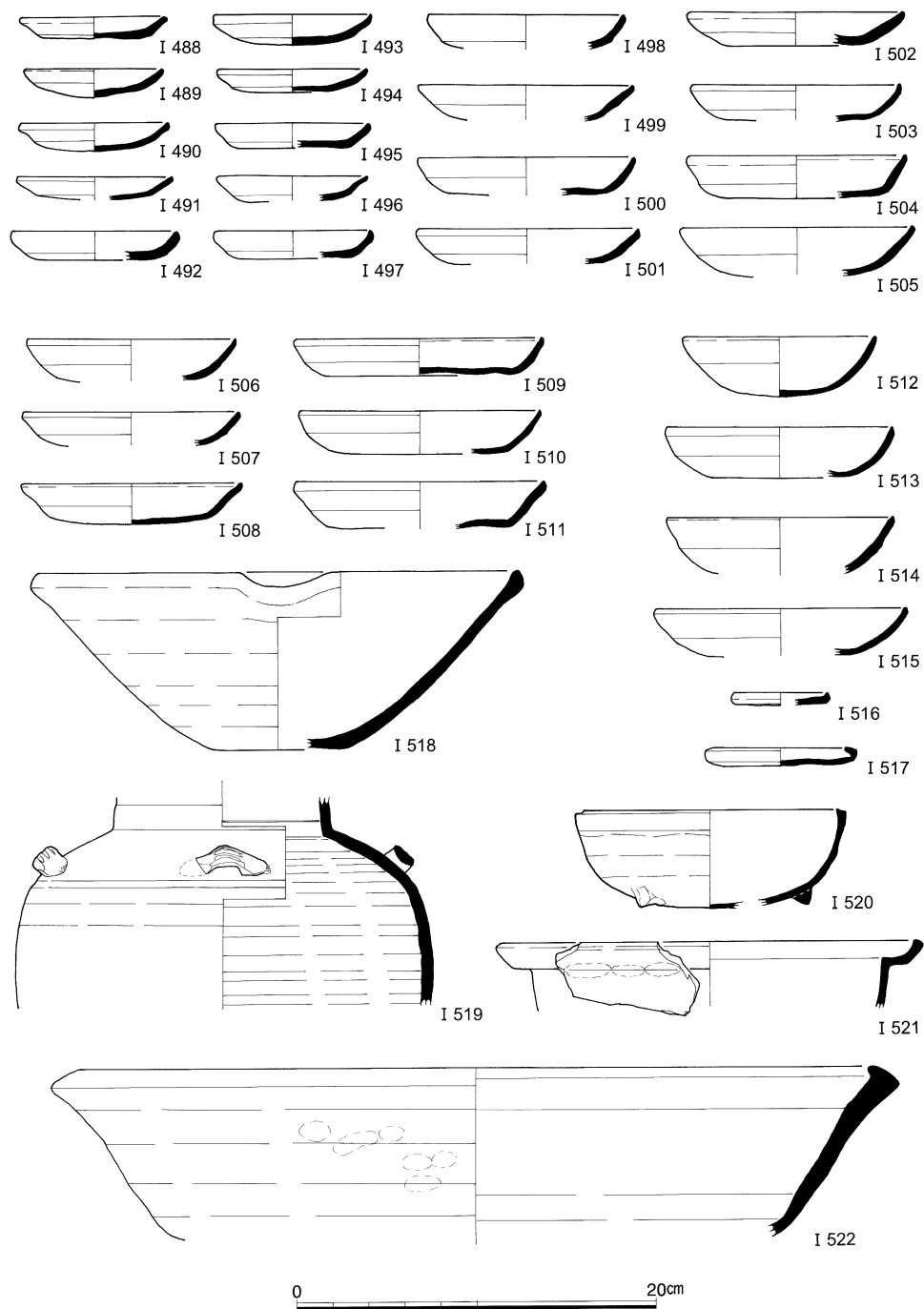


図37 S D 9 出土遺物(1) (I 488~ I 517土師器, I 518須恵器, I 519白磁, I 520~ I 522瓦器)



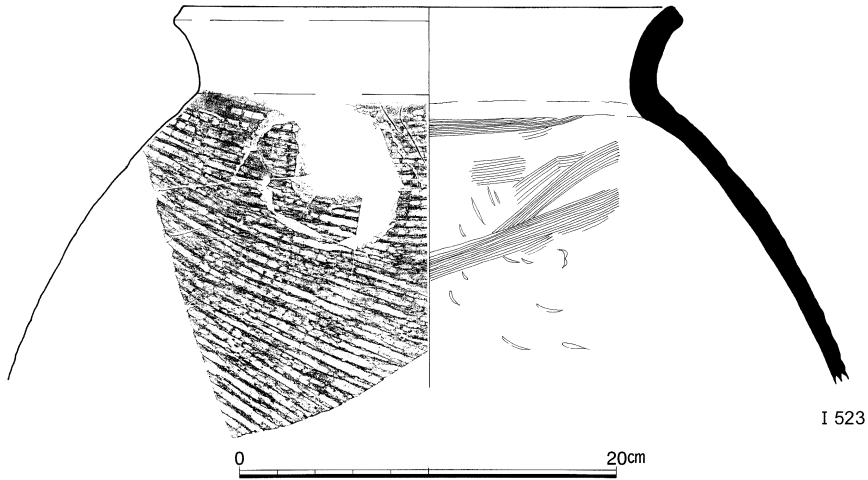


図38 S D 9 出土遺物(2) (I 523瓦器)

S D 9 出土遺物 (I 488～I 523) I 488～I 511は橙褐色の土師器皿。D類が主体を占め、1段撫で素縁手法E類 (I 496・I 502・I 504・I 508) をともなう。小は口径8～9cm、大は12cm台のものが多く、14cm前後のものもみられる。I 512～I 515は灰白色の土師器椀。I 516・I 517は土師器受皿。I 516は灰白色の椀と同じ色調を呈し、I 517は椀と皿の中間的な色調である。1期新段階。

I 518は須恵器すり鉢。I 519は白磁四耳壺。I 520・I 522は瓦器盤。I 520は小型で、口径14.5cm前後、高さ5.5cm前後。脚が1個残存しており、3足になると思われる。口縁端部は強い撫でにより、くぼんでいる。内面から口縁部外面にかけては撫で調整を施し、体外面は指押さえ痕が残っている。I 522は口縁端部が内側へ突出する。I 521は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲するが、上段の屈曲はやや丸みを帯びる。I 523は瓦質の甕。胴部外面に格子状叩き目を残し、内面に刷毛目と当て具の痕跡かとみられるキズがみえる。

S X 46出土遺物 (I 524～I 531) I 524・I 525は橙褐色の土師器皿。I 524はD<sub>2</sub>類で、口径11.6cm。I 525はD<sub>5</sub>類で、口径12.6cm。I 526～I 528は灰白色の土師器椀。I 529は灰白色の土師器受皿。1期新段階。

I 530は瓦器羽釜。口径15cm前後と小型である。I 531は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲し、端部は横撫で、中央部がくぼむ。

S X 43出土遺物 (I 532～I 534) I 532は灰白色の土師器椀。口径11.1cm、器高3.0

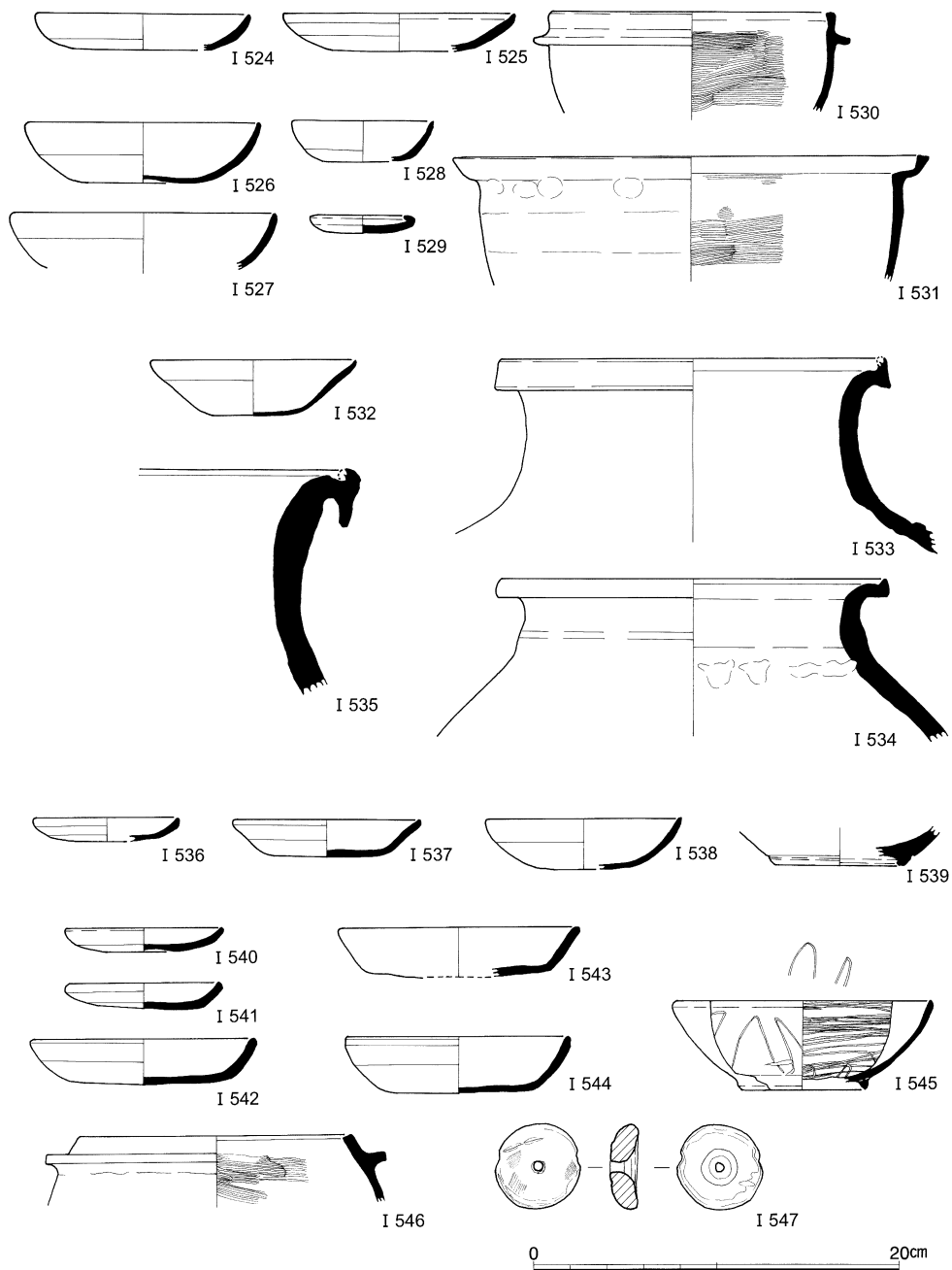


図39 S X46出土遺物 (I 524~ I 529土師器, I 530・I 531瓦器), S X43出土遺物 (I 532土師器, I 533・I 534陶器), S X27出土遺物 (I 535陶器), S X52出土遺物 (I 536~ I 538土師器, I 539青磁), S X102出土遺物 (I 540~ I 544土師器, I 545・I 546瓦器, I 547滑石製紡錘車)

中世の遺跡

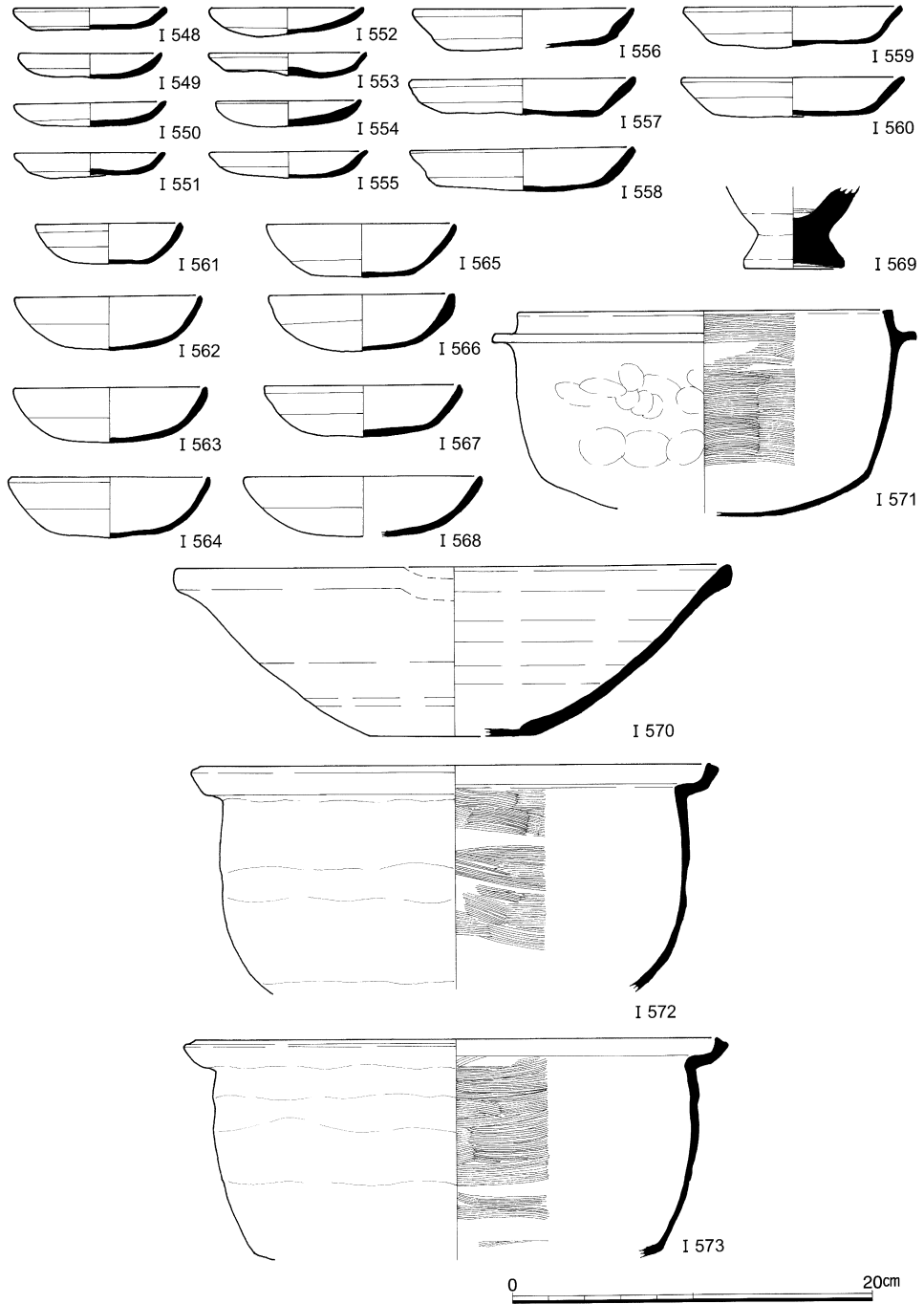


図40 S D14出土遺物(1) (I 548~ I 568土師器, I 569灰釉系陶器, I 570須恵器, I 571~ I 573瓦器)

cm。1期新段階。I 533・I 534は陶器甕。L字状の口縁部形態を示し、常滑焼5型式とみられる。

S X27出土遺物 (I 535) I 535は陶器甕。口縁部がN字状に拡張する常滑焼6b型式に比定できる。

S X52出土遺物 (I 536～I 539) I 536・I 537は橙褐色の土師器皿。I 536はD<sub>5</sub>類、I 537はD<sub>6</sub>類。I 538は灰白色の土師器椀。I 536は口縁端部に煤が付着。1期新段階。

I 539は青磁底部。高台は削り出しで、外側は体部との境に圈線がめぐる。釉は薄く、全面に施釉したのち、畳付けの釉をかきとっている。越州窯系青磁とみられ、平安前中期の混入品であろう。

S X102出土遺物 (I 540～I 547) I 540～I 543は橙褐色を呈する土師器皿。D<sub>5</sub>類が主体。小は口径8.5cm、大は12～13cmをはかる。I 544は灰白色の土師器椀。口径12.0

cm、器高3.1cm。1期新段階。

I 545は瓦器椀。体部内面は横位に篋磨き、体部外面と見込みには、ジグザグ状の暗文を施し、しっかりとした高台がつく。胎土精良。I 546は瓦器羽釜。I 547は滑石製紡錘車。直径4.5cmの円形で、側縁の2箇所へえぐりを持ち、中央に径6mmの孔があく。片側が凸面、逆側が凹面となる。重さ46.6g。

S D14出土遺物 (I 548～I 576) I 548～I 560は橙褐色の土師器皿。小は口径8～8.5cm、大は12～12.5cmで、大はすべて口縁部面取りをするD<sub>5</sub>類、小は面取りをするD<sub>5</sub>・D<sub>6</sub>類と素縁のD<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>類がなかばする。I 555・I 556は口縁部に煤が付着する。

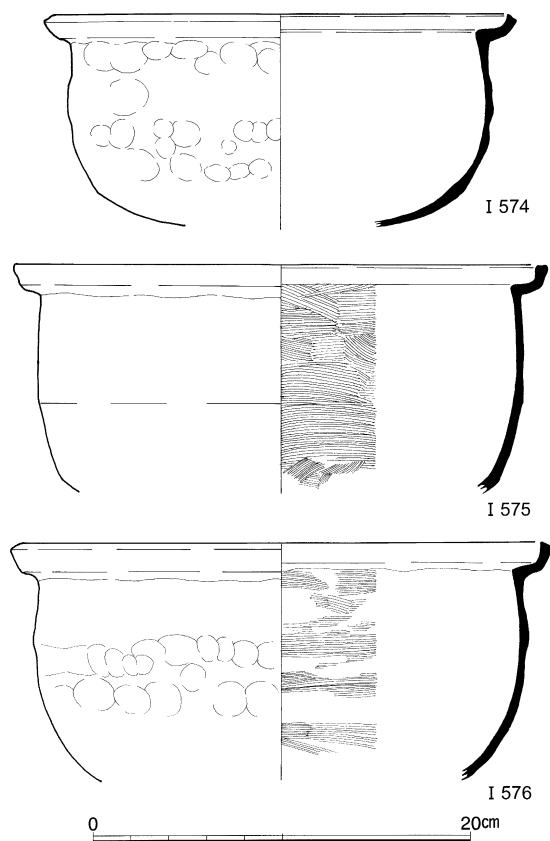


図41 S D14出土遺物(2) (I 574～I 576瓦器)

## 中世の遺跡

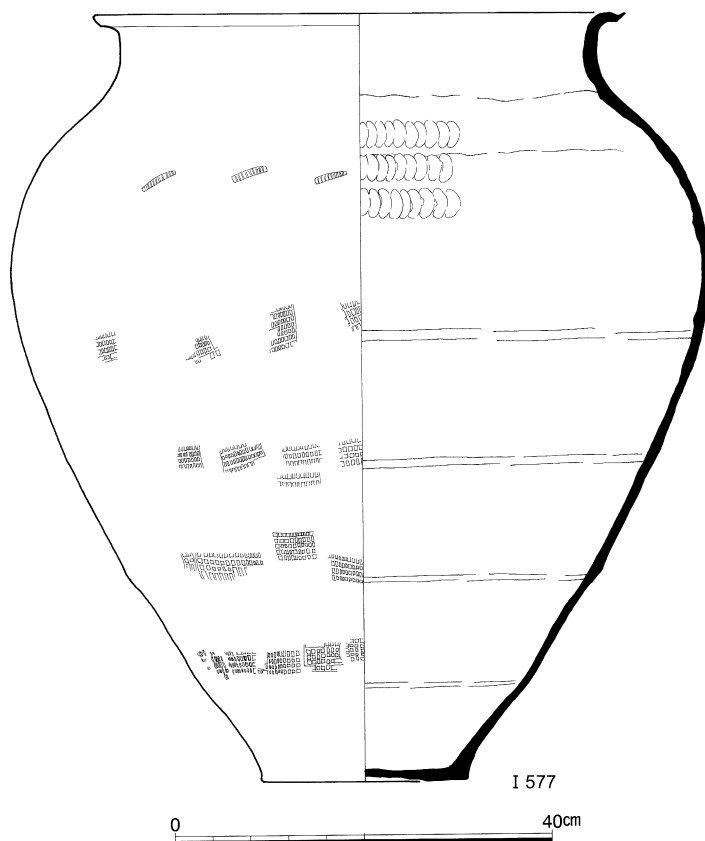


図42 S X38出土遺物（I 577陶器） 縮尺1/8

I 561～I 568は灰白色の土師器椀。口径は8.0mのI 561, 10cm台のI 562～I 567, 13.0 cmのI 568に分かれる。1期新段階。

I 569は灰釉系陶器の花瓶。底部は回転篋削り調整。I 570は須恵器すり鉢。口縁部が玉縁状に肥厚する。I 571は瓦器羽釜。底部と体部の境が屈曲し、口縁部はわずかに内傾する。I 572～I 576は瓦器鍋。いずれも、口縁部は2段に屈曲し、口縁端部は面取りで中央部がわずかにくぼむ。体部は丸みをもちつつ底部にいたるI 572・I 574・I 576と体部と底部の境が屈曲するI 573とI 575がある。

**S X38出土遺物（I 577）** I 577は常滑焼の大甕である。口径56cm, 器高81cmをはかる。口縁部は、外へ向かって幅狭く立ち上がる。体部外面には、成形工程に対応して、帯状の押印文が施される。胴部上半には、指おさえの痕跡が明瞭に残っている。4型式に比定できる。

(7) 中世2期の遺物 (図版21, 図43~49)

S X12出土遺物 (I 578~I 585) I 578~I 581は橙褐色の土師器皿。I 581が口縁部を面取るD<sub>3</sub>類で、ほかは素縁手法のD類とE類である。口径8~10cm。I 582は灰白色の土師器椀。口径11.5cm。2期古段階。I 583は白磁の底部。内面に段をもつ。I 584は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲するが、上部の屈曲は甘く、外側は直線的となる。I 585は瓦器羽釜。体部は直線的で、底部との境は屈曲する。

S K 5出土遺物 (I 586~I 593) I 586~I 591は橙褐色の土師器皿。D<sub>3</sub>類であるI 590をのぞいて、E<sub>3</sub>類。小は口径8cm前後、大は10.5~12cmまで、ややばらつきがある。I 592・I 593は灰白色の椀。I 592は口径11.9cm, I 593は13.8cm。2期古段階。

S X13出土遺物 (I 594~I 598) I 594・I 595は橙褐色の土師器皿。口径は、I 594が6.9cm, I 595が10cm。I 596・I 597は灰白色の土師器椀。I 596はくぼみ底となる。2期古段階。I 598は青磁椀。篋描きによる蓮弁文を施す。

S X18出土遺物 (I 599~I 609) I 599~I 608は橙褐色の土師器皿。E類 (I 602~I 607) 主体に、D<sub>2</sub>類 (I 599~I 601・I 608) がともなう。小は8~9cm, 大は10.5~13cm。I 609は灰白色の土師器椀。口径10.8cm。2期新段階。

S X19出土遺物 (I 610~I 621) I 610~I 614は橙褐色の土師器皿。E<sub>1</sub>類が主体。小は8cm。大は10~11cm。I 615~I 621は灰白色の土師器椀。口径は11~11.5cmが多く、I 621は13.1cmをはかる。2期新段階。

S X20出土遺物 (I 622~I 636) I 622~I 627は橙褐色の土師器皿。小は8cm, 大は11.5~12.5cm。I 623は口縁端部, I 624は内面に、煤が付着する。I 628~I 635は灰白色の土師器椀。2期新段階。I 636は瓦器鍋。2段目の屈曲があまくなり、口縁部が外方へ突出している。

S X25出土遺物 (I 637~I 658) I 637~I 654は橙褐色の土師器皿。I 637は口径6.5cm, 器高2cmをはかる。底部中央が突出し、通常の土師器皿と形態を異にする。これを除いた皿は、E<sub>1</sub>・E<sub>3</sub>類からなり、法量は小が8cm前後、大が10.5~11cmである。I 655~I 657は灰白色の土師器椀。口径11.5~12cm。2期新段階。I 658は瓦器羽釜。胴中位以下を欠失する。

S X28出土遺物 (I 659~I 672) I 659~I 662は橙褐色の土師器皿。E<sub>1</sub>類からなり、I 659・I 651は口径10.5cm, I 660は11.2cm, I 662は11.8cm。I 663~I 671は灰白色の土師器椀。I 663~I 667は口径6.5cm前後の小椀で、I 665~I 667はくぼみ底となる。



中世の遺跡

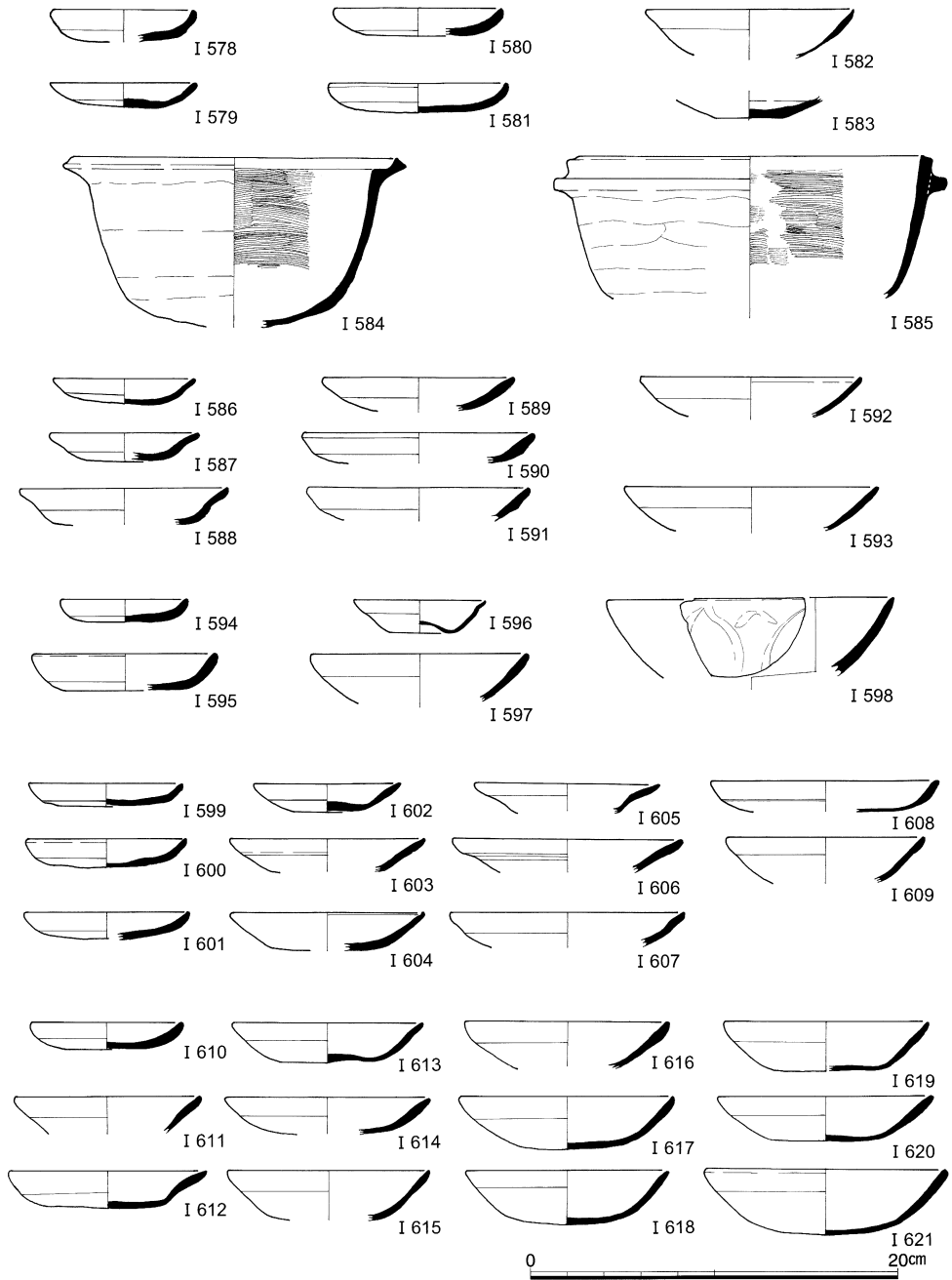


図43 S X12 (I 578~ I 582土師器, I 583白磁, I 584・I 585瓦器), S K 5 (I 586~ I 593土師器), S X13出土遺物 (I 594~ I 597土師器, I 598青磁), S X18出土遺物 (I 599~ I 609土師器), S X19出土遺物 (I 610~ I 621土師器)

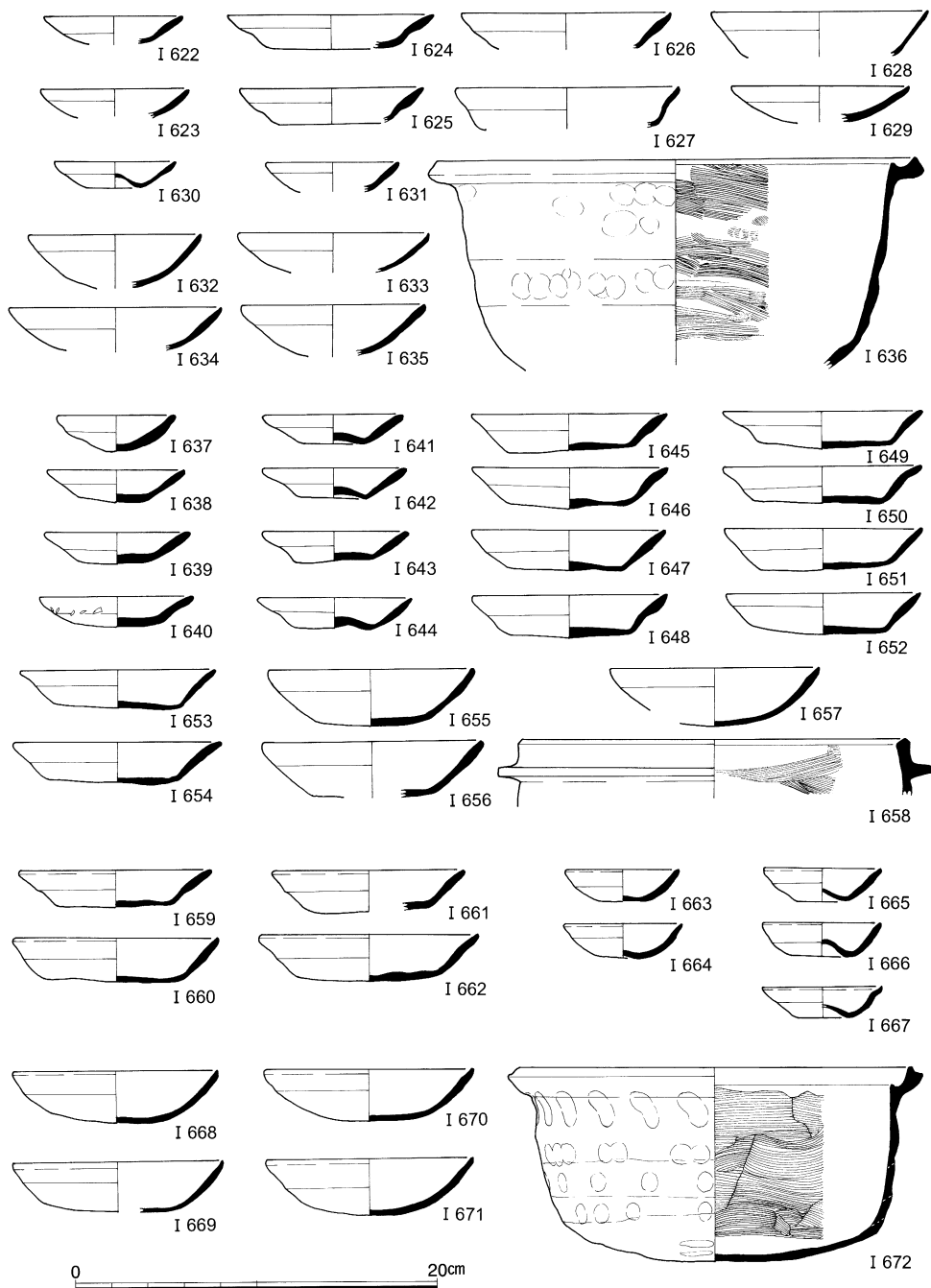


図44 S X20出土遺物 (I 622~ I 635土師器, I 636瓦器), S X25出土遺物 (I 637~ I 657土師器, I 658瓦器), S X28出土遺物 (I 659~ I 671土師器, I 672瓦器)

中世の遺跡

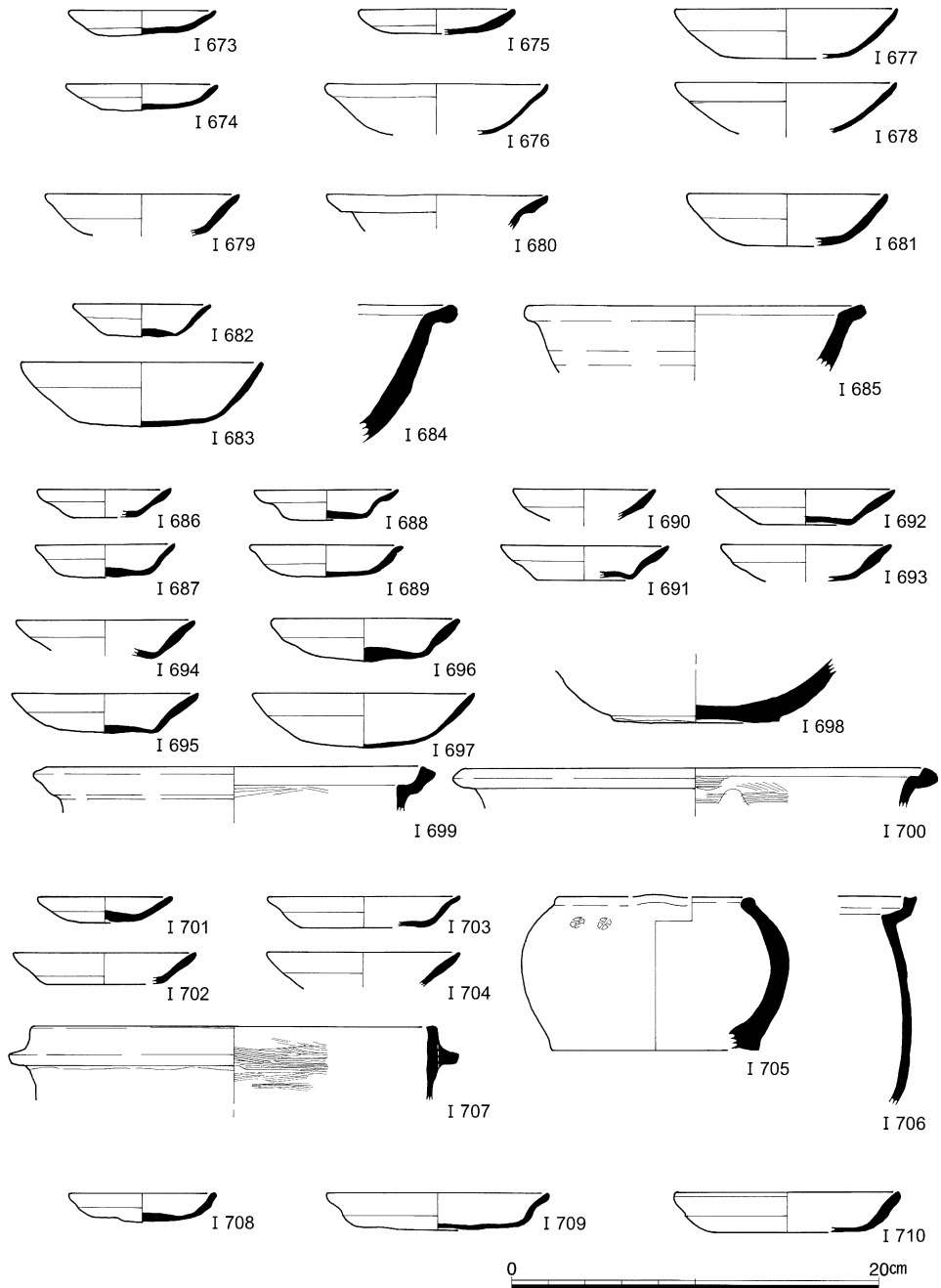


図45 S X40出土遺物 (I 673~ I 678土師器), S X42出土遺物 (I 679~ I 681土師器), S X44出土遺物 (I 682・I 683土師器, I 684・I 685古瀬戸), S X60出土遺物 (I 686~ I 697土師器, I 698須恵器, I 699・I 700瓦器), S X66出土遺物 (I 701~ I 704土師器, I 705備前, I 706・I 707瓦器), S X71出土遺物 (I 708~ I 710土師器)

I 668～I 671は口径11.5cm前後。2期新段階。I 672は瓦器鍋。受け部の幅が狭くなり、口縁端部は内傾する。

S X 40出土遺物 (I 673～I 678) I 673～I 675は、橙褐色の土師器皿。口径は8～8.5cm前後。I 676～I 678は、灰白色の土師器椀。いずれも口径12cm前後である。2期古段階。

S X 42出土遺物 (I 679～I 681) I 679・I 680は橙褐色の土師器皿。I 679はE<sub>1</sub>類で、口径10.5cm、I 680はE<sub>4</sub>類で、口径12cm。I 681は灰白色の土師器椀。口径10.8cm。2期新段階。

S X 44出土遺物 (I 682～I 685) I 682は橙褐色の土師器皿。E<sub>3</sub>類で、口径7.5cm。I 683は灰白色の土師器椀。口径13cm前後。2期新段階。I 684・I 685は古瀬戸中期の折縁深皿。I 685は復元口径18cm。

S X 60出土遺物 (I 686～I 700) I 686～I 696は橙褐色の土師器皿。E<sub>4</sub>類が主体を占める。小は口径7～8cm。大は10cm前後。I 697は灰白色の土師器椀。口径11.8cm。2期新段階。I 698は須恵器鉢の底部。I 699・I 700は瓦器鍋。

S X 66出土遺物 (I 701～I 707) I 701～I 704は橙褐色の土師器皿。E<sub>1</sub>類 (I 701・I 704) とE<sub>3</sub>類 (I 702・I 703)。2期新段階。

I 705は備前焼壺。口縁部がわずかに肥厚し、片口となる。肩部に「+」印のスタンプ文を施している。I 706は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲し、端部は水平で凹面をなす。I 707は瓦器羽釜。短い口縁部が直立する。

S X 71出土遺物 (I 708～I 710) I 708～I 710は橙褐色の土師器皿。口径は、I 708が8cm、残りは11cm前後である。I 708はE<sub>1</sub>類で、著しく歪む。I 709はE<sub>3</sub>類で、I 710は口縁部を面取るD<sub>5</sub>類で、ともに口径12cm前後。2期古段階。

S X 26出土遺物 (I 711～I 746) I 711～I 730は橙褐色の土師器皿。F<sub>2</sub>類 (I 728) を含むが、主体はE類でE<sub>1</sub>・E<sub>3</sub>・E<sub>4</sub>類がある。小は口径7.5～8cm、大は10～11cmが主体を占める。I 729は口径15cm、I 730は19.5cmをはかり、器壁が厚い。通常の皿と同様、内面から口縁部外面は横撫で、体部外面は不調整である。I 729は上げ底となり、口縁部と体部の境が1cm帯状に突出している。口縁部の横撫ではこの部分までは及んでいないため、横撫で調整するさいに、形状のものに固定した痕跡とみられる。I 731～I 740は灰白色の土師器椀。I 731～I 733は口径7cm前後のくぼみ底小椀。I 734～I 740は口径10～13.5cmで、ややばらつきがある。2期新段階。

中世の遺跡

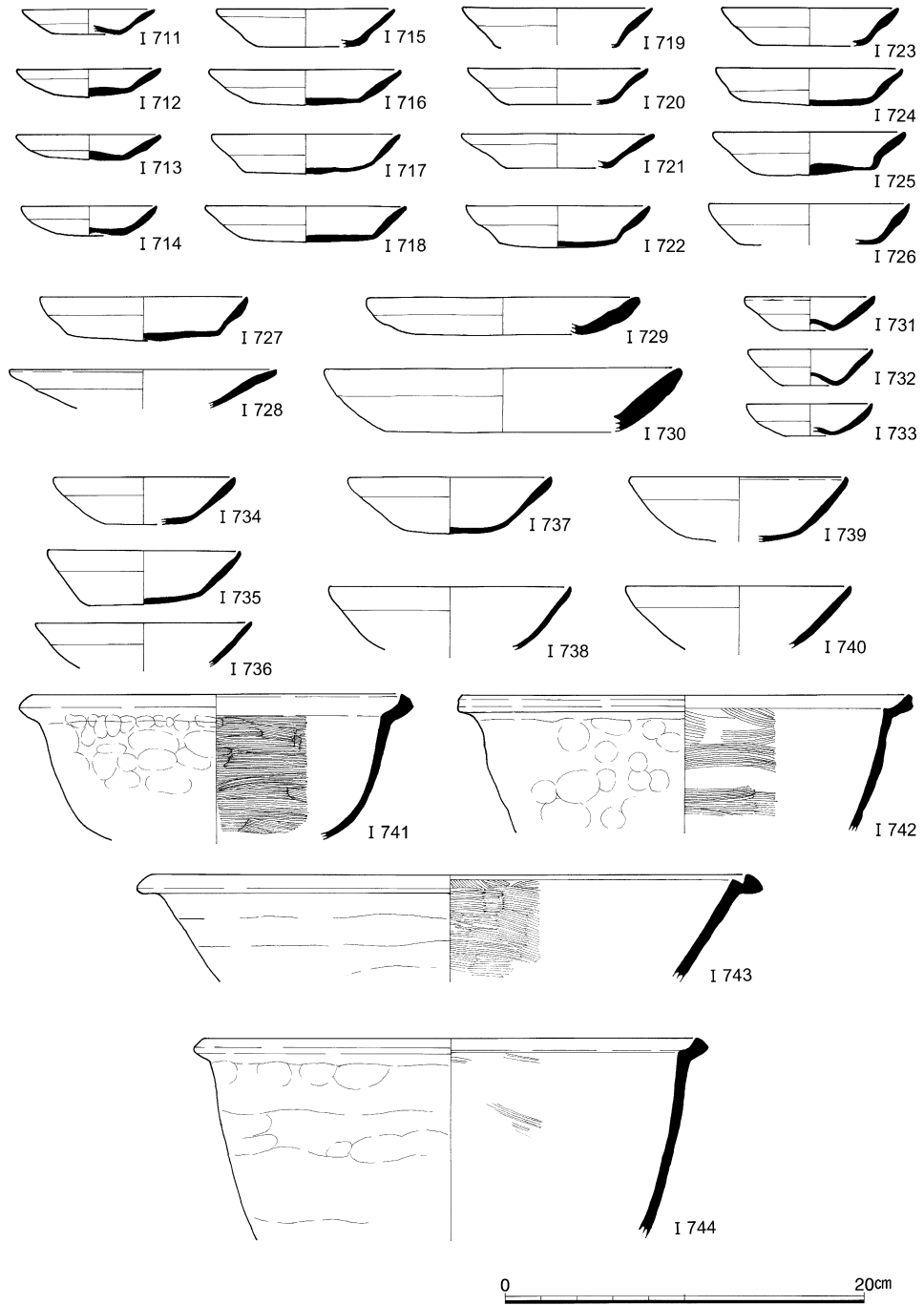


図46 S X 26出土遺物(1) (I 711~ I 740土師器, I 741~ I 744瓦器)

I 741～I 744は瓦器鍋。I 741・I 742は口縁部が内湾しながら立ち上がる。I 743は体部が外へ向かって斜めに立ち上がり、器高が低くなると思われる。受け部は断面「V」字形になる。I 744は深い器形で、短い口縁部が斜め外方へ立ち上がる。I 745・I 746は東播系須恵器すり鉢。I 745は口縁部が上下に拡張し、I 746は上下に肥厚している。第Ⅲ期第2～第3段階。

S X 32出土遺物 (I 747～I 760) I 747～I 751は橙褐色の土師器皿。小は口径8～9cm、大は10～11cm前後である。I 749は底部がややくぼんでいる。I 752～I 756は灰白色の土師器椀。小は口径7cm前後で、I 755はくぼみ底となる。大は11.5～12cm。2期新段階。

I 757は青磁椀。蓮弁文を施す。I 758は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が上方へ拡張する。第Ⅲ期第1段階。I 759は瓦器羽釜。口縁部は短く直立する。I 760は瓦器焜炉。上半を欠失する。3足になるとおもわれる脚が1個残存する。内面にはさなをのせる鐔がめぐる。外面は縦位の篋磨きののち、沈線を横位にめぐらして、菊花のスタンプ文を施している。胴下部に、円形の通風口をもつ。

S X 34出土遺物 (I 761～I 771) I 761～I 765は橙褐色の土師器皿。D類とE類が混じる。I 763は、面取りをするD<sub>4</sub>類。I 761～I 763は、口径7～7.5cm、I 764は9cm、I 765は11.8cm。I 766～I 770は、灰白色の土師器椀。小は6.5～7cm前後、大は、I 770で11.8cm。2期古段階。

I 771は白磁皿。平底、薄手・精巧な作りで、全面に施釉する。見込みには、型押しによる花文を施す。皿X-b類。

S X 37出土遺物 (I 772～I 778) I 772～I 774は橙褐色の土師器皿。すべてE<sub>1</sub>類。I 775～I 778は灰白色の土師器椀。2期古段階。

S X 35出土遺物 (I 779～I 797) I 779～I 782は橙褐色の土師器皿。I 779は口縁端部に煤が付着する。I 783は橙褐色の土師器小椀。口径6.9cm。I 784～I 786は灰白色の土師器椀。I 784はくぼみ底で、口径8.5cm。I 785・I 786は口径11cm前後。I 787は特大の皿で、口径不明。口縁外側が肥厚する。2期新段階。

I 788は陶器甕。口縁部が短く上方へ直立する。I 789は古瀬戸中期の折縁深皿。復元口径19.2cmで、体部は丸みを帯びる。I 790は白磁皿。平底の底部は無釉。見込みに、篋描きで花文を施している。皿VIII類か。I 791は瓦器壺。口径5.4cm、胴部最大径11cm。口縁部は肥厚し、面取りする。肩部に螺旋状暗文を施す。I 792～I 797は瓦器鍋。口縁部は内湾あ



中世の遺跡

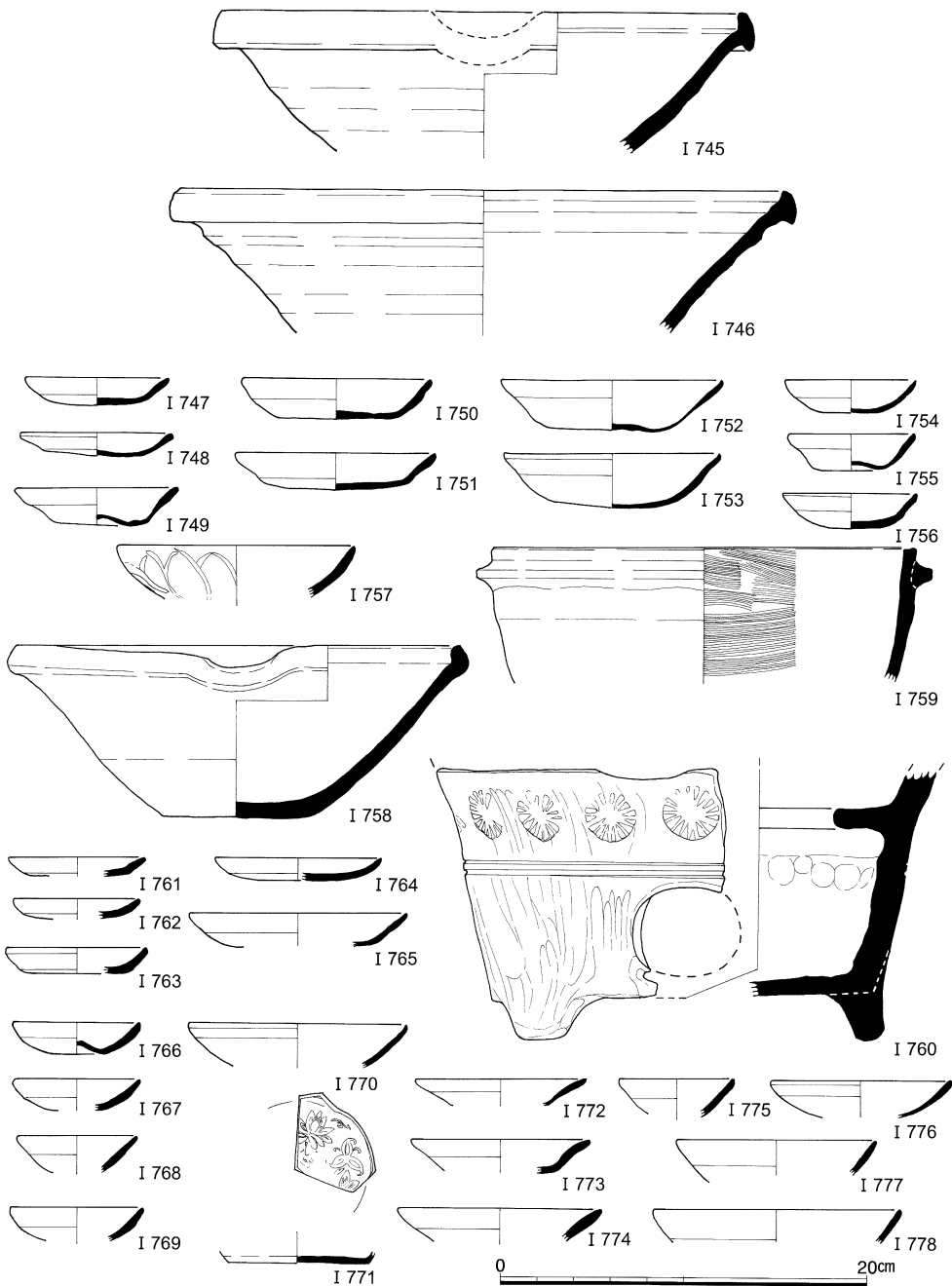


図47 S X26出土遺物(2) (I 745・I 746須恵器), S X32出土遺物 (I 747~ I 756土師器, I 757青磁, I 758須恵器, I 759・I 760瓦器), S X34出土遺物 (I 761~ I 770土師器, I 771白磁), S X37出土遺物 (I 772~ I 778土師器)

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

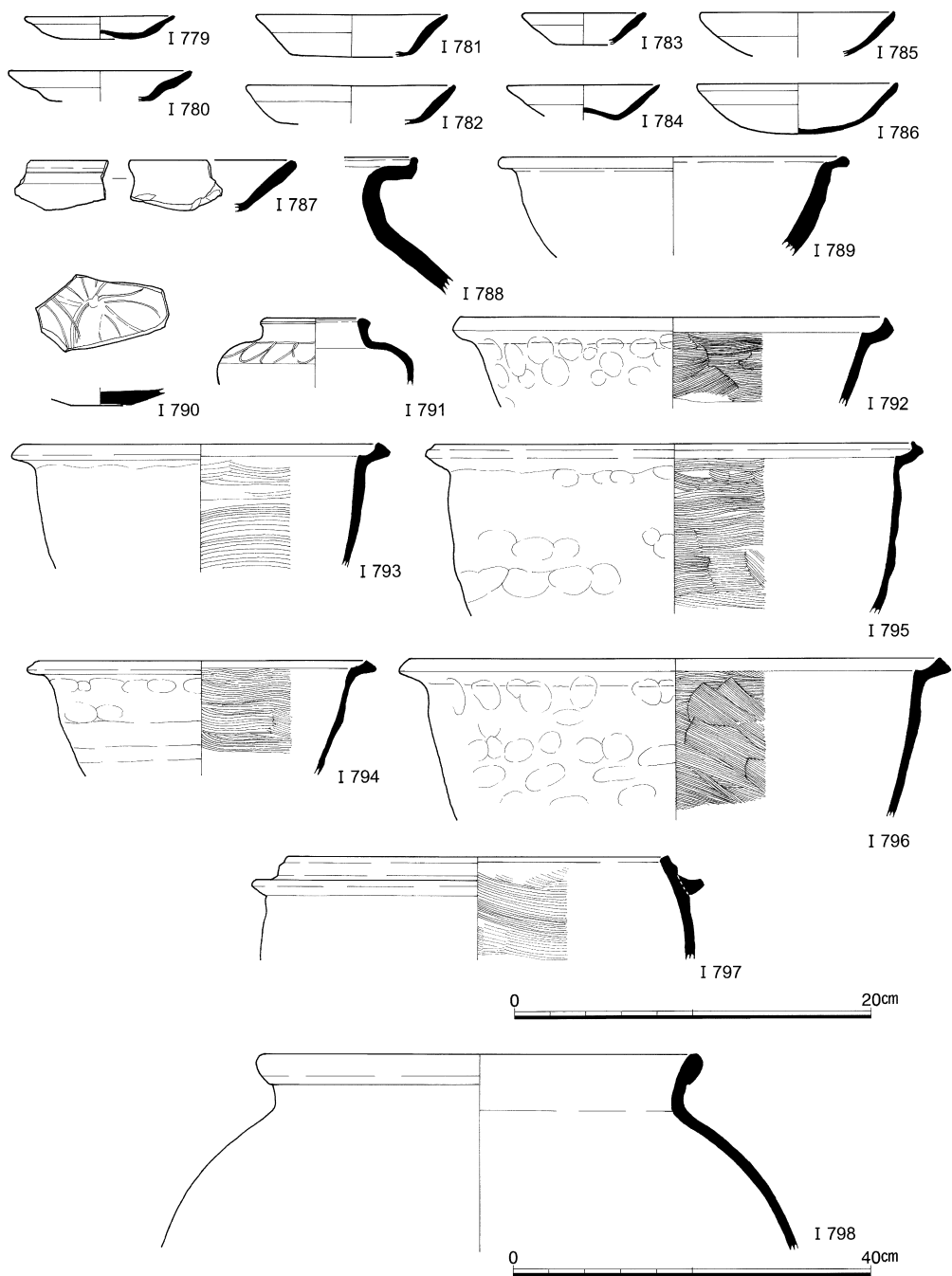


図48 S X35出土遺物 (I 779~I 787土師器, I 788陶器, I 789古瀬戸, I 790白磁, I 791~I 797瓦器), S D11-12間の落ち込み (I 798備前) I 798は1/8

中世の遺跡

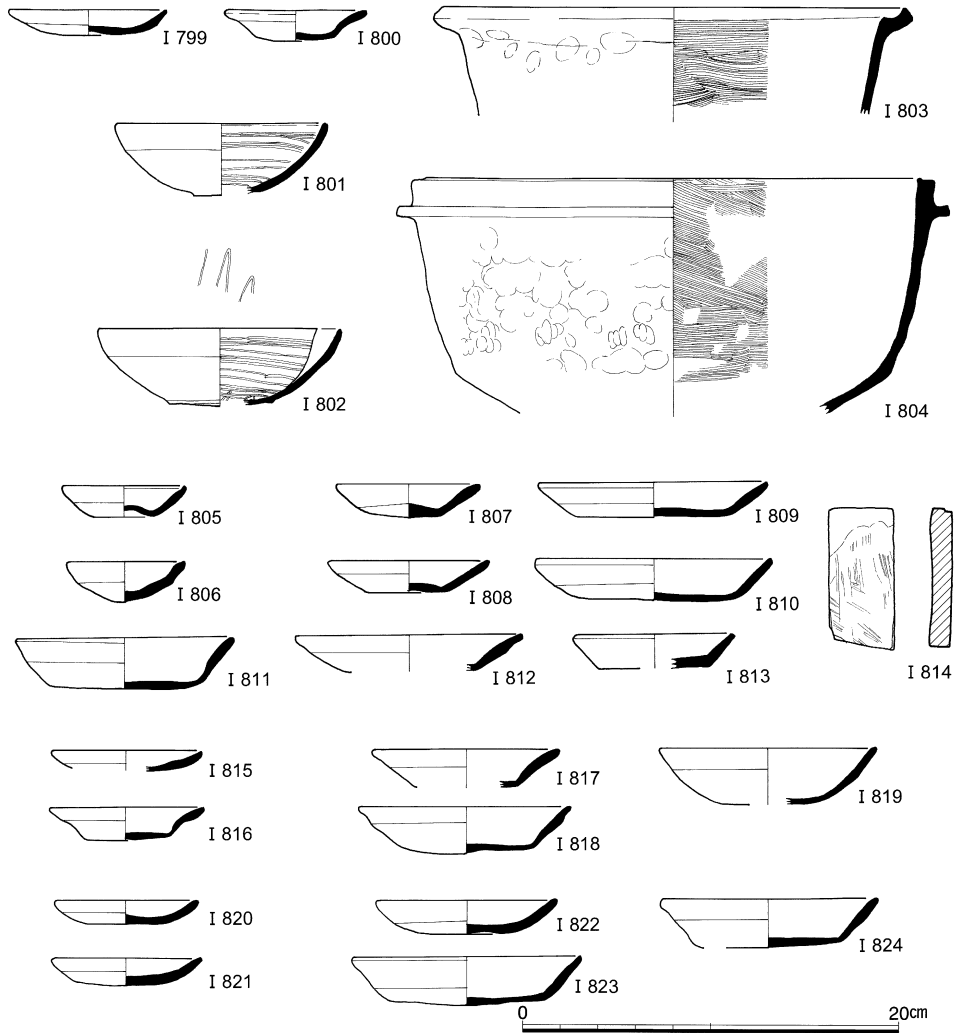


図49 S D15出土遺物 (I 799・I 800土師器, I 801~I 804瓦器), S X101関連遺物 (I 805~I 813・I 815~I 824土師器, I 814砥石)

るいは外折する。口径にばらつきあり, 小はI 794の18.5cm, 大はI 796の30cmである。I 797は瓦器羽釜。口縁部は内傾し, 端部と鏝の間に浮線が1条めぐる。

S D11-12間の落ち込み (I 798) I 798は復元口径48cmをはかる備前焼大甕。口縁部を外側へ折り返し肥厚させている。備前焼Ⅲ~Ⅳ期。

S D15出土遺物 (I 799~I 804) I 799・I 800は土師器皿。I 799は口径8.5cm, I 800は7.5cm。2期新段階。

I 801・I 802は瓦器碗。篋磨きは内面のみで疎らである。I 801は口径11.2cm, 高さ3.8cm, I 802は口径12.8cm, 高さ4.1cm。ともに断面三角形の形骸化した高台がつく。楠葉型Ⅲ-3期~Ⅳ-1期。I 803は瓦器鍋。I 804は瓦器羽釜。

S X 101石敷面以下出土遺物 (I 805~I 814) I 805は灰白色のくぼみ底小碗。口径6.5cm。I 806は橙褐色を呈する土師器小碗。口径6.5cm。底部が突出し通常の土師器碗・皿とは形態を異にする。I 807~I 812は橙褐色の土師器皿。面取りするD<sub>3</sub>類と素縁手法のE<sub>1</sub>類。小は口径7.5~8cm。大は12cm前後。2期古段階。

I 813は白磁の小皿。口禿で、底部は平底で施釉する。皿Ⅸ-1類。I 814は砥石。幅3.4cm, 長さ7.4cm, 厚さ9mmをはかる。実測図下側の面は折損しているため、本来は、もう少し長かったとみられる。現重量55.1g。

S X 101石敷直下出土遺物 (I 815~I 819) I 815~I 818は橙褐色の土師器皿。小は口径8cm, 大は10~11cm。I 819は灰白色の土師器碗。口径11.5cm。2期新段階。

S X 101周辺出土遺物 (I 820~I 824) I 820~I 824は橙褐色の土師器皿。小は口径8cm (I 820・I 821)と9.5cm (I 822)があり, 大はD<sub>6</sub>類のI 823が12cm, E<sub>2</sub>類のI 824が11.5cmである。時期のばらつきがあるが, 2期新段階を下限とみる。

(8) 中世3期の遺物 (図版22~24, 図50~64)

S D 11出土遺物 (I 825~I 917) I 825~I 879は土師器碗皿類。E類が主体を占めるが, F類が一定量組成する。I 825~I 861は橙褐色の土師器皿。口径は, 8~10cm, 11~12cm, 13cm前後のものが多い。I 862は回転台成形の土師器皿。I 863~I 865は特大の土師器皿。いずれもくぼみ底となる。I 866~I 871は灰白色を呈する土師器小碗で, くぼみ底となるものが多い。口径は, 6~7.5cm。I 874~I 879は灰白色の碗。口径11~13cm。3期古段階。

I 880・I 881は須恵器すり鉢。口縁部が上下に肥厚する。I 882~I 890は古瀬戸。I 882・I 887が無釉のほかは, 灰釉を施釉している。I 882は無釉陶器碗。灰白色を呈する。底部は回転糸切りし, 断面三角形の小さな高台を貼り付ける。古瀬戸中Ⅱ期。I 883~I 885は折縁深皿。I 883は底部のみ残存。I 884は口径17.5cm, 器高7cm。見込みには櫛描きで, I 883は同心円文, I 884は同心円文と波状文を施す。底部は, I 883は回転糸切り痕を残し, I 884は回転篋削り調整を加えている。底部外面を除いて, 灰釉を刷毛塗りする。ともに古瀬戸中Ⅱ期。I 885は口縁径に比して器高が低く, 口縁部が外側へ折れ曲がる。外面の施釉は, 体部中位までである。古瀬戸後Ⅰ期。I 886は卸し皿。底部から体部へ丸

中世の遺跡

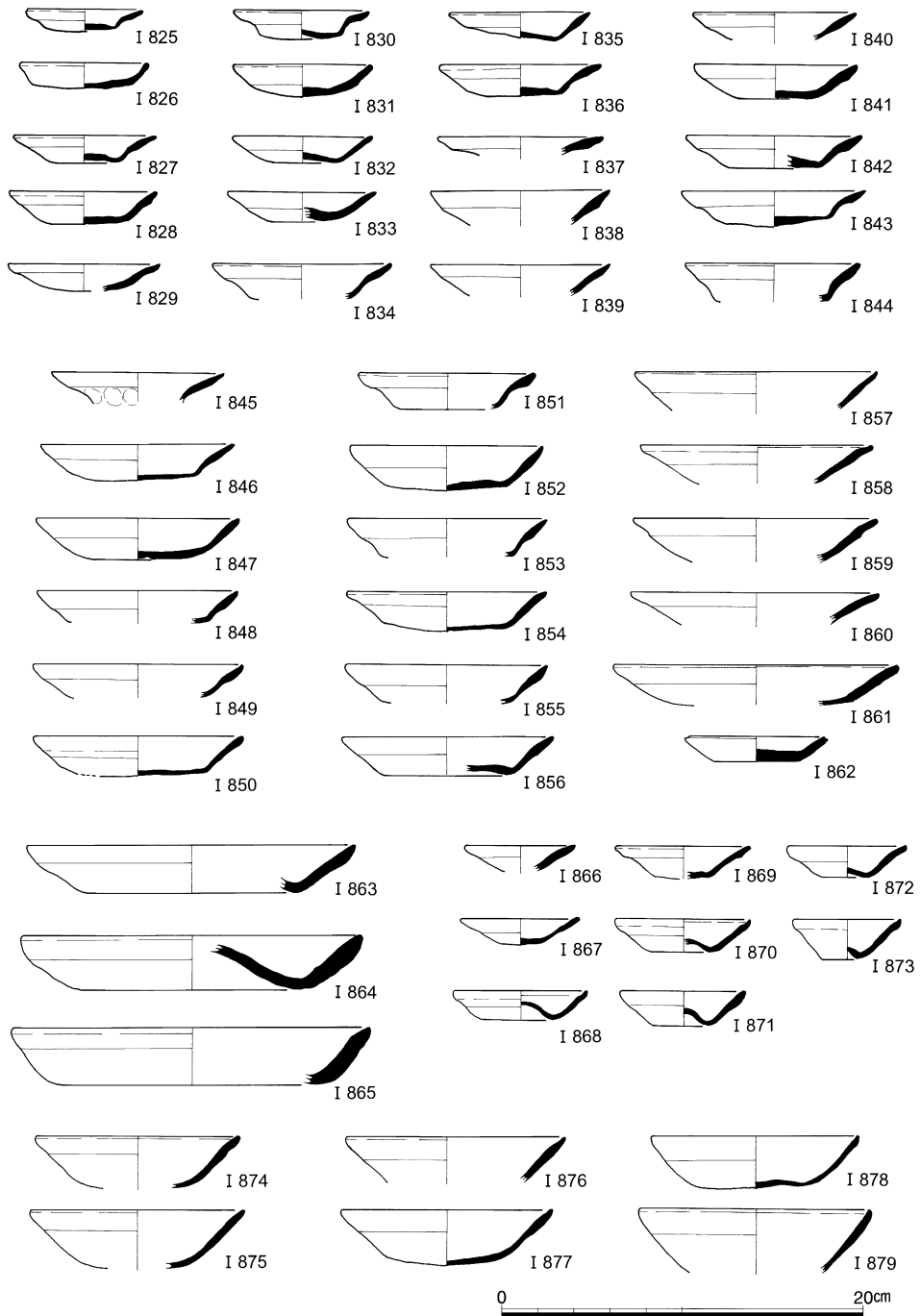


図50 S D11出土遺物(1) (I 825~ I 879土師器)

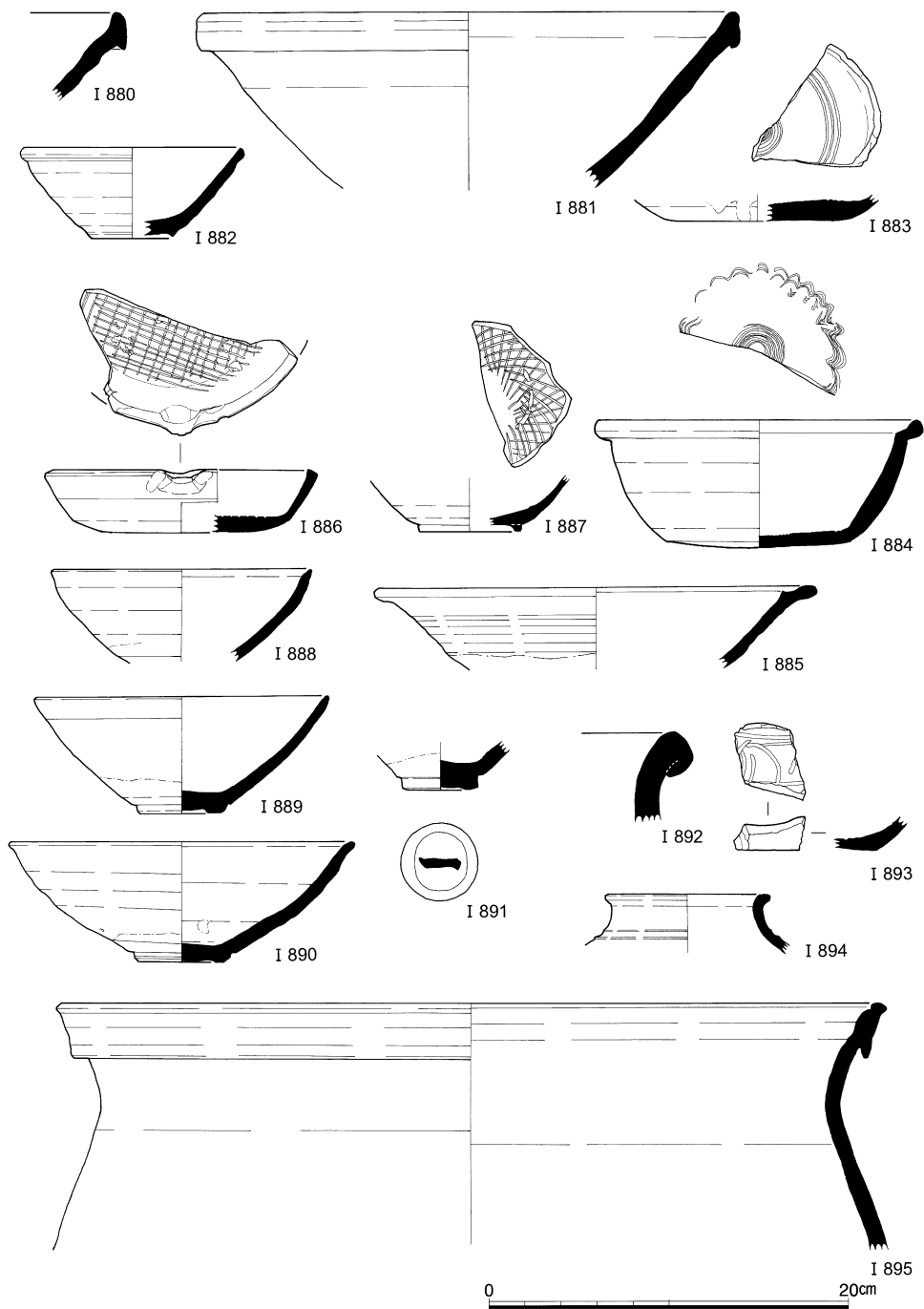


図51 S D11出土遺物(2) (I 880・I 881須恵器, I 882~I 890古瀬戸, I 891・I 893・I 894貿易陶器, I 892備前, I 895信楽)



中世の遺跡

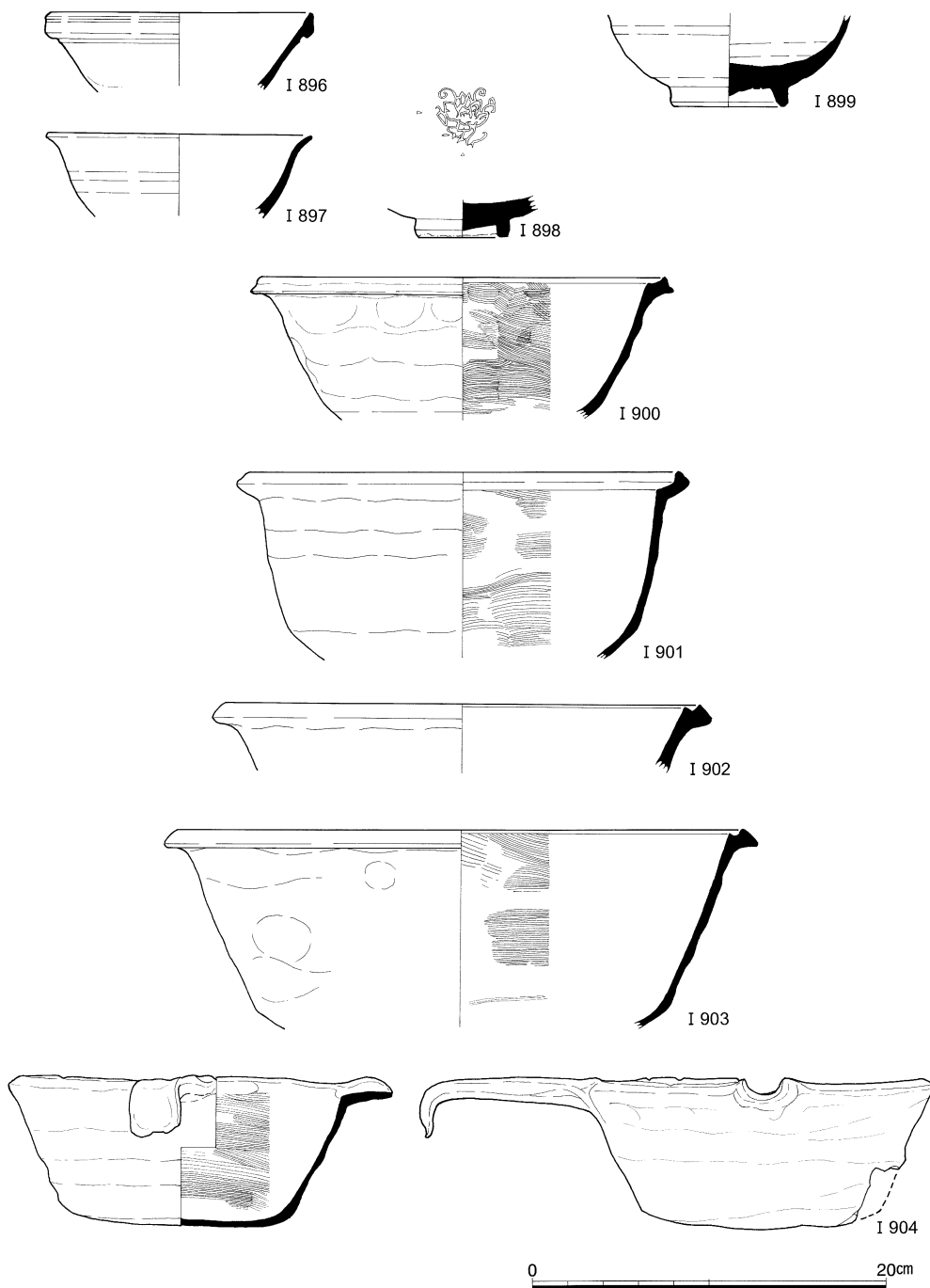


図52 S D11出土遺物(3) (I 896・I 897白磁, I 898・I 899青磁, I 900～I 904瓦器)

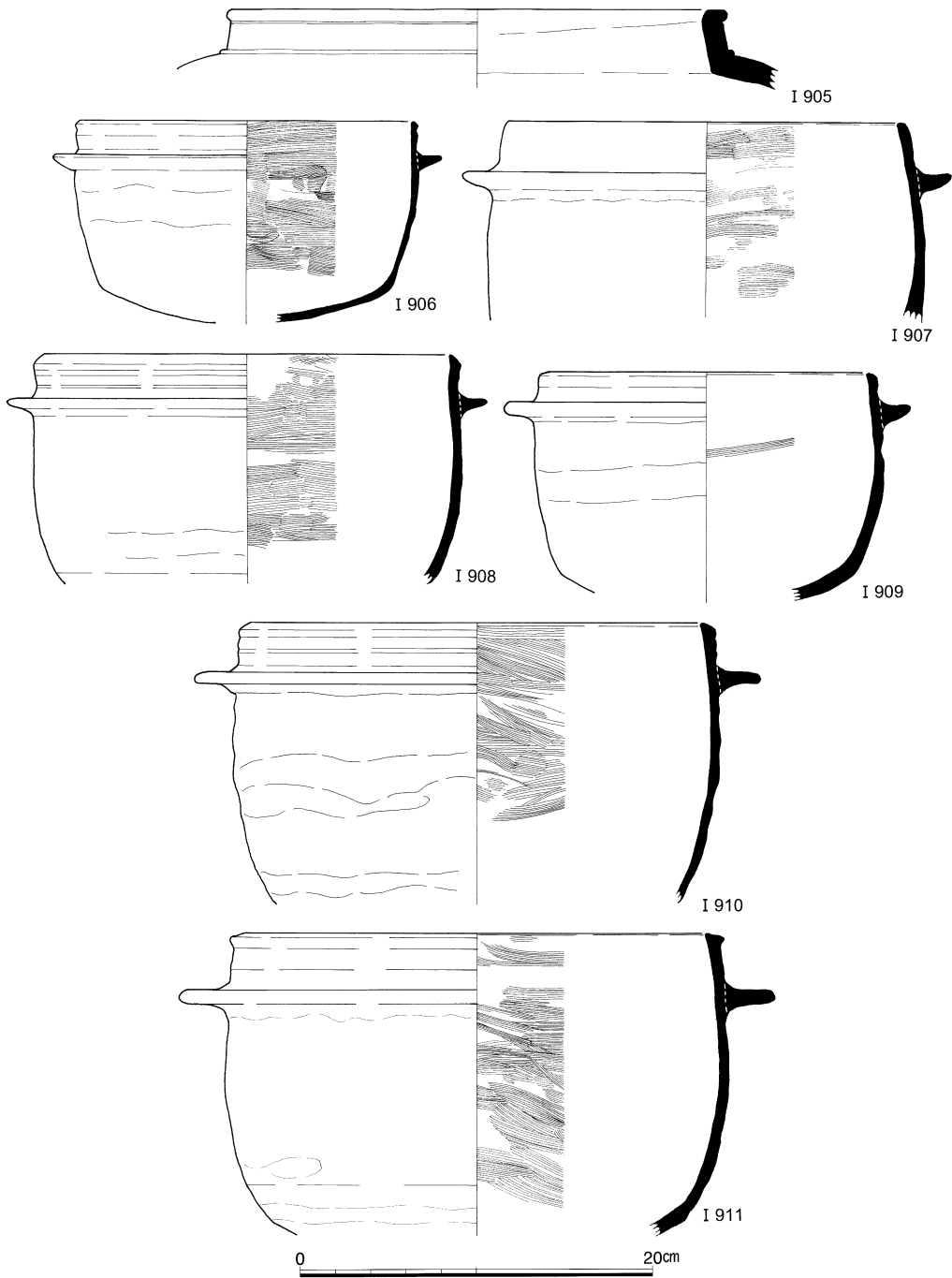


図53 S D11出土遺物(4) (I 905~ I 911瓦器)

中世の遺跡

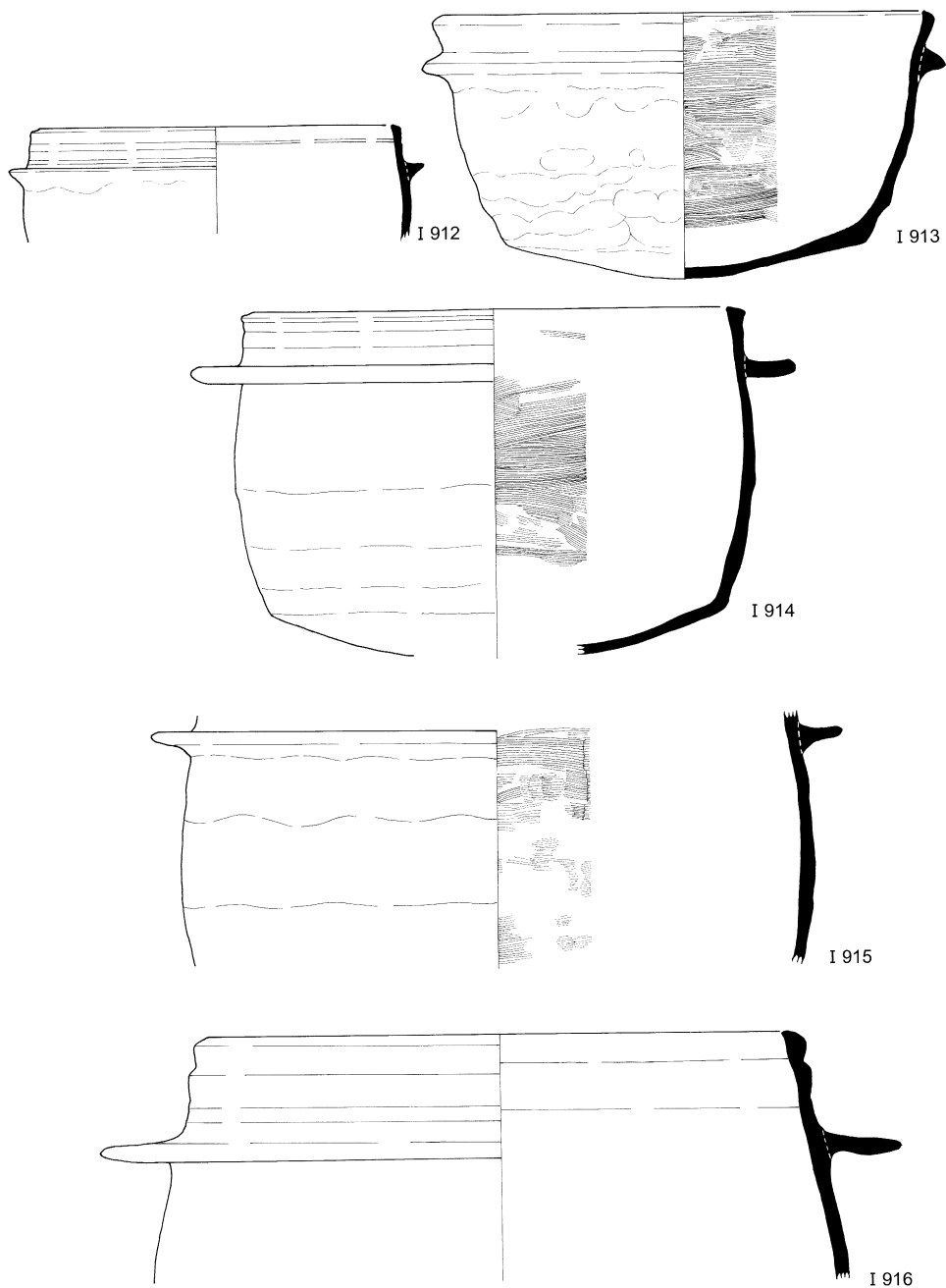


図54 S D11出土遺物(5) (I 912~ I 916瓦器)

みをもって立ち上がり、口縁部は平坦で端部が角張る。底部回転糸切り。古瀬戸前Ⅲ期。

I 887は、いわゆる山茶碗。内面に卸し目をもつ東濃型で、重ね焼きの跡が残る。底部は回転糸切りし、貼り付け高台の端部には靱殻痕跡をもつ。I 888～I 890は、平椀。I 889の口縁部が直線的に立ち上がるのにたいして、I 888・I 890はわずかに外反する。底部は、I 889・I 890ともに、底平な削り出し高台である。I 890は底部畳付けに回転糸切り痕を残し、見込みには5箇所を目跡をもつ。I 888・I 890は古瀬戸後Ⅲ期。I 889は後Ⅱ期に編年される。

I 891は貿易陶器。鉄釉を施す天目椀の底部。底部外面に、「一」の墨書がある。I 892は備前焼甕の口縁部。I 893は河南三彩盤。緑釉地で内面に篋描きによる文様をもつ。I 894は褐釉陶器の壺。I 895は信楽焼甕。K B 3類。I 896・I 897は白磁椀。I 896は口縁部が玉縁となる椀Ⅳ類。I 897は端反となり、青みがかった釉調を呈する。森田分類のB類であろうか。I 898・I 899は青磁椀。I 898は、見込みに花文のスタンプを押捺し、高台外面まで施釉している。I 899は高台外面まで施釉し、内外面とも無文である。

I 900～I 916は瓦器。I 900～I 903は鍋。口縁部の2段の屈曲をかるうじて残すものもあるが(I 901)、断面形が「V」字形に退化したものが多い。I 904は柄付き鍋。端部を下方へ折り曲げた柄と、それに直交する位置に注ぎ口がつく。口縁端部は内側へ肥厚させて、平坦面をつくる。I 905は、いわゆる奈良火鉢の一種で、風炉。直立する口縁部に雷文のスタンプを押捺する。I 906～I 916は羽釜。大小各種あり、小は口径19cm前後、口径25cm前後のものも多く、I 916は口径30cmをこえる大型品である。体部はわずかに湾曲し、口縁部が長く延び、端部が面をなして外傾するものが多い。

I 917は青白磁の置物。上半部を欠損し、現存最大幅5.6cm、現存長5.8cm。最下部での奥行き2.9cmをはかる。中空で、正面は全面施釉し、裏面は下半を露胎としている。最下部には、波頭文を表現し、向かって左端に鳥の表現かと思われる突起がつく。対応する右端にも欠損しているが、同様の突起がついた可能性が高い。左端の突起の横には、足の指が表現されており、これに対応すると考えられる膝頭が右寄りに突起状に表現されている。これは結跏した右足に相当するものと思われる。さらに細長い粘土を貼り付けて衣服の襷を、小玉をつらねてビーズの連珠を表現している。上半部の状況が欠損により不明ではあるけれども、水を表現していると思われる波頭文の上に、裳状の衣服をまとい、ビーズ状の装身具を身につけて、鳥を従えている表現から判断して、いわゆる渡海観音と呼ばれる置物の一種であろうと思われる。



図55 S D 11出土遺物(6) (I 917青白磁) 縮尺1/2

このような青白磁あるいは白磁の観音像は、元代以降、景德鎮や福建省徳化などで製作されている。またビーズ玉を連ねた連珠文は、白磁の壺や瓶などにも取り入れられて元代に流行している〔佐藤1981〕。共伴した在地土師器が3期古段階であることから、本例は14世紀～15世紀初の所産と推定しておきたい。

S X 100出土遺物 (I 918～I 962) I 919～I 921・I 924・I 925は、褐色系の土師器小皿。口径8 cm前後。I 918・I 922・I 923・I 926～I 935は、白色系の土師器小椀。I 918・I 922・I 923は、口径6.5～7 cm前後で、くぼみ底になると思われる。I 926～I 935は、口径7～8 cmで、底部がわずかにくぼむものが多い。I 936は、褐色系の土師器椀で、口径9 cm前後。I 937～I 940・I 947・I 948は、褐色系の土師器皿。I 937～I 940はE類手法で、口径は9.5～12 cmまでみとめられる。I 947・I 948はF<sub>2</sub>類で、口径14 cmをはかる。I 944～I 946は白色系の土師器椀。口径は12 cm前後のものが多い。3期古段階。

I 949・I 950は回転台利用の土師器皿と椀。灰白色を呈し、底部を回転糸切りする。I 949は口径7.5 cm, 器高1.5 cm, I 950は口径7 cm, 器高2.5 cm。I 951・I 952は土師器鉢。体部がやや外傾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。砂粒を多く含む粗放な胎土で、内外面を撫でて仕上げている。I 951は口径13 cm, 推定器高8 cm, I 952は口径15.5 cm, 器高9 cm。I 953は土師器羽釜のミニチュア。

I 954は灰釉系陶器小椀。底部は平底で、篋切りしている。I 955・I 956は須恵器すり鉢。口縁部が玉縁状に肥厚する。I 957は白磁皿。全面施釉し、口縁端部のみ口禿とする。見込みと体部内面に、花文を型押しで陽出する。皿IX-1類。I 958は陶器盤。いわゆる河南三彩とみられ、白化粧を施し全面緑釉地に、褐釉で内面に文様を描いている。口縁部は外側へ折り返して肥厚させる。I 959・I 960は青磁椀。I 959は内面に片切彫りで文様を

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

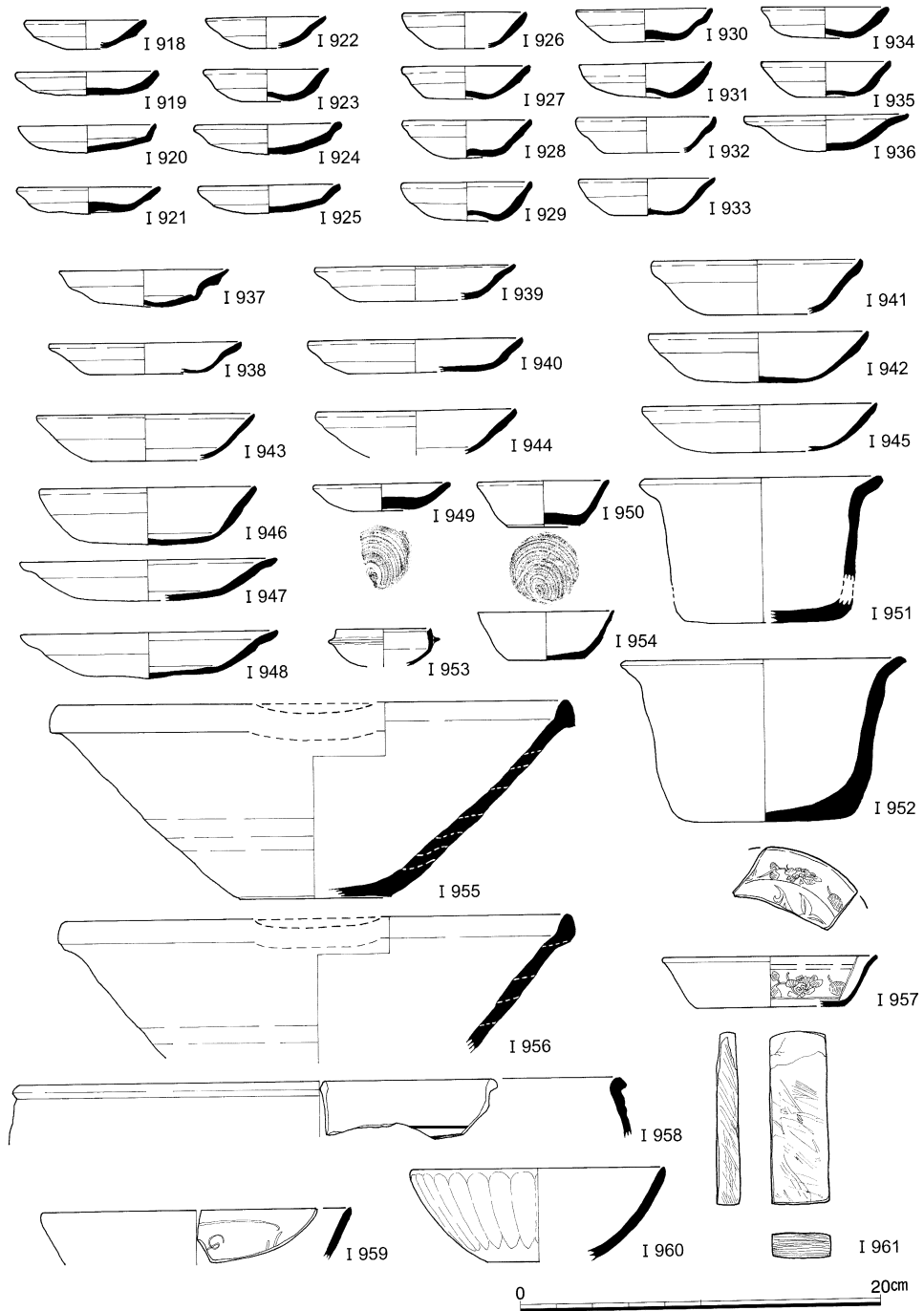


図56 S X100出土遺物(1) (I 918~ I 953土師器, I 954灰釉系陶器, I 955・I 956須恵器, I 957白磁, I 958貿易陶器, I 959・I 960青磁, I 961砥石)

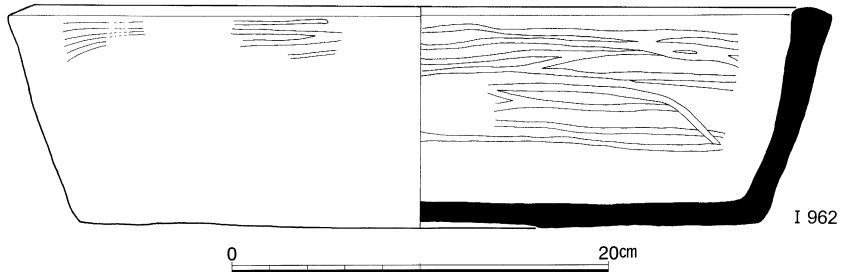


図57 S X100出土遺物(2) (I 962瓦器)

描く。同安窯系青磁碗Ⅰ類。I 960は外面に簡略化した蓮弁文が表現される。龍泉窯系青磁碗。I 961は砥石。直方体で、幅3.1cm、長さ9.3cm、厚さ1.1cm。重量79.6g。I 962は瓦器盤。体部が直線的に立ち上がる形態で、口径40cm前後。体部内外面は横位に磨き、見込みには、斜格子状の暗文を施している。1/5ほど残存する底部には脚はつかない。奈良火鉢の浅鉢Ⅱ類〔立石1995〕とされるものである。

S X21出土遺物 (I 963～I 966) I 963はE<sub>1</sub>類, I 964はF<sub>2</sub>類土師器皿。I 965は特大の土師器皿。口径24.5cm前後で、くぼみ底となる。3期新段階。I 966は黄釉陶器の盤。口縁端部が外側へ水平に張りだしている。

S X30出土遺物 (I 967～I 984) I 967～I 976は土師器皿。白色系といえるのはI 968のみであり、他は赤褐色系あるいは橙褐色系である。小は口径7～9cm、大は12cm前後のI 974・I 975、16.5cmのI 976がある。3期新段階。

I 977は東播系須恵器すり鉢。口縁端部が受口状に肥厚し、体部外面は整形時の挽き目の凹凸が顕著に残る。第3期第3段階。I 978は信楽焼こね鉢。内外面とも横撫で調整し、口縁部はわずかに外反させつつそのまま収めている。A-c類。I 979～I 981は古瀬戸。I 979は平碗。古瀬戸後Ⅲ期。I 980は天目釉を施す。脚台のつく仏供だろう。I 981は卸し皿。底部に回転糸切り痕を残す。古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期。I 982は青磁碗。線描きによる蓮弁文を施す。I 983は瓦器鍋。口縁部は外へ張り出し、浅い器形となる。I 984は瓦器羽釜。体部が直線的で、口縁部は比較的長い。

S X59出土遺物 (I 985・I 986) I 985はF<sub>2</sub>類, I 986はF<sub>3</sub>類の土師器皿。ともに口縁端部に煤が付着する。3期新段階。

S K 8 出土遺物 (I 987～I 990) I 987・I 988はF<sub>2</sub>類土師器皿。3期新段階。I 989は備前焼すり鉢。口縁部が上下に拡張し、内面に7条1単位のすり目が施される。体部下半から底面にかけて、使用による摩耗が著しい。備前焼Ⅳ期。I 990は瓦器羽釜。胴部が



京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

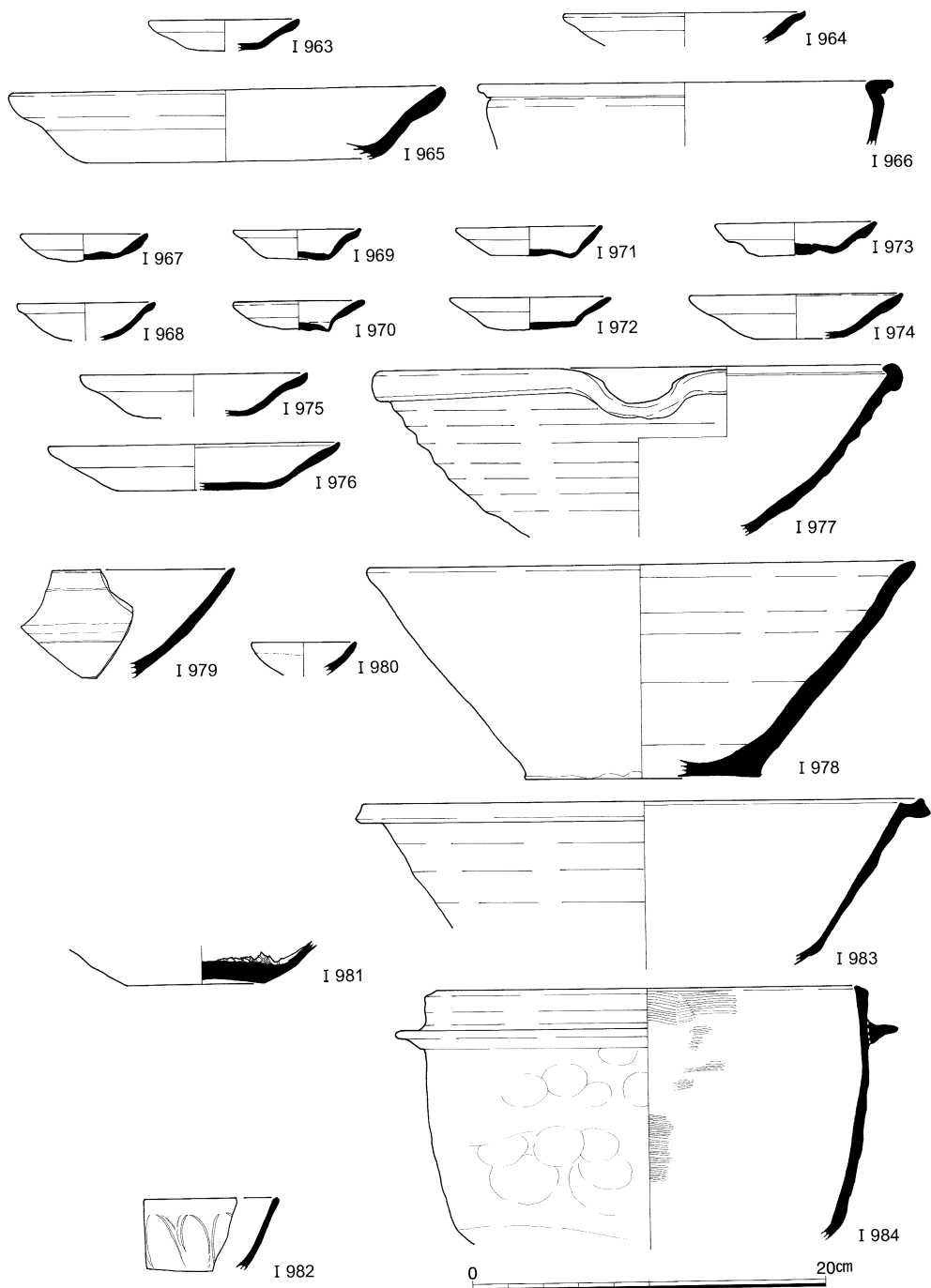


図58 S X21出土遺物 (I 963~I 965土師器, I 966貿易陶器), S X30出土遺物 (I 967~I 976土師器, I 977須恵器, I 978信楽, I 979~I 981古瀬戸, I 982青磁, I 983・I 984瓦器)

中世の遺跡

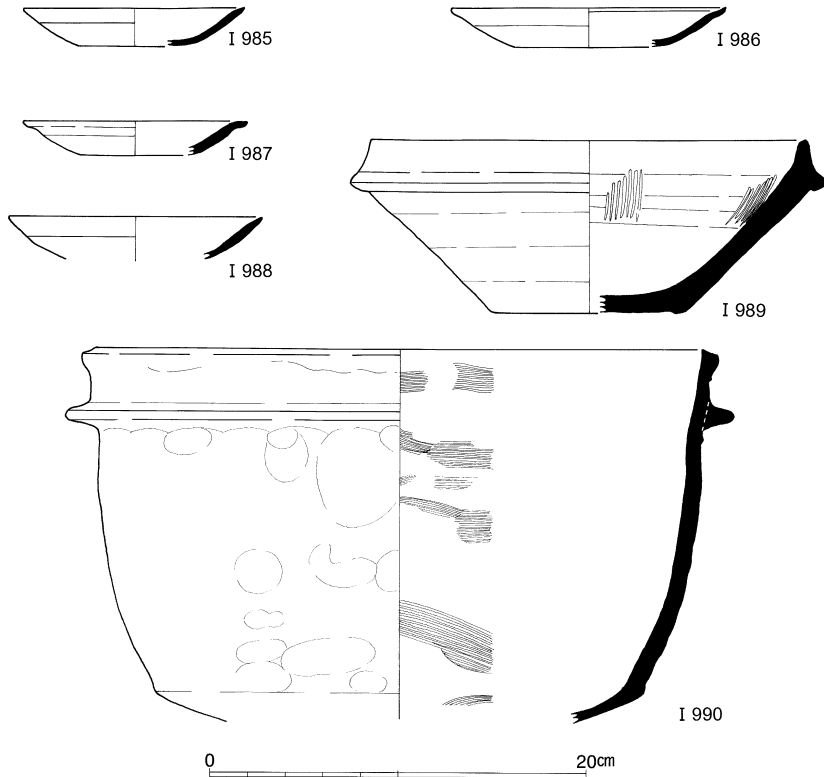


図59 S X 59出土遺物 (I 985・I 986土師器), S K 8出土遺物 (I 978・I 988土師器, I 989備前, I 990瓦器)

ふくらみ気味となり、口縁部がやや長く直立する。

S X 9出土遺物 (I 991～I 1000) I 991～I 999は土師器皿。小は口径7～8.5cmでE<sub>4</sub>類, 大は口径13～14cmでF<sub>2</sub>類。3期新段階。I 1000は回転台成形の土師器皿。底部を静止糸切りしている。

S X 17出土遺物 (I 1001～I 1023) I 1001～I 1010は土師器皿。小は口径6～9cm, 大は12～17cmまであり, 法量にばらつきがある。I 1011～I 1013は特大の土師器皿。I 1013は口縁部下端が突出する。3期新段階。

I 1014は土師器。口径15cm, 器高8.8cmをはかる。I 1015・I 1016は古瀬戸。I 1015は折縁深皿, I 1016は花瓶の脚部とみられる。脚部内面に「浄蓮智受分」と解釈できる墨書がある。古瀬戸後I～II期。I 1017は青磁壺。口縁端部が外側へ折れ, 端部が平坦面をなす。I 1018～I 1020は白磁で, I 1018・I 1019は皿, I 1020は端反になる椀。I 1021～I 1023は瓦器。I 1021・I 1022は羽釜。I 1022は口径30cmをこえる大型品で, 口縁部が長く

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

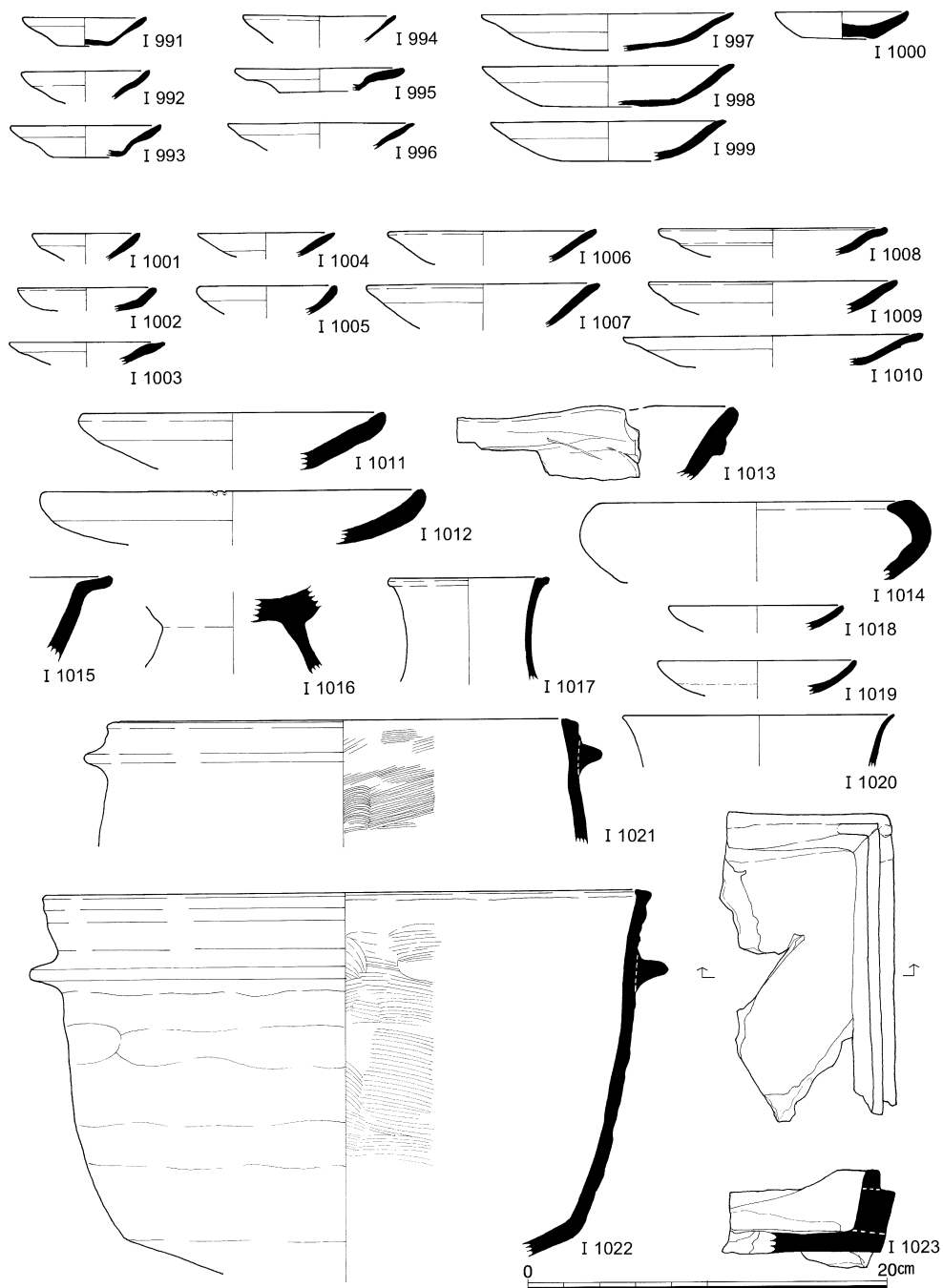


図60 S X 9 出土遺物 (I 991~ I 1000土師器), S X17出土遺物 (I 1001~ I 1014土師器, I 1015・I 1016古瀬戸, I 1017青磁, I 1018~ I 1020白磁, I 1021~ I 1023瓦器)

中世の遺跡

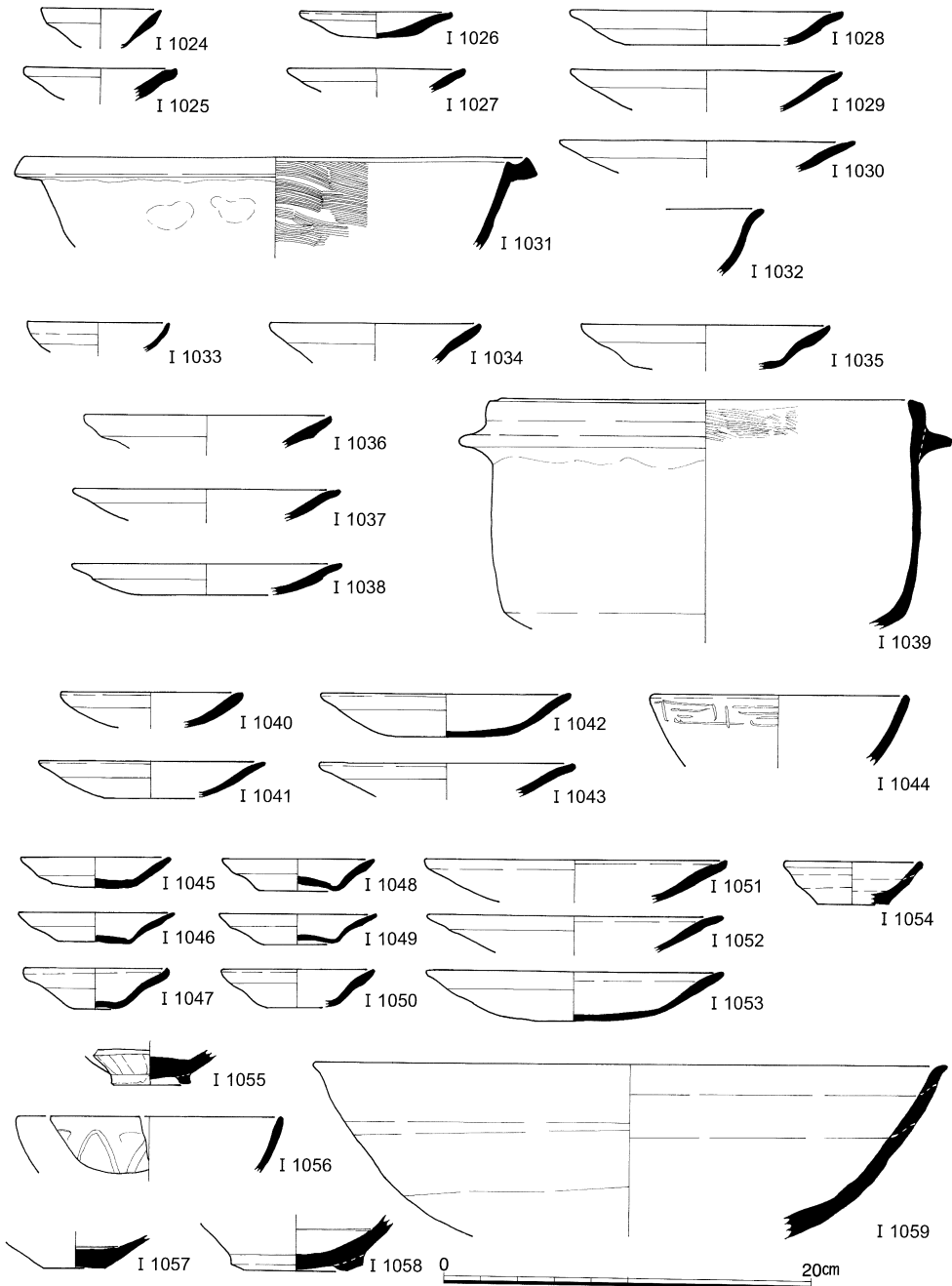


図61 S X29出土遺物 (I 1024~I 1030土師器, I 1031瓦器, I 1032青磁), S X33出土遺物 (I 1033~I 1038土師器, I 1039瓦器), S X36出土遺物 (I 1040~I 1043土師器, I 1044青磁), S X39出土遺物 (I 1045~I 1053土師器, I 1054灰釉系陶器, I 1055・I 1056青磁, I 1057・I 1058白磁, I 1059須恵器)

直立する。I 1023は平面長方形で、浅い広口状を呈する。隅に脚がつき、口縁部が受け口状となる。側面は磨いて仕上げているが、底部は側面との接合部を撫でるほかは粗面を呈している。線香立て、といった用途が想定される。

S X 29出土遺物 (I 1024～I 1032) I 1024～I 1030は土師器皿。小は口径5.5～9.5cmのあいだにあり、大は口径15～16cm。I 1030は口縁端部から外面が煤で黒化している。3期新段階。

I 1031は瓦器鍋。I 1032は青磁椀。口縁部が端反となる。

S X 33出土遺物 (I 1033～I 1039) I 1033は白色系の土師器小椀。口径7.5cm。I 1034～I 1038は土師器皿。I 1034～I 1036はE<sub>4</sub>類で、口径11.5～13.5cm。I 1037・I 1038はF<sub>2</sub>類で、口径14.5cm前後。3期新段階。I 1039は瓦器羽釜。体部が直立する。

S X 36出土遺物 (I 1040～I 1044) I 1040～I 1043は土師器皿。I 1040はF<sub>1</sub>類で、口径10cm。他はF<sub>2</sub>類で、口径12.5cmと13.5cm。3期新段階。I 1044は青磁椀。口縁部に雷文を施す。

S X 39出土遺物 (I 1045～I 1059) I 1045～I 1053は土師器皿。I 1050が白色系のほかは、橙褐色系。小はE類各種からなり、口径8～8.5cm。大はF<sub>2</sub>類・F<sub>3</sub>類で、口径16～16.5cm。3期新段階。

I 1054は灰釉系陶器小杯。無釉で、底部は回転糸切り。I 1055・I 1056は青磁椀。I 1055は底部で、高台外面まで施釉する。I 1056は蓮弁文を施す。I 1057・I 1058は白磁の椀。ともに底部で、I 1057は底部外面のみ露胎、見込みに段をもつ。I 1058は見込みに圈線がめぐる。I 1059は須恵器鉢。古代の遺物の混入品だろう。

S X 63出土遺物 (I 1060～I 1067) I 1060～I 1062は橙褐色系の土師器皿。I 1060はE<sub>4</sub>類で、口径8.5cm。I 1061・I 1062はF<sub>2</sub>類で、口径13.5cmと14.5cmをはかる。3期新段階。

I 1063は古瀬戸の卸皿。口縁部を内側へ肥厚させ、口縁端部が凹面となる。底部は回転糸切り。後期IV古期。I 1064～I 1067は瓦器羽釜。このうち、I 1064・I 1066・I 1067は直立する体部に鏝のつく通例のタイプの羽釜で、いずれも口縁部が長く延びる。I 1067は口径40cm、推定器高28.5cmをはかる大型品である。I 1065は内湾する胴上部に耳がつき胴部中位に鏝のつく、いわゆる茶釜形である。外面は磨き、口縁部内面は横撫で、体部内面は刷毛目調整で仕上げている。

S D 4 出土遺物 (I 1068～I 1093) I 1068～I 1083は褐色系の土師器皿。小はD類

中世の遺跡

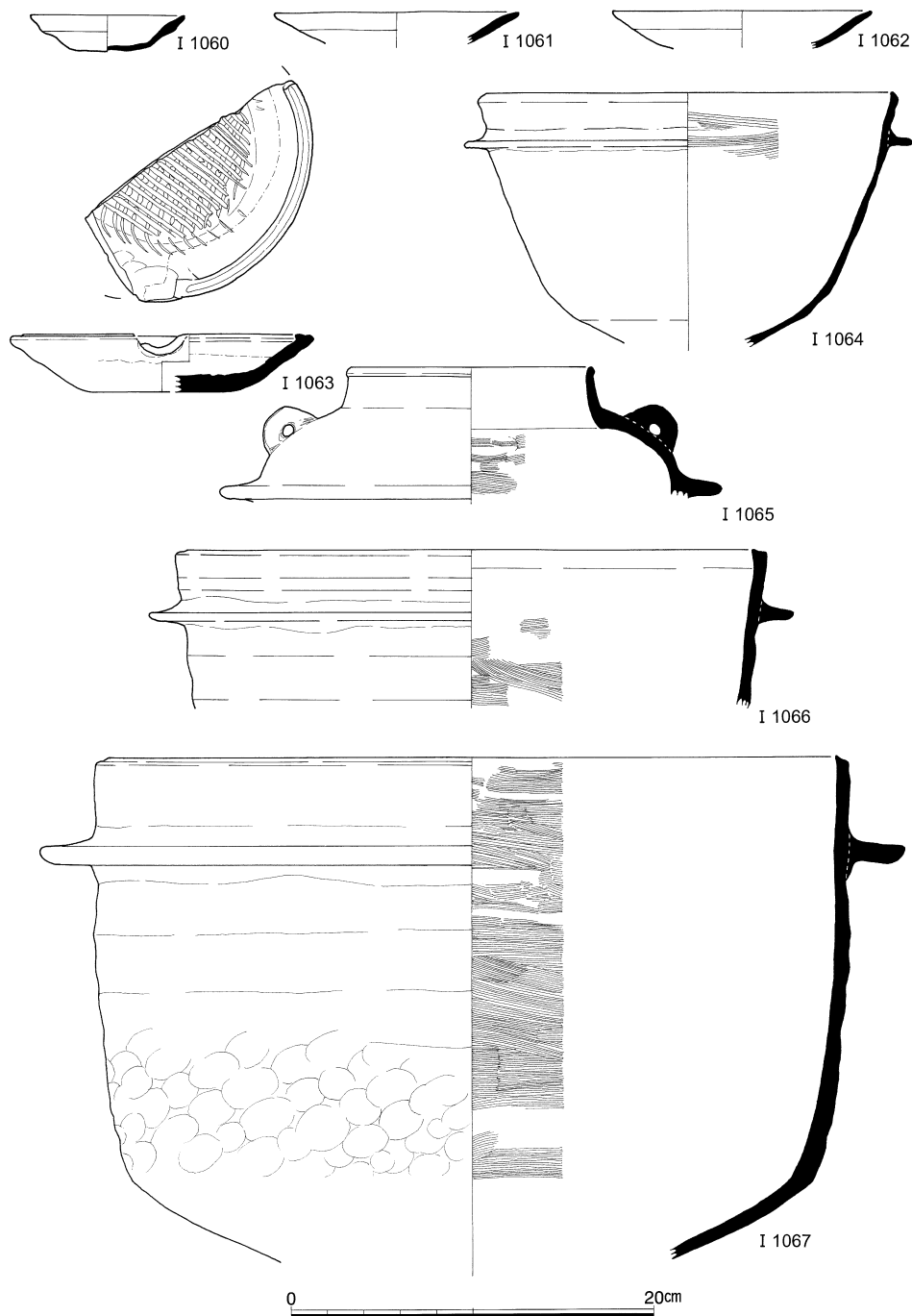


図62 S X63出土遺物 (I 1060~ I 1062土師器, I 1063古瀬戸, I 1064~ I 1067瓦器)

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

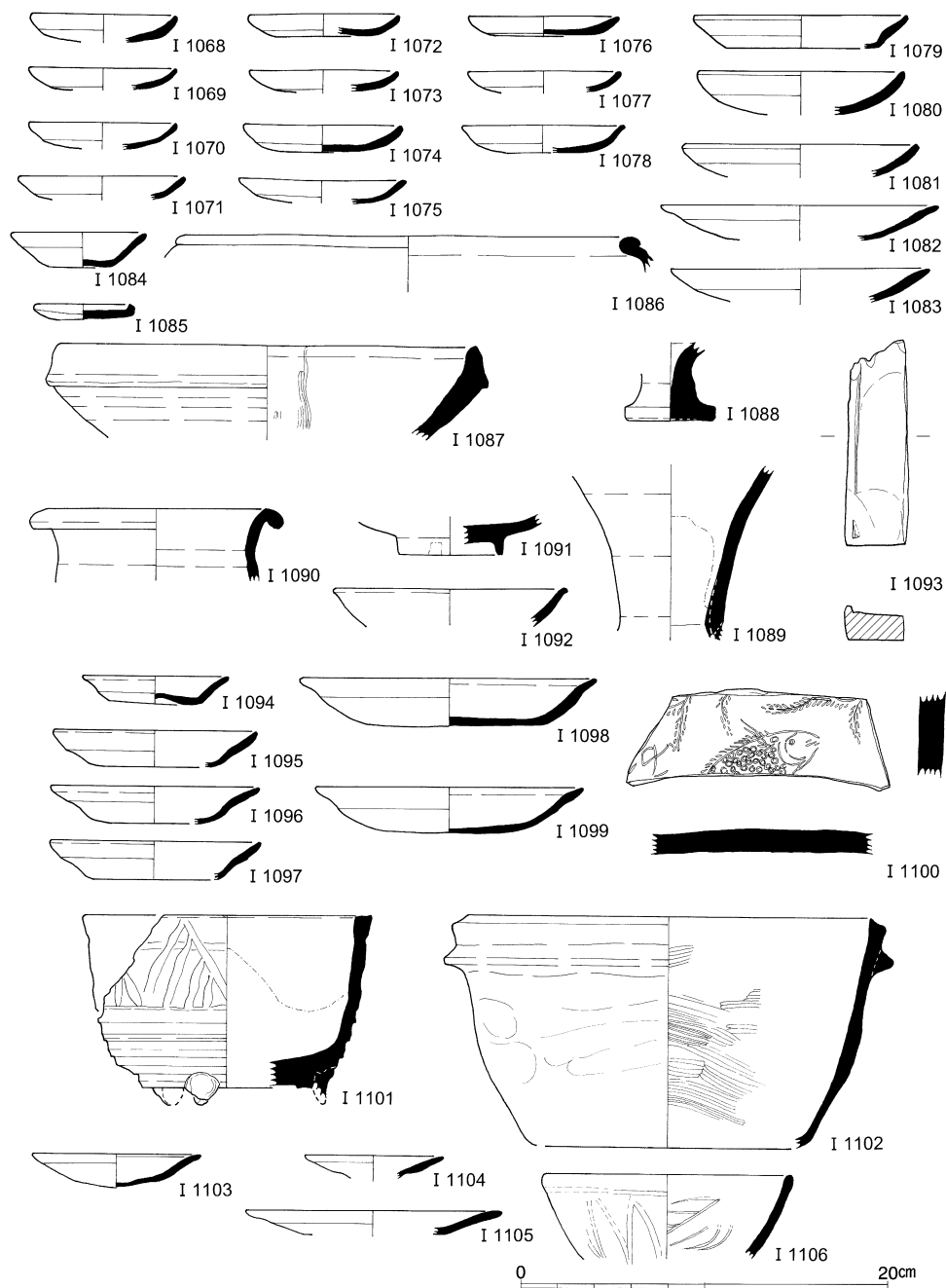


図63 S D 4 出土遺物 ( I 1068～ I 1086土師器, I 1087備前, I 1088・ I 1089古瀬戸, I 1090～ I 1092白磁, I 1093硯), S D 6 上面出土遺物 ( I 1094～ I 1099土師器, I 1100陶器), S X 15出土遺物 ( I 1101古瀬戸, I 1102瓦器), S X 16出土遺物 ( I 1103土師器), S X 22出土遺物 ( I 1104・ I 1105土師器, I 1106青磁)



## 中世の遺跡

が多く、大はD類とF類が出土している。前者を混入と見なすと、遺構はF<sub>2</sub>類のI 1082、F<sub>1</sub>類のI 1083の時期ということになる。I 1084は白色系の土師器小椀。I 1085は白色系の土師器受皿。3期新段階。

I 1086は土師質の土釜。I 1087は備前焼すり鉢。口縁部が縁帯状に肥厚する。備前焼IV期。I 1088・I 1089は古瀬戸。I 1088は仏花瓶の脚部。底部は回転糸切り。古瀬戸後III～IV期。I 1089は尊式花瓶の頸部。下端は胴部との接合部で割れている。古瀬戸後I～II期。I 1090は白磁壺の口縁部。I 1091は青磁椀。高台外面まで施釉する。見込みに文様をもつ。I 1092は白磁椀。I 1093は硯。

**S D 6 上面出土遺物 (I 1094～I 1100)** I 1094～I 1099は褐色系の土師器皿。口径は、I 1094が8cm、I 1095～I 1097が11～11.5cm、I 1098が16cm、I 1099が14.5cm。3期新段階。

I 1100は無釉陶器の底部。焼成は堅緻で、灰色を呈する。底部外面は、時計回りの回転台上で削り調整をおこなっている。見込みには、魚と水草からなる魚藻文を篋刻みで描く。盤の類であり、東海諸窯の製品と思われる。

**S X 15 出土遺物 (I 1101・I 1102)** I 1101は古瀬戸の香炉。筒型の体部に、底部を削り出して成形し、3脚をもつ。胴下部に4条の圏線をめぐらし、口縁部と圏線の間を三角文で埋めている。体部外面から内面中位まで鉄釉を施している。古瀬戸後IV期新。I 1102は瓦器羽釜。体部が直線的に斜め上方へ立ち上がる。

**S X 16 出土遺物 (I 1103)** I 1103は底部が丸底となる土師器皿。口径9cm。3期新段階。

**S X 22 出土遺物 (I 1104～I 1106)** I 1104は、E<sub>4</sub>類土師器皿。口径7.5cm。I 1105は、F<sub>2</sub>類土師器皿。口径14cm。I 1106は青磁椀。外面に蓮弁文、内面にも文様を施す。3期新段階。

**S D 16 出土遺物 (I 1107～I 1115)** I 1107～I 1110は土師器皿。型式にばらつきがみられ、古い時期の遺物の混入と理解する。I 1107・I 1108はE<sub>4</sub>類で、口径8cm。I 1109はD<sub>6</sub>類で、口径8.5cm。I 1110はF<sub>1</sub>類で、口径13.5cm。I 1108・I 1109は褐色系。I 1107・I 1110は白色系。3期新段階。

I 1111は古瀬戸。灰釉は刷毛塗りで、外面体部下半は無釉。内面に卸し目をもつ大皿である。古瀬戸後I～II期。I 1112は蓮弁文をもつ青磁椀。I 1113～I 1115は瓦器羽釜。いずれも口縁部は短く、体部は直線的で、底部との境が屈曲する。

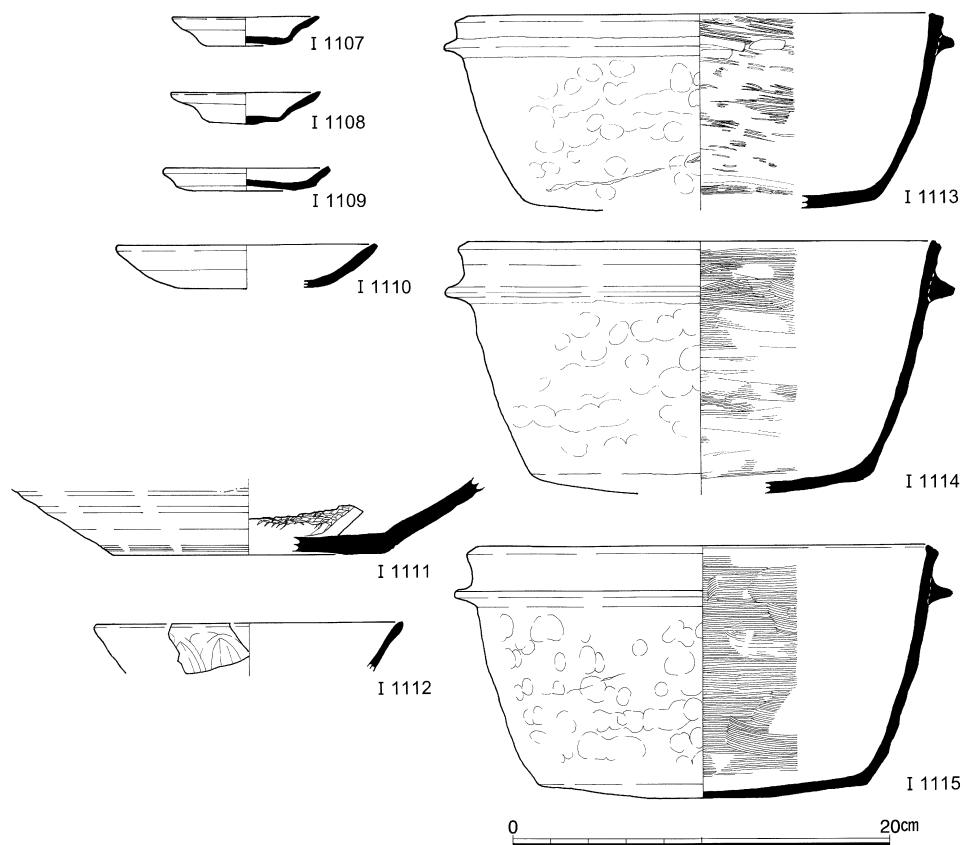


図64 S D16出土遺物（I 1107～I 1110土師器，I 1111古瀬戸，I 1112青磁，I 1113～I 1115瓦器）

茶褐色土・柱穴出土石製品（I 1116～I 1120） 中世の遺物包含層である茶褐色土からも多量の遺物が出土しているが、ここでは石製品のみを報告しておく（図65）。I 1119が中世の柱穴埋土から出土したほかは、茶褐色土出土である。

I 1116は石製帯飾り具。黒色の石を用い、長方形をなす巡方である。隅の一部が欠損し、裏面も一部が剥落する。短辺3.65cm、長辺3.95cm、厚さ0.6cmをはかる。表面は丁寧に磨き光沢をだす。裏面は平らに仕上げているが、擦痕を残し光沢をもたない。裏面の4箇所に潜り穴をもつ。現重量25.0g。I 1117～I 1120は硯。平面は長方形を呈する。I 1117は海の部分が半円形をなし、背面には左右に硯足がつく。I 1118は全体の形状がわかり、長さ11.2cm、海側の幅6.5cm、墨堂側の幅7cmをはかり、わずかに台形となる。背面に径8mmの盲孔が穿たれている。I 1119は幅9.8cmをはかる。背面は大きく剥落している。縦横にはしる筋が硯面上にあり、砥石としての転用が考えられる。

中世の遺跡

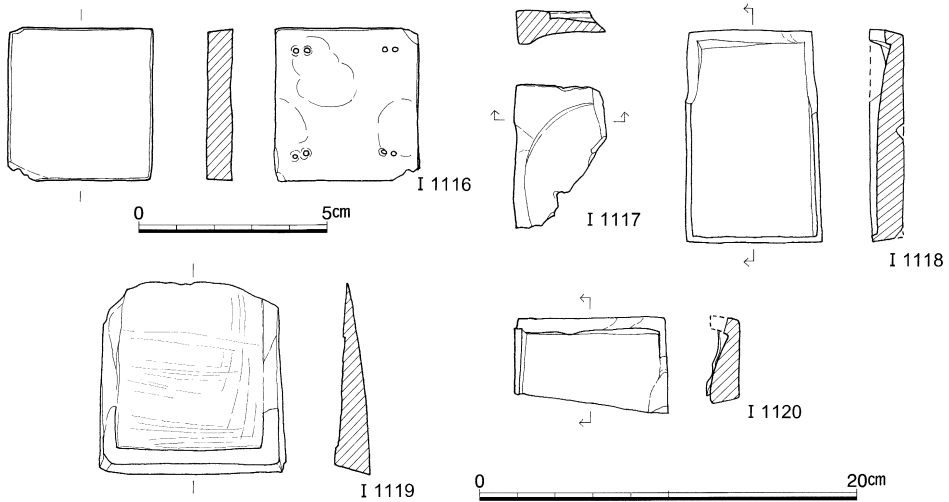


図65 茶褐色土，柱穴出土遺物（I 1116石帯，I 1117～I 1120硯）I 1116 縮尺1/2 ほか縮尺1/4

(9) 鉄製品 (図版25, 図66)

出土した中世の鉄製品のうち，品目を推測できる代表的なもの20点を図示する。以下の記述で出土遺構を記載しないものは，包含層出土遺物である。

**鎌** I 1121・I 1122は鎌である。I 1122はS X17から出土した。I 1121は，一方の短辺を長辺に対して直角に折り返すことによって着柄部を形成する。着柄部の下端をわずかに抉り込む。I 1122は目釘孔をもち，目釘も遺存する。また，柄の上端にはめ込む鉄環を備える。いずれも，柄の木質は全く遺存していない。

**釘** I 1123～I 1137は釘である。I 1123・I 1124はS X40，I 1126・I 1127は中世柱穴，I 1129～I 1134はS X17，I 1135～I 1137はS X35から出土した。完形品のうち，最も長いもの（I 1123）で全長8.4cmをはかる。軸部の太さや断面形はさまざまである。頭を扁平に打ち広げたもの（I 1123～I 1128・I 1130）や，わずかに潰したもの（I 1129・I 1131・I 1132・I 1137）など，頭に何らかの加工を施したものが多数を占めるが，とくに加工を施さずに棒状を呈するもの（I 1133～I 1136）もある。頭の形態は，出土地点ごとにある程度のまとまりをみせるようである。使用の結果として，屈曲してしまったもの（I 1126・I 1129～I 1131・I 1133・I 1135・I 1137）や，木質が遺存するもの（I 1135・I 1136）が認められる。

**楔** I 1138は楔である。S X40から出土した。全長15.0cm，最大幅3.3cmをはかる。

**庖丁** I 1139は，切先と茎尻を欠損しているため全形が不明であるが，庖丁と推

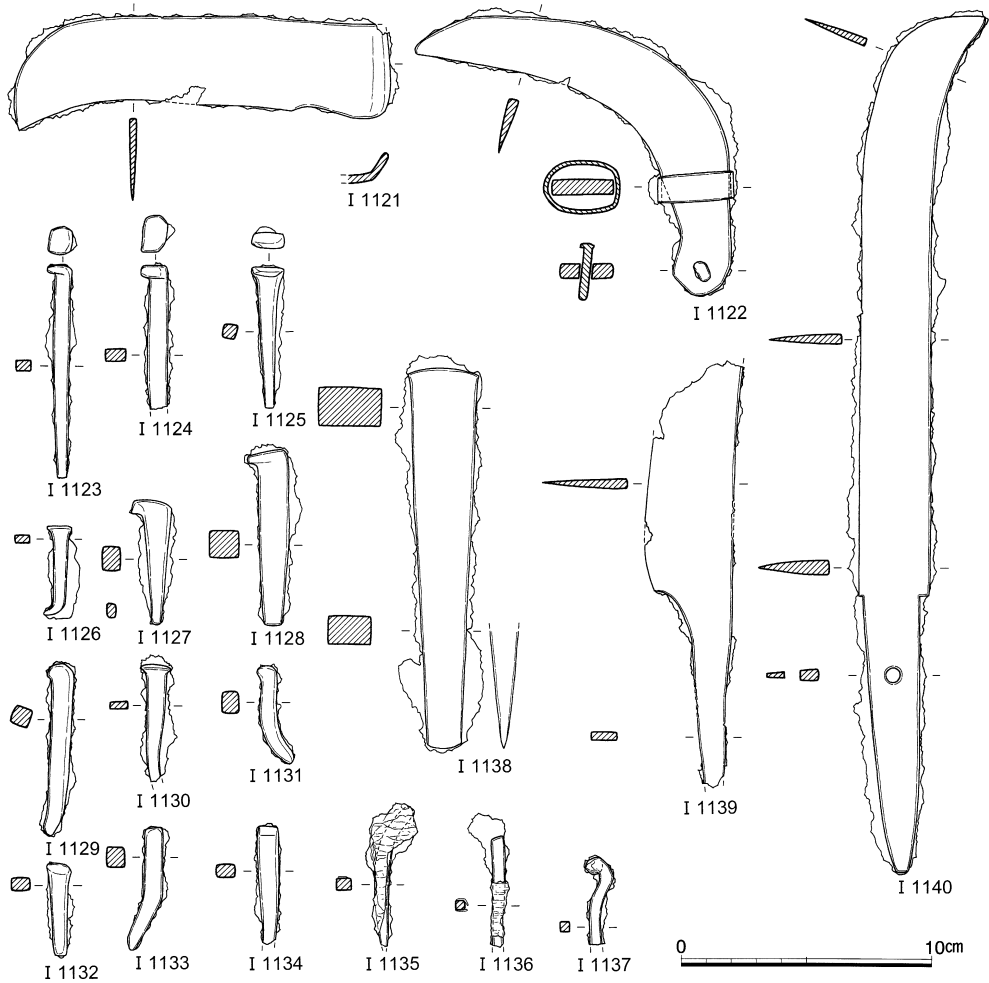


図66 鉄製品 (I 1121・I 1122鎌, I 1123～I 1137釘, I 1138楔, I 1139庖丁, I 1140 薙刀) 縮尺1/3

測する。S X30から出土した。刃部最大幅3.5cmをはかる。茎に目釘孔は認められず、柄の木質も遺存しない。

**薙 刀** I 1140は、切先が大きく屈曲する形状から、薙刀と推測する。全長33.8cm, 刃部長22.9cm, 刃部最大幅2.8cm, 茎長10.9cmをはかる。関をもつ。茎には直径0.6cmの目釘孔を備える。柄の木質は遺存しない。

(10) 銭 貨

古代～中世の銭貨が28点出土した。その内訳と出土地点を表4に示す。包含層出土が主体を占め、遺構出土のものはS X17から2点(6・15)出土したほかは、1点ずつの出土

中世の遺跡

表4 古代～中世の出土銭貨一覧

番	地区	層位・遺構	銭種	初鑄書	A(mm)	B(mm)	C(mm)	D(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	AN22d4	中世柱穴	開元通寶	621	23.15	23.15	19.85	20.20	1.30-1.50	2.8	
2	AN22d4	中世柱穴	富壽神寶	818	23.75	23.60	19.55	19.65	1.75-2.10	(2.7)	周縁欠
3	AN22c3	茶褐色土	景德元寶	1004	25.10	25.00	20.20	19.95	1.40-1.55	3.2	
4	AN22d4	茶褐色土	景德元寶	1004	25.40	25.25	20.60	20.45	1.55-1.70	3.5	
5	AN22e4	茶褐色土	景德元寶	1004	25.75	25.60	20.40	20.40	1.50-1.65	3.3	
6	AN23b3	SX17	天聖元寶	1023 真	25.20	25.20	20.70	20.50	1.25-1.40	3.0	
7	AN22d4	茶褐色土	天聖元寶	1023 真	24.80	25.00	21.55	21.75	1.60-1.85	4.3	
8	AN22d4	黄色砂上面	景祐元寶	1034 篆	25.60	25.70	21.05	20.85	1.30-1.50	3.2	
9	AN22b4	中世柱穴	皇宋通寶	1038 篆	25.15	25.05	19.95	19.60	1.20-1.35	(2.4)	周縁欠
10	AN22d3	S X 101周辺	皇宋通寶	1038 篆	24.90	25.20	20.30	19.60	1.35-1.50	2.9	
11	AN23d1	黄砂上面清掃	皇宋通寶	1038 篆	24.80	24.95	19.60	19.60	1.20-1.35	2.9	
12	AN23d2	SX60	至和元寶	1054 篆	24.80	25.00	19.35	19.60	1.20-1.55	2.6	
13	AN22c3	茶褐色土	嘉祐元寶	1056 真	23.85	23.85	18.70	18.75	1.50-1.70	3.4	
14	AN23c1	SX30	熙寧元寶	1068 真	23.35	23.50	19.40	19.60	1.10-1.20	2.5	
15	An23b3	SX17	熙寧元寶	1068 真	24.10	24.35	20.35	20.30	1.50-1.80	(3.1)	周縁欠
16	AN22b4	茶褐色土	熙寧元寶	1068 篆	24.50	24.10	19.35	19.30	1.60-1.80	3.3	
17	AN23c2	SX22東西畔	元豊通寶	1078 行	24.20	24.30	17.75	17.80	1.40-1.55	3.2	
18	AN22d4	茶褐色土	元豊通寶	1078 行	24.05	24.15	18.45	18.30	1.45-1.65	4.0	
19	AN22c4	茶褐色土	元祐通寶	1086 篆	24.25	24.30	18.95	19.55	1.30-1.40	3.1	
20	AN23b3	茶褐色土	聖宋元寶	1101 篆	24.40	24.55	18.65	18.90	1.40-1.60	3.3	
21	AN23c1	茶褐色土	政和通寶	1111 篆	25.20	25.10	21.50	21.30	1.60-1.75	(3.3)	周縁欠
22	AN23d1	茶褐色土	永樂通寶	1408	25.05	25.30	21.00	21.05	1.25-1.55	2.3	
23	AN22e4	茶褐色土	□□元寶		23.10	23.05	17.80	17.55	1.55-1.75	2.8	
24	AN22e5	溝上層	□永通□						1.00-1.15	(1.1)	1/2欠
25	AN23d3	中世柱穴	無文銭か						1.15-1.45	(1.5)	周縁欠
26	AN22d4	SX38付近	(判読不能)						1.75-1.90	3.1	
27	AN22c5	SX35	(判読不能)						1.30-1.60	2.9	
28	AN23c1	茶褐色土	(判読不能)							(2.7)	1/2欠

(1) 地区割りは、図4(9頁)を参照。

(2) 書:使用書体,「真」は真書体,「行」は行書体,「篆」は篆書体,無記入は,真書体ないしは楷書体をあらわす。

(3) 計測は,兵庫県埋蔵銭調査会の方式[永井編 1994, 第10図]にしたがった。

A・Bは外縁外径, C・Dは外縁内径である。

厚さは,4箇所計測し,最大値と最小値を表示した。

重さは,電子天秤を用いて計測した。

である。判明した銭種は, 15種類(無文銭?を含む)である。皇朝十二銭である富壽神寶(初鑄818年)1点をのぞくと, 判読できる銭貨は, いずれも中国からの渡来銭である。初鑄年で見ると7世紀前葉の開元通宝から15世紀前葉の永樂通宝にわたるが, 量的には11～12世紀前葉の北宋の銭貨(3～21)が主体を占める。

## 8 古代～中世の瓦埴類

古代～中世の瓦埴類をここでまとめて報告する。出土遺構・層位は、表5（110頁）に掲げる。なお、同文ないしは同範として掲げるK C M・K C Hは、総合人間学部構内A R 25区出土瓦における分類記号〔伊藤2000〕である。年代・系統などは、上原真人の成果〔上原1978・1995・1997〕、平安博物館編『平安京古瓦図録』（1977年）をおもに参考にした。

### (1) 軒丸瓦（図版26、図67・68）

**複弁8葉蓮華文（I 1141）** 奈良時代の複弁8葉蓮華文。弁間に、中房より延びる撥形の弁間文をもつ。2条の圏線内の珠文は、弁に対応して施されている。外縁が斜縁で鋸歯文をめぐらすと思われるが、欠損で失われている。複弁A系統の平城宮式6308ないしは6311に近い〔奈文研1991〕。

**単弁推定18葉蓮華文（I 1142）** 範の打ち込みが浅く、文様は不鮮明。中房は無文、単弁の推定18葉蓮華文。外区に圏線を1条もつ。K C M18。12世紀代の中央官衙系製品。

**単弁推定10葉蓮華文（I 1143・I 1144）** 中房は無文で、外区の上半部のみ珠文をもつ。瓦当裏面には、指頭圧痕が顕著に残る。K C M16。12世紀中葉の中央官衙系製品。

**単弁6葉蓮華文（I 1145～I 1149）** 楕円形瓦当面をもつ。弁間には、陰刻の三角文を配する。中房の中心に、蓮子を1個配する。範に木目痕をもつ。瓦当裏面には指頭圧痕を残す。丸瓦凸面は縄叩きのち篋撫で、凹面は撫で調整。栗栖野瓦窯に同文品〔京都市埋文研1986、図版11-2〕があり、12世紀代の中央官衙系製品。

**単弁9葉蓮華文（I 1150～I 1154）** 瓦当面に対して中房の占める割合が大きい。中房には、蓮子1+8をおき、その周囲には、雄蕊を表現したとみられる細い突線が放射状に配される。同様の突線は外区にもみられる。弁中央がふくらみをもち、子葉を突線で表現する。瓦当裏面には指頭圧痕が残り、丸瓦凸面は縄叩きのち篋撫でし、凹面は布目痕が残る。尊勝寺96A型式〔奈文研1961〕と同範であろう。

**単弁8葉蓮華文（I 1155）** 中房に1+4の蓮子をおく。瓦当面に対して中房の占める割合が大きい。瓦当裏面には、指頭圧痕が残る。胎土に雲母を多量に含み、表面灰黒色を呈する。胎土・色調・焼成ともに、単弁9葉蓮華文（I 1150～I 1154）に類似する。

**複弁8葉蓮華文（I 1156・I 1157）** 中房を1段突出させ、陽刻の「卍」文を配している。外区には圏線を施し、珠文が12個めぐる。I 1157は、瓦当面の傷みが激しいが、I 1156と同文とみられる。K C M20。13世紀前半に流行した型式である。

中世の遺跡

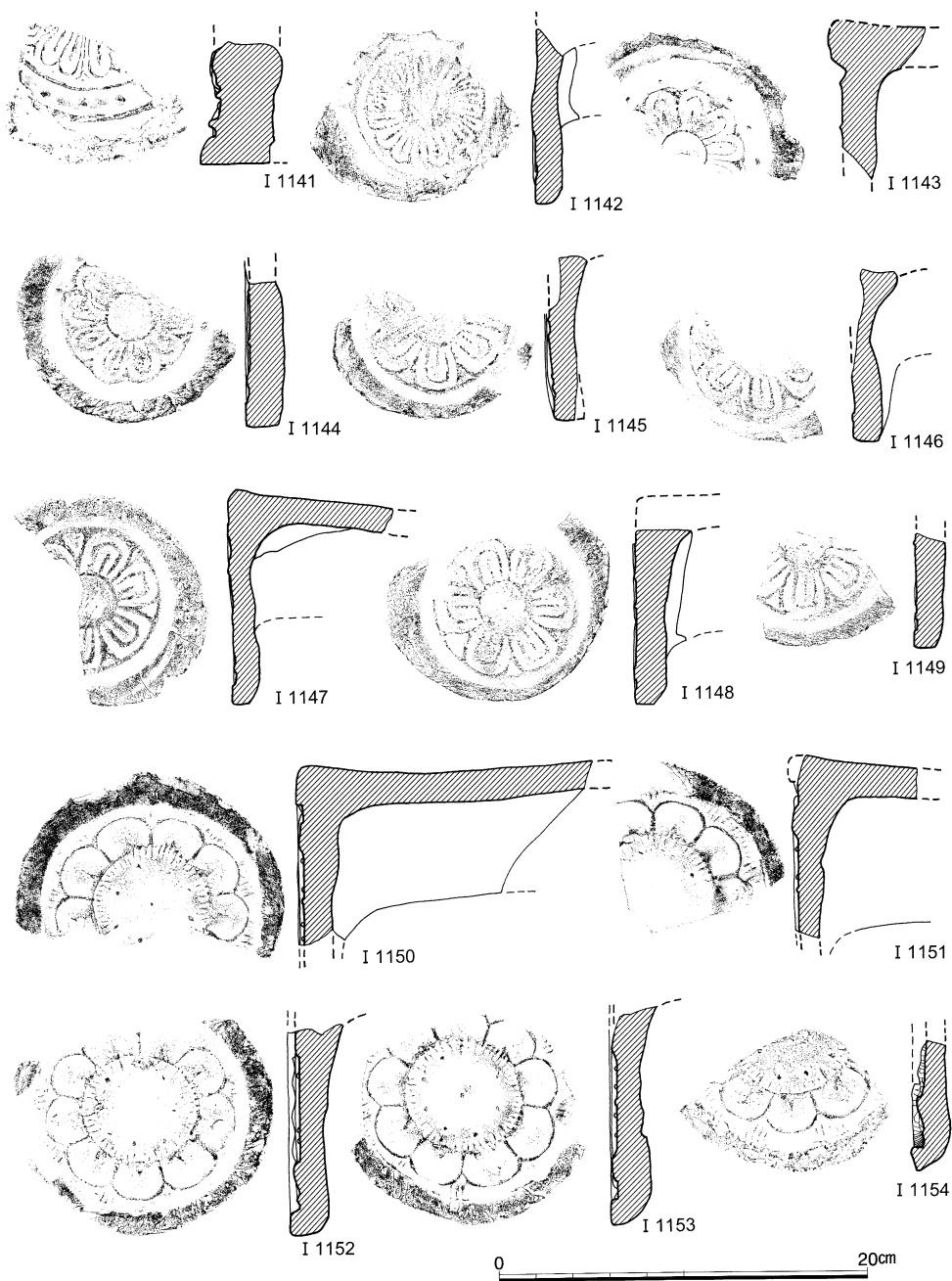


図77 軒丸瓦(1) (I 1141~I 1154)



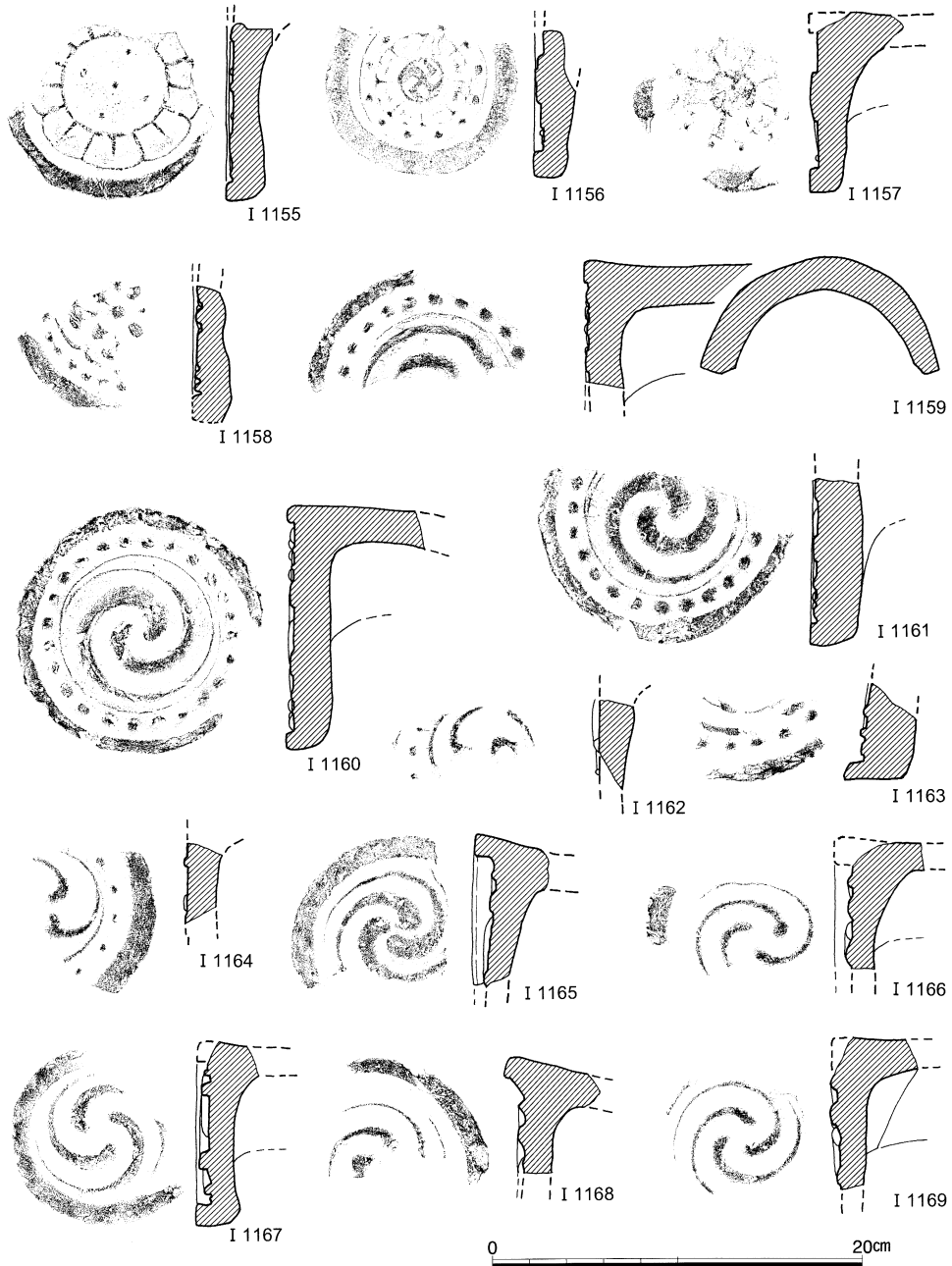


図68 軒丸瓦(2) (I 1155~I 1169)

宝相華文（I 1158） 内区に便化した宝相華文をおき，外区に珠文を密に施す。K C M19と同文。

右巻二巴文（I 1159～I 1161） 外区に珠文をもつ右巻の二巴文。珠文は，I 1160で24個を数える。丸瓦凸面は縄叩きのち篋撫で，凹面は布目痕が残る。

左巻三巴文（I 1162） 外区に珠文をもつ左巻三巴文。

右巻巴文（I 1163） 珠文をもつ外区との境に圈線を有する。右巻の巴文であるが，巴の数は不明。

右巻三巴文（I 1164） 外区に珠文をもつ，右巻三巴文。

三巴文（I 1165～I 1169） 珠文をもたない三巴文。I 1167は左巻，残りは右巻。

巴文軒丸瓦は，直径13.5cm前後で瓦当裏面に指の圧痕を残すI 1159～I 1161と，直径11cm前後で瓦当裏面を撫で調整するI 1162～I 1169に分けられる。前者は中央官衙系V期（12世紀後半），後者は大覚寺御所第Ⅱ期瓦群（13世紀後半～14世紀初頭）に対比することができよう。

## (2) 軒平瓦（図版27，図69～72）

推定唐草文（I 1170） 中心飾りにおかれた四つ葉の花文様と外区におかれた小粒の珠文が残る。凸面は剝落して欠損する。凹面には布目痕が残り，瓦当上縁付近は，篋で幅2cmにわたって面取りしている。内裏内郭回廊跡出土例と同文とみられ，11世紀前後のもであろう。

推定均整唐草文（I 1171・I 1173） I 1171は中心飾り付近しか残らないが，均整唐草文になるとみられる。「C」字背向の中心飾りを結ぶ上下の山形文のうち，上のみ残存しており，曲線化している。唐草の主葉と枝葉は分離し，外区には小粒の珠文が密に施される。瓦当周縁は2段になっている。瓦当裏面には横方向，凸面には縦方向の縄叩きがあり，丹波系の特徴を示す。胎土は精良。12世紀前葉。このI 1171に近いと思われるものにI 1173がある。外区には珠文は施されず，瓦当裏面の一部に斜め方向の縄叩きが残る。

均整唐草文（I 1172） 瓦当折り曲げ式。先端の尖った繊細な唐草文を配する。K C H13をはじめとして同範・同文例多い。12世紀中葉の中央官衙系製品。

雁形文（I 1174） 雁形の文様を連ねる。凹面には細かい布目の圧痕が残り，凸面は撫で調整する。法住寺殿跡出土例〔寺島・片岡編1984，第63図-26〕に同文品がある。

偏行唐草文（I 1175） 向かって右から左に流れる偏行唐草文。瓦当折り曲げ式で，文様部にも布目痕が残るが，瓦当周縁は布目を磨り消している。瓦当下端から凸面は撫で

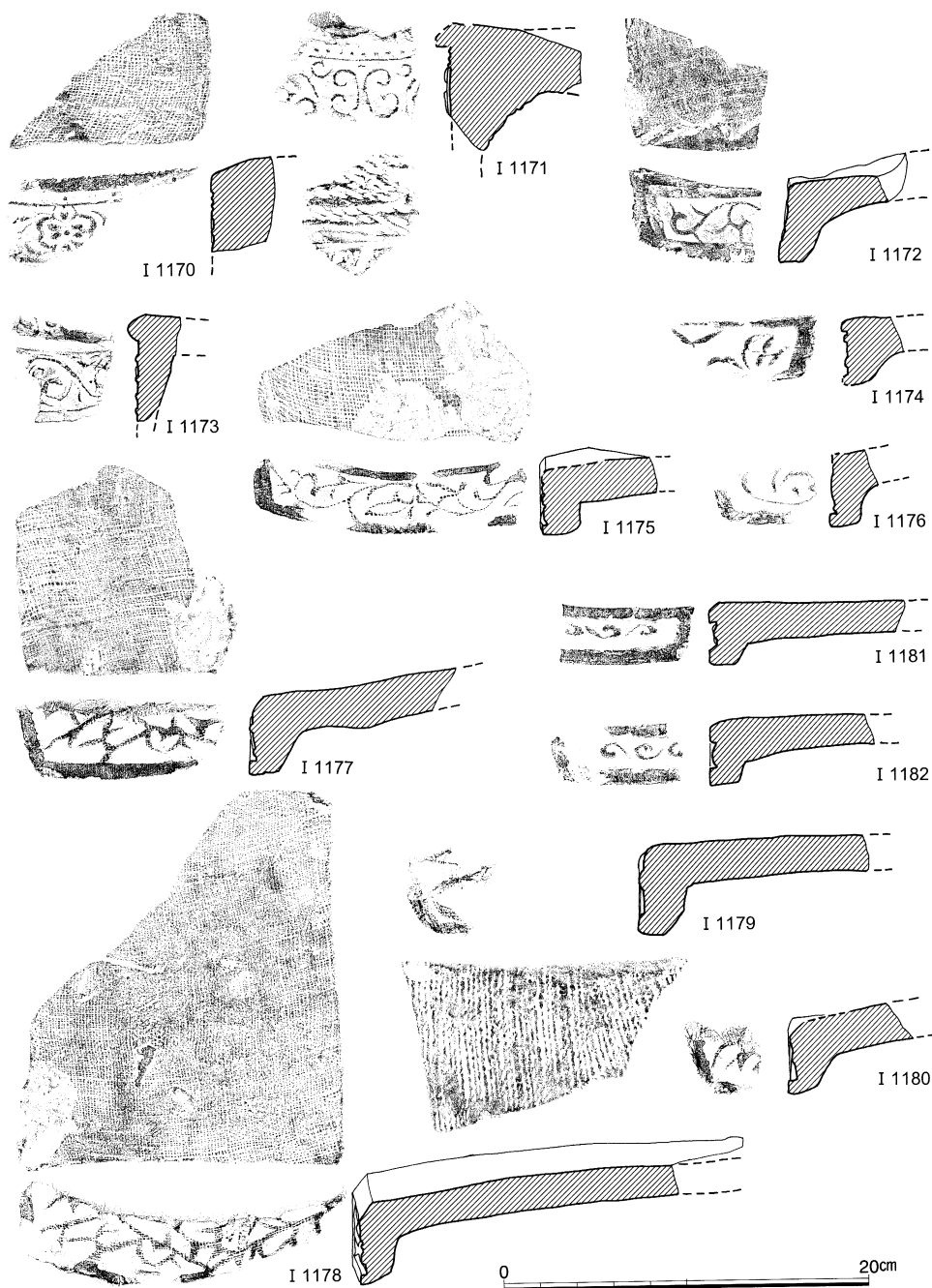


図69 軒平瓦(1) (I 1170~ I 1182)

中世の遺跡

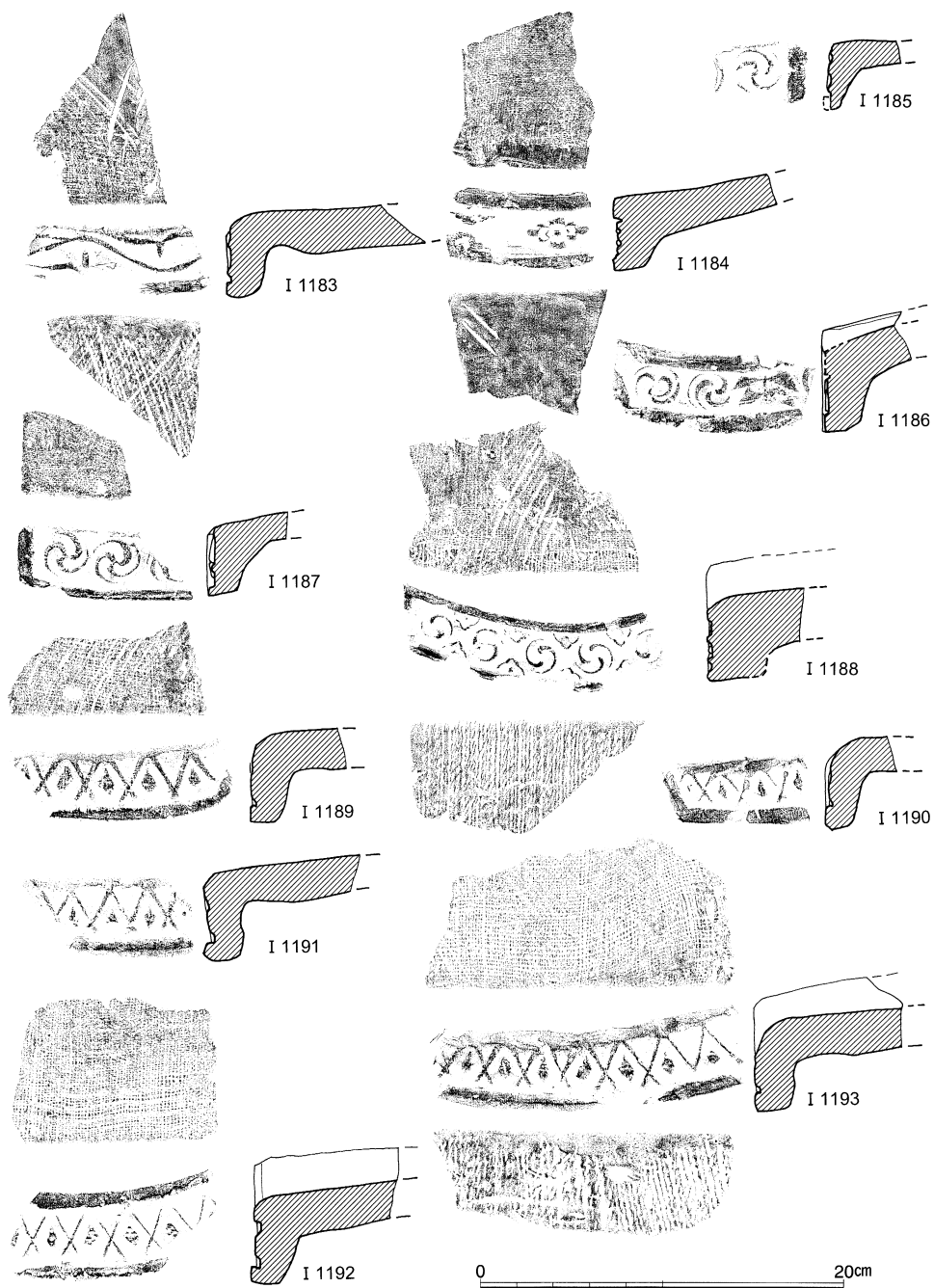


図70 軒平瓦(2) (I 1183~I 1193)

整形している。

唐草文（I 1176） 左端の小片で、唐草文を配するが、詳細は不明である。凹面は細かい布目痕が残る。瓦当下端面には斜め方向、凸面には縦方向の縄叩きが施される。

唐草文（I 1177・I 1178） 硬化した唐草文を配する。瓦当折り曲げ式で、瓦当面に布目痕が残る。幅17.8cm、長さ21.5cm。瓦当周辺は布目磨り消し、瓦当下端部から凸面にかけて撫で調整を施しており、黒灰色、堅緻な焼成も含めて、I 1175に類似する。

唐草文（I 1179・I 1180） 両例とも左端の小片。唐草文を配する。I 1180は、I 1178の文様に類似するが、詳細は不明。ともに、瓦当折り曲げ式とみられ、瓦当周縁の上部に凹面から連続する布目痕が残る。凸面は、I 1179は縄叩き、I 1180は縦方向の篋撫を施している。

均整唐草文（I 1181・I 1182） 類例から、中心飾りに退化した花文をおき、3反転する蕨手文を左右におく均整唐草文に復元できる。凹面は布目痕を撫で消し、凸面は縦位撫で整形。焼成は堅緻。KCH25に相当。14世紀。

唐草文（I 1183） 枝葉が水滴状になった唐草文。瓦当折り曲げ式。凸面は縄叩き。

宝相華文（I 1184） 左端部の破片で、宝相華文と半截花文を配する。凹面は布目痕跡が残り、凸面は撫で整形。凸面に2本平行沈線の篋記号をもつ。同範で同様の篋記号をもつものがもう1点、SX39より出土している。KCH14。

連巴文（I 1185・I 1187） I 1185は右端部、I 1187は左端部で、右卷三巴文を並列させる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、凸面は撫で整形である。12世紀中葉の中央官衙系製品。

連巴文（I 1186） トンボ形の中心飾りの左右に、右卷三巴文をおく。瓦当面が平瓦に対して鈍角をなす。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、凸面は撫で整形。KCH27。12世紀中葉の中央官衙系製品か。

連巴文（I 1188） 巴文を並列させ、その間に、上下から半截花文を配する。巴文は、中心部のみ、左卷三巴で、ほかは左卷二巴と思われる。凹面は糸切り痕と布目圧痕を残し、凸面は縦方向の縄叩きを施す。

幾何学文（I 1189～I 1201） 斜格子文のなかに菱形文を配する。すべて同範と判定する。瓦当折り曲げ式で、瓦当面に布目痕が残るものがある。瓦当外周の上側がしっかりと打ち出されず、凹面へなだらかにつながるものが多い。瓦当外周は布目痕の磨り消し、瓦当下端、瓦当裏面は、撫で調整。凸面は、縦方向の縄叩き（I 1189・I 1193～I 1196・



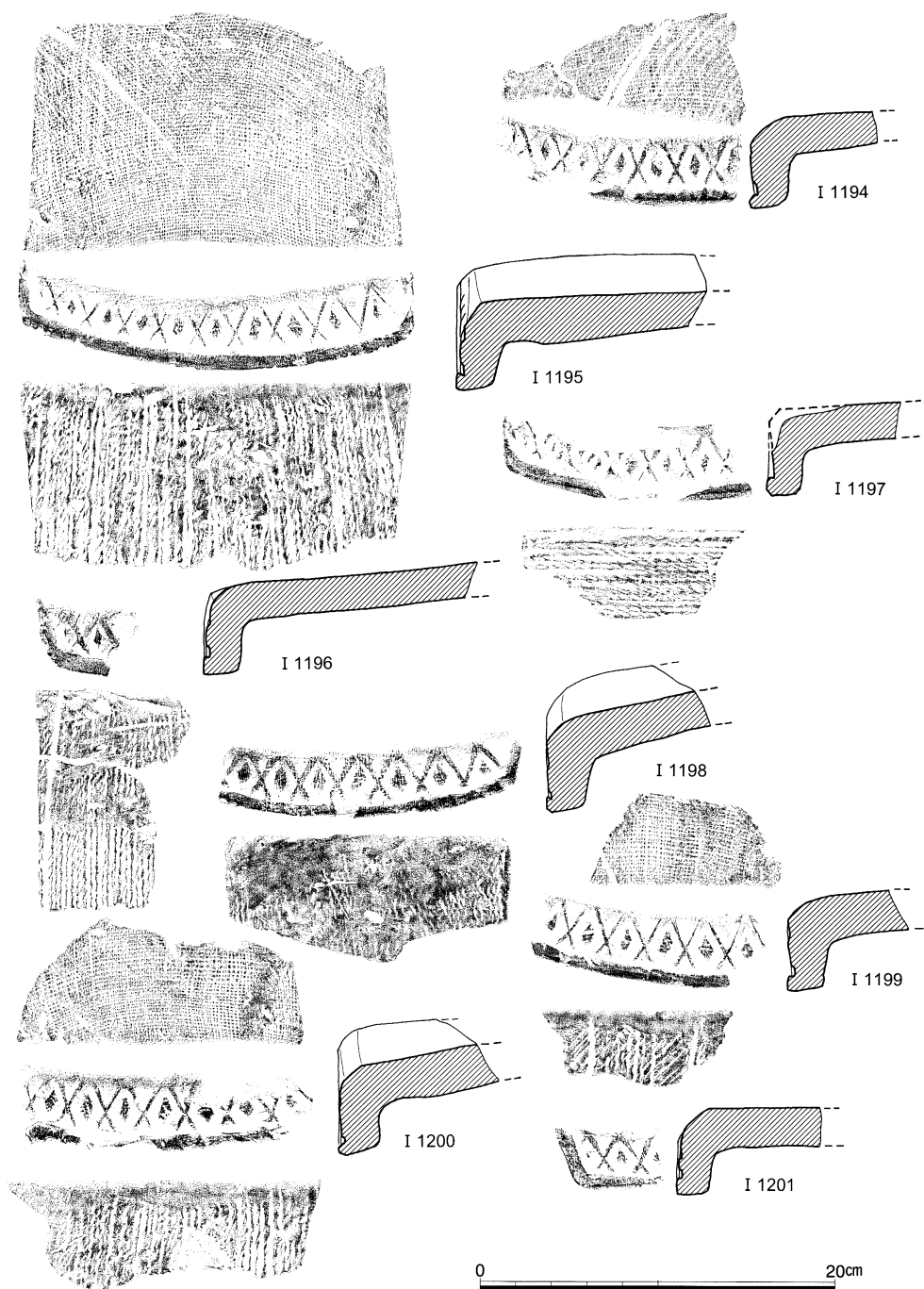


図71 軒平瓦(3) (I 1194~I 1201)

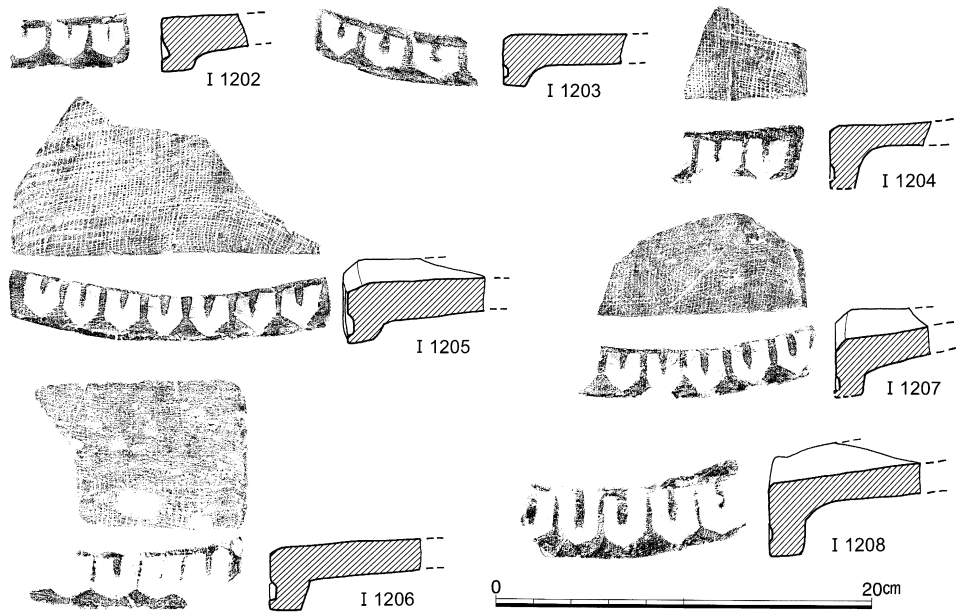


図72 軒平瓦(4) (I 1202～I 1208)

I 1199～I 1201)が多いが、横方向の縄叩き (I 1197), 縦方向の縄叩きのち軽い撫で (I 1191・I 1198), 糸切り (I 1190), 縦方向の撫で (I 1192) もみられる。凸面に「×」印の窠記号をもつものがある (I 1193～I 1195・I 1197・I 1198・I 1200)。尊勝寺285型式〔奈文研1961〕と同文で、法勝寺出土例〔京文観・京都市埋文研1987, 図版18-48〕と同範の可能性はある。

剣頭文 (I 1202～I 1208) 瓦当折り曲げ式で、I 1205・I 1206は瓦当面の一部に布目痕が残る。I 1204～I 1207は瓦当外周上部を横方向の窠削りで面取りしている。凸面には指頭圧痕を残す。I 1203～I 1205の頸部には、凹型台の端があたった痕跡が残る。I 1203の凹面は、布目痕を一部撫で消しており、I 1208の凹面は、糸切り痕跡を残す。I 1206の凹面には、「×」印の窠記号がある。I 1208がやや古くなる可能性を残すが、この一群は、大覚寺御所第Ⅱ期瓦群 (13世紀後半～14世紀初頭) に対比できよう。

(3) 丸瓦・平瓦 (図73・74)

瓦溜S X24出土瓦について報告する。丸瓦・平瓦ともに完形品はなく、軒瓦の丸瓦部、平瓦部を含んでいる可能性をことわっておく。

丸瓦 (I 1209～I 1212) 玉縁のつく丸瓦。黒灰色で凹面に布目の痕跡を残し、



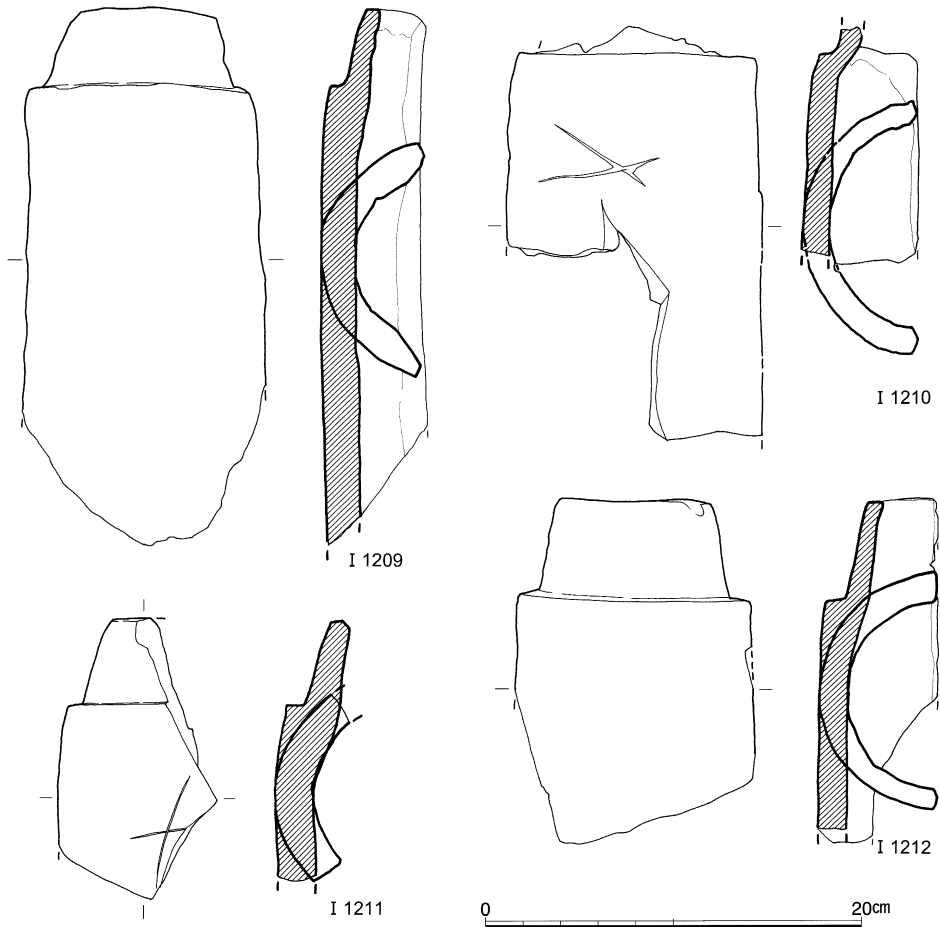


図73 S X24出土丸瓦 (I 1209～I 1212)

凸面を縄叩きし、側面を篋削りする点で共通するが、I 1209・I 1211は凹面に糸切り痕跡をあわせもち、I 1209は凸面の縄叩きをほとんど撫で消し、I 1211・I 1212は玉縁側の凸面縄叩きを幅4～5cm、横方向に撫で消している。I 1210・I 1211は凸面の玉縁側、中央やや左寄りの位置に、「×」印の篋記号をもつ。丸瓦凸面の「×」印篋記号は、合計8点出土。丸瓦に残された篋記号としては、これ以外に、玉縁部凸面に刻まれた斜め1本線が1点出土している。丸瓦は破片総数100点で、うち玉縁の左隅10点、右隅12点を数える。

平瓦 (I 1213～I 1218) I 1213は厚さ2.2cmをはかり、凹面に糸切りと布目の痕跡を残し凸面は縄叩きする。I 1214は厚さ1.8cm、凹面は縦位の撫で調整、凸面には糸切り痕跡を残し、縄叩きする。凸面には離れ砂が付着し、凸面周縁に成型台端部の圧痕を残す。

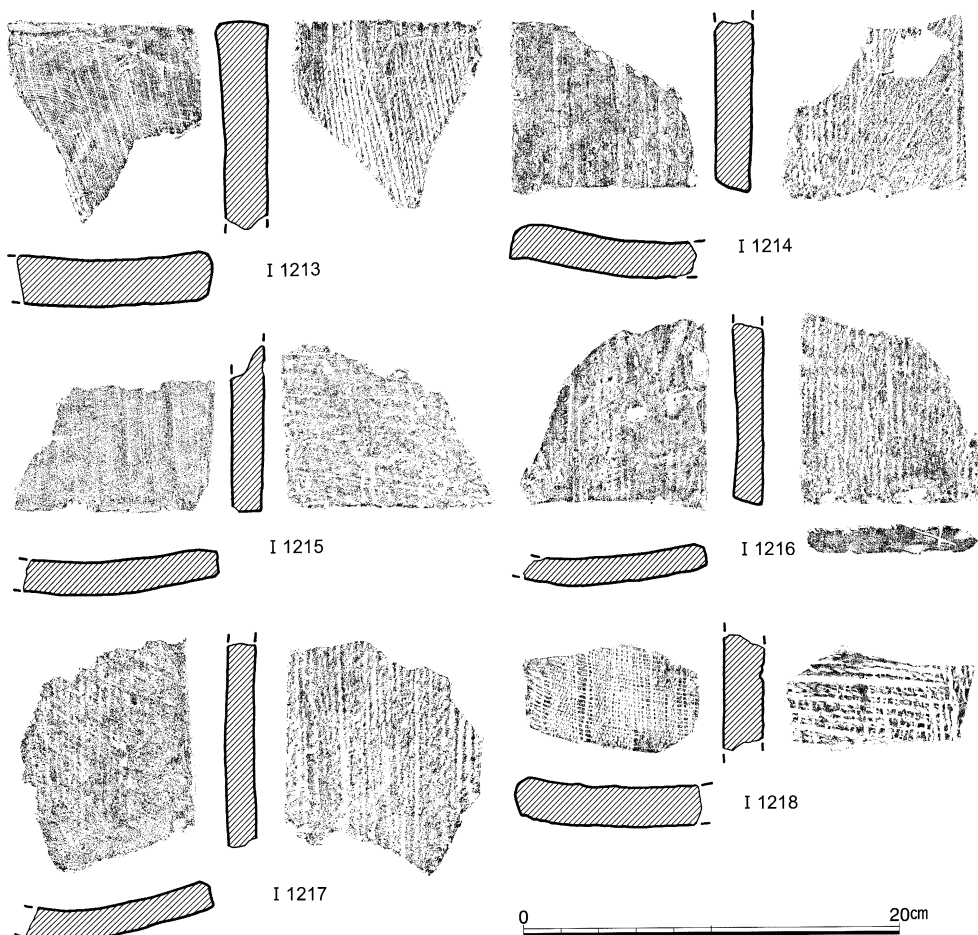


図74 S X24出土平瓦 (I 1213～I 1218)

I 1215は厚さ1.6cm, 凹凸面ともに離れ砂が付着し, 凹面は縦位の撫で調整, 凸面は横位の糸切り痕を残す。凸面周縁に成型台端部の圧痕が観察される。I 1216は厚さ1.5cm, 凹面は縦位の撫で, 凸面は縄叩き。凹凸面ともに, 離れ砂が付着する。端面に「×」印の窺記号をもつ。端面「×」印の窺記号は合計3点出土している。平瓦の窺記号は, そのほかに凸面に残された「×」印が1点出土している。

I 1217は厚さ1.5cm, 凹面に糸切り痕を残し, 凸面は縄叩きする。凹凸面ともに離れ砂が付着する。I 1218は厚さ2.2cm, 凹面は布目痕跡を残し, 凸面は縦方向の縄叩きののち, 横方向の縄叩きを施す。灰白色で胎土は精良である。平瓦は破片総数133点で, うち隅部をもつものは26点を数える。

(4) 出土瓦の特色

以上、本調査区出土の瓦について説明を加えてきた。年代的にみると、奈良時代の瓦(I 1141)、11世紀の瓦(I 1170)が各1点あるものの、量的に多いのは12世紀中葉～後葉の中央官衙系Ⅳ期・Ⅴ期の軒瓦と13世紀後葉～14世紀初頭とされている大覚寺御所Ⅱ期に比定されるものである。この2時期について、瓦葺きの建物の存在を考えることができるかもしれない。

これらの瓦類のうち、遺構からまとまって出土しているのはS X24出土瓦のみである。最後にS X24出土の瓦類について、まとめておく。S X24出土の軒瓦を列挙すると、以下のようなになる(出土点数は、未掲載を含む)。

軒 丸	単弁9葉蓮華文 (I 1150～I 1154)	14点
	単弁8葉蓮華文 (I 1155)	1点
	珠文有・二巴文 (I 1159～I 1161)	5点
軒 平	唐草文 a (I 1177・I 1178)	2点
	唐草文 b (I 1179)	1点
	唐草文 c (I 1180)	1点
	唐草文 d (I 1183)	1点
	連巴文 (I 1187)	1点
	幾何学文 (I 1189・I 1191・I 1193～I 1201)	11点

軒丸が3種、軒平が6種確認されるから、型式数としては軒平が2倍存在することになるが、出土点数をみると、軒平の唐草文b～dおよび連巴文、軒丸の単弁8葉蓮華文は1点を数えるのみである。主体を占めるのは14点を数える単弁9葉蓮華文軒丸と11点を数える幾何学文軒平であり、5点を数える珠文有・二巴文軒丸と2点を数える唐草文aがそれに続くということになる。

これらの軒瓦はいずれも中央官衙系の製品である。軒平瓦は、半折り曲げ技法でⅣ期に遡る可能性がある連巴文(I 1187)を除いて、すべて完成した段階の折り曲げ技法によっており、中央官衙系Ⅴ期(12世紀後葉)に比定できる。軒丸瓦も、完成した折り曲げ式にともなうⅤ期に比定して大過ないと考えられる。出土量から判断して、単弁9葉蓮華文軒丸と幾何学文軒平、二巴文軒丸と唐草文a軒平がセットになる可能性が高い。先述したように、前者の軒丸・軒平瓦は尊勝寺や法勝寺からの出土例はあるが、出土状況からセット関係を指摘できる点で、意義があるものと理解する。

S X24出土の丸瓦・平瓦については、すでに記述した。丸瓦の玉縁点数(左隅10点、右隅12点)、平瓦の隅部片26点と比較すれば、軒瓦の比率の高さは明瞭である。年代的に一括

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

表5 古代～中世瓦埴一覧

番号	遺構・層位	種別	文様	番号	遺構・層位	種別	文様
I 1141	SD14	軒丸瓦	(推)複弁8葉蓮華文	I 1183	SX24	軒平瓦	唐草文
I 1142	茶褐色土	軒丸瓦	単弁18葉蓮華文	I 1184	SX26	軒平瓦	宝相華文+半截花文
I 1143	SD12周辺	軒丸瓦	(推)単弁10葉蓮華文	I 1185	中世柱穴	軒平瓦	連巴文(右卷三巴)
I 1144	SE16	軒丸瓦	(推)単弁10葉蓮華文	I 1186	SD11上層	軒平瓦	連巴文(右卷三巴)
I 1145	黄色砂	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文	I 1187	SX24	軒平瓦	連巴文(右卷三巴)
I 1146	茶褐色土	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文	I 1188	SX42	軒平瓦	連巴文+半截花文
I 1147	SD12	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文	I 1189	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1148	SX39	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文	I 1190	茶褐色土	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1149	茶褐色土	軒丸瓦	単弁6葉蓮華文	I 1191	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1150	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文	I 1192	SD11	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1151	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文	I 1193	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1152	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文	I 1194	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1153	SX24	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文	I 1195	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1154	SD12	軒丸瓦	単弁9葉蓮華文	I 1196	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1155	SX24	軒丸瓦	単弁8葉蓮華文	I 1197	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1156	黄褐色土	軒丸瓦	複弁8葉蓮華文	I 1198	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1157	茶褐色土	軒丸瓦	複弁8葉蓮華文	I 1199	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1158	茶褐色土	軒丸瓦	宝相華文	I 1200	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1159	SX24	軒丸瓦	珠文有・右卷二巴文	I 1201	SX24	軒平瓦	斜格子文+菱形文
I 1160	SX24	軒丸瓦	珠文有・右卷二巴文	I 1202	SX29	軒平瓦	剣頭文
I 1161	SX24	軒丸瓦	珠文有・右卷二巴文	I 1203	茶褐色土	軒平瓦	剣頭文
I 1162	表土	軒丸瓦	珠文有・右卷二巴文	I 1204	SF1断割	軒平瓦	剣頭文
I 1163	茶褐色土	軒丸瓦	珠文有・右卷二巴文	I 1205	SF1断割	軒平瓦	剣頭文
I 1164	SD4	軒丸瓦	珠文有・右卷二巴文	I 1206	SF1断割	軒平瓦	剣頭文
I 1165	SD11	軒丸瓦	珠文無・右卷三巴文	I 1207	茶褐落ち込み	軒平瓦	剣頭文
I 1166	茶褐色土	軒丸瓦	珠文無・右卷三巴文	I 1208	SD11上層	軒平瓦	剣頭文
I 1167	SD11	軒丸瓦	珠文無・左卷三巴文	I 1209	SX24	丸瓦	
I 1168	SD11	軒丸瓦	珠文無・右卷三巴文	I 1210	SX24	丸瓦	籠記号あり
I 1169	溝上層	軒丸瓦	珠文無・右卷三巴文	I 1211	SX24	丸瓦	籠記号あり
I 1170	SE16	軒平瓦	宝相華文	I 1212	SX24	丸瓦	
I 1171	SD7	軒平瓦	均整唐草文	I 1213	SX24	平瓦	
I 1172	SE24	軒平瓦	均整唐草文	I 1214	SX24	平瓦	
I 1173	茶褐色土	軒平瓦	均整唐草文	I 1215	SX24	平瓦	
I 1174	茶褐色土	軒平瓦	雁形文	I 1216	SX24	平瓦	籠記号あり
I 1175	茶褐色土	軒平瓦	偏行唐草文	I 1217	SX24	平瓦	
I 1176	茶褐色土	軒平瓦	唐草文	I 1218	SX24	平瓦	
I 1177	SX24	軒平瓦	硬化した唐草文	I 1219	SD11	有孔磚	
I 1178	SX24	軒平瓦	硬化した唐草文	I 1220	SD11	有孔磚	
I 1179	SX24	軒平瓦	唐草文	I 1221	SX21	有孔磚	
I 1180	SX24	軒平瓦	唐草文	I 1222	SX60	有孔磚	
I 1181	茶褐色土	軒平瓦	均整唐草文	I 1223	SD11	有孔磚	籠記号あり
I 1182	SX36	軒平瓦	均整唐草文	I 1224	SD11	有孔磚	

中世の遺跡

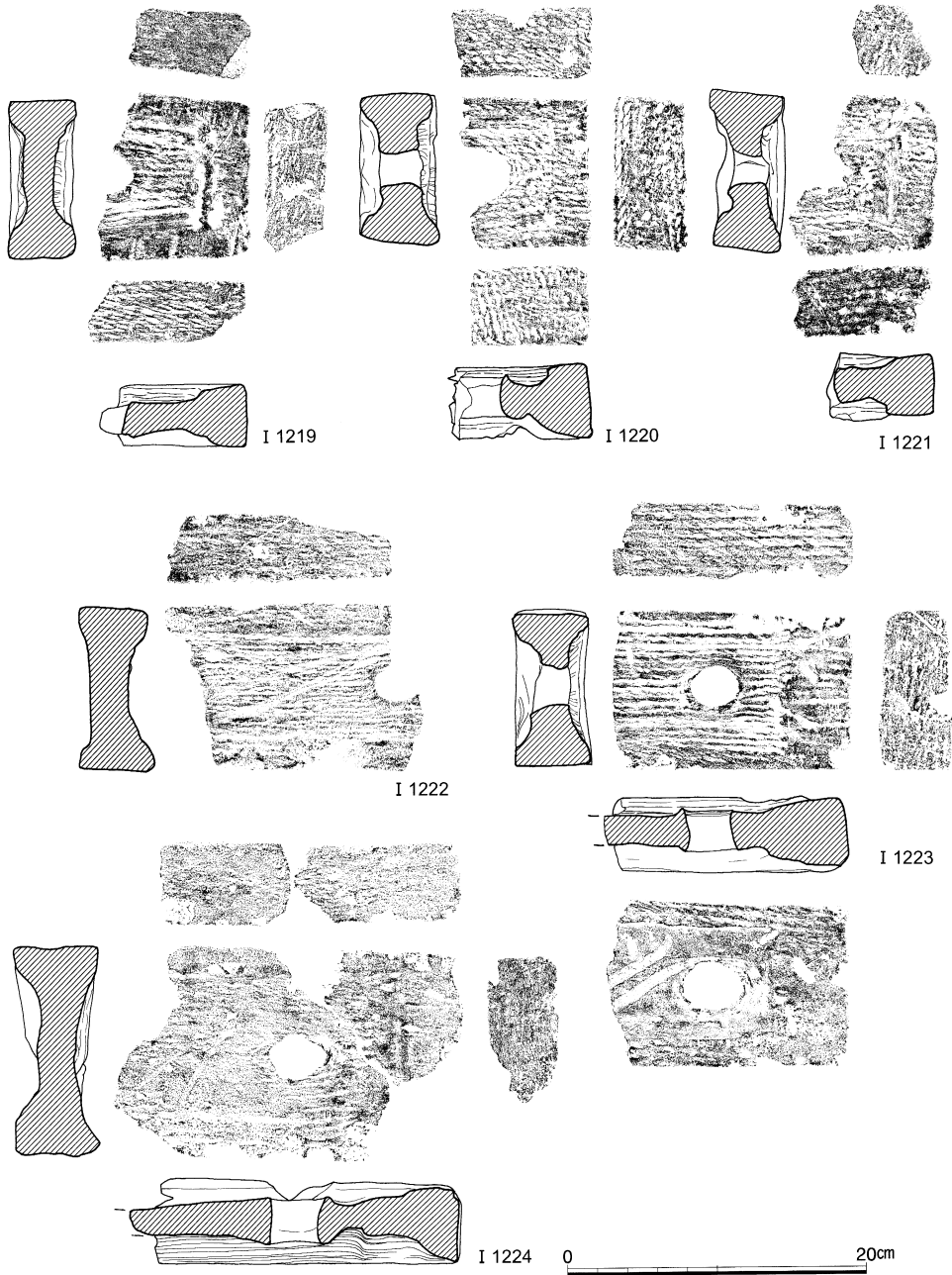


図75 埴 (I 1219~ I 1224) 縮尺1/5



性の高い廃棄状況から、これが屋根の葺き方を反映していると仮定すれば、総瓦葺きの建物の可能性はほとんどないということになる。

(5) 塼 (図版27, 図75)

直方体を呈する塼。砂粒の割合の多い粗放な胎土で、暗灰色を呈する。I 1224は焼成がやや軟質だが、これを含めて内部にいわゆる黒化層を形成しているものはみられない。表面に、離れ砂とみられる雲母片が付着しており、型作りと考える。短辺が10cm前後となるI 1219～I 1223と、13.7cmをはかるI 1224がある。中央部が長方形にくぼみ、断面形が「I」字形になる。凹部に円孔をもつ。I 1222は孔が2つ残存する。孔の位置、ほかの遺跡の類例から判断して、孔は2つあけられたものと推定できる。孔が対称にあけられたと仮定すれば、短辺10cm前後のもので、長辺は30数cmに復元できる。孔は、長辺方向に径の大きい楕円形で、I 1223・I 1224で長径4cm、短径3cm前後である。6面いずれにも、縄叩きを施すものが多い。I 1223は、下面の凹部には縄叩きがなされず、2条の平行凹線による篋記号をもつ。I 1222の縄叩きの上に施された浅い1条の沈線も篋記号かもしれない。I 1224は、側面の縄叩きはきわめて浅く、端面にはみられない。

共伴遺物から判断して、これらは14世紀後半から15世紀ごろのものであろう。同様の有孔塼は、医学部構内A P 19区〔清水・吉野1981, p.17〕, 同構内A O 18区〔梶原2003, 図77-53・54〕, 本部構内A T 21区 (2000年度調査, 整理中) などから出土している。

## 9 近世・近代の遺跡

(1) 近世の遺構 (図版7, 図76)

道路、側溝、野壺、耕作用の小穴などがある。調査区北辺でみつかった道路S F 1は、幅3.7～4.3mで、東西方向に延びる。上面を削平されていたが、路面は礫混じり土からなる。両側に溝S D 1・S D 2をとまなう。路面上、あるいはS D 2を切るかたちで検出されたS X 1～S X 6・S D 3は、小礫や近世陶磁器で充填されており、路面に形成された轍やくぼみを補修した痕跡であろう。S X 6からは、19世紀前半の土器・陶磁器がまとまって出土した。

出土遺物や遺構の切り合いからみても、少なくとも18世紀代にはS F 1は道路として機能しており、この段階ではS D 1・2は側溝として機能した。S D 1・2は18世紀代には埋まってしまうが、19世紀前半の路面の補修や、明治時代になる野壺の位置などから、京都医科大学の用地となる明治29年まで、この道路は存続した。現在、吉田二本松町と吉

近世・近代の遺跡

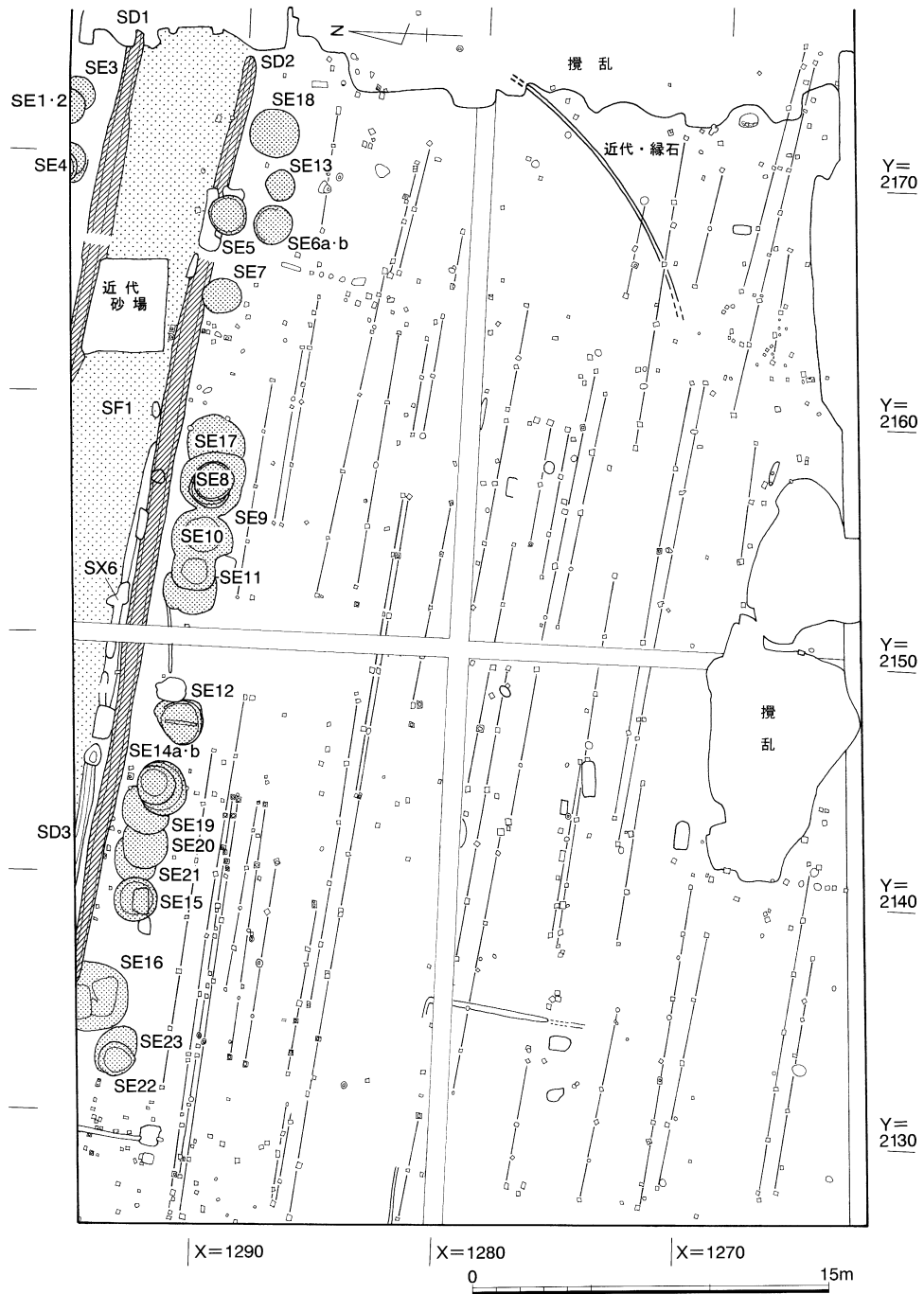


図76 近世・近代の遺構 縮尺1/300



田近衛町の字境がこの付近を東西にはしっており、この道路が字境界としての役割を果たしていた。吉田南構内は、この道路を挟んで、北側の吉田二本松町を第三高等学校、南側の吉田近衛町を京都医科大学の敷地として出発したのであった。

S F 1の両側には、野壺が並ぶ。野壺は、漆喰製のもの（S E 1～5・6 a・7～10）と、漆喰が認められず木桶を設置したと思われるもの（S E 11～23）に分けられる。切り合い関係と埋土出土遺物からみて、木桶が古く18世紀の中頃に境に、漆喰製に変化したようである。漆喰製野壺には、出土遺物からみて明治時代に下るものもある（S E 5）。検出状況のよい道路南側の野壺群の分布をみると、漆喰製の野壺は、Y=2150以東に分布する。また野壺は密集の仕方から、3～4群に群別できる。野壺の分布しない空閑地は、耕作地へ向かう畦道がはしり、あるいはまた土地境界となっていたのであろう。

調査区全面で数多く見出された小穴は、20～25cm前後の方形の掘り方をもつものが多く、その中に一回り小さい円形の柱あたりが検出されたものもある。2.2～2.4mの等間隔で、東西方向に並びが復元できるものが多い。耕作にともなう柵列であろう。

## (2) 近世の遺物（図版28、図77～79）

各種遺構および近世耕作土である第2層から、土器・陶磁器をはじめ、人形・箱庭道具・泥面子・玩具などの土製品、硯・碁石といった石製品、銭貨などが整理箱28箱出土した。遺構出土遺物を図示して、簡単な解説を加えておく。

S F 1 出土遺物（I 1225～I 1228） I 1225は回転台成形の土師器小皿。I 1226～I 1228は染付椀。I 1226は体部下半を氷裂文、上半を矢羽根文で飾り、見込みに手描き五弁花を配する。

S D 1 出土遺物（I 1229～I 1231） I 1229は京・信楽系の陶器灯明受皿。I 1230は染付椀。見込みを蛇の目釉剥ぎとし体部に草花文を施す。I 1231は青磁椀。

S E 11 出土遺物（I 1232～I 1236） I 1232は、てづくねの土師器小皿。I 1233は回転台成形の土師器小椀。I 1234は陶器天目椀。I 1235は肥前京焼風陶器の椀。見込みに山水楼阁を描く。底裏に「(木) 下弥」ないしは「(山) 下弥」の刻印銘をもつ〔角谷1992〕。I 1236は幅3.5cm、長さ7.6cmをはかる小型の長方硯。使用により、墨堂が磨滅している。裏面に「八十」という刻書がある。

S F 1・S D 1・S E 11出土遺物は、18世紀前半代を中心とするものであろう。

S E 8 出土遺物（I 1237～I 1245） I 1237～I 1243は陶器。I 1237～I 1240は京・信楽系で、I 1237・I 1238は灯明皿、I 1239・I 1240は灯明受皿。I 1241も京・信楽系の平

近世・近代の遺跡

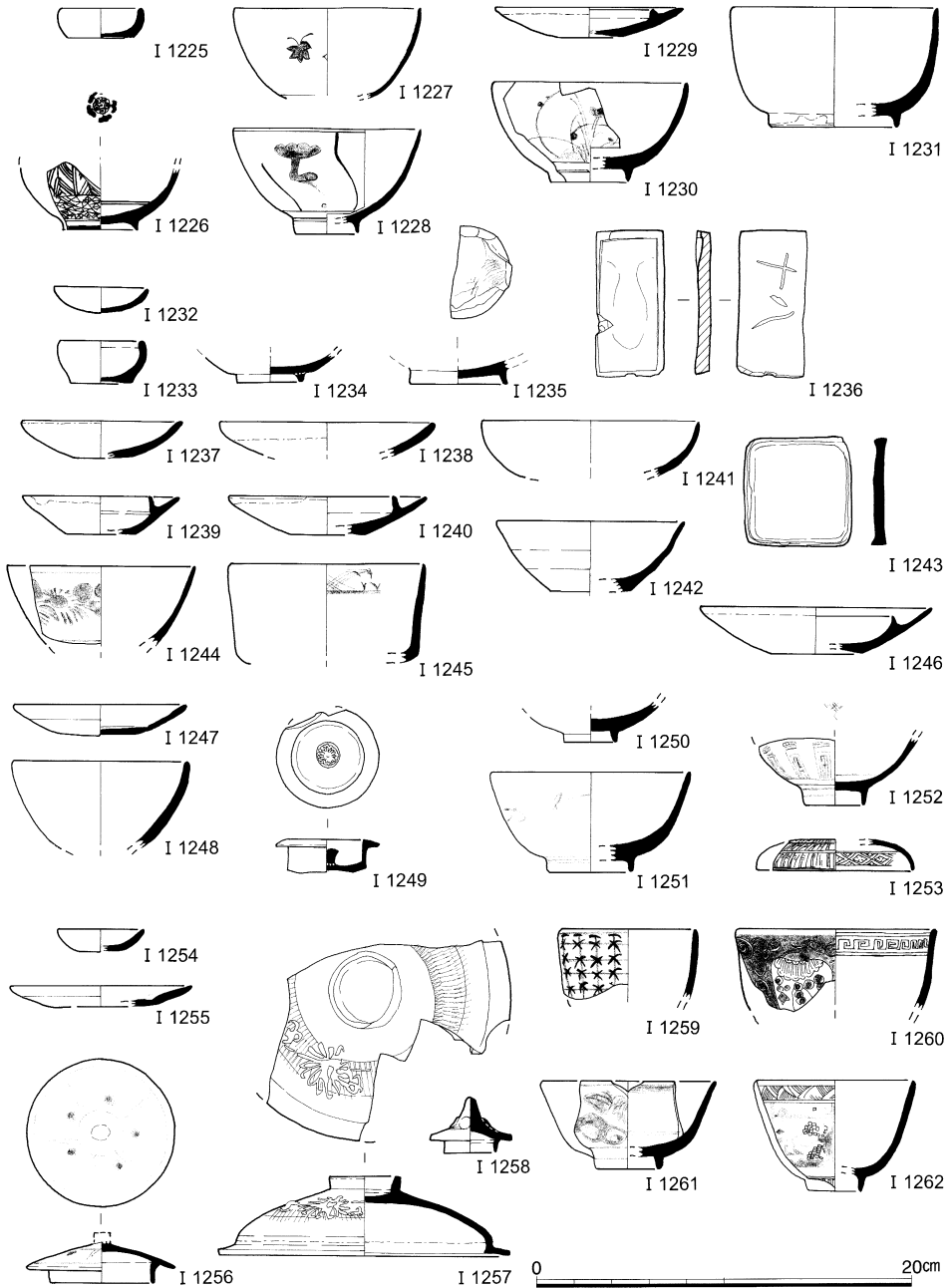


図77 S F 1 出土遺物 (I 1225土師器, I 1226~I 1228染付), S D 1 出土遺物 (I 1229陶器, I 1230染付, I 1231青磁), S E 11出土遺物 (I 1232・I 1233土師器, I 1234・I 1235陶器, I 1236硯), S E 8 出土遺物 (I 1237~I 1243陶器, I 1244・I 1245染付), S E 3 出土遺物 (I 1246陶器), S E 10出土遺物 (I 1247土師器, I 1248~I 1250陶器, I 1251~I 1253染付), S E 6 出土遺物 (I 1254・I 1255土師器, I 1256~I 1258陶器, I 1259~I 1262染付)

碗。I 1242は唐津系の碗。内面は鉄釉に藁灰釉の流し掛け、外面は藁灰釉を施す。I 1243は軟質施釉陶器の方形小皿。底面を除いて、あめ色の釉を施す。I 1244は染付碗。I 1245は青磁染付碗。

SE 3 出土遺物 (I 1246) I 1246は陶器灯明受皿。京・信楽系。

SE 8・SE 3は、18世紀後半代のものであろう。

SE 10 出土遺物 (I 1247～I 1253) I 1247は土師器皿。見込みに圏線がめぐる。I 1248は陶器碗で、透明感のある黄緑色の釉が全面にかかる。I 1249は陶器蓋。外面に鉄釉を施す。I 1250は京・信楽系の陶器碗。I 1251～I 1253は染付。I 1252は見込みに、簡略化した「壽」字文をもつ。19世紀初頭前後。

SE 6 出土遺物 (I 1254～I 1262) I 1254は土師器小皿。I 1255は見込みに圏線のめぐる土師器皿。I 1256～I 1258は陶器の蓋。I 1256は土瓶、I 1257は行平鍋、I 1258は神祭具水玉の蓋。I 1259～I 1262は染付碗。I 1260には焼継がみられる。これらは、19紀前半代のものであろう。

S X 6 出土遺物 (I 1263～I 1327) I 1263～I 1273は土師器皿。I 1263・I 1264は内外面に離れ砂が付着し、I 1268は内面に布目痕、外面に指頭圧痕をもつ。ともに型作りであらう。これら以外は、手づくね成形で、I 1271～I 1273は見込みに圏線がめぐる。I 1274は口縁部を内側に折り曲げた偏平な焼塩壺。I 1275は土師器焙烙。

I 1276～I 1297は陶器。陶器類のうち、I 1278・I 1297を除いて、残りは京・信楽系であらう。I 1276・I 1277は端反碗。I 1278は腰折れ形の碗。体部上半から内面にかけて、天目釉を施す。高台脇と見込みに、目跡を残す。I 1279は蓋物の身。見込みに目跡を残す。I 1280・I 1281は蓋物の蓋。I 1282は水注の蓋。I 1283～I 1296は灯火具。I 1283・I 1284は秉燭。I 1285～I 1289は灯明皿。口縁端部を中心に煤が付着する。I 1290～I 1294は灯明受皿。灯明皿・受皿ともに法量的にみて、口径10～12cmの大と6.5～7cm前後をはかる小の2種類あり、それぞれを組み合わせ使用したものと思われる。I 1297は堺・明石系のすり鉢。

I 1298～I 1312は磁器。I 1298は白磁端反の碗。I 1299は外面にのみ、青磁釉を施した碗。I 1300・I 1301は染付小杯。I 1302～I 1307は染付碗。I 1303～I 1306は、口縁端反となる。I 1307は広東碗である。I 1308は赤上絵付けをした仏飯。I 1309は白磁紅皿。型作りで、内面のみ施釉する。I 1310～I 1312は染付蓋。

I 1313は器高1.7cm、胴径3cm前後をはかる土師器小壺。灰白色。茶の湯の懷石膳に添

近世・近代の遺跡

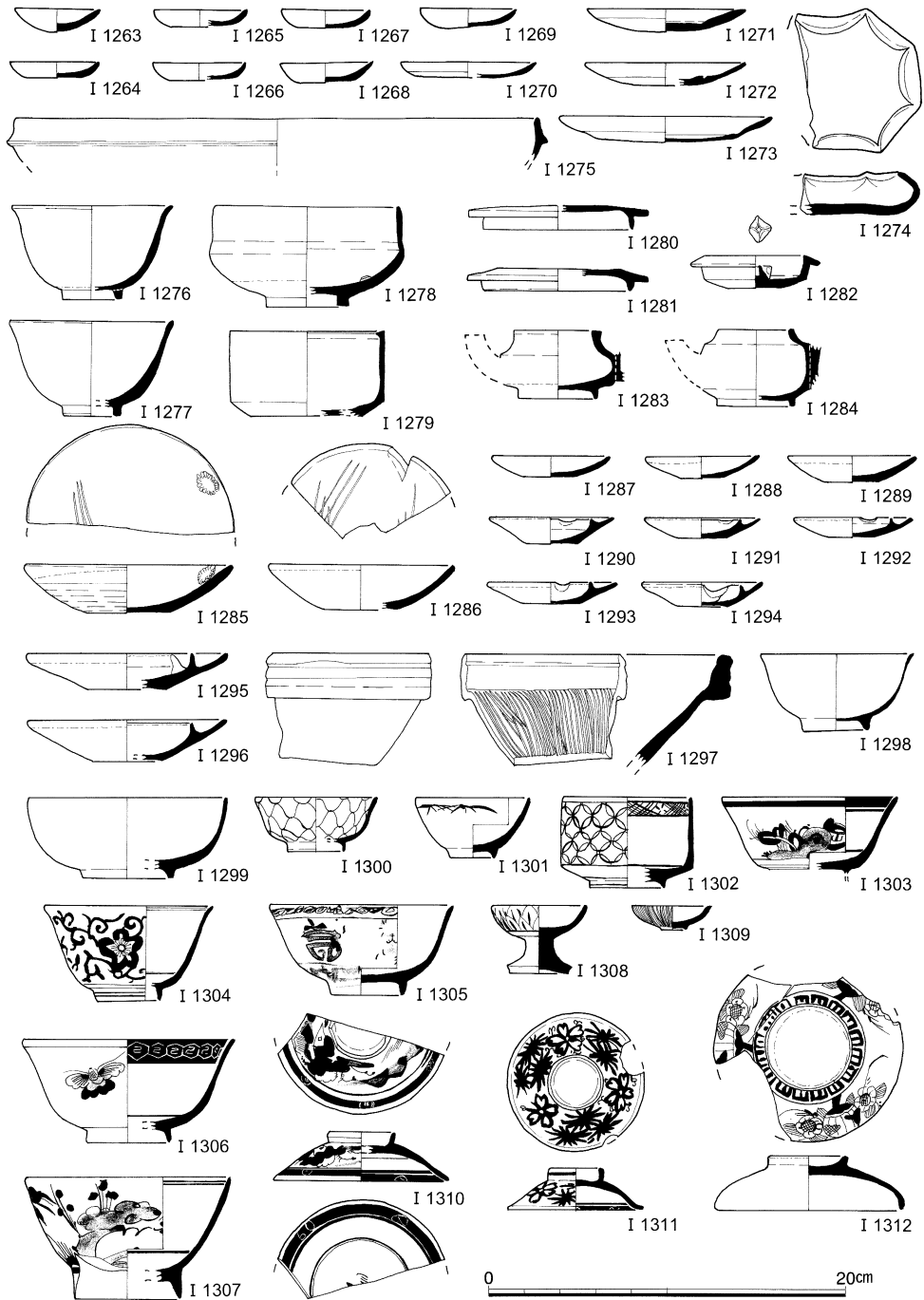


図78 S X 6 出土遺物(1) (I 1263~ I 1275土師器, I 1276~ I 1297陶器, I 1298白磁, I 1299青磁, I 1300~1312染付)

京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査

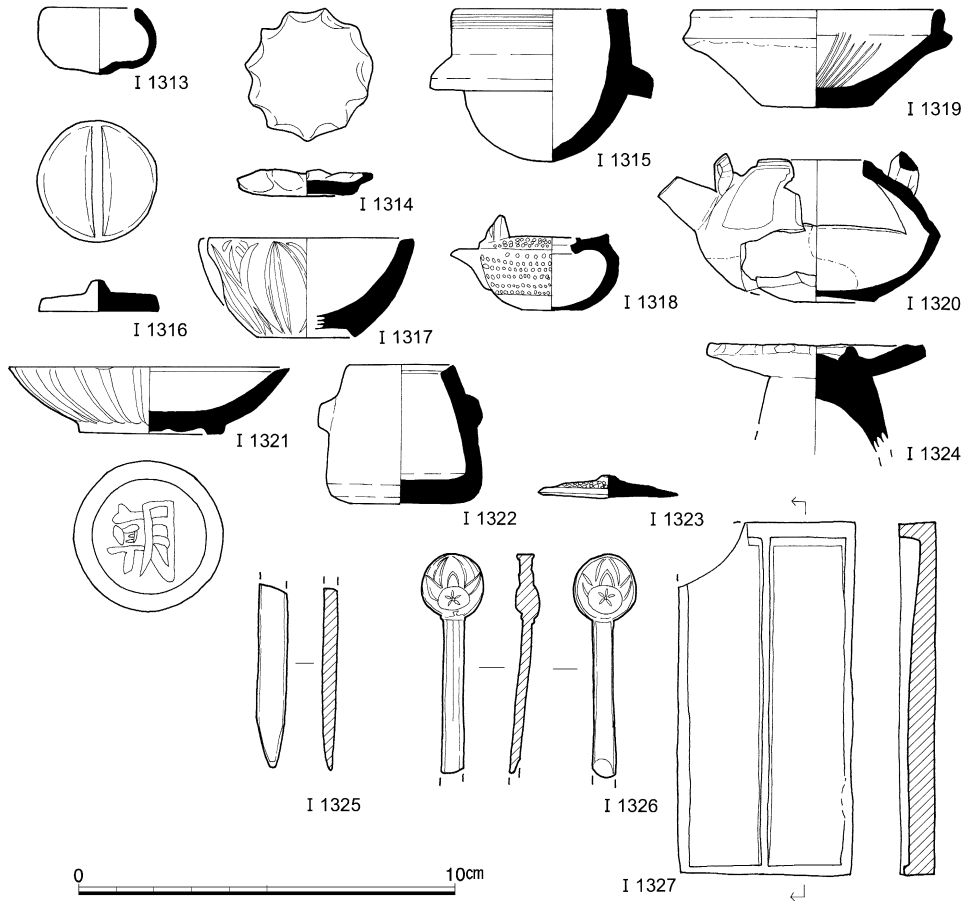


図79 S X 6 出土遺物(2) (I 1313・I 314土師器, I 1315～I 1324玩具, I 1325・I 1326  
ガラス筭, I 1327硯) 縮尺1/2

えられる「つぼつぼ」であろう。I 1314は口径3.5cm前後で、口縁部を花びら形につまんだ土師器小皿。淡橙色。

I 1315～I 1324は玩具。I 1319を除いて型作りとみられる。I 1315・I 1316は土師質、I 1317～I 1324は軟質施釉陶器。I 1315・I 1316は釜の蓋と身。胎土は砂粒を含み、橙褐色を呈する。I 1317は鉢。外面を花卉状の沈刻で飾る。施釉は内面のみで、透明釉をかけたあと、見込みの一部に緑釉を施す。胎土は砂粒を含み、赤褐色を呈する。I 1318は注ぎ口と把手をもつ。体部上半を魚子状の小突起で表現しており、鉄瓶などを模したものであろう。灰白色。I 1319はすり鉢。口縁部外面から内面に、鉛釉を施す。底部に回転糸切り痕を残す。見込みの中央に、使用によると見られる磨減が観察される。I 1320は土瓶。体部の屈曲部で分割成形し、接合している。体部上半に、鉛釉を施す。橙褐色の胎土および

釉調が I 1319 と同一であり、組道具であろう。I 1321 は皿。外面を型押しで成形し、内面に透明釉を施す。底裏に「朝」の沈刻銘をもつ。胎土は砂粒を含み、淡橙色。I 1322 は釜。底面を除いて、外面に施釉する。胎土は赤褐色。I 1323 は蓋。外面に施釉。魚子状の表現からみて、鉄製品を模した蓋であろう。胎土は灰白色。I 1324 は托あるいは杯台であろう。杯部と脚台部を別々に型作りし、接合する。外面には透明釉を施し、花卉状を呈する縁部には緑釉をかける。灰白色。

I 1325・I 1326 はガラス製の筭。I 1325 は先端部、I 1326 は頭部。I 1327 は硯。幅 4.5 cm、長さ 9.2 cm。墨用・朱用の硯面を 2 つもつ。

S X 6 からは、図示した以外に、泥面子、土人形、箱庭道具なども出土している。これらの遺物は、19 世紀前半に編年される。

(3) 近代の遺構と遺物 (図版 28, 図 76・80・81)

表土を除去した段階で、煉瓦を立てて弧状に並べた跡を調査区東半で検出した。フィールドとトラックを隔てる縁石とおもわれる。フィールドにあたる地区からは、砂場や野球のホームベースを設置したと思われる浅い五角形の土坑なども検出した。先述したように、調査区の北を東西にはしる道路から南、近衛通りまでは 1896 年 (明治 29)、京都帝国医科大学の敷地となった。のちに北に隣接する第三高等学校が南へ拡大するに及んで、調査区付近は三高のグラウンドとなった。1940 年ごろの建物配置図 (京都大学施設部蔵) と今回の調査区を重ね合わせると、縁石を検出した地点はトラックのコーナー部分にほぼ一致している (図 80)。また調査区東端の大規模な攪乱土坑からは、観客席に用いられたと想定する花崗岩製の長方形切石も出土した。

近代の遺物は、攪乱坑から第三高等学校に関する遺物が出土している。そのうち、特徴的なもの 3 点を図示する。

I 1328 は、軟質施釉陶器の皿。淡褐色を呈し、砂粒を多く含む粗放な胎土で、全面に透明釉を施す。高台は削り出しで、切り高台。体部外面は削り、口縁部から内面は撫でて仕上げる。見込み

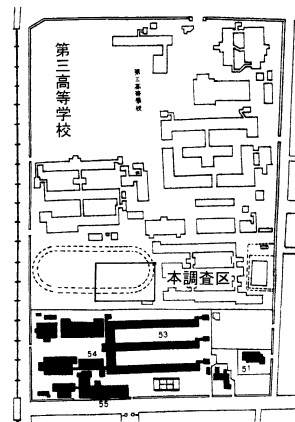


図 80 1940 年ごろの吉田南構内  
縮尺 1/5000

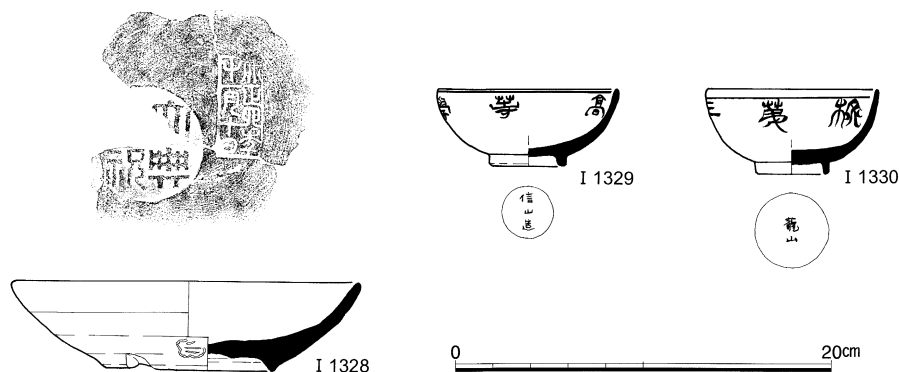


図81 近代土坑出土遺物（I 1328陶器，I 1329・I 1330染付）

に、長方形枠囲みで「大正四年十一月十日」、円形枠囲みで「大典（奉）祝」、高台脇には漢数字の「三」を中に入れた桜の刻印をもつ。「三」に「桜」は、旧制第三高等学校の校章であり、大正4（1915）年11月10日は、大正天皇の即位礼の挙行された日。即位の奉祝記念として、第三高等学校が注文製作した記念品と考える。

I 1329・I 1330は、染付椀。I 1329は口径9.6cm，器高4.1cm，I 1330は口径9cm，器高4.6cm。ともに口縁直下に圈線を巡らし、「第三高等学校」と呉須で手描きする。I 1329は「信山造」、I 1330は「龍山」の底裏銘をもつ。これらも、第三高等学校による注文品である。

## 10 小 結

以上報告したように、今回の調査では中世を主体としつつも縄文時代から近代に至る、多種多様の遺構・遺物が出土し、この地における人間の営みと土地利用の変遷に関する重要な情報を得ることができた。得られた成果を簡潔にまとめるとともに、そこから派生する課題のいくつかを指摘して小結にかえたい。

### (1) 縄文～弥生前期の遺跡について

**地形環境と土地利用** 縄文時代には、Y=2160ライン付近に崖面が形成され、東側に微高地、西側に低地が広がる地形であったことが判明した。東側の微高地はほぼ水平な堆積をしており、砂・シルトといった水成堆積の間に黒色腐植土の堆積を2枚確認した。微高地を形成している堆積物からは遺物はまったく出土せず、形成年代などの手がかりを得ることができなかった。一方、西側に広がる低地部も水成堆積物で基本的に埋積してゆき、最終的に弥生前期末ごろ発生した洪水砂（第5層）で覆われた。この結果、調査区一帯がほぼ平坦化し、現在に至る地形の基盤が形作られた。南北にのびるこの崖面は、堆積



小 結

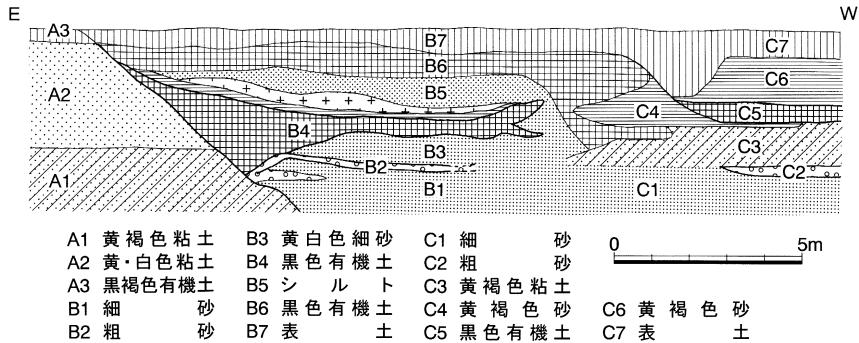


図82 7地点における東西断面層位 (藤岡1973, 第2図より作図, 一部改変) 縮尺1/200

状況の検討から、地下深部へと続く断層のようなものではなく高野川系流路の攻撃によって形成された可能性が高いと考える。この崖面の形成時期は明らかにできなかったが、埋積は縄文後期以降に進行したことが出土遺物から明らかになった。遺物は、微高地から低地へ下る崖面に形成された黒色腐植土から多く出土した。この時代の遺跡は本来、低地を臨む微高地上に展開し、遺物はそこから流入したと理解できよう。

この崖面は、北に隣接する220地点でははっきりしないが、本調査区の北東約70mに位置する7地点の立合調査〔藤岡1973〕で確認された段差がこれに相当するものと考え（図版1-7, 図82）。東から西へ下る崖面が形成され、西側は基本的に水成堆積物で埋積し、崖面に堆積した黒色有機土（B4層）から縄文土器、弥生土器が出土しているなど、弥生前期末の黄色砂がはっきりしないなど異なる点も指摘できるものの、堆積物の基本的な構成は同じと判断でき、一連の地形と理解できる。

このような崖面は、本部構内の218地点〔千葉・吉井ほか1997〕でもみられ、さらに北方、北部構内の6・56・135地点〔伊藤1999b, 京大埋文研1985, 清水ほか1987〕でも、縄文晩期の埋没林などを伴いながら認められる。本調査区から、北部構内にいた南北1km以上におよぶ範囲で確認されている崖面が一連のものかどうかは、なお慎重な検討を必要とするが、いずれの地点でも縄文時代～弥生前期の遺物が出土していることは重要である。低地を臨む扇状地末端で、活動が広範に展開されていたことを物語るからである。今後、関連地点の調査が進めば、遺跡の性格や活動内容も明らかになるであろう。

なお、北に隣接する220地点では、第5層直下で弥生前期水田を検出しているが、本調査区では水田遺構は認められず、調査区北西隅で人工か自然か判断しがたい小溝を数条検出したのとどまった。遺物もわずかな出土にとどまり、弥生前期の遺跡としては本調査区



は縁辺部に位置すると理解しうる。

**出土遺物** 出土遺物は、縄文早期・中期・後期・晩期・弥生前期にわたる。型式別に見れば、断絶する型式も多く、また出土量にも多寡はあるものの、長期にわたってこの地付近における営みがあったことが想定される。このなかで特筆すべきものは、縄文早期の土器である。早期の土器は、崖面に堆積した黒色土3（第22層）およびその下位の黒色土を中心に調査区南辺でまとまって出土した。これより下位の堆積物から縄文後期以降の土器が出土しているため、これらの包含層は二次堆積と考えざるを得ないが、早期土器が集中的に出土した地点からは、他時期の遺物は出土していないので、堆積土そのものがほとんど攪乱をうけずに斜面部へ流出した可能性もある。

早期の土器は、押型文土器と無文土器からなる。押型文土器は、山形文をもつ黄鳥式直前段階と、楕円文からなる黄鳥式のうちでも縦位密接施文が多くなる新しい段階とがあり、後者が主体を占める。無文土器は後者に伴うと考えられる。比叡山西南麓では押型文土器の出土する遺跡が複数みられる。北から、修学院離宮遺跡〔京文博1991, p.17〕、一乗寺向畑町遺跡〔京文博1991, p.18〕、北白川廃寺下層遺跡〔網1994, pp.76-79〕、北白川上終町遺跡〔京文博1991, pp.22-23〕、北白川追分町遺跡〔千葉1998, pp.8-10〕である。このうち、押型文前半期（大川式～神宮寺式）は北白川追分町遺跡でみとめられ、他の遺跡は後半期（黄鳥式直前以降）に比定できる。北白川廃寺下層遺跡では、黄鳥式直前段階の住居跡も検出されている。

本調査区出土土器のうち、黄鳥式直前段階の山形押型文は北白川廃寺下層出土と共通する。主体を占める黄鳥式の新しい段階は、修学院離宮遺跡の主体と共通し、かつ量的には修学院離宮遺跡を凌駕しており、この時期の様相をみるうえで重要な資料となろう。押型文段階に伴う可能性が高い有茎尖頭器も吉田本町遺跡〔千葉ほか1997, 図9・千葉2003, 図49〕で、2点確認されており、比叡山西南麓一帯における調査のさいには、この時期の遺跡の存在について十分に注意を払う必要があろう。

## (2) 弥生中期の遺跡と遺物

**方形周溝墓** 中世以降の開発により上部を削平されており、封土や主体部はみつからなかったが、方形周溝墓を構成したと理解しうる溝が複数認められた。残存状況は良好とは言えないものの、溝の平面形から、少なくとも4基、蓋然性は低いながらも2基、最大6基の方形周溝墓が2列で並存する状況を復元した。いずれも1辺8m前後であり、規模に格差はみられない。年代は、溝中より出土した供献土器から中期後葉、第Ⅲ様式の新し

## 小 結

い段階から第Ⅳ様式の古い段階におさまるとみられる。

比叡山西南麓地域における方形周溝墓の検出例は、本調査地点から北へ1 km前後の本学北部構内の54地点〔岡田・吉野1979〕で4基（第Ⅱ様式）、229地点〔千葉ほか1998〕で2基（第Ⅱ様式）、南へ1 km前後の岡崎遺跡〔辻・鈴木1985、会下1994〕で14基（第Ⅱ様式2基、第Ⅳ様式2基、第Ⅴ様式～庄内式10基）がみついている。資料的にはなお充分とはいえず、今回の調査例は、この地域における方形周溝墓の展開を考える重要な材料となろう。

また本調査区に隣接する220地点でも、直角に曲がるコーナーをもつ第Ⅲ様式後半の溝が検出されている〔伊藤1999a, pp.9-10〕。報告では、方形周溝墓の可能性を指摘しつつ結論は慎重に保留されたが、今回同種の遺構が確認されたことで、調査区周辺に墓域が展開していたと結論してよかろう。本調査区周辺では220地点以外に111地点でも、第Ⅳ様式の溝がみついている〔五十川・飛野1984〕。弥生中期後葉の集落構成を把握できる状況には至っていないが、構内東半の微高地上に居住域が展開し、微高地から低地への傾斜変換点付近を墓域、構内西半から医学部構内にかけての低地部を水田などの生業域としたと想定し、その実証を今後の課題としておきたい。

**弥生土器** 方形周溝墓を構成する溝を中心に、中期後葉の弥生土器がまとまって出土した。これらは、比叡山西南麓では類例が少なかった資料であり、複数の溝や土坑から一括で出土していることから、京都盆地東北部の当該期の編年と地域性を考えるうえで重要な資料となるだろう。器種別に、既存の編年でどのように理解できるかを山城地域の編年を総括的に扱った森岡秀人の編年〔森岡1990〕との対比でみておこう。

壺は、その形態から細頸壺・直口壺・短頸壺・広口壺に細分した。

細頸壺は3点出土（I 226～I 228）。櫛描の直線文・波状文で加飾する。櫛描文の原体は、いずれも割り板である。I 228は縦分割された器面に櫛描流水文が垂下する文様構成をとる。山城町涌出宮遺跡に類例がある〔京都府埋文センター 1989〕。Ⅳ－1様式。

直口壺（I 229）は1点のみ。高さ45cmをはかる大型品で、櫛描による直線文・波状文・斜格子文、円形および棒状の浮文、断面三角形の突帯で飾り立てている。Ⅲ－2様式～Ⅳ－1様式に比定しておく。

短頸壺（I 230～I 239）は、胴部の張りが弱く細長い形態を呈する壺。壺の中では出土量がもっとも多い。口縁部の凹線文、刻み目文を除くと目立った装飾を施さない。口縁部に凹線文を施すもの、口縁端部に刻みを施すもの、口縁部に加飾しないものに細分できる。

類例は近江に多く、Ⅲ様式からⅣ様式にかけて系統的に変遷する。凹線文は出現期の特徴を示し、Ⅳ-1様式に比定できる。

広口壺（I 240～I 243）は、口縁部が外へ開き、刷毛目調整のみで、文様で飾らない。口縁部に強い横撫でを施し、口縁端部が上方へわずかに拡張する。Ⅳ-1様式。

水差（I 244）は1点出土したのみ。底面が剝落しており、脚台付きであろう。櫛描直線文・流水文と簾状文で飾り、口縁部に凹線文を1条施す。Ⅳ-1様式。水差は、本学構内では、北へ80mの地点にあたる111地点で出土している〔五十川・飛野1984, 図6〕。口縁部を6条の凹線文で加飾するもので、型式学的に本例よりは新しい。

甕は口縁端部の刻みの有無で、大きく2種類に分けられる。刻みをもつタイプ（I 245～I 251）は、口頸部が「く」字形に折れ、やや細身になる。森岡編年では、山城独自の甕とされ、Ⅳ-1様式に比定される。一方、良好な資料の出土した久御山町市田齊当坊遺跡の甕Dに相当し、「大和瀬戸内折衷形」と理解され、「多く出土している遺構の大半が方形周溝墓でありその特殊性がうかがえる」と指摘がある〔松野2004, pp.137-138〕。

刻みをもたないタイプ（I 252～I 257）は、短い口頸部が「く」字形に屈曲し胴部の張る瀬戸内系の甕である。口縁部に強い横撫でを施して上下に拡張させたものは大型品（I 252～I 254）で、小型品（I 256～I 258）は口縁端部をつまみあげるように横撫でするという違いがある。Ⅳ-1様式に比定できる。

高杯は2点出土（I 275・I 276）。1点は全形が復元でき、北に隣接する220地点S D 19出土のそれ〔伊藤1999a, 図13〕と、技法・形態ともに酷似する。口縁端部が拡張しつつも、垂直に折れていないことから、Ⅲ-2様式に対比できる。

鉢は1点出土（I 277）。口縁部に、凹線文を1条めぐらしており、凹線文出現期、Ⅳ-1様式に比定できよう。

以上、器種別に既存の編年と対比した結果では、高杯がⅢ-2様式の古い形態をとどめるものの、のこりはおおむね、Ⅳ-1様式として理解してよさそうである。図83は複数の土器が出土した溝出土資料を、溝別に配列しなおしたものである。型式学的に若干古く理解しうる高杯（I 276）が出土したS D 31で共伴した甕のうち、I 250はS D 23のI 251あるいはS D 26のI 247と同一の特徴をもち、大きな年代差を想定する必要はないと考える。それ以外の資料は、既存の編年観で、ほぼ同時期と比定される内容から構成されている。また溝間どおしの比較でも、様式内容が近似しており、これら溝群出土の土器は近接した時間内で供献されたものと理解しておきたい。

小 結

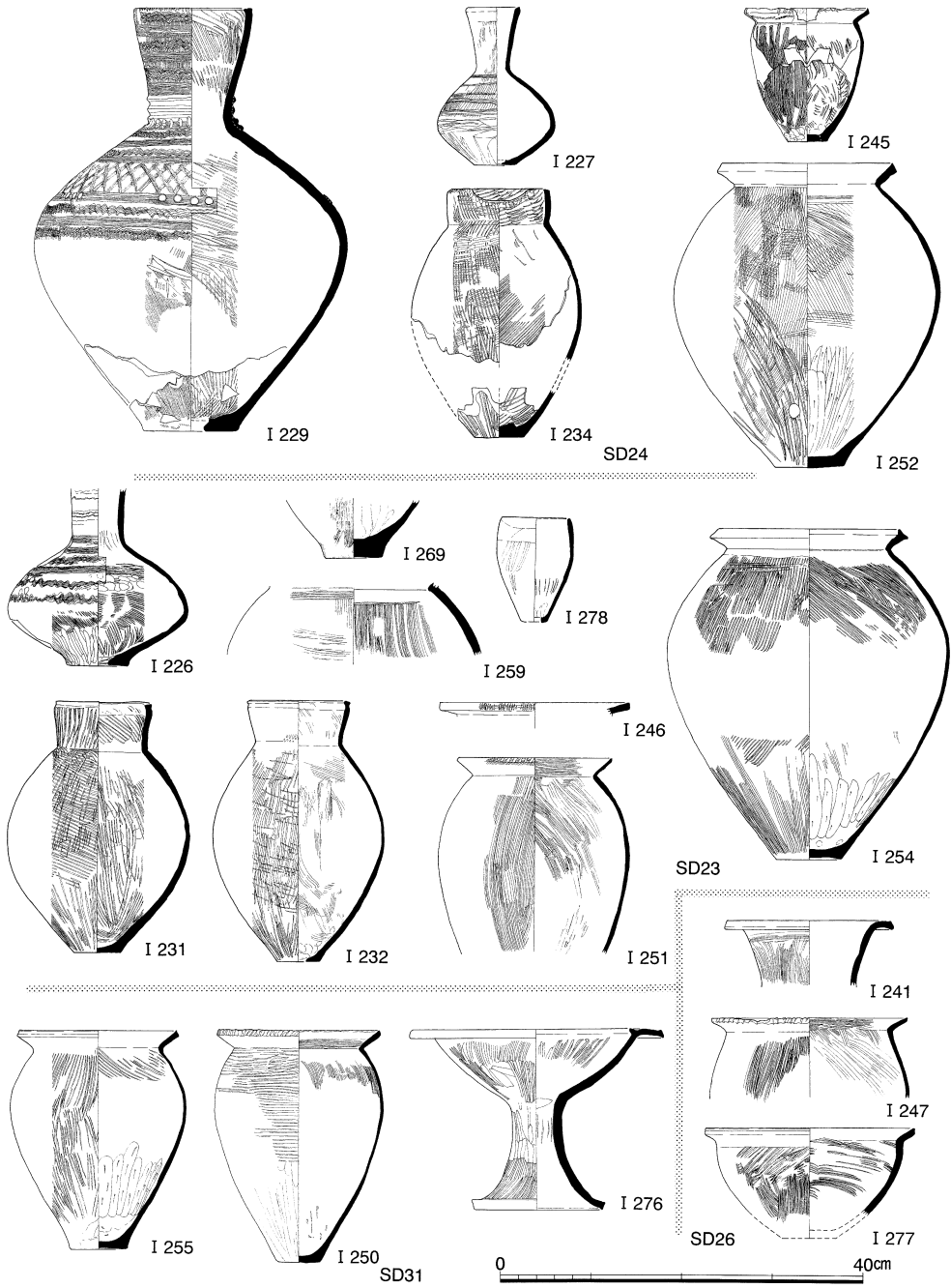


図83 遺構出土別弥生土器 縮尺1/8

以上述べてきたように、本調査区出土の弥生中期土器は、森岡編年のⅣ-1様式を中心とした比較的短期間に限定できる資料である。この時期については、周知のように、様式の境界について、凹線文の発達と器台の出現を重視するか、あるいは凹線文の出現を重視するかによって、意見の違いが生じている〔長友2004, p.181〕。この問題に深入りはしないが、凹線文の出現を様式境界と考える人が最近では多いようである。問題が単純にどこで線を引くかということであって、様式内容や年代序列が異ならないのであれば、区分が簡明でかつ多くの人が支持する意見に従うのがよいであろう。いずれにしても、本調査区出土土器は凹線文の出現期、すなわち研究史的理解にしたがえば、第Ⅲ様式新段階〔佐原1968〕、最近の区分法では第Ⅳ様式の前段階と呼ぶべき資料が主体を占める。

最後に、地域性の問題について簡単にふれておきたい。今回の出土資料には、近江系と呼ばれる受口状になる甕は出土していない。しかし、北に隣接する220地点の方形周溝墓を構成するとみられる溝からは、さきに言及した高杯とともに受口口縁の甕が出土しているので〔伊藤1999a, 図13〕、近江系甕の不在はあまり強調すべきではないだろう。むしろ、さきに記したように、壺の中で主体を占める短頸壺が近江に類例の多いタイプであることに注目しておきたい。従来から指摘があるように、近江との関係が深いとされる京都盆地東北部の状況は、今回の資料群にも反映されているのであろう。

### (3) 家形埴輪について

本調査では、本学構内の調査ではきわめてまれな出土遺物である家形埴輪片が出土した。ここでは、その出土状況を確認した上で、全体形の復元と年代的位相について検討し、最後にそこから派生する問題に言及する。

**出土状況** 第5節でも述べたように、家形埴輪片は調査区内のさまざまな層位および

地点から出土しているが、つくりや胎土が非常に類似していることから、同一個体であると考えられる。加えて、かつて吉田南構内A O22・23区で出土した「形象埴輪片」〔伊藤1999, p.9〕(図84, 表6) や、A R25区〔伊藤2000, p.18, 図13, I 121・I 122〕で出土した家形埴輪片についても、線刻や胎土から判断する限り、本調査で出土した家形埴輪片と同一個体である可能性が高い。いずれの破片

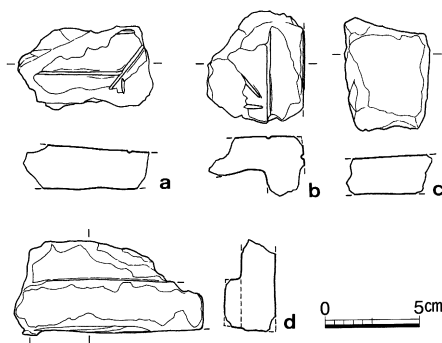


図84 A O22・23区出土家形埴輪

表6 A O22・23区出土家形埴輪

記号	品目	部位	赤彩	線刻	備考	出土地区	出土層位・遺構
a	家形埴輪	柱	○	○	鍵手文	AO22d3・d4・e3・e4	SD6
b	家形埴輪	隅柱	○	○	鍵手文	AO23d3	攪乱
c	家形埴輪	不明				AO22d3	SD6
d	家形埴輪	壁体部	○		突帯	AO22e4	SD6

も遺構にともなわずに出土しており、本来の樹立位置は不明といわざるを得ない。また、このように非常に広範囲に破片が散在することとなった原因についても手掛かりはない。

**全体形の復元** 本例は、破片数が少ないために全体形を復元することは困難であるが、幸いにも特徴的な部位が遺存しているため、おおよその形態を推定することができる。すなわち、大棟に鱗飾りを載せ、屋根部に網代と梯子状の文様、軸部の柱には鍵手文状の文様を施し、入口には庇をもち、外面の全面に赤色顔料を塗布するという、きわめて装飾性の高い入母屋造の家形埴輪を復元できる。ただし、平屋建物であったか高床建物であったかは確定できない。軸部の柱と考えられる I 285と I 286の存在から、軸部にスカシが設けられたことは確実であるが、それは平屋建物の窓である可能性も、高床建物下層の柱間の空隙である可能性も考えられる。平屋建物であった場合、先に挙げた特徴は、京都府城陽市丸塚古墳出土の家形埴輪〔近藤1989〕の特徴にきわめて類似する（図85）。丸塚古墳例の復元案を参考にすれば、本例も本来は桁行70cm前後、梁行60cm前後、高さ100cm前後を

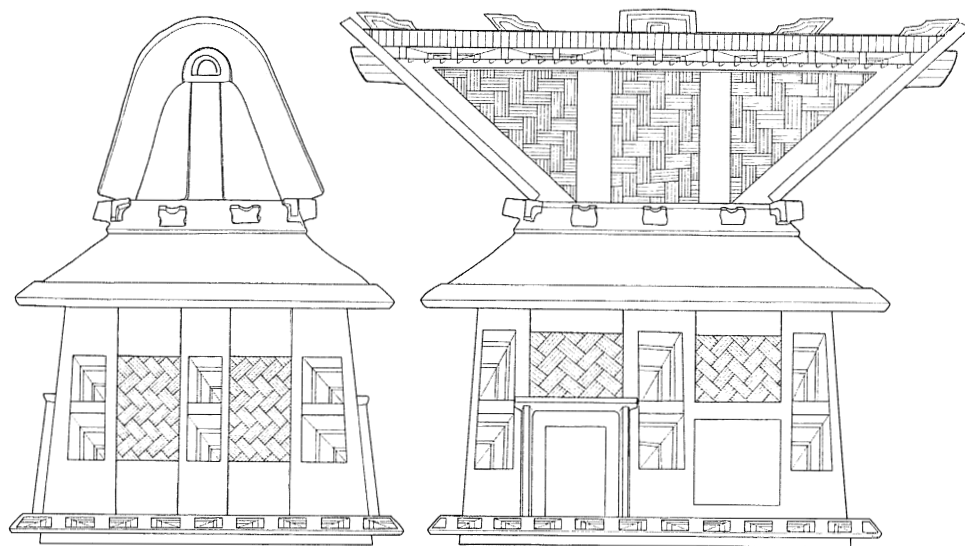


図85 丸塚古墳出土家形埴輪復元図〔近藤1989〕



はかる大型品であった可能性が高い。高床建物であった場合には、100cmを優に超える高さであったと想定される。これほど装飾性の高い大型品は、家形埴輪の全国の出土例をみわたしても非常に稀少である。

**年代的位置** 丸塚古墳例は「(黒斑をとどめる)焼成から5世紀後半まで下らない」〔近藤1989, p.38〕と評価されている。破片が少量であるためか本例には黒斑を確認できないが、文様上の諸特徴が非常に類似していることから、やはり5世紀前半の所産とみるのが穏当であろう。ただし、梯子状文様が室宮山古墳例〔千賀編1995〕などにみられるような立体的な段差表現ではなく線刻で表現されていることに加え、鱗飾の両面や下屋根部隅棟で線刻が食い違いを生じているなど、つくりが粗雑さが看取されることから、5世紀前半のうちでも中葉に近い時期と考えておきたい。

**派生する問題** ここまでの検討で、吉田南構内のさまざまな地点から出土した家形埴輪片は同一個体である可能性が高いこと、また5世紀前半でも中葉に近い時期に位置づけられることが明らかとなった。こうした結果から派生する、二つの問題について触れておきたい。

まず第一に、該期における古墳の存否である。これまで京都大学構内では、5世紀後半以降に位置づけられる吉田二本松古墳群〔五十川・飛野1984, 伊藤1999a〕が知られるのみで、5世紀前半に位置づけられる古墳は確認されていない。これまでの家形埴輪片の出土は、その存在を示唆するものと考えられよう。しかしながら、いずれも古墳時代の遺構にともなわず、総合人間学部構内の広範囲から破片が出土していることから、かつて存在していたとしてもすでに徹底的に削平されてしまっている可能性が高い。

第二に、該期の古墳がかつては存在していたとして、家形埴輪片のほかには同時期の所産と考えられる埴輪片が確認されていないことである。家形埴輪が装飾性に富んだ大型品であることからすれば、円筒埴輪や器財埴輪をとまわずにそのみが単独で樹立されていたとは考えにくい。今後の発掘調査によって出土する可能性も残されてはいるが、これまでの傾向からみて、それほど高くみつめることはできない。現状では、ほかの埴輪をとまわずに家形埴輪のみが樹立される、特殊な事例であると考えざるをえない。

以上、本調査での破片出土によりその概要が明らかとなってきた家形埴輪は、それ自身として全国的にみても貴重な資料であるだけでなく、この地の履歴をうかがう上でもきわめて重要な資料である。しかしながら、いまだ不明な点が多く残されており、今後の調査によってさらに多くの手がかりが得られることに期待したい。

## (4) 古代の土地利用

本調査区でみつかった古代の遺構は、時期・性格とも不明の大型溝 S D30を除くと、調査区北辺を東西方向にのびる小規模な溝群のみであり、遺物の出土量も少なかった。北に隣接する220地点では、奈良時代の建物跡・井戸、平安中期の梵鐘鑄造土坑・井戸・瓦溜など多種多様な遺構や多量の遺物がみつかったのは対照的なあり方を示し、調査区北辺の東西溝群を境に、古代の遺跡は北に展開していると理解しうる。

東西溝群の掘削時期は、出土遺物から10世紀以前に遡ると考えられるが、ほぼ同様の位置に中世以降近世に至るまで連綿と東西溝が設けられていることは重要である。これらの溝は、道路に付属する側溝であった可能性が高く、土地境界の機能を担っていたと想定できるが、それが古代に遡って形成されたことを示唆するからである。

## (5) 中世の土地利用

今回の調査で、遺構・遺物の質・量ともにもっとも主体を占める時期であり、3期にわけて解説を試みた。まず遺構の変遷をまとめておく。1期は12世紀後葉～13世紀で、溝・井戸・配石・廃棄土坑・集石土坑・埋甕など、2期は14世紀で、溝・石室・石敷・廃棄土坑・集石・集石土坑など、3期は15世紀を中心に新段階は16世紀前葉に下る時期で、溝・石室・廃棄土坑・集石・集石土坑などからなる。時期や並びを十分に特定できなかったが、建物や柵列を構成したと思われる無数の柱穴もみつまっている。

細別時期を通じて、調査区北辺を東西にはしる溝群が形成されること、調査区中央やや西よりに、東西溝よりも規模の大きい南北溝が掘削されていることが最初に注目しうる。ほぼ同じ位置に、時期を違えて何度も溝が掘り直されている状況から、これら東西溝、南北溝ともに土地境界の重要な区画であったことが想定できる。とくに東西溝は調査区北側の立合調査でもみつかっており〔伊藤1999a, p.4〕、近世には同じ位置を道路がはしっていることから判断して、中世においても路面に伴なう側溝とみることができよう。すなわち、本調査区でみつかった中世遺構は、東西および南は遺構の広がりには確定できないが、北側は東西道路で画されており北へは展開せず、また調査区中央西寄りで見つかった南北溝によって東西2つの空間に分けて理解することが可能となる。また、時期を特定することができなかったが、両空間内で無数の柱穴を検出したことは、本調査地が邸宅の一画を占めていたことを示している。

個々の遺構で注目しうるのは、5基検出した石室である（表7）。石室は地面を掘りくぼめ、四周に礫を壁状に配置した遺構で、石積み土坑などと呼称されることもある。本学構



表7 石室一覧

遺構名	時期	掘方平面形	掘方規模(m)	石室平面形	石室規模(内法・m)	備考
SX35	中世2期	隅丸長方形	3.6×2.4×1	長方形	2.4×1×1	底面に、土坑2基
SX26	中世2期	不整形	直径3m超	方形	0.8×0.8×0.4	掘方2段掘り、破壊顕著
SX60	中世2期	隅丸長方形	1.9×1.2×0.4	長方形	1.4×0.6×0.4	底面に黒色有機質土
SX17	中世3期	不整形	4.3×4×0.8	長方形	2.3×2×0.8	東壁・南壁の崩落顕著
SX29	中世3期	不整形	3×2.8×0.6	長方形	1.6×1×0.6	南北壁の崩落顕著

内では今まで明確な出土例はなく初出となる。1期に属するものはなく、2期から3期に構築されており、すべて南北溝の東側に分布している。

石室状遺構は、中世から近世にかけて多くの検出例があり、その用途については、地下収蔵庫、水溜、便槽などが想定されている〔豊田1992〕。いずれも宅地の一面に設けられるものが多い。平安京の地下式土坑を検討した堀内明博は、地下式土坑は11世紀末12世紀初頭には成立し、14世紀以降、内部に石組をもつ施設が顕著になって江戸時代以降に引き継がれるとし、収蔵庫としての性格を想定しつつ規模の小さなものは便槽の可能性も考慮している〔堀内1992〕。本調査区では2期（14世紀）に出現しており、京内のあり方に通じているといえる。規模の小さなSX60は、底部に黒色有機質泥土が堆積していたため、松井章氏に土壌分析をおこなっていただいたが、遺構の性格を明らかにするような手がかりを得ることはできなかった。これら石室は、地下収蔵庫としての用途が第一に想定するが、規模に大小があるので、一律に考えることも難しい。周辺地区の類例の増加を待つて再考したい。

出土遺物は、3時期を通じて土師器椀・皿類が主体を占め、瓦器、国産陶器、輸入陶磁器が伴う点では隣接地の調査成果の傾向とかわりがない。ただし、神饌の容器オオヤツカサ土器〔五十川1986〕と酷似した大型の土師器皿が2期～3期の遺構で見つかっていること、我が国ではほとんど類例の知られていない青白磁置物（3期）や包含層出土ではあるけれど石帯が出土したことなどは、遺跡の性格を考える上で手がかりとなろう。

吉田南構内に残された中世遺跡の造営者については、今までの発掘調査成果と文献から、二つの集団の存在が指摘されている。一つは、藤原北家勸修寺家であり、もう一つは吉田社である〔浜崎1983〕。藤原経房が吉田の地に別業を設け、菩提寺となる浄蓮華院を正治元（1199）年建立し、ここを根拠地とするにおよんで、吉田殿と称せられるようになる。「勸修寺経房処分状」（正治2年）には、「吉田南亭」、「吉田園領」、「吉田角家地」といった屋敷地がみえる。その後、氏長者吉田定房が南朝にしたがい吉野に移った建武4（1337）

年頃を境に、浄蓮華院や邸宅は衰退に向かったようである。これらの屋敷地は、本部構内から吉田南構内および医学部構内にかけて広がっていたと考えられており、そのうち浄蓮華院は医学部構内から吉田南構内西半に比定されている。

もう一つの吉田社は、応仁の乱による焼亡後に、現存地神楽岡山上に遷座するが、その旧地については、吉田南構内南半に比定する説があり〔福山1977〕、また本調査区から西100mの医学部構内134地点では、遷座前の春日若宮にかかわる可能性のある井戸がみつまっている〔五十川1986〕。

この二つの集団は、吉田定房の吉野退転を契機に、吉田社の勢力が拡大し、応仁の乱を経て伸長著しい吉田社が吉田殿の領地を蚕食し、16世紀前葉には吉田社の領地となって、吉田構を形成し、のちの景観の基盤を形成するという変遷をたどっている。

調査区はさきに述べたように、東西2つの空間に分離できる。西側の空間が1～2期にかけて活動の主体があり、3期にはその活動が衰えたようにみえるのに対して、東側の空間は1期から3期まで継続的な活動がおこなわれており、とくに2期から3期にかけては石室の造営にみられるように、活発な活動がなされている。オオヤツカサと称された特殊な土師器皿が、2期から3期の東側の空間に位置する遺構からのみ出土していることも、東西の空間に占地した人たちが異なる集団であったことを想定することもできよう。

このような想定が正しければ、さきに掲げた二つの集団と重ね合わせて、西側の空間に残された遺構・遺物が吉田殿とおもにかかわり、東側の空間に残された遺構・遺物はおもに吉田社にかかわると解釈することも可能となろう。

また3期に属する南北方向の大溝SD11が廃絶した契機についても注目しておきたい。SD11の廃絶時期は埋土中の遺物から、15世紀中～後葉ごろと判断するが、本調査区から北東250mに位置する238地点の大溝もSD11とほぼ同じころ、15世紀の末葉には完全に廃絶している。すでに指摘がなされているように〔伊藤2000, p.78〕、これらが吉田社の神楽岡遷座と関連する出来事である可能性は高いと想定している。この遷座に伴って、邸宅地も、より東の吉田上大路町・中大路町へと移動し、近世社家町へと発展したのに対して、吉田南構内の地は、無住の地となって江戸時代の耕作地へと変転してゆく下地が形成されたのであろう。

#### (6) 近世・近代の土地利用

上に示したように、16世紀なかごろ以降、この地での活動の痕跡はきわめて希薄になった。ふたたび遺構・遺物で人間の営みがはっきりと認められるようになるのは、18世紀に

はいつてからである。道路、道路脇の野壺群、耕作にともなう無数の柱穴群であり、大学構内のほかの多くの調査地点同様、この地点が都市近郊農村の耕作地へと変転したことを示している。

このなかで、中世溝群とはほぼ同様の位置に道路と側溝が検出され、これが現在に至る字境界とほぼ重なることは、中世後半から近世前期にいったん荒廃しつつも、この場所が土地境界としての重要性を失わなかったことを考えさせる。明治30年に京都大学の敷地となったさいにも、この道路の北側は第三高等中学校、南側は京都医科大学の敷地としたように、この土地境界は生きていた。のちに三高の敷地が南へ拡大するに及んで、この境界は失われたように見えるが、その後の構内整備ではふたたび、ほぼ同じ位置に東西道路が敷設されて現在に至っているのである。土地利用の形態は幾多の変遷を重ねつつも、重要な土地区画は、長期にわたって存続し続けることを示しているといえよう。

以上、述べてきたように、縄文時代から近代に至る長期にわたる土地利用の変遷と人間の営みのありようを考古資料を通して、かいま見ることができた。

なお、発掘調査から整理調査を通じて、以下の諸氏より貴重なご教示をいただいた。押型文土器について矢野健一氏（立命館大学）、家形埴輪について高橋克壽氏（奈良文化財研究所）・東方仁史氏（鳥取県立博物館）、中世の石室について、山本雅和氏（京都市埋蔵文化財研究所）、古瀬戸について藤澤良祐氏（愛知学院大学）、古代および中世の瓦について上原真人氏（京都大学文学研究科）、青白磁置物について弓場紀知氏（京都橘女子大学）、中世土坑出土具類の同定について、加藤真氏（京都大学人間・環境学研究科）、土壌分析について、松井章氏（奈良文化財研究所）。末尾ながら、記してお礼申し上げます。

#### 〔注〕

- (1) オオタニシは、殻内に幼貝の入っているものが多かった。成貝は殻高35～59mm、殻径23～37mm、幼貝は殻高7mm前後、殻径6mm前後である。一つの殻内に最大30個の幼貝の入っていたものもある。タニシは卵胎生で、6～7月ごろ40個前後産卵し、6～8月ごろ20～30個前後の幼貝を産む。幼貝を殻内にとどめている個体が多いことから判断して、7月前後の初夏のころ採集した可能性が想定できよう。なお、オオタニシ、マルタニシは、加藤真氏に同定していただき、ご教示をいただいた。